

---

Fate/anotherside saga ~ ドラゴンラージャ ~

メガネオオカミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/another side saga 〈ドラゴンラージャ〉

### 【Nコード】

N6748S

### 【作者名】

メガネオオカミ

### 【あらすじ】

月の聖杯戦争は終わり、生き残った少年も眠りにつくはずだった。しかし、運命は少年を赤き従者と共に新たな物語へと誘った。

(この作品はFate/EXTRAとドラゴンラージャのクロスオーバーです。Fate/EXTRAを知らないと読むのがきついです。ドラゴンラージャは知らなくても読めるようになっていきます)

## 予告編

Fate / another side saga トリゴングンラー  
ジヤ  
予告

終末の鐘は鳴り響き、彼は眠りにつこうとしていた。

「これで……本当にやるべきことは全て終わった。後は、分解の時を待つだけ」

「本当に、それでいいの？」

「えっ？」

しかし運命は彼を、愛する従者と共に新たな物語へと誘った。

「俺は、俺は生きたい。もっとセイバーといっしょに生きていたい！」

「ふつ、当然であろう。奏者がいる限り、余に敗北などありえぬのだからな！」

そして、血塗られた戦いの王と、赤き暴君は別の世界で生きることが決意する。

「職人魂さ。オレはロウソク職人だからな」

「私にまかせて。そんなんじゃ、いつ終わるかわからないわ」

「やあ、コノエくん、クラウディウス嬢。今日はどうしたんだい？」

「おいおい何だ？ フチとジェミニだけじゃなくて、お前達までいたのか？」

「気絶してしまった娘を眠りから覚ます、伝統的な方法があるじゃろ」

「これで私達は友達かしら？」

彼らは新たなる地で大切な仲間達と出会う。

「そうよ、おチビちゃん。このユスネさまを怒らせたやつは、十三人目にしてやるからね！」

「嵐を眠らせるのは、かよわいコスモスです。エデルブロイの祝福がともに」

「あの……すぐに出発してしまうの？」

「いよいよ、みなさんをお呼びたてした理由をお話せねばなるまい」

旅の途中に出会う様々な人達。

「よし。死をもってつくなえ」

「ふはははは。エルフが洞窟のなかで死ぬとはな。ドワーフが海で溺れ死ぬよりもゆかいじゃないか」

「……あいつら、夜露に濡れるやつらとは違うよつだが」

「ありうるさ。時間と努力の問題だ」

旅をする中で知る、大陸を覆う黒い影。

「私は……………運命の影」

そして彼らに力を貸す、謎の女性。

「魔法はもともと、ドラゴンのものじゃ」

「ふざけたことを言うな！」

「ふむ、ドラゴンか。余も一度は仕留めてみたいものだ」

「これが、真実だって言うのか……………」

人とドラゴンが関わる時、なにかが起こる。

「フチ、タクト、ネロ。見て、見て！ あの子がドラゴンラージャ  
よー！」

「私の感情を支配しようとするな。ドラゴンラージャの資質を持つ  
少女よ」

「ドラゴンラージャの契約！」

そして、ドラゴンラージャとは？

人とそれ以外の種族が暮らす世界で、彼は一体なにを見るのか？



Fate/another side saga〜ドラゴンライダージャ〜

近日、連載開始

「俺はネロと出会えて、本当によかったって思ってるよ」

「っ！ な、なに当たり前の事を言っておるのだ、そなたは！ 余と出会えた事など生涯一番の幸福な事に決まっておるであろう！」

彼らの戦いはまだ終わらない。

## 予告編（後書き）

初投稿です。

残念ながら投稿スピードは遅めだと思いますが、これからよろしく  
お願いします。

Fate/another side saga〜ドラゴンライジャ〜に出てくる言葉の解説です。

性質上、多少のネタバレあり。

現在、第一章第七話の単語まで更新されています。

#### 注意

この用語解説はあくまで、二次創作『Fate/another side saga〜ドラゴンライジャ〜』の用語解説であり、原作の作品、及びその関係の作品とは何の関係もありません。

したがって、所々自己解釈や自己設定が混じっていますが、そのところは笑って流してやってください。

武器

・隕鉄の韃アエストゥス・エストゥス「原初の火」

ネロが使う歪な形の大剣。

身の丈ほどの大きさがあり、剣にあるまじきその形は武器というよりも一種の芸術品のような雰囲気醸し出している。

宝具というわけではないが、謎の物質で作られており、かなり丈夫。敵の宝具と打ちあっても壊れるようなことは一度としてなかった。

刀身には「regnum caelorum et gehenna」(レグナム・カエロラム・エト・ジエヘナ)と刻まれている。

実はネロのお手製らしい。

・キャット・オ・ナインテール

九本の短い革ひもたらした鞭。

猫がひつかいたような傷痕が生じることから名づけられた。

殺傷能力は低いが、それゆえに拷問器具としては最適。

・クレイモア

薄く幅の広い刀身を持つ大剣。

切れ味が優れる。

・コピシユ

古代エジプトで使われていた銅剣。

切り裂くことを目的としているため、湾曲した刀身と平らな刃先を

持っている。

斧と剣の中間に位置する武器。

・ショートボウ

小さくて単純な弓矢。

構造も単純。

人類が狩猟生活のころから使っていた歴史の長い武器。

・スコージ

鞭。

家畜を飼育する道具が、奴隷を制裁する目的で使用されるようになり発達した。

・バスタードソード

長剣の一種。

約四フィート（約1・2メートル）の刀身に約一フィート（約0・3メートル）の柄。

片手に盾を持って使うが、盾を捨て、両手で一撃を加えることも可能。

普通の剣よりも長く、重量があるため使いこなすには訓練が必要だが、片手でも両手でも使え、斬ることも突くこともできるため、優秀な剣であるといえる。

・バトルアックス

戦闘用の斧。

切る、または叩く武器だが、投げて攻撃を加えることも可能。

・ハルバード

斧の刃がついている槍。

反対側には、ひっかけるためのフックやスパイクがついており、これ一つで斬る、突く、ひっかける、叩くの四種類もの攻撃をすることが可能。

重量がかなりあり、なおかつ多芸なため、完全に扱いこなす者は限られてくる。

しかし非常に威力が大きく、強力な武器なのは間違いない。

・フォーチャード

八フィート（2・4メートル）の長い柄に、三日月のような槍心がつき、切るといふより、たたき切る武器。

・ロングソード

長剣。

形はまっすぐで、両刃。

機動性に優れ、さまざまな剣術に適合している。

衣服・防護具

・タワーシールド

長方形の大きな盾。

・チェーンメイル

いわゆる鎖帷子のこと。

金属の輪を鎖のようにつなぎあわせた甲冑。

動きやすく柔軟性があり斬激に対する防御力に優れるが、その反面、刺突や衝撃に対する防御力は高くない。

他の防護具との併用が可能。

・バーディング

騎士を乗せる馬が着用する鎧。

・ハーフプレート

プレートメイルの胸甲部分だけを残し、機能性を強化した鉄の鎧。主に歩兵が着用する。

・プレートアーマー

レザーアーマーやチェーンメイルの上から、要所を鉄板でおおうもの。

・ライトレザー

ごく軽い革の鎧。

・ローブ

長くだぶだぶとした外套。  
動きづらいため、魔術師などが着用することが多い。

## モンスター・種族

### ・ウェアウルフ

オオカミ人間。

満月を見ると、オオカミに変身する。

ライカーンスロープの一種で、銀製の武器に弱い。

関連項目『ライカーンスロープ』

### ・エルフ

森の種族。

知識と品位をかねそなえた高尚な存在。

すらりと背が高く、美貌ととがった耳が特徴。

### ・オーガ

凶暴な食人モンスター。

体は大きく、力もかなり強いが、知能はそこまで高くはない。

### ・ガーゴイル

飛行モンスターの中でも代表的なモンスター。

敏捷で強靱。



・コボルト

人間よりも一回り小さく、犬と類似した頭を持つ人型モンスター。

・セイレーン

海にいるモンスター。

女性と魚の混ざった姿をしたものと、女性と鳥の混ざった姿をしたものの二種類がいる。

どちらも美しい歌声で人間を惑わせる。

・ドラゴン

鳥とヘビが結合して誕生した史上最強のモンスター。

おそるべき力と無限の知識を持つ。

英雄たちにとって<試験>であり、<理想>の存在。

無論、拓斗達の世界にも存在し、やはり最強の名をほしいままにしていた種族。

関連項目 『ブラックドラゴン』 『ホワイトドラゴン』

・トロール

知能の低い食人モンスター。

体そのものを武器として使う白兵戦にたけている。

また生命力が異常に強い。

・バードグ

悪魔。

高い知性を持ち、魔法にも精通。  
地下を好むため、地上にはあまり現れない。

・バンパイア

吸血鬼。

満月の夜、超常的な力で異性を誘惑し、生き血を吸う。  
血が供給されるかぎり、不死身。  
おそわれた者はバンパイアになる。  
銀製の武器に弱い。

・ブラックドラゴン

黒いドラゴン。

邪悪で乱暴。

強力なエイシッドブレスを噴出する。

関連項目『ドラゴン』

・ホワイトドラゴン

凶暴な性格で、欲が深く、愚鈍。  
極地に住む。

物質を凍らせるアイスブレスを噴出する。

関連項目『ドラゴン』

・ライカンスロープ

動物に変身するモンスター。

ライカンスロープにおそわれた人間が、なってしまうことが多い。

・ラミア

上半身は人間の女性で下半身はヘビ。  
子供を食い殺すモンスター。

・ミノタウロス

体は人間だが、雄牛の頭を持つモンスター。

## 魔法

・キュアドランクン

二日酔いを解消するといわれる伝説の魔法。  
どうやら完成しなかったらしい。

・gain|con(32)

強化用のコードキャスト。

使用することで対象者一名の耐久力を大幅に上げる。

関連項目『コードキャスト』

・gain|str(32)

強化用のコードキャスト。

使用することで対象者一名の筋力を大幅に上げる。

関連項目『コードキャスト』

・コードキャスト

セラフに用意されていた礼装に宿る特殊能力のこと。魔術に近いもので、その種類は攻撃から回復まで多岐にわたる。めがみの力により、拓斗は所持していた全ての礼装のコードキャストを使えるようになる。

関連項目『礼装』

・shock(64)

攻撃用のコードキャスト。

その効果はマヒ能力のある黒い魔弾を相手に放つというもの。

拓斗の使用できるものでは最も強いが、この魔術も単体で戦うためではなく、相手をマヒさせ仲間止めを刺してもらったための連携用の魔術である。

関連項目『コードキャスト』

・第三魔法

拓斗達の世界で失われたとされる五大魔法の一つ。

その内容は魂の物質化による、高次元の存在への進化と真の不老不死の実現。

サーヴァントシステムはこの魔法の一種であるとされる。

詳細不明。

めがみが似たような力を使えるらしいが……？

・第二魔法

拓斗達の世界で失われたとされる五大魔法の一つ。

その内容は並行世界の運営。

自由自在に並行世界を行き来することが可能となる。  
詳細不明。

めがみが似たような力を使えるらしいが……？

・ディテクト・マジック

特定の魔力、マナを探知する魔法。

・ディテクト・メタル

金属を探知する魔法。

暗闇でも金属を発見することができる。

・テレポートワープ

望みの場所に、瞬間移動できる魔法。

生身のままの瞬間移動は、拓斗達の世界では魔法に位置する。

・heal(32)

中級の回復用のコードキャスト。

使用することで深い傷も一瞬で治すことができる。

関連項目『コードキャスト』

・プロテクト・フロム・マジック

魔法から対象を守る魔法。

しかけてくる魔法が、なにかわからないと使用できない。

・ view | map ) )  
補助用のコードキャスト。

使用することで一定期間、周囲の地形を地図にして使用者の脳内に直接映し出す。

関連項目『コードキャスト』

マナ

世界に普遍的に広がるエネルギー。

無知生命体とも。

魔術師はこれを利用して魔術を使う。

拓斗とフチの世界は異世界の関係であるため、拓斗達の世界のマナは若干その有り様が異なる………が、基本的な働きはあまり変わらない。

拓斗達の世界では原因不明だがマナが枯渇している。

・ 魔法モドキ

根尾丘めがみの使う謎の力。

第二魔法や第三魔法に近いことすらできるらしい。

詳細不明。

関連項目『第二魔法』『第三魔法』

・ move | speed ) )

強化用のコードキャスト。

使用することで一定時間、使用者の足を大幅に強化する。

ここでいう足の強化とは、足の筋力、瞬発力、持久力、速力等の多岐にわたる。

拓斗が愛用しているコードキャストの一つ。

関連項目『コードキャスト』

・ recover ( )

最高級の力を持つ回復用のコードキャスト。

使用することで致命傷ですら一瞬で治癒することができる。

元々は凜の切り札の礼装のコードキャストであった。

拓斗が愛用しているコードキャストの一つ。

関連項目『コードキャスト』

・ リバースグラビティ

重力逆転。

対象を上に乗っことす。

かなりの上級魔法だと推測される。

軍事・戦闘

・ アーチエリー

弓兵隊。

その特性上、掃討戦は不可能。

最初の攻撃を任される。

・ インウィクトゥス・スプリットゥス 三度、洛陽を迎えても

ネロの補助スキル。

兵隊長がネロの遺体にマントをかけられたときに、死んだはずのネロが目を開き言葉を話した後に再び死亡したという伝説が元になって生まれたスキル。

使用した一定時間内に受けた致命傷を自動回復する。

ただし、蘇生ではないので即死に至る程の傷は回復できず、また治癒も最低限までしかされないので、過信は危険。

・パイカー

槍兵隊。

歩兵隊を背後から援護する。

・バックアップ

支援隊。

医療、軍糧、資材などを担当する部隊。

直接の戦闘には参加しないが、戦場では欠かすことのできない重要な部隊である。

・ヘビートウルーパー

重装歩兵隊。

歩兵の中でも第一陣の突撃を敢行する。

・ライトフットマン

軽装歩兵隊。

一般的な歩兵を意味する。



・花散る天幕  
ロサ・イクトウス

ネロの攻撃スキルの一つ。

両手で握った剣を大きく引きながら駆け抜け、一瞬で相手を斬り裂く技。

## 宗教・神

・エデルブロイ

嵐とコスモスのエデルブロイ。

ヘルカネスの下位神。

詳細不明

関連項目 『ヘルカネス』

・カリス・ヌーメン

ドワーフと火のカリス・ヌーメン。

ヘルカネスの下位神。

詳細不明。

関連項目 『ヘルカネス』

・ヘルカネス

混沌の神。

世界の法則。

ユピネルと共にフチ達の世界を創造したとされる。神と言うよりは、一つ概念に近い。

詳細不明。

関連項目『ユピネル』

・ユピネル

調和の神。

世界の法則。

ヘルカネスと共にフチ達の世界を創造したとされる。

神と言うよりは、一つ概念に近い。

詳細不明。

関連項目『ヘルカネス』

地名・国名

・ジャイファン

バイサス王国の南に位置する国。

国土の大半を砂漠が占めている。

現在、バイサス王国と戦争中。

関連項目『バイサス王国』

・灰色山脈

バイサス王国の西部から北部にかけて広がる広大な山脈。

アムルタットが住みついているため、西端では特にモンスターが数多く出没する。

関連項目『バイサス王国』

・バイサス王国  
フチ達の住む国。

大陸の中央に位置し、ドラゴンロードを打ち破ったルトエリノ大王の子孫であるバイサス家が王家として君臨している。  
現在、ジャイファンと戦争中。

関連項目『ジャイファン』

・ヘゲモニア

バイサス王国の北に位置する国。  
国土の多くを山岳が占めている。  
拓斗がとつさに口走った出まかせから、フチの世界での拓斗とネロの故郷とされている。

関連項目『バイサス王国』

・ヘルタント領

バイサス王国の西端に位置する領。  
代々ヘルタント子爵家が所有し管理している。  
アムルタットが住む灰色山脈のふもとにあるため、モンスターの襲撃をたびたび受ける。

住民は冗談を好み、純朴で勇敢。

関連項目『灰色山脈』『バイサス王国』

## 建造物

・アビスの迷宮  
ジャイファンにある迷宮。  
バーログが守護しており、入りこんだ者を排除している。  
関連項目『ジャイファン』『バーログ』

・サントレラの歌  
ヘルタントにある居酒屋。  
ヘナーおばさんが経営しており、タクトもたびたびお手伝いをして  
いる。

現在でもミユラカイン・サポーネを注文できる数少ないお店。  
関連項目『ヘルタント領』

・ヘルタント城  
ヘルタントにある城。  
小高い丘の上に建てられていて、城というよりは要塞。  
庭には練兵場があり、警備兵が訓練をしている。  
関連項目『ヘルタント領』

## 数量・単位

・キュビット  
長さの単位。

1 キュビット ≒ 約 4.3 ～ 4.5 センチメートル。  
肘から中指までの長さが元となっている。

・セル

通貨の単位。

・ダース

数の単位。

1 ダース ≒ 12 個。

・パウンド

質量の単位。

1 パウンド ≒ 約 0.5 グラム  
別名ポンド。

・ペンキュビット

長さの単位。

1 ペンキュビット ≒ 100000 キュビット ≒ 約 4.3 キロメートル  
関連項目『キュビット』

聖杯戦争関連

・アーチャー

弓兵の英霊。

単独で動くことが多い。

マスターとの反目が目立つ。

聖杯戦争で呼び出されるクラスの一つで、飛び道具による遠距離攻撃を得意とする。

弓兵というだけあって単独で行動する者が多く、多くの者はマスターの指示を嫌う。

別に武器が弓でなくても飛び道具さえあればアーチャーになれるので、中には剣を飛ばすだけの者や銃火器類で武装する名ばかりの弓兵も数多くいる。

この作品では無名の義賊が召喚されていた。

関連項目『サーヴァント』

・アサシン

暗殺者の英霊。

気配遮断のスキルのみで戦いぬくもの。

厄介な相手が多い。

聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントのクラスの一つ。

ステータスは低いが、気配遮断のスキルと一撃必殺の宝具で戦いぬく者が多い。

本来後衛に徹するマスターにとって天敵とも呼べるサーヴァントである。

使役するマスターの技量によっては恐ろしい相手となる。

この作品には一撃必殺の魔拳士が召喚されていた。

関連項目『サーヴァント』

・アリーナ

セラフに存在する施設、というか空間の一つ。全部で七階層プラス一層の八階層存在する。実はセラフによって長時間維持されている固有結界の一種。敵性エネミーがウヨウヨしているため、基本的には鍛錬するための場所。

ただし決戦場に行くためのトリガーがここでしか手に入らないため、敵マスターとの交戦場所になることが多い。ルール上、アリーナでの私闘は禁止されており、戦闘になった場合はセラフによって強制終了させられる。モチーフは海。

関連項目『月の聖杯戦争』

・キャスター

魔術師の英霊。

最弱のサーヴァント。

マスターとの仲がいい者が多い。

聖杯戦争で呼びだされるサーヴァントのクラスの一つで、全てのクラスの中で最弱とされる。

その理由は、呼び出される英霊が魔術師のため元々戦闘に向かないのと、サーヴァントには強力な対魔力のスキルが付加されている者が多いため。

だが、強力な大魔術を使える者が多くいるため、その火力、攻撃規模の大きさは全サーヴァントの中でも屈指のもの。

そのため、他のサーヴァントには真似できない大規模な殲滅戦を行うことができる。

この作品の聖杯戦争では、少女の夢の化身が召喚されていた。

関連項目『サーヴァント』

・サーヴァント

再現された英霊。

マスターの剣であり盾。

人間よりも遥かに高い次元に存在する者。

聖杯により呼び出される使い魔たる英霊のこと。

召喚の負担を減らすために、呼び出されるサーヴァントは七つのクラスに分けられる。

現実世界である地上の聖杯戦争でのサーヴァントと、霊子虚構世界である月の聖杯戦争でのサーヴァントとは若干そのありようが違う。地上の聖杯戦争のサーヴァントは聖杯の力により英霊の座から召喚される英霊のコピー。

霊的存在で、カテゴリーとしては超高度な使い魔的存在。

月の聖杯戦争のサーヴァントは聖杯の記録に残っている英雄を、一時的にセラフ内に再現したもの。

電子的な存在ではなく、第三魔法により実体化した霊子生命体。だが、地上、月どちらのサーヴァントも細かい違いこそあれ、令呪に縛られ、マスターを優勝に導くために戦うという有りようは基本的には変わらない。

基本的にはマスターとサーヴァントは魂の相性がいいとされる。

関連項目 『聖杯戦争』 『マスター』 『令呪』

・セイバー

騎士の英霊。

最優のサーヴァント。

頑固者が多い。

聖杯戦争で呼びだされるサーヴァントの七つのクラスの一つで、全てのクラスの中で最優と称えられる。

全能力値が高く、接近戦で無類の強さを誇り、また強力な対魔力のスキルを持つため、単純な戦闘ではおそらく最強。



ただし、遠距離攻撃のスキルを持つ者が少なく、また呼び出される英霊の英雄の我が強すぎてマスターとの不和を起こす可能性があるという欠点も存在する。

ただしセイバーに限らず、強力な英霊ならば誰しも我が強いため、セイバーのクラス固有の欠点とは言い難い。

また宝具が強力な者も多い。

この作品では赤き暴君と太陽の騎士が召喚された。

関連項目『サーヴァント』

#### ・聖杯

聖遺物。

貴き者の血を受けた杯。

持ち主の願いをかなえる、無限の願望機。

西洋の伝説で、十字架上の神の子の血を受けた杯のこと。

様々な奇跡を呼び起こすことができたとされ、以降、願いをかなえる願望機の総称とされる。

つまり、願いを叶えるという力さえあれば、それがどんな形をしていたとしても、それは聖杯ということになるのである。

ちなみに本物の聖杯の所在は未だにわかっていない。

この作品での聖杯とは、Fate/EXTRAにおける月の聖杯

ムーンセル・オートマトン のことである。

関連項目『月の聖杯』『ムーンセル・オートマトン』

#### ・聖杯戦争

聖杯の所有者を決める戦いのこと。

広義的に言えば、聖杯を巡る競争ならばすべて聖杯戦争と呼ぶことができるため、例えば優勝者が聖杯を手に入れることができるというルールさえあれば、じゃんけん大会だろうがクイズ大会だろうが、

百メートル走だろが、すべて聖杯戦争と呼ぶことができる。狭義的に言えば、魔術師と英霊による聖杯を巡る殺し合いのこと。過去に地上で行われた時には、七組のマスターとサーヴァントが最後の一組になるまでのバトルロワイアルのことを聖杯戦争と呼んでいた。

そのときのルールは自分以外の全てのマスターが死ぬまで生き残れというもので、その他に詳しいルールもなければ、厳しい罰則なども存在しなかった。

のちに月の聖杯の所有者を決めるために、ルールを大幅に変えた月の聖杯戦争と呼ばれる戦いが行われることになった。

関連項目『サーヴァント』『聖杯』『月の聖杯戦争』『マスター』

#### ・セラフ

霊子虚構世界の通称。

詳細はそちらで。

関連項目『霊子虚構世界』

#### ・月の聖杯

月に存在すると言われる無限の願望機。

その正体は謎の物体、ムーンセル・オートマトンのことである。

詳細はそちらで。

関連項目『聖杯』『月の聖杯戦争』『ムーンセル・オートマトン』

#### ・月の聖杯戦争

月に存在する聖杯、ムーンセル・オートマトンの所有者を決める戦い。

地上の聖杯戦争を模して作られた別物。

最後の一組になるまでマスターとサーヴァントが殺し合いをするという根本のルールは変わらないが、その他のルールはだいぶ変わっている。

月の聖杯戦争のルールは128人のマスターがそれぞれ決まっている相手と戦うというトーナメント形式になっており、決められた決戦日以外の敵マスターとの私闘も禁じられている。

また地上の聖杯戦争と違い、優勝者以外の敗れた全てのマスターが必ず死亡する。

この作品では拓斗がムーンセルを封印したため、二度と行われることはないと思われる。

関連項目『サーヴァント』『聖杯戦争』『マスター』『ムーンセル・オートマトン』

## ・バーサーカー

狂戦士の英霊。

最強のサーヴァント。

狂戦士の割にマスターへの忠義は厚い。

聖杯戦争で呼ばれるサーヴァントの七つのクラスの一つで、全てのサーヴァントの中で最強と呼ばれる。

なぜなら、バーサーカーのクラスで呼ばれた英霊は理性を失う代わりに、全てのステータスが上昇するためである。

能力が大幅に上がるがその分消費する魔力も桁違いのため、基本的には能力の低い英霊を強化するクラス。

しかし消費魔力のことを考えずに強大な英霊を呼ぶと、文句なしの最強のサーヴァントへと変貌する。

ただし、ほとんどの英霊が宝具を使えなくなり、また呼び出す英霊によっては逆に弱体化してしまうため、どちらにせよ扱いにくいクラスなのは間違いない。

この作品では三国史最強の戦士と、変貌した一撃必殺の魔拳士が召

喚されていた。

関連項目『サーヴァント』

#### ・宝具

サーヴァントの切り札。

英霊を英霊たらしめる伝説の象徴。

具現化された奇跡。

人々の願いを骨子にして誕生したサーヴァントの最終武装。

真名を持って開放することで魔術等では遠く及ばない奇跡を発揮する。

別に武器の類ではない魔術や特殊能力等も、それが伝説に深く関わっているのならば宝具となる。

宝具は使用する英霊と必ず対となって伝説で語られるため、宝具の真名を開放することはその英霊の正体を語るのと同じことになる。基本的にはどの宝具も使用するためには莫大な魔力が必要となり、連射することは難しい。

関連項目『サーヴァント』

#### ・マスター

聖杯を求める者。

サーヴァントの主。

自身の願いのために厳しい生存競争に身を置いた魔術師。

聖杯戦争に参加し、聖杯を求める魔術師のこと。

とはいえ、マスターであることの条件は令呪が体に刻まれていることと、使役するサーヴァントがいることの二つのみのため、本当の魔術師でなくても令呪さえあればマスターと呼ばれる。

月の聖杯戦争では128人もマスターが参加していた。

関連項目『サーヴァント』『聖杯』『聖杯戦争』『令呪』

・ムーンセル

ムーンセル・オートマトンの略称。

詳細はそちらで。

関連項目『ムーンセル・オートマトン』

・ムーンセル・オートマトン

月の眼。

神の自動書記。

異文化の残したアーティファクト。

2032年に発見された、月に存在する謎の物体。

太陽系最古の物質とも言われ、この物体を人類が解析することは未  
来永劫無いとされる。

この謎の物体に与えられた役割は、観測。

ムーンセル・オートマトンは地球上のあらゆる歴史、あらゆる魂、

あらゆるifを観測、計測し記録してきた。

その莫大な情報量、情報処理能力はもはや事象書き換え能力にすら  
届いているため、月の聖杯とよばれるようになる。

この作品では拓斗によって、外部からの侵入が禁止され、事実上の  
封印状態にある。<sup>アクセス</sup>

関連項目『聖杯』『月の聖杯戦争』

・モラトリアム

猶予期間。

月の聖杯戦争で、マスター達に与えられた決戦までの準備期間。

六日間あり、この間に相手マスターを殺す準備をしたり、鍛錬等を行ったりする。

安息の時間といえ、まあ、そうでもある。

関連項目『月の聖杯戦争』

#### ・ライダー

騎乗兵の英霊。

大がかりな宝具を持つ者が多い。

なぜかマスターを温かい目で見守る者が多いのも特徴。

聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントの七つのクラスの一つ。

ステータスは並みであることが多いが、それを補ってあまりある程の強力な威力の宝具を使う。

また特殊なスキルを扱うことができる者もいるため、戦闘を決するのはサーヴァントよりもマスターの技量によるものが多い。

この作品では歴史を変えた女海賊が召喚されていた。

関連項目『サーヴァント』

#### ・ランサー

槍兵の英霊。

最速のサーヴァント。

非業の死を遂げた者が多い。

聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントの七つのクラスの一つで、全てのサーヴァントの中で最も速い。

リーチの長い槍を主武装とし、敏捷も最高値のため一撃離脱ワンパンアウェイの戦法を得意とする……が、ランサーとして呼び出される英霊の多くが騎士のため、この戦法を嫌がる者が多い。

ステータス能力ではセイバー、バーサーカーに次いで高いため、純粹の一騎打ちでも十分に実力を発揮できる。

また、非常にしぶとく、生き残ることに特化した者が多いのも特徴。この作品ではルーマニアの串刺し公とアイルランドの光の御子が召

喚されていた。

・ 霊視虚構世界

ムーンセルの表層世界で月の聖杯戦争の舞台。

電子世界ではなく、霊子を用いた高度な仮想現実世界。

聖杯戦争に参加する、もしくは関わる人物だけが侵入する<sup>ロケイン</sup>ことができ、脱出する<sup>ロクアウト</sup>には聖杯の所有者になるしかない。

関連項目『ムーンセル・オートマトン』

・ 令呪

マスターの証。

三度の絶対命令権。

使いきりの簡易強化装置<sup>ブースター</sup>。

サーヴァントを召喚したマスターに宿る聖杯戦争参加の資格で、三画の模様として現れる。

本来、人間では使役することのできないサーヴァントを律するため  
の鎖という一面も持つ。

使用することでサーヴァントに対して絶対の命令を下すことができ、  
また状況によってはサーヴァントを大幅に強化することも可能。

ただし令呪は使用する毎に模様が消えていき、最終的には三回の使  
用で完全に消失する。

地上の聖杯戦争では令呪を失ってもサーヴァントを従えることができ  
なくなるだけで済むが、月の聖杯戦争では参加資格がなくなった  
とされ即座にセラフによって解体　つまりは、死ということにな  
る。

拓斗は聖杯戦争中に二回使用したため、残り一角の令呪が左手に残  
ることになった。

関連項目『聖杯戦争』『マスター』

## その他の用語

### ・異世界

元いた自分達の世界とは法則すらも異なる、かけ離れた世界。めがみは拓斗達に異世界のことを完全に別の世界だと説明していたが、実際は想像も絶する昔 例えば、地球誕生やもつと前の宇宙誕生のとき に枝分かれしたれっきとした並行世界の一つである。ただし、遙か古代に分かれたため、めがみの言う通りもはや自然や魔術の法則すら違う世界も多々ある。

中には第二魔法ですら到達できない世界もあるのではと考えられているが、実際には確かめようもないために不明である。

めがみが異世界のことを並行世界の一つだと拓斗達に話さなかったのは、単純に彼女も知らなかったのか、それとも何か裏があつて教えなかったのか……。

この真相も今のところは不明。

関連項目『第二魔法』『並行世界』

### ・運命の輪(?)

謎の黒い影がしきりに呟く単語。

詳細不明。

### ・栄光の七週戦争

三百十五年前に行われたドラゴンロードとルトエリノ大王の世界の



覇権を巡る戦争。

名前の通り七週間におよぶ戦いの末、ドラゴンロードは敗れ、勝利したルトエリノ大王はバイサス王国を建国することとなった。  
詳細不明。

関連項目『バイサス王国』

・ドラゴンスレイヤー

ドラゴンを殺した者。

勇敢な戦士にささげられる、最高の称号。

・ドラゴンファイア

ドラゴンの示威行動。

威圧することで、ほかの生物を恐怖におとしいれる。

ドラゴン版の凶暴かつ強力な殺気とも言える。

・ドラゴンラージャ

ドラゴンと人を結び付ける者。

血統によって受け継がれる特別な才能。

詳細不明。

・バイサス歴

バイサス王国で使用される暦。

バイサス王国が建国された四月二日を新年の始まりとしている。  
一年を三百六十五日にした太陽暦、もしくは太陰太陽暦だと思われる。

関連項目『バイサス王国』

・並行世界

自分の住んでいる世界とは別の異なる世界のこと。

あり得たかもしれないIfの世界で、似ていたとしてもどこか自分の世界と違っている。

その数は無限とも噂されている。

第二魔法はこの無数の世界を渡り歩くことができる。

関連項目『第二魔法』

・礼装

本来は魔術師をサポートする魔術用具のこと。

セラフで用意されていた礼装にはコードキャストという特殊能力があり、その礼装を装備することでマスターにその力を付加することができる。

種類は体操服から日本刀まで様々。

拓斗は持っていた全ての礼装を失っているが、めがみの力によりコードキャストは使用可能となっている。

関連項目『コードキャスト』

## プロローグ

「これが……聖杯……」

……触れた瞬間。

俺は聖杯の中にいた。

聖杯に吸い込まれた、いや溶けこんだと言った方がいいだろう。

分解されるまでのわずかな時間。

意識は確かにムーンセルに接続し、1つの存在となっていた。ムーンセルのすべてに触れ、その蓄積のすべてを見た。

膨大な情報、人類とは異なる概念、紋様のように編まれた情報保管の工程は、人類が使う知識体系ではない。

しかし理解できなくても、感じることはできる。

確かにムーンセルの記録した人類史において、トワイスの言葉は間違っているとは言えない。

戦争は一方で発展を生んだ。

そして凜が何度も言ったように、現在はかりそめの平和の代償に底知れぬ停滞を抱えている。

けれど、ムーンセルは記録するだけだ。

観測し、計測し、記録する中で幾度か生まれかけた知性。  
それを自ら解体し、観客であり続けた。

地上は、人間がたの住む世界だと。

どのような事態が人類に、地球に起ころうとも、月は全てを受け入れて、ただ見守り続ける。

そんな強さ。

そんな在りように、トワイスは気付けなかった。

「……………」

……………だけど、感慨を抱く暇はない。  
聖杯へ、願いを伝えなければならぬ。

「……………よし」

入力完了。

「文字も歪むことなく伝わった……と、思う。」

これで、後は分解の時を迎えるだけだ。

「……………あれ？」

……………そのはずだが、その時が不思議となかなか来ない。

ムーンセルと一体になった事で、時間感覚はそちらに同調している。  
1秒で膨大な計算を処理する演算機。

なので刹那の時間でも、体感では多少長くはなっている。

とはいえ、それにしても長すぎる気がするが　？

「ふむ、話が違うな。あのトワイズとかいう男、勘違いをしていたか？」

「！　セイバー！？」

セイバーの声が聞こえてきた。

すぐそばで、というより、同じ聖杯の中で。

いつの間にか彼女も一緒に聖杯の中に入り込んでいたらしい。

「……………いま気付いたような反応をするな。そもそも余の存在は常に  
気にかけておくのが余の<sup>マスター</sup>奏者たる者の務めである」

「そ、それはそうかもしれないけど……………」

しかし、少し意外だ。

聖杯戦争は終わり、もう戦闘もない。

……………つまり、すでにサーヴァントとしての彼女の役割は終わったのだ。

ならば寂しいけれど、彼女がここまでついてくる理由はないというのに。

「これがそなたの、マスターとしての最後の仕事なのだろう？ ならば余が同席するのは当然だ。そなたが余の力を必要としているときならば特に、な」

「セイバー……………」

……………そうか。

混入した異物が1つ多ければムーンセルの行う処理が増え、結果、分解までの時間が延びる。

彼女なりの不甲斐ないマスターに最後の助太刀をしに来てくれたという事か。

正直、彼女の気遣いはかなり嬉しい。

「でも……………」

それだけでこれほどの遅延は生じない。

他にまだ何かあるはずだ。

ムーンセルと接続している今、原因を探るのはそれほど困難ではない。

意識は程なくして、1つのデータに行き当たった。

「　　っ！」

「？　これは、そなたのようだな。……なんだ、この冷凍、睡眠と言うのは？」

それは、ある難病患者のデータ。

記憶障害を引き起こし、最後は死に至る脳症の。治療のための理論は示されていたが、技術的な問題と、理論の提唱者がテロ災害で死亡した為、手術は断念された。

技術の進歩と理論の完成を待つため、当時ようやく実用化された<sup>コールドスリープ</sup>冷凍睡眠装置で患者は保管され

「そういう、ことが……………」

同じ個人情報を持つ生きて人間がいるのなら、不正なデータかどうかは即断出来ない。

データの照会が必要となる。

それが、分解がここまで引き伸ばされた理由。

とはいえ、そこに眠る彼が<sup>サイバー</sup>魔術師として、この世界に來たわけではない。

俺はあくまで、その人生の再現体<sup>データ</sup>。  
それが判明し次第、分解される。  
運命<sup>フェイト</sup>は変わらない。  
時間もそれほど残ってはいないだろう。

「だけど……………」

メールを一通送る程度の、ささやかな余裕は、残されていた。

「 よし」

送信、完了。

無事に凜のもとに届くと思う。

「これで……………本当にやるべきことは全て終わった。後は、分解の時を待つだけ」

目を瞑ってその時が来るのを静かに待とうとする。

……………その時だった。



「本当に、それでいいの？」

「えっ？」

誰だ？

今の声は一体、誰の声だ？

突然、どこからか若い女性の綺麗な声が聞こえてきた。

でも、セイバーの声じゃない。

ガラスのように透明で綺麗な声だが、綺麗すぎて現実味がまるで感じられない。

ただどこに俺とセイバー以外に人がいるはずがない。

では、この声は一体、誰が、どこから？

「っ！」

それは、本当に唐突の変化だった。

謎の女性の声に問いかけようとした瞬間、俺は聖杯の中から、見知らぬ部屋の中に移動していた。

「じ、じじは……………？」

部屋は一面真っ白で家具も何も置かれておらず、ただし広い空間が広がっているだけだった。

……はつきり言って、最初の頃の俺のマイルームよりもさらに殺風景だ。

「むっ、どういうことだ？ 余と奏者は確かに聖杯の中にいた。それなのに別の空間に移動しているとは……………」

振り返るとセイバーが驚いた表情で立っていた。

俺だけじゃなく、彼女もいっしょにこの部屋にいるというだけで、ずいぶんと気持ちが悪くなった。

それにしても、これは一体どういうことなんだろう？

「まさか……………罠か？」

ふと思い出したのはユリウスのやっていた閉鎖空間だった。

もしかしたら誰かが俺を殺すためにこの空間に移動させたのかもしれない。

もちろん聖杯戦争が終わった以上、セラフに魔術師は俺以外に残ってはいない。

例外として、凜や教会の蒼崎蒼子と蒼崎青子がいるがああ三人がこんなことをするとは思えない。

だから普通なら罠という可能性はほとんどない。

だが、俺はつい先程、トワイスという本来ならありえない例外を見ている。

トワイスのように今回以外の聖杯戦争で生き残ったマスターが、俺を何らかの理由で利用しようとしたり、排除するためにこの空間を作ったのだとしたら　　？

「いや、奏者よ。そなたの考えていることはなんとなく分かるが、おそらくその可能性はないと思うぞ。たとえ、どのように優秀な者でもこのセラフの中心たる聖杯にハッキングできるとは思えぬ。そもそもそのようなことができれば、聖杯戦争などという回りくどいことは行われてはおるまい？」

「……確かにセイバーの言うとおりか。でも、だとしたらこの部屋は一体……………」

俺が何か手がかりが無いかと、部屋を見渡していたその時。

「ここはあなたの思考の中よ、近衛拓斗」

突然、俺の名前を呼ばれた。

先程と同じ女性の声で、ただし今度は前方からはっきりと聞こえてきた。

「　　っ！」

「何者だ！」

俺とセイバーはすぐさま戦闘体制を取り、前を睨みつける。

「……………」

そこには先程から聞こえてきた声の主と思われる若い女性がいた。年齢は二十代前半頃で、この部屋と同じ真っ白なワンピースを着ている。

絹のような金髪を背中に垂らし、目は深い海のような綺麗なブルーをしていた。

その顔には柔らかい笑みを浮かべており、敵意など微塵も感じさせない。

だが、それでも俺は警戒を解くことができなかった。

その理由の一つは聖杯戦争の経験から、たとえ相手が笑っていたとしても、本当に殺意がないとは限らないということを知っていたからだ。

……………だが、本当の理由はこの女性の気配だった。

さっき彼女の声を聞いたときも思ったのだが、彼女の微笑みも、柔らかそうな髪も、綺麗な目も、彼女の全てがなんだかひどく現実味が無いのだ。

慎二よりも普通なのに。

ダンよりも静かで。

ありすよりも生気がなく。  
ランルーくんよりも異常で。  
ユリウスよりも冷たく。  
ラニよりも人間らしくなく。  
レオよりも不自然だ。

今まで俺が出会ったどの人物とも、彼女はまるで違う。  
唯一、少しだけでも似ているとしたら、最後にアリーナで会ったあのサーヴァント殺しの女性ぐらいだろうか？

「……もう一度だけ問う。貴様は、何者だ？」

セイバーも俺と同じように感じているのか、硬い表情で静かに女性に問いかけていた。

「安心して、セイバー。私はあなた達の敵ではないわ」

「……そんな言葉で余が安心するとも思っているのか？」

「いいえ、しないでしょうね。だからあなた達に信用してもらっために、私のことや、この空間のこと、そして私の目的とか、拓斗とセイバーが聞きたいことは全部教えてあげるわ」

女性は微笑みを浮かべたまま、静かに答えた。

……………彼女の言葉が本当かどうかはまだ分からないが、とりあえ

ずすぐに戦う気はないということには分かった。  
ならば、このまま彼女の話聞いてもいいだろう。

「分かった、とりあえず話を聞こう」

「むう、仕方あるまいか。確かになんの情報もない相手と戦う事ほど危険なことはないのだしな」

俺の言葉を聞き、セイバーもしぶしぶと剣を引く。

「ありがとう、拓斗、セイバー。それじゃ、まずはこの空間のことから話すわね。さっき私はこの空間のことを拓斗の思考の中って言ったけど、それは言葉遊びでも何でもなく言葉通りの意味よ」

「どっぴいっことだ？」

「そうね。言葉にするのはとても難しいんだけど、簡単に言えばここはあなたの頭の中ってことになるの」

「……？」

「うーん、つまりね。あなた達は聖杯からこの空間に移ったって思っているけど、実際は移動なんてしてないの。あなた達の本体は相変わらず聖杯にあって、あなた達はこの光景を夢のように見ているのよ。そう、ちょうど魔術師が<sup>ウィザード</sup>霊子ハッキングを使って体を置いて魂だけセラフにアクセスするように、ね」

「……………ちょっと待ってくれ。言いたいことは分かったけど、それはおかしいんじゃないか？ もしその話が本当だとしても、俺は既に魂だけの存在だ。魂だけの存在がさらに魂そのもの（からだ）を置いて別のところにいけるはずがない」

…………… 厳密には俺は魂どころか、ただのデータに過ぎないんだが、今はどっちでも同じことだろう。

「だから、あなたはどこにも移動してないって言ったでしょ。ここはあなたの思考　あなたは私達と話しているように感じているだけ。……………そうね、あなた七回戦のときユリウスの記憶を見たでしょ？　あれと同じよ。あなた自身はどこにも行っていないのに意識は別のところにある、そういう感じよ」

これ以上は説明の仕様がないわ　　そう言って彼女は口を閉じた。

なるほど。

なんとなく、漠然とだがどういうことかは分かった。

おそらく、自分はこの光景を頭の中で思い浮かべているだけなんだろう。

そしてもう一つわかったことがある。

この女性は間違いなく俺の今までのことを知っている。

俺が聖杯戦争に出ていることも、七回戦でユリウスと戦ったことも調べればわかるだろう。

だけど、俺がユリウスの記憶をのぞいたことは調べられるはずがない。

あのとときいつしょにいたセイバーですら気づいていないんだから。なら、どうしてこの女性はそのことを知っている？  
一体どうすればそんなことを知ることができる。

やっぱり、まだ油断はできない。

「でも、だったらどうしてここにセイバーがいるんだ？ お前の言い方だここは俺の頭の中らしいけど、それならここにセイバーがいるはずがない。それも言葉のあやなのか？ それともこのセイバーは本物じゃないのか？」

「あら、どちらも違うわよ。セイバーはただ単に巻き込まれただけ」

「？ どういうことだ？」

「彼女はあなたのサーヴァントでしょ？ だからあなたの思考に私が進入したときに、パスを通じて彼女もあなたの思考に繋がったのよ」

「ほう、それは興味深いな。ならば、今この状況ならば余は奏者の考えていることを知ることができるのか？」

「うーん、ちよっとそれは難しいと思うわよ。魔術師ならばともかく、あなた剣士でしょ？ そんな細かいことができるとは思えないわ」

「うーむ、それは残念だ。奏者がどれほど余のことを想っているの  
か知るチャンスだというのに」



……ちょっと待ってくれ。

セイバー、お前はそんなことを考えていたのか？

「話が進まないからそろそろ次に行くわよ。次は私のこと。そうね、まず私の名前は『根尾丘めがみ』……もっともこれは偽名だけだね」

「偽名かよ！」

自己紹介で偽名を言って、おまけにそれを自分からバラすなんて……。

めがみって得体は知れないけど、案外明るい性格なのかもしれない。隣のセイバーもすっかり呆れている。

「そして、私がわざわざこんなことをした目的は………拓斗、あなたを救うことよ」

「はっ？」

思いがけないめがみの言葉に思わず声を上げてしまう。

一体、どういうことだ……？

「むっ、そなたそれはどういうことだ？」

「どうしたも何も、言葉通りだけど？」

驚いたようなセイバーの問いにめがみは普通に答える。

「助けるって……………」

「ええ、私は聖杯に不正なデータとして分解される運命さだめのあなたを助けに来たの」

「っ！」

やっぱり、そのことまで知っているのか　！？

「私は何でも知っている　そう言っておくわ、拓斗。もちろん、あなたが助かる方法も、ね」

「そなた、それは本当か！　本当にマスターを救う手段があるのか  
！」

めがみの言葉にセイバーが身を乗り出して叫ぶ。その顔はどこまでも真剣そのものだった。

「ええ、あるわ」

「マスター、良かったではないか！　まだそなたは眠りに尽く必要

「はないらしいぞ！」

めがみの言葉にセイバーは本当に嬉しそうに俺に笑いかける。  
でも、俺はまだめがみの言った言葉をうまく飲み込めていなかった。

助かる？

本当に？

「……………？ どうしたのだ、奏者よ。嬉しくないのか？」

「……………」

でも、それでいいのか？

多くの人の命を奪ってきた、ただのデータである自分が？

「っ！ 奏者よ、まさかとは思いますが、この期に及んでまだ自分は生きていいのか、などと考えているのではないのだろうか？」

「……………」

セイバーの言葉に答えられない。

俺は、本当にこのまま生きていく価値があるのか？

たとえば、ここで俺が消えたとしても地上には本当の『俺』がいる。

まがい物なんかじゃない、本物の。<sup>データ</sup>  
それなのに、俺が生きていく意味はあるのか？  
こんなにも多くの人を殺した自分が？

セイバーはそんな俺の様子を見て、信じられないと言いたそうな表情を浮かべた後、顔を真っ赤にした。  
そして。

「この……………たわけっ！」

「っ！」

突然、頬がひどく熱くなって前にいたはずのセイバーが視界から消えた。

それが、セイバーに平手打ちを食らったせいだと理解するのとはほとんど同時に、今度は胸倉を掴まれた。

「セイ、バー……………」

「ばかもの！ この大ばかもの！ そなたは一体この聖杯戦争で何を学んだのだ！ まさか、今更そんなことを言うとは思わなかったぞ！」

セイバーの顔を見て何も言えなくなる。

セイバーは顔を真っ赤にして、そして泣きながら叫んでいた。

「あのダンとかいう老人も言っていたであろう！ 『どんな結果でも受け入れてほしい』と！ 今のあなたの態度は、あなたが今まで倒してきた全ての者に対する冒涇だぞ！」

「……………っ！」

「それに、そなたが死んだら余は悲しむぞ！ わんわんと幼女のように泣くぞ！ そなたは余にそのような醜態をさらさせたいのか！」

「セイバー……………」

「余はこんなにもそなたに生きてほしいと願っているのだぞ！ それなのに、それなのに……………そなたは……………まだ、生きたいとは思えぬのか？」

セイバーの腕から力が抜けていく。セイバーは下を向きながら小さな声で話し続けた。

「余が……………私が生きてほしいと思っているだけでは、そなたが生きていく理由には、ならぬのか……………？」

最後はもう涙声で、セイバーはそう懇願してきた。

それを見て、俺は理解した。

……そうか、ようやく分かった。俺の本当の願いは

「マスター……………」

泣きじゃくるセイバーを抱きしめて、俺はじっとこちらを見たままのめがみに話しかけた。

めがみはまだ信用できない。

でも、その言葉を信じる価値はあるかもしれない。

「めがみ……………さっき俺の命を救うことができるって言ったよな。それは本当か？」

「ええ、本当よ。あなたは消えずに生き残ることができるわ」

「なら……………セイバーも一緒に俺と生き残させることはできるか？」

「っ！ マスター……………」

「ええ、できるわ」

「そうか……………」

あっさりと答えたためがみの言葉を何度も反芻する。

めがみはそんな俺を見て、にっこりと笑いながら俺に問いかけた。

「それじゃあ、近衛拓斗、質問するわ。あなたはこれからどうしたい？」

俺の出す答えは決まっている。

「俺は、俺は生きたい。もっとセイバーと一緒に生きていたい！」

「奏者よ……」

「そう」

俺の出した答えを聞いて、セイバーは顔を赤くし、めがみは満足そうに微笑んだ。

「なら、私は拓斗のその願いをかなえてあげるわ」

めがみは微笑みを消して、真剣な顔つきになった。

「それじゃ、あなたを助ける具体的な方法を説明するわね。拓斗、あなたはこのままいけば聖杯によって不正なデータとして分解されて消えてしまう。だから私が聖杯の外から力を使って、一時的な穴を作るわ。でも、私の力じゃそのままでは聖杯に穴を開けるのははつきり言っただけ難しい。だから、拓斗とセイバーは向こうに戻ったら聖杯に願いを入力して」

「聖杯に!?!」

「そう。さっきの『セイバーと一緒に生きていたい』って感じてね。そしたら聖杯自身の内側からの力と私の外側からの力が同時に働いて、なんとか小さな穴ぐらいだったら空けられるわ。そして、その穴からあなた達二人を脱出させるわ」

「いや、それって簡単に言っているけどかなり難しいことなんじゃない?」

「ふむ、色々ツツコミたいところだが、今は良しとしよう。とにかく、余と奏者は聖杯に願えばいいのだから?」

「ええ。でも時間はあまり残ってはいないわ。ここでの時の流れはそれこそ現実世界では一瞬だけど、もうこの空間に来た時点で拓斗に残された時間はそんなになかったわ。だからあなた達二人はできるだけ早く、そして強く願って」

「……………分かった」



できる、だろうか？

聖杯に願いを入力するのインプットは先ほどやったばかりだから、方法はわかっている。

だけど、今回の願いは先ほどの願いとは大きく違う。  
もし、失敗したら俺は今度こそ消えるんだ。

「っ……………！」

怖い。

消える覚悟 死ぬ覚悟のできていた先ほどとは違う。

今度は生きれるかもしれないのだ。

それなのに、もし願いを入力するのインプットが遅かったら？

もしめがみの作戦がうまくいかなかったら？

そしたら、俺は 。

「どうした、不安か奏者よ？ なに、安心せよ。これまでも散々奏者と余は無茶をしてきた。だがそれは全て上手くいってきた。だから今回もきつと上手くいく」

先ほど涙を見せていたのと同じ人物だとは思えないほど、セイバーの言葉は力強かった。

そして、その言葉でこれまでの闘いを思い出す。

ライダーとのトレジャーハンティング。

アーチャーの遺物探し。  
キャスターの固有結界の解除。  
令呪を使つての凜とラニの戦いへの介入。  
ランサーとのエネミーハンティング。  
アサシンの圏境の解除。  
礼装の承認を得るためのエネミーとの戦い。  
ガウエインの能力を封じるための時間稼ぎ。

そのどれもが一步間違えれば死に至るものだった。  
それだけじゃない、他のマスターとの戦いだって当然何度も死にそうになった。

でも、その全てを俺とセイバーは乗り越えてきたのだ。

……そうだ。何を恐れることがあった。

これくらい、いつものことじゃないか！

「ああ、そうだな。がんばろう、セイバー」

「うむ！」

次の瞬間、また唐突に景色が変わった。

「っ！」

そこはまた聖杯の中だった。  
戻ってきた？

いや、夢から覚めたというべきか。

時間が惜しい。

すぐに思考を切り替えて、聖杯に願いを伝える。

「聖杯よ、俺（余）の願いを聞いてくれ（聞くがよい）」

セイバーと声が重なる。

「俺とセイバー（余と奏者）をいっしょに生きさせてくれ（生きさせよ）！」

次の瞬間、俺の視界の一面を光が覆って

## プロローグ（後書き）

プロローグです。

……思ったより、長くなってしまいました……  
次からはたぶん、ここまでに長くはならないと思います。

第零章 新たな世界 1 森の中の問答

? ? ?

みせかけの微笑を見せたり、心に仮面をかぶったりしない、真心のこもった、裸のままの親切には、人は決して抵抗できないものだ。もしこちらがあくまで親切を続けければ、たとえ良心の一かけらもない人間でも、必ず受け入れてくれるだろう。

マルクス・アウレリウス・アント

ニヌス

? ? ?

「マスター。マスター！ 大丈夫か！？ 起きれるか！？」

「くっ、うう……。セイ、バー……。？」

セイバーに揺り動かされ、俺は目を覚ました。辺りは薄暗く、俺はまだ意識がハッキリしていなくて頭はボーっとしている。

「おお、目を覚ましたか、マスター。いつもは余よりも早く起きるのに、今日はいつまでたっても起きぬから心配したぞ」

「いや、たぶん、セイバーより遅く起きる人はそうそういないんじゃないかな？」

元皇帝ということもあってか、セイバーには早起きという習慣がまったく身についてない。たぶん、ほつとくと普通に昼近くまで眠っていることだろう。

もっとも、そんなことで貴重な<sup>モラトリアム</sup>猶予期間を無駄にしたくはなかったので、聖杯戦争中は俺が毎日起こしてはいたんだが。

いや……そんなことはどうでもいい。

それより、俺はどうしてこんなところで寝ているんだ？

だんだん頭が正常に機能してくる。

「……そうだ！ セイバー、あれからどうなったんだ！？ めがみの計画は無事に成功したのか！？」

「当然であろう。そうでなくては余も奏者もとっくに消滅しておる。だがこの通り余も、奏者も、ちゃんと生きておる。そのことが、あやつの作戦が成功したという、最も分かりやすい証明であるう？」

どうやら俺はあの出来事の後、気絶していたらしい。だけど、セイバーの言った通り俺は助かったようだ。だけど、気絶していたせいであまり助かった実感が湧かない。

とりあえずしばらくキョロキョロとあたりを見渡して、今の状況を確認する。

「ここは、森、か？」

深い森だ。近くに生えてる木はどれも俺の身長の数倍以上の高さはある。

周りを木で囲まれているとはいえ、ここまで薄暗いのはたぶん、まだ昼じゃないからだ。

ここは、どこなんだろう？

たぶんセラフではないんだろう。

セラフには学校とアリーナぐらいしか存在しないし、何よりも今の俺達がセラフにのこのこと帰ったら今度こそ排除されてしまう。

ただ俺とセイバーがいることを考えると、どこか別の電脳世界なのかもしれない。

「目を覚ましたようね、拓斗」

いつの間にか、俺達の目の前にめがみが立っていた。

初めて会ったときもそうだったけど、彼女は俺にもセイバーにも気付かれずにいきなり目の前に現れる。

アリスのようにワープでも使っているんだろうか？

「めがみ……………」

「ふむ、お主か。まずは、礼を言わせてもらおうぞ」

「お礼？」

「そつだ、礼だ。お主のおかげで余も奏者も消えずにすんだのだからな。礼をするのは当然であろう？ ……よくやってくれた、感謝する」

「ああ、セイバーの言うとおりでな、俺からもお礼を言わせてくれ。めがみ、ありがとう」

「……ふふ。まあ、あれは私がやりたくてやったことだから、そんなに感謝してもらわなくてもいいんだけど……とりあえずは、どういたしましてと言わせてもらおうわ」

めがみは少し照れくさそうにしながらも、微笑んでいた。

……とはいえ、相変わらずその笑みは少し違和感を感じるものだったが。

「とりあえず、めがみ。ここは一体どこなんだ？ セラフじゃないみたいだけど、また別の電腦空間なのか？」

「いいえ、違うわ」

「違う？ ていうことはやっぱりここはセラフの中なのか？」

「違う」



にこやかに微笑みながらめがみは首を振る。

「む、待てめがみよ！ そなたのその話しぶりからすると、よもやここは霊子虚構世界ではなく地上なのではないか？」

……なんだって？

今、セイバーはなんて言った？

ここが地上だって？

………いや、それはありえない。

なぜなら俺は人間ほんものじゃなくて、ただのデータ（にせもの）なんだから……。

そんな俺が分解されなかったからとはいえ、電腦世界以外で存在でき（いきていられ）るはずが無い！

「待つてくれ、セイバー。そんなことありえるはずないだろ？ 俺もお前も現実世界ではただのデータにすぎないんだぞ。そんな俺達が地上にいるはずがない」

「しかし奏者よ、今いるこの森自体も、木も、空気も、そして余達のこの肉体も本物と何も変わらないように思わぬか？ 余が知っている限りとはいえ、ここまでリアルに現実世界を再現できる霊子虚構世界は、ムーンセルの創り出したセラフしかありえぬのだぞ。ならばここがセラフではないのなら、地上ということになるのではないか？」

「確かに、その通りだけど……………」

俺の歯切りの悪い言い方が気に入らなかつたらしく、セイバーはむつと眉をしかめて怒鳴った。

「ええい、まどろっこしい！！ 奏者よ、答えを知っている者が目の前におるのだ、そやつにそうそうと答えを聞くがよい！」

そう言つてぶいっと顔をそらすセイバー。

……………まずい、怒らせてしまったみたいだ。

とはいえこのままじゃどうしようもないので、まずは微笑みながらこつちを見ているめがみに、詳しいことを教えてもらうことにする。

「それでめがみ、実際ここはどこなんだ。いや、ここのことだけじゃない。お前はその後、俺達になにをしたんだ？」

「そうね、ちゃんと全部話すわ。ちよつと長くなるけど別に構わないでしょ？」

「ああ、もちろんだ」

めがみは一度眼をつぶって言葉を切り、再び話し始めた。

「まず、分解される寸前だったあなた達は聖杯と私の力によって孔

の開いた聖杯から私に救出された。……………そこまではいい？」

「ああ」

「そして、問題はそこからなの。普通の魔術師ウィザードなら聖杯から取り出した後は、元の肉体に魂を戻すだけでいいわ。…………でも、あなたにはその帰るべき肉体がない。だからあなたをそのまま地上に帰すことはできなかつた」

そうだ。だからこそ俺はセイバーの言葉に納得することができないんだ。

「次に、拓斗の言った通り別の電子ネットワークに送ることもできたわ。セラフ以外の電子世界では今までのように普通の人間と同じように生きることが難しいけど、それでも生き続けることはできるから」

俺はそれでも構わない。

本来なら消えるはずだった命。

それが曲がりなりにも保たれるならどんな状況でも文句が言えるはずがない。

「でも、拓斗はセイバーといっしょに生きていきたいと言った。そもそも普通の人間のゴーストである拓斗と、英霊の再現体であるセイバーでは、基本性能スペックの桁が違うわ。英霊を再現できたのはムーンスルの規格外の処理能力のおかげ。普通の電子世界にセイバーを一

緒に連れて行ったら、その瞬間にその世界は崩壊するわ」

「……………そうか、ずっと一緒にいたせいかすっかり忘れていたことだが、セイバーもまた普通の人間じゃないんだった。」

確かにどんな状況でも文句は言えないが、彼女がいなかったら俺の願いの意味がなくなる。

「つまり、あなた達は地上に帰るにも帰れない。だから他の電子ネットワークに移ろうにも移れない。かといって、セラフに留まるうにも留まれないっていう三つの問題があったの」

「めがみ……………お前はそれをどうやって解決したんだ？」

自分のことながら、めがみの話を聞いているうちに、正直どうしようもないんじゃないかと思ってしまうたんだが。

「ふふ、簡単よ。ようは、地上に行きたくても肉体がない。でも電子世界にはもう居場所がない。……………なら、答えは一つだけよ」

めがみはそれまでと何ら変わることもない微笑みを浮かべながら、信じられないことを言い放った。

「新しい体を作って地上に送ればいいのよ」

「なっ!?!」

「なんだとっ!?!」

俺とセイバーの驚きの声が重なる。

体を作る？

一体どういう意味だ!?!

「おい、めがみ! それは一体どういう意味だ!?!」

「そのままの意味よ。私はあなた達を聖杯から汲み上げた後、あなた達に人の肉体を作ってあげて、その中あなた達を入れてあげたの。拓斗もセイバーもデータとはいえ、その実態は他の霊子ハツカ―と同じように普通の魂と何ら変わる物ではなかったから」

「……………」

言葉を失う。

彼女の言葉が本当なら、今の俺の体はまがい物ではなく、本物だと

いうことになる。

でも、本当にそんなことが可能なのか？

「むっ、信じられん。おぬしの言葉を信じるのならばおぬしのやった事は、今は失われたという第三魔法そのものではないか」

セイバーも眉をひそめて疑わしそうにしている。

「あら、そこまでおかしな話じゃないでしょ？ だってサーヴァントであるあなた自身が第三魔法の体現者じゃない」

「むっ。確かにそれはそうだが……」

めがみの言葉を聞いたセイバーが難しそうな顔をして考え込む。

だがそんなことより、まずは……。

「……………すまん、セイバー。第三魔法って、何だ？」

残念ながら、俺の元になった人物は魔術とは何の関わりも無い一般人だった。

そのため彼女達の会話に若干ついていけない。

「ああ、そうか。奏者は元々はそちら側の人間ではなかったのだったな」

セイバーが忘れていたとでも言いたそうな顔をした。

それを見ためがみが説明を始めてくれた。

「地上からマナが枯渇する以前は、世界には魔術を扱う魔術師がいた。彼らは様々な魔術を扱っていたけど、それらは現在の技術で再現することができるものだったわ。例えば、あなたが三回戦で戦ったキャスター。彼女は火炎を起こす魔術を使っていたでしょう」

「ああ、そうだったな。でも、自由に火をおこすなんてことを再現することができるのか？」

そういえば、あの時は大変だった。

キャスターの攻撃はそのほとんどが魔術だったけど、対するセイバーの魔力が弱かったせいはこちらはかなりのダメージを負ってしまったんだよな。

……いや、別に今の話とは全く関係ないんだけどな。

「ええ。火を出すだけならライターが一本あれば事足りるし、人を焼くほどの火炎が必要だとしても火炎放射機があれば十分でしょう？」

「なるほど、確かにそう言われればそうだな」

つまり、現在の科学技術でも少し時間や手間をつかえば似たようなこと、似たような結果が出せてしまうのが、魔術ということか。

「……でも、魔法は違う。魔法とは人間の科学では行うことのできないもの……つまり、奇跡と呼ぶことが出来るものよ。例えば、時間転移や生身での空間転移とかね」

……生身での空間転移はアリスとキャスターが使っていたような……

いや、あれは違うか。

よく考えればあれはセラフだからこそできる芸当で、地上でも彼女たちがあんなことをできるとは思えない。

「そして、地上から魔法がなくなる前に世界には五つの魔法があったわ。第三魔法っていうのはその中の一つで、その内容は魂の物質化………簡単にいえば霊体の実体化、かな？」

「霊体の実体化………」

なるほど……。

確かにそれは魔法だ。

現在の技術じゃあ、とてもじゃないが真似できない。



でも、それならその失われたはずの魔法を使うめがみとは一体？

「それじゃあ、めがみは一体どうして第三魔法を使えるんだ？ 地上ではもう魔術や魔法はほとんど使えないんだろっ？」

「ああ、だってそれは私が魔法なんて使えないからよ」

「はい？」

あれなんか今、さっきの会話が全部無駄になりそうな、とんでも発言を聞いたような？

「勘違いしないで。私は魔術師メイカスでもなければ魔術師ウイザードでもないの。魔法どころか魔術の類もなんにも使えないわ」

「ま、待て！ それならどうやって余と奏者に肉体を与え地上へ帰したというのだ！？ それとも今までの話は全部虚言とでも言うつもりか!？」

セイバーも怒ってというよりも、慌ててというふうな風でめがみに詰め寄る。

そんなセイバーの気概もどこ吹く風というように、さっきまでと変わらずに穏やかな口調でめがみは話す。

「あら嘘ではないわよ。事実あなた達は今こうやって受肉しているじゃない」

「ならばどうやったというのだ!」

「私はね、セイバー。魔術も魔法も使えないけど、もっと別のことができるのよ」

「別のこと？ それは何なんだ、めがみ?」

「うーん、何ていうのかしら？ あえて言わせてもらつたら魔法モドキ?」

「魔法モドキ?」

再びセイバーと声がハモる。

「一体どういうものなのだ、そなたのその魔法モドキとやらは」

「えーっと、何ていうかな……。上書き？ 改変？ うーん、違うわね……」

セイバーの言葉にめがみはしばらくブツブツと考え込んでいたが、やがて諦めたかのように溜息をついて、口を開いた。

「ごめんなさい。残念ながら、私のこの力を正しく伝える言葉はな

いわ。魔術でもなく、魔法でもない。でも、この力はオリジナルの魔法には及ばないものだけど、ある意味では全ての魔法よりもずっと強力な代物よ」

「ふむ、そうか。説明できないならば仕方あるまい。正直に言っと、そなたの話は信じがたい。だがそなたは余と奏者の命の恩人だからな、その話を信じてやってもよいぞ」

ようやくいつもの余裕が戻ってきたのか、セイバーはいつものようにエヘンと胸をはって答えた。

めがみはそんなセイバーの態度を見ながら微笑んだ。俺には、その微笑みはどことなく楽しげに見えた。

「ま、それはともかくとして。とにかく私はその魔法モドキを使って拓斗とセイバーに肉体を与えて地上に帰そうと思ったの。……でも、ここにも一つ問題があった」

「……一体、今度はどんな問題なんだ？」

また、問題か。

なんだかさつきからめがみの話を聞いていたら問題ばかりだな。

……でも、それもしかないか。

普通ならできないこと　いや、あり得ないことを、彼女はやってくれたのだ。

これで何の問題もなかったら、逆に怖い。

「そうね、簡単に言えば世界の修正力が問題だったのよ」

「修正力？」

「そう。あの世界はセラフ以上に、とにかく矛盾という事を嫌うのよ。たとえば、同じ人が二人以上同時に存在している、とかね。だから既に死んでいるセイバーはもちろん、ほとんど同一の存在が生きている拓斗も、受肉させてとはいえ地上に帰すのは難しかったの。本当の魔法ならそれでも可能なんだけど、私が使うのはあくまでモドキ。残念ながらそこまでの力はないから」

「それで、その問題はどうやって解決したんだ？」

俺の言葉にめがみは軽く頷いた。

「私の力じゃあの世界ではあなた達を地上に帰すことはできなかった。だから、あなた達二人を別の世界に送って受肉させたわ」

「……………」

またまたすごいことを言われたが、いい加減に慣れてしまってもう俺は反応もしない。

ただ、彼女が一体何者なのか漠然と考えていた。

「第三魔法のまねの次は第二魔法のまねか？ そなたは本当に何者

なのだ？」

「いいえ、厳密には第二魔法のまねですらないわ。だって私があなた達を飛ばしたところは平行世界じゃなくて異世界だからね。……ちなみに拓斗。第二魔法っていうのは平行世界を移動したりすることのできる魔法ね」

「わざわざ説明してくれたのは嬉しいけど、平行世界と異世界ってどう違うんだ？」

「簡単に言えば、ありえたかもしれない現実そっくりの世界と、法則すら違う現実とは思えない世界って感じかな」

正直、もう何がなんだかって感じた。

「ふむ、つまりここは余と奏者のいた世界とはまるで違うところとか？」

「ええ。ああ、でも安心してちゃんとここには前の世界と同じように、人間も住んでいるから」

……異世界というのはヘタしたら人すら存在してない可能性があるあったようです。

どうもめがみの口ぶりからすると、異世界というのは本当に俺達の世界とはまるで違うところらしい。

「む。奏者よ、案外落ち着いておるな。あの話からするとそなたはもっと混乱してもおかしくはないと思うが？」

「そりゃあ、ね。俺だってこれが初めてのことだったら、もっとうるたえていただろうけどさ。自分の中の常識がへし折られるのはこれで二回目だからね」

聖杯戦争。

現実だと思っていた世界が実は虚構の世界だと知ったとき、そして今まで夢物語だと思っていた魔術師のことを知ったとき、自分の中の常識なんてすぐに吹っ飛んでしまった。あのときの衝撃は今もまだ覚えている。

「そういうセイバーだって落ち着いてるじゃないか」

「ばか者、マスターの前だというのに醜態をさらすサーヴァントがどこにいる！　そ、それに……………」

突然、セイバーが齒切りが悪そうにする。

「よ、余にはそなたがついておるからな。そなたと一緒にいるかぎり余には、不安も恐怖も存在せぬ」

セイバーは顔をそらしてぶっきらぼうに言い放つ。  
………が、その頬は真っ赤に染まっていた。

まったく、こいつは。

「俺もセイバーがいる限り、どんなことがあっても大丈夫だと信じてるよ」

「っ！」

頬どころかセイバーの顔全体が着ているドレスのように真っ赤になる。

かわいい。

「ふふ。説明を続けるわよ、お二人さん？」

「ああ、頼むめがみ」

「う、うむっ！」

めがみがクスクス笑いながら説明を再会する。

「ま、今までの話をまとめて言うと、私はあなた達を聖杯から脱出させたあと異世界に転移させて、さらに新しい肉体を作ったそこに

あなた達のデータたましいをいれて、ちゃんとした人間にしたってわけ」

「なるほど、な」

ようやく状況を正しく認識する。

つまりここはセラフでも地上でもなく、異世界にある森の中。

そして、俺とセイバーはデータでも電子生命体でもなく、ちゃんとした肉体をもつ人間ということになるのか。

「よし、状況はなんとなくわかった。じゃあ、次にこの異世界っていうところはどんなところなんだ？」

「そうね。とりあえず、拓斗がいた世界と大まかなところは変わらないわ。ちゃんと人間は住んでいるし、大方の常識もいっしょ。雨も上から下に降るし、ちゃんと重力だってあるわ」

……とりあえず、無茶苦茶な世界ではないことは分かった。というか雨が上に降ったり、重力の無い異世界もあるのか。

「ただ、生活はだいぶ違うわ。っていうか、ここは元の世界でいう中世ぐらいの暮らしをしてるわ」

「中世って、ヨーロッパでは騎士が活躍し、日本では武士が活躍したあの中世のことか？」

「そう、その中世」



たぶんアーチャーやガウエインの生きていた頃の時代ぐらいか。  
ならここにも騎士とかがいるのかもしれないな。

「次に、ここには魔法が存在するわ。もちろん、レベルは魔術ぐら  
いだけだね」

「中世の時代に魔法か。まさしく物語の世界だな」

エクスカリバー・ガラティーン  
転輪する勝利の剣のような聖剣があってもおかしくないかもしれな  
い。

今更、魔法やなにやらでそこまで驚くことはない。

「最後に、この世界には人間以外にもドラゴンやエルフのような種  
族が暮らしているわ」

「ドラゴン!? ドラゴンと戦うことになるのかもしれないのか!  
?」

さすがにこれには驚いた。

まさしく物語の世界って感じだ。

……ああ、いや。

英霊がいるってことは、俺の知らないだけで地上にもドラゴンとか  
はいたのかもしれない。

だとしたら、そこまでおかしな世界じゃないのかもしれないな。

「ふむ、ドラゴンか。余も一度は仕留めてみたいものだ」

いや、セイバーさん？

さすがの俺もドラゴンと戦ったら死を覚悟すると思うよ。

………もちろん、本当に死ぬ気なんてこれっぽちもないけどさ。  
セイバーといっしょなら、なおさらだね。

「この世界に関する基本的な情報はこれくらいね。私もこの世界のことを詳しく知っているわけじゃないから。あとはこの世界でゆっくりと知ることね。それじゃ、最後にあなた達の体のことについて」

「……！」

緊張が走る。

「まずは安心して。拓斗もセイバーもその体はちゃんと普通の人間のものだから。普通の人間のように成長して、普通の人間のように年を取って、普通の人間のように死ぬことができるわ」

「サーヴァントである余も人のように年を取ることができるのか？」

「ええ。普通の受肉だったらそのサーヴァントの肉体は死ぬまで成長することは無いわ。でも、私のは特殊な力だから。セイバーの体

は限りなく人間に近くなってるわ。だからセイバーも普通の人間のように死ぬことができるわ」

「そうか」

そう答えるセイバーはひどく嬉しそうだった。  
なぜだろう？

「どうして、セイバーはそんなに嬉しそうなんだ？」

「ふ、当然であろう。これで余はそなたといっしょに年を取って死ぬことができるのだからな。死ぬのは嫌だが、そなたが死んだあと余だけずっと生き続けるのはもっと嫌だ」

「なるほどね」

納得した。

確かにそれは嫌だ。

もし俺がそんな立場だったらと考えるだけでぞっとする。

そのとき、セイバーがふと何かを思いついたような顔をした。

「む？ しかし、考えてみると普通の人間になってしまったのなら、もう奏者を守ることができなくなってしまっではないか！」

確かにそうだ。

もしセイバーが本当に普通の人間になったのなら、その力はそれこそ普通の少女並みしかないだろう。  
下手したら俺よりも弱いかもしれない。

「そこらへんはどうなってるんだ？」

「そうね。じゃあ、セイバーの体について詳しく話すわね」

「うむ、頼む」

「まず、基本的にはセイバーの体は生前のものと変わらない、十代後半の肉体になっているわ。ただし人間離れとまではいかないけど、身体能力も高くなってるわ」

「具体的にはどれくらいなんだ？」

「そうね、たとえば足の速さはだいたい拓斗がコードキャストの *overspeed*（*overspeed*）を使っているときと同じくらいかしら」

「確かに、十分だな……」

俺、あれを使っているときって結構速かった気がするんだけど……？

「さすがにサーヴァントだったときと同じようには戦えないでしょうけど、普通の人間相手なら十分戦えるわ」

「宝具やスキルはどうなってる？ セラフでもないここでも使う

「ことはできるのか？」

「安心して、セイバー。あなたの宝具や戦闘スキル、それと固有スキルは今も使うことができるわ」

「おお、そうか！ ならばこれからも奏者のために剣を振るうことができるな！」

嬉しそうにセイバーは笑う。

セイバーがそこまで俺のために、戦ってくれようとしてくれているのは正直嬉しい。

「次に、拓斗の体のことだけど」

「ああ、俺の体はどうなってるんだ？ まさか俺までセイバーみたいな身体能力になっているわけじゃないんだろ？」

もっとも、俺がそんなすごい身体能力を手に入れたところで戦えるわけじゃないんだけどな。

「というかセイバーが許してはくれまい。」

「ええ、拓斗の体はセラフの頃と身体能力は変わってないわ。ほら、ほとんど違和感が無いでしょう？」

「違和感どころか、本当にこれが本物の肉体かも分からないくらいだ」

正直、ここがセラフだと言われても納得してしまっただ。

「それはよかったわ。違和感がないってことは、それだけその体が本物に近いってこと。私もこんなことをしたのは初めてだったから、少しだけ心配してたの。でも安心したわ」

「なら俺の体は特に変わったところはないのか？」

「いいえ、いくつもあるわ」

「どんなところなんだ？」

「まず、礼装なしでも拓斗が今まで使っていたコードキャストの全てがこの世界でも使えるようになってるわ」

「なっ、本当か!？」

「ええ。ためしにあの木に向けてshock(64)を使ってみて」

めがみが俺の右前に立っている木を指差した。

shock(64)か。

魔弾を作って相手に撃ち込むコードキャストだ。

本来ならあれを使うには破邪刀が必要なんだけど、今の俺は破邪刀を含めた全ての礼装がない。

ま、物は試しだ。

「shock(64)!!」

何も持っていない右腕を木の方向に突き出して呪文を唱える。

すると。

「おおっ、発動したぞ奏者よ!」

「本当に……できた……」

俺の手から見覚えのある魔弾が出てきて、向こうに立っていた木に当たった。

「ね、できたでしょ。ああ、それと今の拓斗の魔力は、赤原礼装とアトラスの悪魔の両方を装備したときのあなたの最大魔力と同じだけあるわ」

「そこまでしてくれたのか……。本当にありがとう、めがみ」

「あっ、そのかわりにこれからあなたの魔力はどんなに特訓しても上がらず、一生そのままになるわ」

「別に気にしないよ。これだけあれば十分だ」

「それとあなたの魔力は夜の十二時、つまり日付が変わるときにだけ完全に回復するわ。その方法以外ではあなたの魔力は一切回復しないから忘れないでね」

「わかった、気をつける」

「ふー、あと何かあったかしら。……………そうだ、最後に重要なことがあったわ」

めがみは少し疲れたような素振りをしてながらも再び真剣な顔になった。

「重要なこと？」

「拓斗、セイバー。あなた達は私の力で受肉を果して真の意味で人間になった。つまり、あなた達はもうマスターとサーヴァントの関係ではないの」

「っ！」

「むっ！」

「もうセイバーは拓斗の魔力供給がなくても存在することができし、拓斗もセイバーがいなくても死ぬことは無いわ。つまりあなたたちはもういっしょにいる必要性はないの」

「……………」



……なるほど。

確かにめがみの言うとおりだ。

マスターとサーヴァントの関係で無くなったのならもう無理していつしよにしている必要は無い。

別れたければ自由に別れていいってことか。

だけど、俺の答えはもう決まっている。

たぶんセイバーの答えも俺といつしよだ。

「ふふ、いい顔ね。私がこれから何を聞くかわかっている顔ね。…  
… 必要ないと思うけど、一応聞いておくわ。拓斗、セイバー、あなた達これからもいつしよに生きていくつもり？」

「もちろん(だ)！」

当然だ。

もう俺にとってセイバーは聖杯戦争を共に戦う相棒じゃない。  
俺にとって大切なパートナーなんだから。

セイバーの方を見ると、彼女も俺と同じ考えなんだろうか。

少し、顔を赤くしながら微笑んでくれている。

「めがみ、もう俺はセイバーと離れるなんて考えることもできないんだ」

「余もそうだ。たとえマスターでなくても、あのものは余の大切な

奏者であり、愛すべき勇者なのだからな」

「……そう」

めがみは俺達の答えを聞いて、とても嬉しそうに微笑んだ。

「なら、私からは何も言うことは無いわ。このままいっしょに生きるのも、いつか別れて暮らすのも、それはあなた達の自由。私が口を挟む権利はないわ」

そう言って、めがみは俺達に背を向けた。

「最後に、セイバー。あなたはもうサーヴァントじゃないから対魔力のスキルだけは失っているわ」

「うむ、わかった」

「拓斗、あなたの手に刻まれた令呪はまだ使うことができるわ。切り札としてとっておきなさい」

そう言い残すとめがみは俺達に背を向けて歩き出した。  
まさか、このまま立ち去るつもりか!?

「むづ! あやつ、立ち去るつもりか!?!」

「ま、待ってくれめがみ！ どうしてお前は俺達を助けてくれたんだ！？ お前は一体何者なんだ！？」

そう、これだけ色々してもらって、話をしたが彼女がどうして俺達を救ってくれたかがまだわからない。

聖杯より俺達を救い出すという常識外の行動。

世界を自由に駆け、肉体を自由に作り出す驚異の力。

彼女がとんでもない存在であることは容易に想像がつく。

それなのに彼女は見ず知らずの 少なくとも俺にとっては 他人である俺達を救ってくれた。

今までの話しぶりから、彼女が得体の知れない存在だが、善良な人であることはなんとなくわかる。

それでも、彼女が俺達を救う理由がわからない。

一体、彼女は何のために ？

めがみは俺達の声が聞こえたのか、振り向いた。

「私の目的は拓斗、あなたにこれからも生き続けてもらうことよ」

「な、一体どういう」

俺の声を無視して、めがみは再び前を向いて歩き出す。

「待てめがみ！ そなたは一体なにものなのだ！？」

セイバーの問いにめがみは再び足を止め、振り向いた。

めがみは空虚な微笑を顔に貼り付けたまま、セイバーの問いに答えた。

「私は……………運命の影」

運命の……………影……………？

それは、一体なにを表しているんだ？

俺とセイバーが呆然としている間にめがみはまた歩き出した。

「また、会うことになるでしょう。それまで、お元気で」

めがみの言葉にも俺達はなにも答えることはできなかった。  
立ち去っていくその後ろ姿はどこか物悲しいものだった。

そして、そのままがみは森の奥深くに消えていった。

第零章 新たな世界 1 森の中の問答（後書き）

いやー、また長くなってしまった……。

ま、こんなに長いのも今回まで。

次回からは少し短いのを投稿すると思います。

## 2 本当の名前

？

？

？

愛は時の威力を破り、未来と過去とを、永遠に結び合わせる。

ミュラー

？

？

？

「行ってしまったな、マスター」

「ああ……」

不思議な人だった。

得体の知れない人でもあったけど、それでも俺達を助けてくれたんだ。

できれば最後にもう一度くらいお礼を言っておきたかった。

「なに辛気臭い顔をしておるのだ、奏者よ。別にもう会えぬというわけでもない。めがみもそう言っておったであろう」

「それもそうだな。……実を言うと、めがみとはこれから何度も会うような気がするんだよな」

「うむ、奇遇だな。ちょうど余もそのように思っていたところだったぞ」

それは奇妙な予感。  
でも確かな予感でもあった。

おそらく、俺とめがみはこれから何度も再会することになるんだろう。

そのとき彼女がまた俺達に力を貸してくれるかはわからないけど。とりあえず、次にまた会ったときは、なんで俺達を助けてくれたのかもう一回聞いてみよう。

「それで奏者よ、これからどうする？」

「そうだな。とりあえずはこの森から出てどこか人のいる場所村とか町とかを探そう。そして、そこでこの世界に慣れよう」

「うむ、そうだな。めがみが教えてくれたこの世界の知識は最低限のものだからな。町で情報を集めるといっなのは良い手だと余も思う」

今の俺達はこの世界のことをなにも知らない。

聖杯戦争で痛感したけど、情報は大切なものだ。



いつまでも、この世界で右も左もわからない状況を続けるわけには  
いかない。

「む、しかしマスターよ。今の余達には資金がまったくないので  
ないか？」

「あつ、そういえばそうかもしれない。……というかお金どころか  
今の俺達なにも持ってないんじゃないか？」

めがみの力で肉体は実体化したけど、アイテムやら礼装やらはして  
ないみたいだ。

とはいえめがみのおかげで俺自身の力でコードキャストが使える以  
上、礼装はあまり役には立たないし、アイテムだってここがセラフ  
でないなら効果があるかどうか疑わしい。

お金にいたっては電子マネーだったから、実体化させろというほう  
が無茶なことだろう。

文字どおりの無一文だ。

こんなんでこれから、このなにも知らない世界で上手くやっていけ  
るのかと少し不安になる。

「ん？　　そういえばセイバーがいつも使っている剣はどうなってる  
んだ？」

今は持ってないみたいだけど。

「ふむ、いつものように魔力で編み出せるのではないか？」

「でもセイバーだってもうほとんど普通の人間なんだろう？　今までのようにいくかわからないんじゃないか？」

「まあ議論するよりも実際にやってみたほうが早かるう」

そう言っつてセイバーが左手を前に出すと、次の瞬間にはもう見慣れ  
てしまった、いびつな形の真紅の大剣が握られていた。

「うむっ。どうだ奏者よ、いつものように上手くいったであろう？」

「はは、そうだな。いらん杞憂だったみたいだな」

エヘンと胸を張って自慢するように剣を見せるかわいいセイバーの  
様子に、おもわず笑ってしまう。

「安心するがいいマスター。たとえ、なにがあつたとしても余がこ  
の剣で今までのようにそなたを守りきる。金銭がないのならば、余  
がこの剣で稼いで見せよう。ドラゴンが襲ってきたのならば、余が  
この剣で打ち滅ぼして見せよう。そなたは後ろでただ見ているだけ  
でしょう」

「……………っ！」

セイバーはさっきまでとは違い真剣な声をしているが、その顔はひどく穏やかでその瞳には俺のことを想う深い慈愛に満ちていた。それを見て俺は心を揺さぶられるのを感じた。

……前言撤回だな、これは。

まったく、一体俺はなにを不安に思っていたんだろうな。

自分が生きていた世界と違う世界だから？

知人が誰もいない？

時代が中世？

ドラゴンがいるかもしれない？

言葉が通じるかわからない？

お金も物もなにもない？

………なんだ、それくらいか。

それくらいなら、なんとでもなる。

別に世界がなくなつたわけじゃない。

道だっていくらでもある。

これから俺はどこにでも進むことができる。

なによりも俺の隣には彼女がいるじゃないか。

彼女と進む限り、俺の前に不安も絶望もあるわけない。

そんなもの彼女が斬り捨ててくれる。  
俺はそれを手伝うだけでいい。

そして彼女がそれにぶつかったら、今度は俺がそれをぶっ壊せばいい。

もちろんそのときは彼女にもちよっとだけ力を貸してもらって。

そうだ。

それが俺達だ。

不安を感じる必要などどこにもない。

そして、俺はそのとき一つの決心をした。

「む、どうしたのだ奏者よ？ 急にニヤニヤと笑いだして。少し気持ち悪いぞ？」

「ははははは！ いや、何でもないよ。ただ、ようやく俺も本調子に戻ってきたみたいだ」

意味が分らないとでも言いたそうな、怪訝そうな顔をする彼女の顔がなんだかひどく愛らしく見える。

……さすがにそろそろ別のことを考えたほうがよさそうだ。

彼女もいまだに怪訝そうな顔はしていたが、いつまでもこんな話をしているのは時間の無駄だと思ったのか、話題を変えてきた。

「むー、奏者よ。そろそろ移動を開始したほうがよいのではないか？ 余はいつまでもこのような薄暗い森にいたくはないぞ。この陰湿な感じ、なんだかあのアーチャーが襲ってきそうで気に食わん」

「ああ、ちょっと待ってくれ。その前にこれを使っておくから」

俺はそう言つと目を閉じて神経を集中させる。

「viewmap）！」

呪文を唱えた瞬間、俺の頭の中にこの森の地図が映し出される。

viewmap）（はshock）64）とは違い、補助用のコードキャストだ。

使えば一定時間だけど、その周辺の地形を頭の中で地図のように映し出すことができる。

聖杯戦争ではアリーナの隠し通路を見つけるのに役に立った。

「おお、そうか！ そのコードキャストを使えばこの陰鬱な森で迷うこともなくなるということだな！」

「そういうこと。なんの装備もない今の俺達じゃ、万が一でもこんな森で遭難でもしたら一巻の終わりだからな」

さすがにここまでめがみにやってもらつて、森で迷つて死にましたー、なんて終わりは迎えたくない。

「うむ、では行こうとするかマスター！」

「……………」

彼女はアリーナの探索のときと同じように、俺が先に行くのを待って  
てくれている。

それは、彼女があくまで俺の指示に従ってくれるという意思表示で  
もあり、同時に、後ろにいたほうが俺になにがあっても対処しやす  
いということだと、俺は今までの経験で知っていた。

だけど俺は、彼女がいつものようにマスターと呼んだときにさっき  
の決心を固めていた。

「？ マスター？」

中々動かない俺に、彼女はいぶかしむような声をかける。  
でも、俺はその声になんの反応も返さない。

「む、どうしたのだマスター？ 行かぬのか？」

落ち着け。

落ち着くんだ、俺。

俺は深呼吸をしてから、ようやく口を開く。

「ああそうだな、行こうか

.....ネロ」

「えっ？」

彼女はどこかぼうぜんとしたような声をだして、固まってしまった。その頬が赤く染まっていく。

俺も平然とはしていられなかった。

顔が彼女に負けず劣らず赤くなっているのが自分でもわかる。

「そ、そ、奏者よ！ い、今、なんと言ったのだ？ 余の耳はおかしくなってしまうたらしい！ そなたが今、よ、余のことを.....  
...その.....なんというか.....！」

彼女は普段の凛々しさが嘘のように、顔を真っ赤にしてしどろもどろに尋ねてくる。

「だから、そろそろ行こうかって言ったんだよ.....ネロ」

「っ！」

もう一度、俺が彼女の本当の名前を口にすると、彼女は今度こそピタリと動きを止めてしまった。

慌てて、俺は言葉をつなげる。

「い、いや、ほらさ。もう、俺達って主人と従者マスター サーヴァントの関係じゃないだろ。聖杯戦争はもう終わったし、なによりネロももうサーヴァントじゃなくて、普通の人になれたんだから。だ、だからいつまでもセイバーなんて役割名クラスで呼んだら駄目だと思って……………」

口から出たのは偽らざる本音。

でも、この言葉は本当の想いの一部でしかない。

彼女のことをセイバーと呼ぶのが嫌なのはもちろん聖杯戦争が終わったのに、いつまでもこんな呼び方するのは不自然だという思いもある。

でも、それ以上に俺は彼女とは対等だと思っているからだ。

俺達は決して主従関係なんかじゃない。

俺達は切れることない絆で繋がった相棒パートナーなんだ。

……………いや、それも違う。

それもまだ自分の気持ちをこまかしている。

俺は。

俺はただ彼女のことを名前で呼びたかっただけなんだ。

ただそれだけ。

それだけの理由。



でも、俺にとってはそれが一番重要で大切だったんだ。

「……………」

彼女はまだ固まって動けずにいる。

あれ？

もしかして彼女を傷つけちゃったか？

俺は恐る恐る彼女に声をかけた。

「なあ、もしかして、嫌、だったか……………？」

彼女にとって『ネロ・クラディウス』の名前は心の傷だったのかも  
しれない。

なにせ彼女はその名前で生前、数々の不幸を体験したのだ。

実の母に権力掌握のためのコマにされ。

私腹を肥やすことしか頭がない元老院と対立し。

信頼していた師とは心がすれ違い。

母の毒により頭痛に苦しみ。

部下には反乱を起こされ。

ついには皇帝の座を追われ。

あれほど愛していた市民にも見捨てられ。

そして最後は夕陽のなかで自害するしかなかった。

彼女はそれを気にしてないと、後悔していないと言っていたが、もしかしたらただ強がっていただけじゃないのか？

本当は彼女は嫌な思いでの詰まった『ネロ』よりも、俺と聖杯戦争を戦った『セイバー』の名前で呼ばれたいんじゃないのか……？

「ごめん、勝手に本当の名前で呼んじゃって。もし、ネロがその名前前で呼ばれるのが嫌なら、今まで通りセイバーって呼ぶけど……」

…」

「ち、違っただけ奏者よ、別に嫌だったわけではない！ むしろもっと呼ぶがよい！ 余の名前をオリュンポスの神々の名のように呼び、称えるがよい！」

「いや、さすがにそこまではしないから」

彼女はまだ混乱しているみたいで、よくわからないことを叫んでいる。

でも、ネロって呼ばれるのが嫌いというわけではないことはわかった。

「なんだか混乱してるみたいだな」

「あ、当り前であろう！ 突然名前で呼ばれたら余だって驚くわ！ だが、うむ、たしかにそなたの言う通りかもしれないな。聖杯戦

争は終わった。それなのに、いまだにクラス名を名乗るのは美しくないな。うむ、よいだろう、我が奏者に余の真名を呼ぶ荣誉を与えよう！」

エヘンといつもとどおりに胸を張って、尊大な口調でどこか早口に彼女が言う。

だけど、その頬がいまだに赤くなっているのを俺は見逃さなかった。

かわいいな、本当に。

「ええーい、もうその話はよい！　あまり余をからかうと、いくらそなたでもただでは済ませぬぞ！」

笑ったのがばれたのか、彼女が本気で機嫌を悪くしそうになったので、俺も出発の準備をする。

「ごめん、ごめん。じゃあ、そろそろ行こうかネロ」

「うむ、そうだな……………タクト」

「えっ！」

不覚にもさっきの彼女と同じ反応をしてしまう。

え、今の俺の名前だよな？

まさか彼女も俺のことを名前で呼んでくれるのか……？  
うわ、顔がすっごく熱くなってる！

「ふふ、どうしたのだ、タクトよ。まさか余のことは名前で呼んでおきながら、自分はダメなどと言うのではないだろうな？」

「え、いや。そりゃあ、別に良いっていうか。というか、呼んでくれたほうが嬉しいというか……」

「ふ、当然であろう。余がすでにサーバーヴァントでないように、そなたもまたもうマスターではないのだ。名前で呼ぶのは当然であろう？」

ネロはいたずらの成功した少女のような顔で、堂々とそう言った。

なるほど、これは恥ずかしい。

先ほどのネロの反応がよくわかる。

とても嬉しいけど、それと同じくらいに恥ずかしい。

おかしいな、俺のことを名前で呼んだのはネロが初めてってわけじゃないのに。

なんだか、すっごく恥ずかしい。

やっぱり呼んでくれたのがネロだからなのかな？

「ふふ、さあどうしたのだ？ まだ行かぬのか、タクトよ？」

ネロは先ほどの意趣返しができて満足したのか、えらくご機嫌だ。

まったく……。

これだからネロには敵わないんだよな。

俺は苦笑しながらネロの隣に立つ。

「はいはい。それじゃ、今度こそ行こうか、ネロ？」

「うむ、タクトの思うままに」

そして、俺とネロは隣に並んでいっしょに森の出口へと歩き出した。

## 2 本当の名前（後書き）

拓斗とネロの好感度は、すでにマックスを突破しています（笑）  
もはやバカップルの領域です。

ちなみに、次回からようやくドラゴンライジャと本格的に絡み出します。

よもや設定の説明にここまでかかるとは……………o r t

## 主人公&ヒロイン設定

主人公

名前 近衛拓斗

性別 男性

年齢 精神的には十七歳（実年齢は一歳にも満たない）

性格 素直。また死にそうな敵に止めをさせなかったり身を挺して人を救ったりするなど、非常に優しい性格でもある。

Fate/EXTRA並びに本編の主人公。

月で行われた無限の願望機『聖杯』を巡る戦い 聖杯戦争 の  
勝利者。

本来なら不正のデータとして聖杯に分解され、その生涯を終えるはずだったが、その直前に謎の女性、根尾丘めがみによって異世界に飛ばされ命を救われる。

元々自己が無いせいか自身の欲が少なく、自分をあまり省みないことが多かったが、最近ではネロの努力によって少しずつ変わってきている。

『使えるものは使えるときに使う』、『道具やお金は使ったためにあるもの』という考えがあるため、派手好きでも浪費癖があるわけでもないのにお金や物を惜しみなく使う。

その使いつぶりは派手好きのネロですら恐々とするほど。

ネロのことは深く信頼しており、またそれ以上にベタ惚れしている。自身のことや聖杯戦争の経験から、命というものに人一倍重みを置いており、そのため命を粗末にする人や簡単に奪う人が嫌いである。聖杯戦争の経験からか、それとも天武の才なのかは分からないが、敵の行動の予測や、人の内面、隠された人間性を見抜くことが非常に上手い。勘も鋭いが、なぜか女性関係になると非常に鈍くなる。

## ヒロイン

名前 ネロ・クラウディウス（セイバー）

性別 女性

年齢 見た目は十代。

性格 尊大だが、人を気遣う優しさも持ち合わせている。

能力 筋力 A

耐久 A

敏捷 D

魔力 E

幸運 C

（聖杯戦争決戦時）

本編のヒロイン。

聖杯戦争で拓斗に召喚され、共に戦ったセイバーのサーヴァント。



ムーンセルによってサーヴァントとして再現された霊子生命体のため、聖杯戦争が終了すれば消滅する運命だったが、根尾丘めがみによってマスターである拓斗といっしょに異世界に飛ばされ受肉をはたす。

非常に派手好きで、儉約、節約といった言葉が嫌い。

また宝物や美しいものを心から愛している。

元々はサーヴァントという非常に不安定な存在だったが、現在は受肉を果しているため普通の人間との差はほとんどなくなっている。そのため、サーヴァントの人間離れた能力やクラススキルを失っている。

とは言っても固有スキルや宝具は残っており、身体能力自体も普通の人間よりは高くなっている。

聖杯戦争での経験もあって拓斗との連携が非常に上手く、拓斗の出す僅かな指示でもその意図を完璧に理解することができる。

拓斗とは相思相愛の仲。

というより、もはやバカツプルの段階まで進んでいる。

聖杯戦争中の戦闘の掛け声

ATTACK……セイバー「はっ!」「ふっ!」「むっ!」「やっ!」  
「たあっ!」

BREAK……セイバー「硬いな!」「打ち砕く!」「そこを動か  
な!」

GUARDからの反撃……セイバー「出直せ!」「返上するぞ!」  
「無礼なっ!」

GUARDによる防御……セイバー「させぬっ!」「さて」「無粋  
だな」

被ダメージ……セイバー「くっ!」「うっ!」「っは……!」「程  
度があるっ」

宝具名 ……セイバー「レグナム カエロナム エト ジエヘナ

築かれよ魔天、ここに至高の光を示めせ!」「我が才を見よ、  
万雷の喝采を聞け! しかして讃えるがよい、黄金の劇場を!」

三手取られた……セイバー「くっ、読み間違えたか……!」 / 拓斗  
「くそっ……!」

六手取られた……セイバー「ええい、不甲斐ない!」 / 拓斗「まさ  
かここまでなんて……!」

三手取った……セイバー「もらったぞ!」 / 拓斗「まだだ!」

六手取った……セイバー「余は楽しい!」 / 拓斗「見切った!」

優勢状態……セイバー「よい指揮だ、マスター」 / 拓斗「よし、い  
ける……!」

劣勢状態……セイバー「そなただけは守りきる」 / 拓斗「まだ……

……終われないんだ！」

掛け合い1（優勢状態）……拓斗「このまま、いけるか？」 セイバー「迷うな、自信を持って」

掛け合い2（劣勢状態）……セイバー「そんな顔をするな、余を信じよ！」 拓斗「っ！ ああ、そうだな。信じるよ、セイバー！」

掛け合い3（宝具使用予告）……セイバー「奏者よ、我が真名を！」 拓斗「……ああ、この悲しい戦いの、幕を下ろそう」

掛け合い4（宝具で倒せない）……セイバー「っ！ 余の黄金劇場が………！」 拓斗「しっかりろ、セイバー！ まだ幕は下りてないぞ！」

## 主人公&ヒロイン設定（後書き）

今回は拓斗たちの設定です。

ときどき追加することもあるかもしれませんが。

### 3 奇妙な村

?

?

?

欠点は、表面に浮かんでいるわらのようなもの。  
真珠を求めるなら、深く潜れ。

デン

ジョン・ドライ

?

?

?

「お、どうやら森を抜けたようだぞ、タクトよ」

「意外と早かったな。もつと抜けるのに時間がかかると思っていたけど」

あれからしばらく歩くと、あっさりと俺達は森を抜けることができた。

コードキャスト viewmap) (のおかげで迷うことなく最短ルートで歩くことができたということもあるが、おそらく元々めがみが森の出口に近い場所に俺達を飛ばしてくれていたのだから。

「ラッキーだな。ちょうど人の住んでいるところに出たみたいだな」

森を抜けた先には村が広がっていた。

豊かな自然の中に、あまり多くない民家がポツポツと点在していて、その周りには畑や牧草地のようなものが広がっている。

一見するとのどかな田舎の村って感じがする。

だけど。

「どつやら普通の村ではないようだな。なんだか妙な雰囲気を感じる」

「ああ、俺もそれは感じているよ、ネロ。温かく、穏やかとしている雰囲気なのに、それと同時に冷たく、殺伐とした空気も感じる」

見た感じでは別に異常なところはどこにもない。

だけど、ただの村にしてはあまりにも空気が重苦しい。

どうする？

ここには寄らないべきか？

この世界のことをなにも知らないのに、こんな得体のしれない村に入って大丈夫だろうか？

ネロも俺と同じことを考えているのか、難しそうな顔をしている。

「ふむ、どうする、タクトよ？ どうもここは普通の村ではないよ  
うだし、いったん森に引き返して別の村に行くというのも一つの案  
だと思うが？」

自分と同じ考えをネロに言われ、俺はしばらくの間どうするか迷う。

「……いや、このままこの村に入ってみよう」

迷った末に俺はこの得体のしれない村に入ることを決めた。

「このまま森に戻っても、またすぐに人の住んでいる場所を見つ  
けることができるとは限らない。それに今の俺達は食料も道具もな  
にも持っていない。もし集落が見つからなくて野宿なんてことになっ  
たら、大変なことになる」

俺はなんの道具もなしで野宿ができるようなサバイバル知識は持っ  
てないし、ネロだって生前はそういった人生とは無縁だったはずだ。  
この温かい日差しや、木々の柔らかい葉の様子から、今の季節は春  
みたいだけど、下手をするとそれでも一晩外で寝るだけで体調を崩  
すかもしれない。

もつとも、病気になったとしても、cure（）やrecover（）  
r（）で治すこともできるかもしれないけど、できればそんなこ

とは避けたい。

「……ふむ、確かにそうかもしれないな、タクトの言うことにも一理ある。………それによく考えれば、未知のものを恐れてなにもしないというのは余の美学に反する」

ネロはムムと難しそうな顔で考えたあと、いつもの自信満々な顔で俺に微笑みかけた。

「うむ、余もそなたの提案に乗ることにしよう」

「うん、ありがとう、ネロ」

「さて先の方針が決まったのならさっさと行動に移すでしょう。このままこんなところで立ち尽くしていたら、この村の者に不審に思われるかもしれないぞ?」

……確かに、村の入り口にずっと立っていたら、怪しく思われてし  
かないかもしれない。

「そうだな。それじゃ、もしものときは頼むよ、ネロ」

「うむ、任せるがよい!」



力強く頷くネ口を頼もしく思いながら、俺は村の中に入っていった。

？

？

？

俺とネ口は村の大通りだと思われる、いささか広い道を歩いていた。

村の中は少しもおかしなところはなく、別に突然村の人に襲われることもないし、人骨が転がっているような変な光景も目にしなかった。

これでこの奇妙な空気さえなければ、いたって平凡な村だと俺も言えるんだけど……。

「ふむ、やはりおかしなところはないう普通の村のようだな。やはり余達が勘ぐりすぎたのではないか？」

「うーん……。でも、やっぱりこの空気は異常な気がするんだけどな……。」

ここはまだ村の外れのようにあまり民家もなく、また朝早い時間帯

というせいもあってか、俺達はまだ一人も村の人を見ていなかった。それにしても、ここの風景はとてもきれいだな。

めがみの言った通りここは元の世界では中世の時代に相当しているらしく、村には電柱やアスファルトのようなものが見当たらず、緑のきれいな景色が広がっている。

人によっては田舎くさいと言って敬遠しそうだが、俺はどちらかといえばこういった所は好きなほうだ。

争いとは無縁そうなこういった風景を見ると、心が洗われる。

でも、だからだろうか。

なぜかこの戦いとは縁のなさそうなこの村に流れる、血のような空気に違和感を覚えるのは。

ただの闘争の空気じゃない、喜びと悲しみの入り混じった奇妙な空気が。

まるでここは月海原学園だ。

聖杯戦争の控所となっていたあの学園。

殺し合いをしていた人間が偽りの平穏を送っていた場所。

ここは戦場であって、戦場でない。

すぐ死ぬ心配はないが、気を抜けばすぐに命を落とす、戦争と平和の狭間の場所。

隣を歩くネ口も複雑そうな顔だ。

「むづ。なんだ、この村は？ 一見すると普通なのに、どこか普通

ではない。まるで剣闘士の戦うコロシウムで最高の演劇を見ているような感覚だぞ」

「うん、ネロのたとえも十分変だと思っよ」

「な、なにを言う、タクトよ！ 今の余の言葉のどこが変だというのだ！」

「どごがって、全部だけど？」

「なっ………………。そ、奏者よ、そなたはもつと芸術を理解するべきだ！ いや、ぜつたいにさせてやる！ 余がそなたに芸術のなんたるかをたたきこんでやる！」

ネロと冗談を言い合いながら、村の中を進んでいく。

「おや、あんた達見慣れない顔だね」

突然、話しかけられて立ち止まって前を見ると、そこには村人らしき三人の男女が立っていた。

年齢は三人ともおじさん、おばさんといえそうで、農作業に行くところなのか手にはスキヤクワを持っている。

服には土や泥がついた跡がいたるところにあって、彼らが毎日汗水たらして畑を耕しているのがすぐにわかる。

村人らしき人々はみんな穏やかな微笑みを浮かべていて、悪い人の

ようには見えなかった。

「確かにお前の言うとおり知らない顔だな。ボウズ達まさか旅人かい？」

「ええ、そうです」

男の一人が珍しそうな顔で質問するので、とっさに肯定する。べつにウソは言っていないはずだ。

「へー、うちの村に旅人が来るなんて珍しいこともあるもんだな。お前ら一体どこから来たんだい？」

さっきとは別の男も興味津津といった様子で俺に質問してくる。

でもこの質問、なんて答えよう？

「えっと……、遠いところから、ですかね……………」

ウソは言っていない。

「ハハハ！ そりゃあそうだろう、ボウズ！ わざわざ近くの村に行くような旅人はいないだろう！」

「こら、あんた！ 笑うなんて失礼じゃないか！」

「す、すまん……」

最初に質問した男がおばさんに叱られていた。  
どうやらこの二人は夫婦のようだ。

「でも、まだそんな若いのに旅をするなんて危なくないかい？ あんたたち見たところ、フチやジエムとたいして変わらない歳のようだけど」

「ああ、隣にいる少女がこう見えて強いんでなんの問題もないんですよ」

ウソじゃない、実際にネロは強いんだし。

「へー、そうなのかい」

おばさんが感心するようにネロを見る。

ネロもまんざらじゃないのか、胸を張って嬉しそうにしている

さっきからネロが一言も話さないのは、この場の会話を全部俺に任せたとしたことなんだろう。

俺としてもそっこのほうがありがたい。

二人でデタラメなことを言うよりも、一人で言ったほうがボロが出にくいはずだ。

「それにしてもお前ら変わった格好をしているな。お前達の故郷じやあ、それが普通なのかい？」

確かに俺達と村の人達じゃ全然とまではいなくても、けっこう違う服をしている。

村の人達は上下ともに簡単な服装だけど、俺はいまだに月海原学園の制服だし、ネロにいたってはドレス姿だ。

「ええ、そうなんです。俺達の故郷ってここからかなり遠いんで」

「もしかしてお前らへゲモニアの人間かい？」

「え、えっと、そんなところですよ……」

マズイ。

へゲモニアってどこだ？

とりあえず遠くの地名ってことはわかったから答えただけど、これは失敗したかもしれない。

「そりゃあ、驚いたな！ ボウズ達そんな遠いところから来たのかい！」

「え、ええ……」

隣に立っているネロが少しイラツとしたような顔で俺を見てくる。  
大丈夫なのか、と言いたそうなのがよくわかる。

「でもボウズはともかく、そっちのお譲ちゃんはもしかして貴族の方なんじゃないのかい？ ほら、高そうなドレスを着ていらっしやるし……」

男の言葉に、他の二人の表情がひきつる。

ヤバイ。

やっぱりネロのこの格好はこの世界でも高価なドレスのように見えるらしい。

「いえ、違ふんです。彼女は確かに貴族のような服を着ているんですけど、別に普通の平民なんです。俺の故郷じゃお嫁に行く前の少女はみんなこんな服を着る習慣があるので、それでこんな格好をしているんです」

これは完全にウソだ。

この世界のこととはまだよくわかっていないけど、それでもここでも貴族という身分が存在し、それが普通の人と比べると、天と地ほど

の差があるのはこの人たちの反応を見ていればわかる。

この世界のことをこの村で学ぶためにも、ここで村人に変な意識を植え付けるのは良い方法とはいえないだろう。

俺としてもそれじゃあ寂しいしね。

「うむ、タクトの言う通りだぞ。余はこのような変な口調で話すし、服もドレスのようなものを着ておるが、それは余達の村の風習でな。できれば気にしないでいてくれると、余としてもありがたい」

ネロも俺の意図を読み取ってくれて、演技に付き合ってくれる。

……でも自分のその口調がおかしいってことには自覚していたんですね。

「そ、そうなのかい。いやー、てっきり貴族様だと思っちゃまってよー。焦っちゃまったぜ」

「ははは、そうだよな。本当に貴族様だったらきれいな馬車とかに乗ってくるよな」

俺達の言葉を信じてくれたのか、三人とも恥ずかしそうに笑ってくれた。

……よ、よかったー。



「それじゃあ、改めてヘルタントにようこそ、若い旅人さん」

「この村の名前はヘルタントっていうんですか？」

「ああ、この村はヘルタント子爵さまが領主として治めている。だからヘルタント領っていうのさ」

なるほど、領主さまか。

中世の時代だとしたらまだ封建制度だから、村の名前もここら一帯を治めている貴族の名前からつけられているのか。

でも、この領主は悪い人じゃなさそうだ。

村の人が領主の名前を言う時に微笑むくらいなんだから、少なくともここの人には慕われているんだろう。

えぱり散らしているようなら、こうはならないだろうからな。

「うんじゃあ、ボウズ達。俺がこの村を案内してやるよ」

「ちょっと、あんた！ 仕事はどうするんだい！」

「なに、一日くらい休んでも問題ないだろ。どうせ例年より早く仕事を始めようとしていたんだ。それよりも、このボウズ達をこのままにはしておけねーよ」

「そうだな、それなら俺もいっしょに案内してやるか」

「お、そうか！ 俺一人じゃうまく案内できるか心配だったんだ」

「まったく、しかたないねー……」

おじさん達は楽しそうに笑い合っている。

おばさんはそれを見てあきれたようにしているが、その目は確かに笑っていた。

……うん、ここの人たちは良い人ばかりみたいだ。

「それじゃあ、よろしくお願いしてもよろしいですか？」

「おう、任せな、ボウズたち！」

おじさんが笑ってグーサインをだした、そのとき。

「うわあああああああああああああああああああああ！」

悲鳴が聞こえてきた。

### 3 奇妙な村（後書き）

ようやくヘルタントに到着。  
フチ達の出番はもう少し先です。

#### 4 優しい魔法使い

?

?

?

欠点は常に裏から見た長所である。

徳富蘆花

?

?

?

「一体なんだ!？」

突然聞こえてきた悲鳴に、楽しく会話していた俺達は驚いて動きを止めた。

「む、奏者よ、向こうからおかしな気を感じるぞ!」

ネロがそう言って悲鳴の聞こえてきた方をにらみつけた。

確かにネロの言う通り変な気を感じる。

これは……………殺気!?

おじさん達もネロのその言葉で我を取り戻したらしく、慌てて悲鳴の聞こえてきた方向に向かって駆けだした。  
俺も嫌な予感がして一緒になって走り出す。

「こら、お前達は残っているよ！」

「なんだか嫌な予感がして、気になるんです！」

「その言葉が本当にならないといいけどねえ……」

俺の言葉におばさんがなんだか不安そうな顔をする。

しばらく走ると、向こうから誰かが走ってくるのが見えた。

男の人で、どうやらここの村人らしくおじさん達と似たような格好をしている。

だけど、その右手は肩のあたりから赤く染まっており、顔には苦悶の表情を浮かべている。

「ジャック!? ジャックじゃないか!？」

「その傷はどうしたんだ!？」

男に気付いたおじさん達が叫び声を上げる。

どうやらあの男の人はジャックという名前らしい。

「……………うっ、……………お、お前か……………」

傷を負った男の人もこっちに気づいたらしく、ふらふらとした歩み

で寄ってくる。

「むづ、ひどい傷を負っておるな……」

ネロの言う通り、近くで見るとその肩の傷がかなりひどいものだとわかった。

肩、というより二の腕に付けられたその傷は、容赦なくその周囲の肉をえぐり取っており、もしかしたら骨にまで達しているかもしれないほどだった。

正直右腕が未だにくっ付いているのが不思議なほどだ。

「一体何があった!」

おじさんはそんな傷など意に關しないというように、ジャックと呼ばれた男に焦ったように呼び掛ける。

男は荒い息を吐きながらも、しっかりとした声で答える。

「……オ………オーガだ………」

「何だと!？」

「………オーガが………三匹………向こうに………」

「ちくしょう！」

ジャックの言葉におじさん達は皆、いつせいに敵しそうな顔になる。

オーガ、つまりモンスターの類か！

このおかしな殺気はそのオーガの放つ殺気ということか！

「くそ、お前はジャックとそのボウズ達と一緒に、警備兵の連中を呼んで来い！」

「あ、あんたはどうする気だい？」

「俺はここに残ってオーガ達を足止めする」

……なんだって！？

「ああ、それなら俺も残るぜ」

「すまない、助かる」

「……ま、待て……。それなら……。俺が……」

「バカ野郎！ お前は俺の母ちゃんの面倒を見なくちゃいけないだろっ！」

「……こ、こんな傷を……。負っていたら……。どうせ……。面

倒など……………見ることなんて……………できや……………しない……………  
……。それなら……………俺が残って……………約束通り……………お前が……………  
……………俺の母さんを……………」

「その傷じゃ、それこそ足止めなんてできやしないだろ！ お前はもつと犠牲者を出すつもりか！？」

おじさんの言葉にジャックは言葉を失う。

「待て、お主らは本当に足止めをするつもりなのか？」

「ああそつだ。でもお前は逃げな、お譲ちゃん。これは俺達の問題だ。お譲ちゃん達には関係ない」

「か、考え直してください！ 俺はオーガをこの目で見たことはありませんけど、それがとても強い奴だってことはわかります！ この人の傷を見てください！ これはよつぽど強い力で斬られない限りこうはなりませんよ！」

「ああ、わかってるよ。でもな、ここで俺達が逃げたらもつと多くの人死ぬかもしれない」

「それは……………！」

「いいんだ。ありがとうな、ボウズ」

そう言ったおじさんの目を見て、俺は悟った。



だって、その目は今までに何度も見てきたものだったから。

この人達は死ぬつもりだ。

それも一時の感情に任せて何の覚悟もなく死ぬつもりなんかじゃない。

これが一番いい方法だと冷静に考えて、そして確実に死ぬことがわかってるのに、それでも足止めを果たすつもりなんだ。

「さ、ボウズ達はもう行きな。ここにお前達がいてもできることなんて……」

「いえ、俺はここに残ります。おじさん達こそ逃げてください、オーガの足止めは俺がやりますから」

「……………」

静寂。

俺の発言にみんな固まってしまっただけ動けないようだ。

安心させようと俺に微笑んでくれようとした、おじさん達も。

泣きそうな顔をしていた、おばさんも。

苦しそうに息をはいていた、ジャックも。

皆、俺の言葉がどこまで本気なのかわからないようで、止まっていた。

いや。

ネロだけが俺に向かっていつもの自信満々の表情を見せていた。

ああ。

それだけで、十分だ。

「ボウズ、あのな。ボウズも言った通り、オーガっていうのは恐ろしいモンスターでな……」

「大丈夫ですよ、おじさん。俺はこれまでずいぶんと長い間、旅をしてきました。その途中で、何度も自分よりもはるかに強い奴と戦ったりもしました。それでも、俺はネロといっしょにそれを乗り越えてきましたから」

「いや、でもな……」

おじさんはそれでも顔を渋らせている。

それはそうかもしれない。

俺やネロみたいな子供がオーガと戦うなんて言っても、説得力がないだろう。

「……そうだ」

ふと、思いついてジャックに向けて手を伸ばす。

「…………どうしたん…………だ……………」

いきなり手を向けられたジャックが、不安そうな目を俺に向かってくる。

だけど、俺はそんなものを気にもしないで呪文を唱えた。

「heal(32)」

俺の右手から温かな光があふれ出て、ジャックの二の腕に集まっていく。

そして一瞬の強い輝きの後、再びジャックの腕を見ると、そこにはもうあのひどい傷などかけらも残っていないかった。

ジャック達の顔が驚きに染まる。

「い、痛みが消えた。い、いや、あんなひどい傷が一瞬で治った……………!?!」

「うおおおおお！ ぼ、ボウズ、お前さんもしかして、魔法使いかい!?!」

「ええ、そうです。俺は、実は魔法使いなんです」

本当は魔法使いじゃなくてウィザード魔術師なんだけど、まあ、ここならどっ

ちでもいいだろう。

「さあ、これでわかったでしょう。俺は魔法使いだから、オーガと戦っても死にません。だからおじさん達はみんな、その、警備兵っていうのを連れてきてください。俺はネロといっしょにそのオーガってやつを倒しますから」

「で、でもあんたは確かに大丈夫かもしれないけど、そっちのネロちゃんは死んじゃうかもしれないよ？」

「

はは。

ネロちゃんか。

聖杯戦争のマスターや彼女の伝説を知っている人だったら絶対しない呼び方だな。

147

「大丈夫ですよ、おばさん、さっきもいったでしょう？ ネロはこう見えてとっても強いんですよ。俺なんかよりも、何倍もね」

「ほ、本当にそうなのかい？」

それでもおばさんは心配そうにこっちを見ていた。

うーん……どうやって説得しよう……。  
ん、そうだ、思いついたぞ。

「ネロ、剣を」

「お、なるほどな」

ネロは俺のそれだけの言葉ですぐに意味を察してくれた。

そして、おじさん達の目の前で、あのいびつな形の大剣　隕鉄の  
アエストウス・エストウス  
鞘「原初の火」　を取り出す。

何も無い所から突然現れた大剣に、おじさん達の顔が再び驚愕に染まる。

「え、ええ！　い、いきなり剣が……………！？」

「き、きみも魔法使いなのかい！？」

「む、余はそのようなものではないぞ。余は奏者を守る騎士だ！」  
ナイト

ネロはどこか嬉しそうにそう言い放つ。

いや、ネロさん？

俺はその言葉とっても嬉しいんだけど、おじさん達はポカンとしちゃってますよ？

「あー、その……。ネロは魔法使いじゃないんだけど、今みたいに不思議な力を使うことができるんですよ。だから、心配する必要は

ありませんから」

「……………よく、わからんが、とにかくここはボウズ達に任せてもいいのか？」

俺の言葉におじさんのうち一人がようやく冷静さを取り戻したのか、話しかけてきた。

俺はその言葉に頷く。

「はい、任せてください」

「……………しかし、よそ者であるお前達にそんな危険なことをさせていものなのか……………」

「気にしないでください、俺達は勝てる見込みがありますから。それよりもほんの少し前に会ったばかりとはいえ、知り合いに死なれた方が俺も気分が悪いですから」

「し、しかし……………」

「ほら、早く警備兵を呼んでください。そのほうが俺たちにとっても助かりますし」

「くっ、わかった」

おじさんはようやく決心がついたのか、他の人達にいっしょに行くように促す。

他のおじさん達も渋々とだけど、おじさんといっしょに走り出す。

一回だけ、おじさんが振り返って俺に話かけてきた。

「ありがとよ、ボウズ」

「気にしないでください、おじさん」

俺はそれだけ言って、おじさん達とは逆方向に走り出した。

「相変わらずだな、余の愛すべき奏者は」

走りながら、ネロがそう言って俺に向かって意味深な笑みを浮かべていた。

「あれ、意外と機嫌がいいな、ネロ。もっと怒ってるかと思ったけど」

三回戦が終わった後に、凧を助けた時はあんなに怒っていたのに。

「ふん、なにを言ってる。これでもちゃんと怒っておるし、不機嫌だぞ？　ほとんど赤の他人を守るために、自分の嫌いな戦場に戻ろうとしておるのだからな。まったく、怒りを通り過ぎて、余は呆

れてきたぞ?」

そう言いながらも、ネロは相変わらず笑みを浮かべている。  
どういふことだろう?」

不思議そうにしている俺を見て、ネロはさらに笑みを深くしてこう  
言った。

「ふ、確かに余はそなたの思っているとおり、以前と比べてそこま  
で怒ってはおらぬ。だが、それがなぜだかわかるか、タクトよ?」

「……助けようとしてるのが、敵マスターじゃないからか?」

「それもある。だが、もっと他に理由がある」

……?」  
なんだろう?

やっぱりわからずにいる俺に、ネロは可愛いものを見るような顔で  
言葉を繋いだ。

「それはな、タクトよ。あのときに比べて余はそなたのことを知っ  
ておるからだ」

ネロは楽しそうに話を続ける。



「あのときは本当に、そなたがなぜあのような選択をしたのかが、わからなかった。いや、もちろんタクトが優しい者だということはあのときもわかっているつもりだった。だが、な。あのあと、そなたは助けた凜のことを心配したり、余の真名を知った時も余のことを嫌わなideいでいてくれた。自分の命を何度も狙ったあの恐るべき暗殺者だったとしても、そなたはその者が死ぬときには涙した」

そこまで言っつてネロは今度は照れたように笑った。

「そなたは本当に優しい者だ。余はそれを、あのあとにたつぷりと知った。だからさっきの者達が足止めをしようと云ったときに、余はすでにこうなるとわかっていた。なぜなら、そなたなら必ずこうすると思っつたからだ」

「ネロ……………」

「その優しさが、きつとそなたらしさなのだろう。だから余も文句は言わん。余はただ無茶をするそなたを、全力で守るだけだ」

「……………」

ありがとう、ネロ。

でも、その言葉は口にはしない。

だつてそんなことはネロにとっては当然のことで、きつとお礼を言

つてもネロは怒るだけだから。

だから

「ネロ、勝てるよな？」

今はこれだけ。

感謝の気持ちは口にしないで、ただ信頼の言葉だけを口にする。

「ふっ、当然であろう。奏者がいる限り、余に敗北などありえぬのだからな！」

「……そうだな。ああ、そうだよな！」

力強いネロの言葉を聞いて、俺はさらに足に力を込める。

「行こう、ネロ！」

「うむ、そなたの思うままに！」

お互いに相手の事を頼もしく思いながら、道を駆け抜ける。

嫌な気配はもう、すぐそばにまで感じられた。

#### 4 優しい魔法使い（後書き）

今回は異世界に来てからの初の戦闘になります。  
さて、バトル描写をうまくできるか……。

## 5 オーガとの戦い

？

？

？

才に傲りをもって人を驕らず、寵をもって威を作さず。

諸葛亮

？

？

？

村の道をネロと一緒に駆け抜ける。

聖杯戦争中に散々走り回ったせいか、これくらいじゃ息切れすら起こさない。

155

「む、嫌な気配を感じるな……。奏者よ、敵はとうやら近いよ  
うだぞ」

「ああ、わかっている」

先ほどから殺気を含んだ嫌な気配が漂っている。

ネロの言う通り、オーガとやらはもう近くまで来ているのだろつ。

「止まれ、ネロ！」

「むづ！」

前方に巨大な影が三体现れるのを確認して、俺達は足を止めて戦闘態勢にはいる。

「グルルルル！」

「これは、でかいな……………」

「うむ、あの狂戦士ほどの大きさの者とまた戦うことになるとはな」

ゆったりと歩きながら俺達の目の前に現れたオーガは、思っていたよりもずいぶん大きかった。

背丈は三メートルほどもあり、肩幅だけでも小さな子供の体ぐらいはありそうだ。

腕の太さも半端じゃない。

あの大きな腕で殴られただけでも普通の人間は即死だろう。

おまけにオーガ達はそろって皆、似たような武器を持っていた。おそらく銅で作られたであろうその武器は、ひどく無骨な形をしていた。

剣に似たような形をしているが、刀身はひどく曲がっており、斧のようにも見える。

あの武器は、一体？

「む、あやつらの持っているあの武器……。あれはコピシユ、か？」

「コピシユ？」

「うむ、古代エジプト王朝で使われておったという最古の武器の一つだ。余が生きておったときにはもう廃れておったがな。……それにしても醜い。いかにコピシユとはいえってもあの醜さはあるまい！ あんな物を見たら古代エジプトの刀鍛冶が草葉の陰で泣きだすぞー!？」

……ネロの怒りはさて置き、どうもあのコピシユという武器は敵を刀身の鋭さで斬り裂くことよりも、持ち主の力でぶった切るということに特化しているようだ。

オーガの持っているコピシユのうち一本が赤く染まっていることから、やはりジャックのあのひどい傷はこいつらが負わせたものらしい。

オーガ達はこちらを見たままニタニタと笑っているように見える。どうも、こちらが子供二人だけだからなめているようだ。

「ふん、華のない面構えよな。奏者よ、始めてもよいか？」

「……………ああ、頼む、ネロ！」

「任せよ、一蹴に伏してくれる！」

掛け声とともにネロが三体の中で一番近くにいたオーガの前に飛び出す。

オーガは突然の行動に驚いたのか、反応できずにいた。

「ふっ！」

ネロが短く息を吐きながら、オーガの腰に向かって真横に剣を振るう。

「グルアアアアア！」

オーガが腰から鮮血が飛び散らせながら絶叫する。

だが、浅いか。

人間になったことにより、ネロの力は以前に比べてかなり弱くなっただよつた。

以前のネロならあのままオーガを両断していただろう。

「グルルルルル………！」

よろよろと足元をふらつかせながらも、オーガは手に持ったコピシ





上半身を真つ赤に染め上げてオーガが地面に倒れ伏す。

よし、これで一体目……………いや、マズイ！

「左だ、ネロ！」

「グオオオオオ！」

ネロが体を左に向け、さらに剣を前に出して防御の構えをとったのと同じに、二体目のオーガの攻撃が飛んできた。

「ぬう……………！」

「グルルルル……………！」

なんとかネロはオーガの攻撃を受け止めたが、オーガの馬鹿力に押し返されて反撃できずにいた。さらに動きのとれないネロの後ろから、もう一体のオーガが「コピシ」を振り下ろそうとする。

「shock(64)……………！」

「グアアアアアア!?」

だが、その動きを読んでいた俺が後ろからネ口を襲おうとしたオーガに向けて、shock(64)を放つ。完全に俺の存在を忘れていたオーガはまともにもその一撃を食らって、体をしびれさせ動けなくなる。その光景に啞然としたもう一体のオーガの隙を付いて、ネ口も脱出する。

「大丈夫か、ネ口？」

「すまぬ、どうも力負けしているようだ」

「やっぱりか……」

当然と言えば、当然だ。

先ほども感じたように、今のネ口は普通の人間より少し強い程度の筋力しかない。

見た目よりはずっと強いが、人間離れた強さを持つあのオーガのようなものと互角に戦えるほど力はないのだ。

もちろん戦いは別に筋力だけで勝敗が決まるわけではないが、力を主体とする戦い方をするオーガと戦闘を行っている今の状況では、このままではマズイだろう。

俺のもとに戻って軽く息を整えるネ口を見ながら、俺はそう考える。

残った二体のオーガは体制を整えて、こちらの様子を窺っている。先ほどまでの油断はすでになく、気のせいか動きも素早くなっているようだ。

長引かせると、こちらが不利か。

だったら……………。

「ネロ、力を上げるぞ、gain|str(32)！」

「うむ、感謝するぞ」

俺の右手から放たれた光がネロの前身を包む。

gain|str(32)は対象者の筋力を一時的にだが、大幅に増大させるコードキャスト。

この世界でどれほど力が強くなるかはわからないが、これですしでもネロの助けになればそれでいい。

オーガ達もネロの力が強くなったのを察したのか、それとも単純に俺がコードキャストを使ったことに警戒しているのか、グルグルと唸りだす。

「一気に終わらせるぞ！」

「任せよ、奏者よ！」

俺の言葉に合わせて、ネロが再びオーガ達に向かって駆けてゆく。

「グワアアアアア！」

オーガの一体が走りながら、ネロに向かってコピシュを鈍器のように振り下ろす。

「ガード！」

「うむっ！」

オーガのコピシュとネロの剣が大きな音を立ててぶつかり合う。

gain | str (32) のおかげで、ネロは自分の倍はありそうなオーガの一撃を受けても、動じることなく立っていた。

逆に力任せの攻撃を止められたオーガの方が、態勢を崩してよろめく。

「返すぞっ！」

その際に、ネロが剣で真つ直ぐにオーガの腹を突く。

痛みに顔をゆがめるオーガの腹から鮮血が流れ出る。

ただど人間なら致命傷のその一撃も、体の巨大なオーガにとってはただの傷にしかない。

仲間がやられているのを見たもう一体のオーガが、ネロに向かって

走り出している。

ただ力任せに上から武器を振り下ろしても、ネロに効かないことはあのオーガもわかっているはず。

ならば振り下ろす以外に、あの武器の特性とオーガの馬鹿力を活かせる攻撃方法は………おそらく横なぎにコピシユを振り切ること！

俺は瞬時に考えをまとめ、ネロに指示を出す。

「ネロ、後ろに飛べ！」

「むっ！」

「グルアア!？」

手負いのオーガにもう一撃を加えようとしていたネロは、すぐに俺の指示に従ってバックステップして後ろに下がる。するとその寸前までネロのいた地点をオーガの武器が大きく通り過ぎていた。

「そのまますぐにブレイク！」

「了解した！」

俺に行動を読まれ、大きく態勢を崩していたオーガの体にネロの渾身の一撃がたたき込まれる。

「グアアアアアアアアアア！」

オーガの左肩は大きく切り裂かれ、大量の血が噴きあがる。絶叫を上げ、肩を押さえながらたじろぐオーガ。

「逃がすな、ネロ！」

「うむ！ ……天幕よ、落ちよ！」

ロサ・イクトウス  
花散る天幕！」

コピシユを構えることもできずにいるオーガの横を、ネロが剣と共に通り過ぎる。

一瞬の後、オーガの腰の右半分が両断され、そこから大量の血しびきを上げる。

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

断末魔の悲鳴を上げて、肩と腰から大量の鮮血をまき散らしながら二体目のオーガが地面に倒れ伏す。

これで、あと一体 ……！

しかしそのとき、ネロに胸を突かれ呻いていた最後のオーガが俺の

方に向かって走ってきた！

どうもオーガは俺を先に殺した方が、ネロと戦うのに有利になると考えたらしい。

「タクト！」

ネロもすぐに気がついて駆け付けようとしてくれるけど、俺との間に距離が開きすぎていた。

このままではネロが俺のここに来る前に、俺がオーガにやられてしまう。

だけど、俺だって簡単に殺されるつもりなんてない！

「shock(64)！」

俺の手より放たれた魔弾が恐ろしいスピードで一直線にオーガに向かって飛んでいく。

shock(64)には先ほどオーガに当たった時もそうだったように、相手を痺れさせる能力がある。

少しでも時間が稼げれば、あとはネロが止めを刺してくれる。

だけど。





そして、オーガが振り上げたコピシュに力を入れた。  
その瞬間。

「くらいやがれ！」

「グアアアアアアア！」

オーガの腹にきれいな剣痕が刻まれた。

完全に油断していたオーガは突然の奇襲と新たな傷のせいで、よろよろと後ずさる。

今のはネ口の仕業じゃない。

まだ彼女は俺のところに戻っていない。

「おい、大丈夫か！？」

オーガを斬りつけて俺を助けてくれたのは、皮の鎧を身に付けた剣士だった。

背丈は二メートル近くはありそうな巨漢だが、顔を見る限りおそろく年齢はまだ青年ぐらいか。

防具は革の鎧と貧弱だが、その手に持った剣は何かでコーティングでもしてあるのか、日の光を浴びてキラキラと光っていた。

そしてなによりも様々な強者<sup>サウザン</sup>を見てきた俺が見ても、強いと思わせる空気を身に着けていた。

「助けてくれて、ありがとうございます。あなたは？」

「オレはこのヘルタントの警備兵隊長を務めている、サンソン・パ  
ーシバルという者だ。……お前がジャック達の言っていた旅の魔術  
師か？」

「ええ、そうです」

「そうか、言いたいことは色々あるが今は後回しでいいな？」

「はい、そうしたほうがいいでしょうね」

「タクトッ！」

俺とサンソンが会話を終わらせようとしたところに、ネロがよつや  
く俺のもとにたどり着いた。

「怪我はないか！？ 大丈夫か、奏者よ！？」

「ああ、この人が助けてくれたからね。俺は全然大丈夫だよ」

「そうか、安心したぞ、タクトよ……………」

ネロは泣くのを必死に我慢する子供のような顔をしたあと、表情を  
なんとか戻して今度はサンソンに向き直る。

「……………我が愛しき奏者の命を救ってくれたことに感謝するぞ、戦士よ」

「えっ、あの、その……………いや、オレは別に、当然のことをしたまでというか……………。その……………別に、お礼を言われるようなことはなにも……………」

急にサンソンが赤くなってモゴモゴと話し出す。  
なぜかその視線はチラチラとネロのドレスに集まっていた。

？

どうしたんだろうか？

「サンソン、無事か！」

俺が首をかしげていると、後ろから新たにサンソンと同じ武装をした兵士が五人現れた。

「ジャレン！俺は無事だ！」

「通報にあった旅人達は？」

「ここにいないのが見えないのか！」

「あれ？ 思ってたよりも若いんだな？」

ジャレンを含めた五人の戦士はあっという間に俺とネロを内側にして半円を作る。

サンソンと同じようになんり訓練してあるみたいだ。

「サンソン、作戦は？」

「最初にオレが飛び出して、ヤツの武器を封じる。そのあとにターナーとハリーが両足に切りかけ。ジャレンはヤツの左腕を潰せ！」

「わかった」

サンソンの指示に従って、ジャレンと他に二人の兵士が前に出てくる。

オーガはこちらからもわかるほどに動揺している。こちらの戦力がいつきに倍増したから、当然か。

「む、ちょっと待て、サンソンとやら。あのオーガは余の手で止めを刺したい」

「なんだと？」

「あのオーガは余の奏者を殺そうとしたのだぞ！ 余が直々に引導

を渡さなければ気が済まん！」

「おい、お前、勝手になにを言って……………」

「わかった、いいだろう」

「おい、サンソン!？」

驚いたジャレンが声を上げる。

このとき、どうしてサンソンがネロの無茶な願いを聞き入れたのかは、わからない。

もしかしたら熟練の戦士にしかわからない勘だったのかもしれないし、ネロの怒りを理解したのかもしれない。

「ここまでコイツは一人で戦ったんだ。足手まといにはならないだろっ」

「……………」

ジャレンはまだ不服そうだったが、頭を切り替えたのかそれ以上の文句は言わなかった。

「作戦を変更する。ジャレンはここで残りのヤツらといっしょにこの少年を守ってくれ。…………ジャレンの代わりに頼めるか？」

「うむ、あのオーガの左腕を潰せば良いのだろうか?」

「ああ、頼むぞ」

サンソンはそう言ってオーガを睨みつけた。

ジャレンは素早く後ろに下がり、代わりにネロが前に進み出た。

オーガもう覚悟がついたのか、コピシュを構えてこちらを睨んでいる。

サンソンとネロ達は誰もなにも言わないままに、自然とひし形の陣形をとっていた。

先頭がサンソン、その次にターナーとハリー、一番後ろはネロだ。

四人はジリジリとオーガのほうに進んでいく。

見ているこちらがイライラしそうな動きだ。

「グアアアアアアアアア!」

オーガもしばらくはネロ達が来るのを待っていたが、やがてしびれを切らしたのか突撃してきた。

それを待っていたのか、オーガが飛び出すのとほぼ同時にサンソンが前に出る。

虚を突かれたオーガが慌ててコピシュを振るう。

「グワアアア!？」

しかし、サンソンはオーガの攻撃をいとも簡単に剣で受け止めて、そのまま手首の回転を利用してオーガの武器を空中に弾き飛ばした。

「し、信じられない。あの馬鹿力を真正面から受け止めたっていうのに……………」

俺は驚いて思わず呟いてしまう。

オーガが突然手持ちの武器を失ってオロオロしているあいだに、ターナーとハリーの二人がそのすねを剣で斬り裂く。たまらず、オーガは地面に両膝をつけてしまう。

「グアアアアアア!」

オーガは最後の力を振り絞って、その左腕でサンソンを殴りつけようと振り上げる。

「させぬっ!」

しかしその腕をネロが飛びあがりながら斬りつける。





## 5 オーガとの戦い（後書き）

やっぱり、色々な人が言うようにバトル描写は難しいですね。  
次の戦いではもっとうまく表現したいです。

ちなみに gain | str (32) を使っても、今にネロの力はオーガにまではとどきません。

オーガはドラゴンラーヂャのモンスターの中でもかなり力が強いほうですから。

それにネロの力をそんな簡単にオーガと同じにしちゃうと、ドラゴンラーヂャの主人公の出る幕がなくなっちゃいますしね（笑）

## 6 温かい人々

？

？

？

苦しみは人間を強くするか、それとも打ち砕くかである。その人が自分のうちに持っている素質に応じて、どちらかになる。

ヒルティ

？

？

？

「終わったな」

「うむ、思ったよりもあっけない終わりだったな」

戦闘が終わって剣に付いた血を布で拭いながら、サンソン達この村の警備兵が戻ってくる。

ネロもすぐに隕鉄の鞆アエストゥス・エストゥス「原初の火」をその手から消した。それを見た警備兵達が驚いている。

「すごいな。さっきのおばさん達の言う通り、剣を簡単に消してしまっただぞ」

「ああ、変な力を持っているのは本当らしいな」

「すげーよな。オレもできるようにならないかな」

「どうでもいいけどあの子可愛いよな。オレ、少し話しかけてみようかな？」

「やめとけ、やめとけ。どう見てもあの子、あっちの小僧と良い仲間じゃないか。絶対に見込みないって」

「……………なんか変な会話してるな。」

「こら、おまえら！　しゃべってないで、こつちを手伝いやがれ！」

オーガの死体を一か所に集めていたサンソンが怒鳴る。

おしゃべりをしていた警備兵達は慌ててその作業に加わる。

俺はその間にネロに気になることを話した。

「なあ、ネロ。ここの警備兵達、どう思っつ？」

「やはりそなたも気になっておったか。余から見ても、ここの者達

はかなりの腕だと思っぞ」

「特にあの隊長のサンソン。あの警備兵の中でも、かなり強いんじゃないか？」

「あの者はあの連中の中でも、一段階ずば抜けておる。純粹に劍の腕だけなら余よりも上、いや、それどころかあの太陽の騎士にも引けを取るまい」

「な、あのガウエインとか!？」

「無論、宝具や戦闘スキルを使用しないという前提の上だがな」

そこまで強いのか……………。

俺達が話しているうちに、サンソン達は三体のオーガの死体を燃やして、処理していた。

作業の終わったサンソン達、警備兵がこちらに戻ってくる。

「さて、改めて名乗らせてもらう。オレはサンソン・パーシバル。ヘルタント城の警備兵隊長を務めさせてもらっている」

「俺はタクト・コノエって言います。故郷から旅を続けてここまで来ました」

「余の名前はネロ・クラウディウス。至高の芸術家にして、ここに  
いるタクトを守る美しき劍だ!」

「そ、そうか……。とりあえず、オーガから村人を守ってくれたことに礼を言わせてもらう」

サンソンはネロのおかしな自己紹介に目をパチクリとさせていたが、特になにも言わずに話を続けた。

「いえ、いいんですよ。俺は当然のことをしたまでですから」

「たった二人でオーガ二匹を始末することを当然のことと言われたら、オレ達の立場がないんだがな……………」

サンソンは若干呆れながらそう続けた。

うっ。

確かにそうかもしれない……………。  
普通の人ならできないよな、こんなこと。

「ま、それはともかく。このことはオレの口かこの領主さまにも報告させていただく。しばらくしたら領主さまから謝礼を用意してくださいさるだろう」

「謝礼ですか……………」

お金にあまりがつつく方じゃないけど、無一文の今はありがたくも

らうとしよつ。

……少しだけ、藤村先生を思い出して苦笑した。

あの先生には最後まで手を焼かされたからな！。

「ん？ どうしたんだ？」

「い、いえ。何でもありません」

サンソンはまだ怪訝な顔をしているが、特に気にせず話を続けてくれた。

「そうか？ ……そういえばお前達、まだ朝食を食ってないんじゃないか？ よかったら村の居酒屋まで案内するぞ」

「居酒屋、ですか……………」

居酒屋って、俺ってまだ未成年でお酒飲めないんですけど……………。  
いや、それともこの世界ではもう俺の年齢だと飲んでもいいのか……………？

そんな俺の心情を読み取ってくれたのか、サンソンはにっこりと笑って言う。

「なーに、心配するな。酒以外の飲み物も出してくれるし、あそこ

の料理はけっこう旨いんだぞ?」

「うむ、余も空腹だぞ、タクトよ。こやつの話に甘えさせてもらおうではないか」

「でも、いいんですか? 領主さまへの報告もあるんですし、お忙しいんじゃないですか?」

「余計な気は使わなくてもいいさ。それに居酒屋は、領主さまの城への道の途中にあるからな」

「……わかりました、それならお願いします」

俺がそう答えるとサンソンは満足そうに頷いて、他の警備兵に話し出した。

「よし、お前ら聞いたな! これから我が村を救ってくれた偉大な魔術師と剣士を、ヘナーおばさんの居酒屋くサントレラの歌へまで護送するぞ!」

「え、いや、ちょっと……!??」

サンソンの口から出てきたあまりの言葉に、俺は思わず狼狽してしまっ。

が、周りの警護兵達が笑っているところを見ると、ただの冗談ようだ。

「余と奏者を護衛をするというその態度……………うむ、悪くない、大義であるぞ、そなたら」

ネロさん、嬉しそうですね……………。  
ローマ皇帝としての血がたぎるんですか？

だけど、警備兵達はそんなネロの様子に気を悪くせず、むしろその態度をジョークとして受け取ったのか、悪乗りしてくれる。

「ははー。おほめに頂き光栄です」

「ささ、女王陛下。どうぞこちらへ」

「うむ、うむ！ 苦しゅうないぞ、褒めてつかわそうー！」

「ははあー！」「」

……………この人たちは、とてもノリがいいってことはわかった  
……………。

？

？

？



「へー、それじゃお譲ちゃんはおつちの少年を守る騎士ナイトなのかい！」

「そうだぞ？ 余はタクトを全力で守り、タクトは余に全力で守られる。うむ、実にわかりやすい関係ではないか！」

「ハハハハハ！ こんなジェミニと変わらない年頃の女の子に守られるなんて、情けないな、小僧！」

「いえ、そんなこと言われても……………」

「それにしても、なんの取り柄もなさそうな男を守る、お姫様みたいな女の子なんてな。普通逆じゃねーか？ ほら昔話みたいな、お姫様を守るかっこいい騎士とか、忠実な従者とか。もしくは見習い騎士とそれに守られる村の少女とかさ」

「確かにな。それが男の方はなにもしないで、女の方に守られるなんてな……………」

「おいおい、ちょっと待てよ。このボウズのほうは確か魔術師なんじゃなかったか？」

「そういえばそんな話も聞いたな」

「本当だぞ、みんな！ あのボウズはジャックの怪我を一瞬で治しちゃったんだ！ 俺はこの目でちゃんと見たんだ！」

「おい、小僧！ それって本当なのか？」

「ええ、まあ……」

「へー！ そんな歳で魔法が使えるのか！？」

「すっげーな、少年！」

「今まで見たことのある魔術師は、みんなヨボヨボのじーさんだったもんな！」

「お、だったらちようどいいじゃねーか。まだ若いのに魔法を使いこなす天才少年魔法使いに、それを守る美少女剣士！ まさしく昔話じゃねーか！」

「おおー！ 確かに！」

えーっと……………。

なんでこんな状況になったんだっけ？

ていうかなに、このカオスな状況？

発端は、サンソン達に案内してもらった居酒屋<サントレラの歌>で食事をしている時だった。

ちなみに無一文だった俺達はこの居酒屋の女主人、ヘナーおばさんに相談して食事代はここで働いて返すという約束になった。

どうせいつかは働かないといけないんだから、こっちとしてもありがた話だった。

……もつとも、ネロに接客業ができるかは非常に怪しいところだけ  
ど。

サンソン達警備兵は報告やら、オーガの使っていた武器の始末やら、  
まだ色々と仕事が残っていたので居酒屋の中にまでは入らず、すぐ  
に行ってしまった。

オーガの襲撃はまだ朝早かったことや、被害者がいなかったことで、  
村の人達は襲撃があったことすら知らなかった。  
おかげで、居酒屋にいた人達は見慣れない俺達に驚いてしまった。

……まー、別に嫌われたわけでも迷惑がられたわけでもなかつ  
たけど。

ていうか村人の方も、話しかけたいけどどうしようかな、やっぱ  
り止めようかな、どうしようかなー、みたいな感じだった。

そんなとき、食事をしていた俺とネロのところには先ほど会ったおじ  
さんやジャック達がお礼を言いに来てきた。

おじさん達は警備兵にオーガと俺達のことを知らせて、ジャックの  
傷をお医者さんに見てもらった後、俺達のことを探していたらしい。

ちなみにジャックの腕の傷はもう完全に塞がっていて、なんの問題  
もないそうだ。

よかった、一応治したとはいえ心配していたんだよな。

それにしてもあの傷が完全に塞がるとは、さすがは俺の使える中で

最強のコードキャストの一つだ。

………ありがとな、凜。

で、おじさん達がお礼を言っているまでは良かったが、好奇心の高い村人がおじさん達にオーガの事を聞いてから、大変なことになった。

もうみんな、質問しまくり。

答えても、答えても次々と質問してくる。

おまけにみんなテンションが高い。

ネロは嬉しそうに答えているけど、俺は少し疲れたぞ………。

「なー、あんた達の名前って何て言うんだい？」

「俺はタクト・コノエって言います。そして向こうの少女がネロ・クラウディウスです」

「うむ、そなたら覚えておくとよいぞ」

「さすが旅人さんだけあって、珍しい名前をしているんだな」

「ああ、そうかもしれないね」

ま、それもそうだろう。

俺の名前は元々日本風の名前だからな。

「お譲ちゃんの名前も変わってるな。“ネロ”なんて普通、男の名

前だろ？」

「それはな、余とタクトの故郷では女にも男にも似たような名前を付けるという風習があつてな。おかげでこのような男風の名前になつたのだ」

自分で作った設定だけど、あまり多用するとばれるかもしれないな。とはいえ、そうでもしないとネ口の名前を説明することはできないか……。

「へー、そうなのか。そういやあ、あいつらから聞いたんだがその口調とか服装も故郷の習慣なんだって？」

「うむ、そのとおりだ。余の故郷では普通のことだぞ？」

「珍しい所もあるんだな」

「タクトとネ口ってなんで故郷を出たんだ？」

うわ、一番してほしくない質問が来た！

「うっ。そ、それはな………」

「バカかお前、なんでそんな質問してるんだよ」



村人は俺達の反応を見て存分にはやし立ててきた。

でもそれに対して怒りは湧いてこなかった。

だって、からかっていているけど、村の人達が心から俺達の事を祝福しているのがわかったから。

ほんの少し前に出会ったばかりの得体のしれない旅人に、ここまで温かい対応ができるなんて。

ここの人達は本当にいい人ばかりだ。

でも、だからこそ気になる。

この村に流れる冷たい気が。

どうして、こんな村にオーガが三体も現れたのか？

どうして、ジャック達はあんなすぐに命を捨てる覚悟ができたのか？  
どうして、サンソンをはじめとするこここの警備兵はあんなに強いのか？

190

なんだか、嫌な感じがする。

別に俺とネロに危険が降りかかる感じではないんだけど……。

「お、まだここにいたか」

考え事をしていると、誰かに呼びかけられた。

「サンソン？　どうかしたんですか？」

そこにいたのは先ほど別れたはずの警備兵隊長、サンソン・パーシバルだった。

「ああ、さつき領主さまから謝礼が出るかもしれないって話しただろ」

「ええ、言っていましたね」

「それが領主さまに今回の件を報告したら、旅の話も聞きたいから今から城に来てくれないか、と言われたんだ」

「結構早いですね……」

こういうことはもっと時間がかかると思ったんだけど。

「ああ、普通ならもっと時間がかかるんだが、旅人がこの村に来ることも珍しいし、その旅人がモンスターを退治してくれるなんてもっと珍しいからな」

「なるほど……」

「領主さまは今すぐでもなくていいから、落ち着いたら城に来てほしいと言っていたが、どうする？」

「……………そうですね」



俺は少しだけ考え、すぐに答える。

「ええ、わかりました。領主さまにお会いします」

「お、そうか。じゃあすぐに出発するか？」

「あ、ちょっと待ってください。……ネロ！」

その前に、いまだに村人たちと話をしているネロをこっちに呼ぶ。

「おい、ネロちゃん！ 旦那さまが呼んでるぞ！」

……………いつのまにか俺はネロの旦那にされたらしい。  
あっ、サンソンもにやにや笑ってる！

「どうしたのだ、タクトよ？」

「いや、こここの領主さまがオーガを退治した謝礼をしてくれるらしいんだ。それで今からお城にむかうからネロも呼んだんだ」

「む、そうか、わかった。では、向かうとしようか」

「じゃあ、サンソン、案内をお願いします」

「ああ、任せる」

そう言つて、俺達がくサントレラの歌から出て行くころとすると、後ろから村の人たちの温かい声が聞こえてきた。

「じゃあな、ネロちゃん！ また会おうぜ！」

「旦那さんを取り逃がすんじゃねーぞ！」

「タクトが浮気したらワタシに言いにおいで！ 二度と浮気なんてできなくなる、きつつい罰を教えるからさ！」

「ひゅー、ひゅー！」

「お譲ちゃん！ なにか買い物するならうちに来いよ！ 安くしとくからさ！」

……ネロ、短時間に村の人達と仲良くなりすぎだろ……………。

皇帝だった時、市民から人気者だったというのはあながち嘘でもなかったんだな……………。

「うむ、皆の者、心遣い感謝するぞ！」

ネロが花のような笑顔を村の人達に向けながら、俺達はくサントレ

ラの歌>を出た。

そして丘の上にある城に向かって、歩き出した。

## 6 温かい人々（後書き）

……今回、風邪とスランプのダブルパンチのせいで、思ったように書くことができませんでした……………。

スランプはともかく、風邪の方は自己管理ができてない証拠ですね……………。  
気をつけなくては。

ちなみにサンソンはかなり強いです。

並みのサーヴァントなら互角以上に戦うことができる……………か、  
どうかは正直わかりませんが、うちではそうい設定でいこうと思  
っています。

まー、さすがに宝具を使われたら勝ち目はないんですけどね。

## 7 ヘルタント子爵

?

?

?

やってみせて、言って聞かせて、やらせてみて、ほめてやらねば人は動かじ。話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。

山本五十六

?

?

?

「よし、着いたぞ。ここが領主さまの住んでいらっしやるヘルタント城だ」

「ほう、この城は………悪くない、むしろ良いな。質素で飾り気の一つもないのは少々気に食わんが、この城には人の温かみと誠実さを感じる。よっぽど、そのヘルタント子爵とやらの人柄がよいのだろうな」

へー、ネロがそこまで誉めるなんて珍しいな。

基本的には装飾華美の物が好きなのに、こんないかにも『戦うための城』ってものを誉めるなんて、なんか思うところでもあるんだろうか？

ヘルタント城は村の近くの小高い丘の上に建てられた城だった。

城と言っても、ネロの話にもあるように貴族の豪邸というよりも要塞と言ったほうがいい、そこまで大きくはない城だった。

俺とネロはサンソンに案内されて城の門をくぐった。

城としてそこまで大きくないとはいっても、学校の校舎ぐらいしか知らない俺としてはその門の大きさにも圧倒されそうになった。

隣を歩くネロはいつもとまるで変わらない。

やっぱり彼女は昔、これよりも大きな城で生活していたのだろうか？

そんなことを考えながら門をくぐると、そこは大きなホールになっていた。

ホールにはあごひげを生やした中年の男性が立っていた。

サンソンはその男性に駆け寄って話し始める。

「ハーメル執事さま、先ほど報告した旅人の二人を連れてまいりました」

「君達が話聞いた、タクト・コノエにネロ・クラウディウスで間違いないかな」

「はい」

「うむ、間違っではおらぬぞ」

「よし、ではサンソンご苦労だった。きみはもう通常の勤務に戻りたまえ」

「はっ！」

ハーメル執事と呼ばれた男性の指示に従って、サンソンがこの場から離れていく。

このハーメル執事っていう人の眼は、先ほど出会ったヘルタントの多くの人と同じようにきれいだった。

この人はとても真面目な人なんだということが、会ってすぐにわかった。

「私がこのヘルタント城の執事を務めるハーメルというものだ。さ、領主さまがお待ちになっている。さっそくだがこちらへ」

ハーメル執事に案内されながら俺達はホールを出て、そのまま一階の廊下を歩いていく。

廊下の右側の壁には槍剣がかけられていて、それをネロが興味深そうに見ている。

反対側の壁には多くの肖像画がかけられている。

たぶんこれから会うヘルタント子爵の先祖の肖像画なんだろう。

そして俺達は廊下の突き当たりにとどり着いた。突き当りには大きな木製の扉が付いている。たぶん、ここにヘルタント子爵がいるのだろう。

扉の前でハーメル執事が俺達に話しかける。

「ここが領主さまの執務室だ。領主さまはここにおられる。わかっているとは思いますが、くれぐれも失礼のないようにしてください」

俺はその言葉に頷く。

ハーメル執事はそれを見てから、大きな木の扉をノックする。

「領主さま。オーガから村を守ってくれた旅人が到着いたしました」

「おお、来てくれたか。わかった、入れてくれ」

ハーメル執事が扉を開け中にはいり、俺とネロも続けて中にはいる。

部屋の中は思ったよりも殺風景だった。

四方の石壁には何の装飾もされておらず、家具も机とテーブル、本棚、それと暖炉があるくらいだ。

暖炉の上には剣と楯がかけられているが、他には装飾らしいものは見当たらない。

普通なら貴族の見栄とかで無駄に豪華にするんだろうが、ここにはそういった類の物は一切ない。



この領主はネロとは違って、装飾華美が嫌いなのか？  
いや、というよりも贅沢ができないのか？

ネロはこのあまりにも殺風景な執務室の様子にがっかりしているようだった。

……いや、がっかりって、何を期待してたんだ？

ネロの様子に少し呆れながらも、目の前の机に座って書類に目を通している人物に目をやる。

けっこう歳を召している男性だ。

髪はすでに白髪に染まり、目元には深いしわが寄っている。  
厳しい顔で書類に目を通してはいるが、それでもこの人物が持つ穏やかさを消してしまっているわけではない。

この人物がここら一带を治める領主である、ヘルタント子爵なんだろう。

ヘルタント子爵はしばらく書類を見ていたが、疲れた顔で書類を机に置いてからこちらに向き直った。

「待たせてしまってすまない。どうしても、この書類にだけは目を通さなくてはいけなくてな」

ヘルタント子爵はすまなそうな顔で、当然のようにこちらに謝ってくる。

そのことに俺は少なからず驚いてしまっ。

「いえ、領主としてこの地域を治める者として、俺のような普通の人物より仕事を優先するのは当たり前のことだと思いますが……」

「いいや。君達をここに呼んだのは私の身勝手な都合によるものだ。それなのにせっかく来てもらった君達に対して、わずかな時間とはいえこちらの事情を優先してしまったのだ。それについてはやはり謝らなくてはならない」

俺の言葉にヘルタント子爵は首を横に振って答えた。

……………律儀な人だ。

生前、ローマ皇帝だったネロに、ワラキア大公だったランサー。

そして世界の王になるはずだった少年、レオ。

聖杯戦争で多くの人の上に立つ人物を見てきた俺から見たら、このヘルタント子爵は少し優しすぎる気がする。

ネロにしる、ランサーにしる、レオにしる、それぞれタイプはまるで違ったが、それでも三人ともある種の強さを身に着けていた。

それは過酷な政治の世界を生き抜く者なら、当然身に着けていなければならぬ強さだ。

そうでないか、きっと政治の世界ではあつという間に脱落してしまっのだから。

現に、ネロもランサーもその最後はあまり良いものではなかった。

彼にはその強さが薄い気がする。

まるでないわけではないが、そんなに強いわけでもない。  
政治の世界には、まじめすぎるし、優しすぎる気がする。

でも、どちらかといえば俺はそういう人のほうが好きだけど。

「さ、まずはこちらに座りなさい」

「はい、ありがとうございます」

ヘルタント子爵に勧められて、俺達は部屋にある数少ない家具であるテーブルを挟んでイスに座った。

俺とネロが隣同士で座って、その前にヘルタント子爵。  
ハーメル執事はヘルタント子爵の後ろで待機している。

「まずは礼を言わせていただきたい。我が領地に侵入したオーガ三匹を倒して、領民を救ってくれたこと、何度礼を言っても足りないほどだ。ありがとう」

「いいえ……。この警備兵隊長でもあるサンソンさんにも言いましたが、あれはこちらがやりたくてやったこと。あまり礼を言われても困ります」

「いや、そう言っな。君達は人の命を救ったのだ。それはどれ程感謝してもけっして返すことのできない恩だ」

「……もったいないお言葉です」

俺がそう言っと、ヘルタント子爵はにっこりと笑った。

「礼の代わりになるかはわからんが、少量だが謝礼を用意させてもらった。受けとってくれないか？」

「はい、こちらとしても助かります」

「はは、そうか。そう言ってくれると用意したかいがあるというものだ。謝礼はハーメルに預けている。帰りにでも貰って行きなさい」

「ありがとうございます」

さっきからネロが一言も口にしないな。

別に機嫌が悪いわけではないみたいだから、今回も話は俺に任せるといふことか。

……確かに領主に向かってネロがいつもの口調で話したら、色々と問題がありそうだな……………。

「それで、君達を呼んだのにはもう一つ用件がある」

っ！

やっぱり来たか……………！

「君達の旅の話の話を聞かせてほしい。なにしろ領主などやっていたら、中々ここから出て行く機会がなくてな。おまけに残念ながら、ここには旅人もあまりやって来ない。だからできれば君達の話の話を聞きたくてな」

……さて、ここが一番の問題だ。

なにしろ俺とネロは旅人ということになっているが、実際には今日初めてこの世界にやってきた、別世界の人間だ。

旅をしたことがないだけじゃなく、この世界のことすらほとんどなにも知らない。

だけど、ここで旅の話は話せないといっても怪しまれるだけか。

「……上手く話せるか、自信がありませんが………」

俺は少しためらいがちに、話し始めた。

気が付いたら記憶もなく、見知らぬ土地にいたこと。

殺されそうになった俺を、ネロが助けてくれたこと。

それ以来、ネロとはずっと一緒にいること。

友人だった人物が俺を殺しに来て、逆に返り討ちにしてしまったこと。

薄暗い森で毒矢を受けて死にかけたこと。

旅の途中に出会った無邪気な少女のこと。

愛したもののしか食べられないという、狂気の女性のこと。

何度も俺を殺しに来た暗殺者のこと。

友人二人と昼食を食べたこと。

燃えるような夕日の中、完璧な騎士と戦ったこと。

そしてネロと共に死にそうになっていたところを、謎の女性に助けられたこと。

そして、このヘルタントについたこと。

聖杯戦争で俺が経験したことを、脚色を加えながら旅の話のようにヘルタント子爵に話す。

ヘルタント子爵は相づちを打ったり、驚きの表情を浮かべたりしていたが、俺が話している間は何も言わなかった。

「これは驚きましたな。この広い大陸にはそのようなこともあるのですね！」

「……………」

俺が話し終わると、ハーメル執事が感動したかのように声を上げた。でも、ヘルタント子爵は何も言わずに何やら考え込んでいる。

「ヘルタント子爵さま？」

「……………」

俺が声をかけても、ヘルタント子爵は何の反応もしない。

そんなヘルタント子爵の様子を見て、ネロは眉をひそめ、ハーメル執事も困っているようだ。

しばらくヘルタント子爵は黙っていたが、やがて口を開いた。

「……………間違っていたらすまないが、君はウソを付いていないか？」

「えっ……………」

まさかばれたのか…………？

でも、どうして……………？

ヘルタント子爵は俺の様子を見て、にっこりとほほ笑んだ。

「やっぱりな。君はウソをつけない子みたいだな。話をしているときに、ときどき目が泳いでいたから、もしかしたらとは思ってたんだ」

「……………はぁー、やっぱりばれてしまったか。タクトの事だ。いつかは見抜かれるとは思っておったんだが……………。よもやここまで早いとはな」

ヘルタント子爵の言葉とネロの言葉が意外と心に突き刺さった。

……俺ってそんなにウソが下手なのか？

「それで、どうしてウソをついたのか教えてくれないか？」

「それは……」

「もちろん、理由が言えないならそれでもいい。ただ、もしも君達が困っていることがあるのなら、私は君達に対する恩返しとしてそれを助けてやりたいと思う。……もちろん、我が祖国に剣を向けるような用件以外のことだったら、だがね」

ヘルタント子爵はまじめな表情でこちらを見る。

領主向きの人ではないとはいえ、その顔には生涯をかけて一つの領地を治めていた者の強い顔が確かにあった。

そして、歳と地位にあわずその瞳はとても澄んで美しかった。

……この人は本当に今日自分の領地にきたばかりの、俺達に力を貸そうとしてくれてるんだ。

いくら自分の領地に現れたオーガを退治したとはいえ、俺達は一介の旅人にすぎないはずなのに……。

それなのに、この人はまるで古くからの友人を助けるかのような真摯さで、俺達を助けたいと思ってるんだ……。

そこまで考えて俺は結論を出した。

そして自分とはまるで関係ない人を信用できると、俺は生まれて初



めてそう思った。

「……わかりました。まずはウソについて、すみませんでした、領主さま。……信じられないかもしれませんが、今度は俺とネ口の旅の、本当の話をお願いします」

「……よいのか、タクトよ」

「ああ」

ネ口の短い問いに、俺も短く答える。

「………ふ、そうか。なら余は何も言わぬ。そなたの思うままに行動すればよい。余はただそなたの決めた道をいっしょに歩いて行っただけだ」

ネ口はしばらく俺の顔を無言で見っていたが、やがて微笑んでそう言った。

俺もネ口に微笑み返して、ヘルタント子爵に向き直った。

「……領主さま。先ほども言いましたが、これから俺が話すことは嘘っぱちの作り話のように聞こえるかもしれませんが、ですが、すべて事実です」

「………」

ヘルタント子爵は俺の言葉に驚きながらも、大きく頷いてくれた。

……信じてはもらえないかもしれない。

いや、むしろ信じてくれる可能性はほとんどないと言っている。

この世界とは違う別の世界から来たなんて、普通考えもしない。

それでも、俺はこの人に話したかった。

この不器用な領主さまに、俺の本当の話を。

そして俺は、俺の巻き込まれた別世界の月で起こった魔術師の戦いと、その後に出会った不思議な女性について全て話した。

## 7 ヘルタント子爵（後書き）

くそー……………。

いまだにスランプから抜け出せず、四苦八苦……………。

こんなんで大丈夫か、おれ！？

とまあ、愚痴はこれくらいにして。

領主さま登場です。

ただ、原作でも台詞の少ない方なので、少々言葉づかいがおかしい  
かもしれません……………。

そこらへんのご了承ください。

## 8 選択

?

?

?

私は素直な悪よりも頑固な善を好む。

モリエール

?

?

?

「……なるほど、確かに信じがたい話だな」

俺の長い話を聞き終わって、ヘルタント子爵はポツリと言葉をこぼす。

「全ての願いを叶える『聖杯』を手に入れるために百人もの魔法使いと過去の英雄が争い合った。そしてそれが行われたのは空に浮かぶ月。おまけにこのことは違う異世界、か……。ふふ、昔話や吟遊詩人の物語でもこんな荒唐無稽な話はないだろうな」

「はい。正直なところ話した俺自身も信じてもらえるとは思っていません。ですが、事実なのです」

おもしろそうに話すヘルタント子爵の言葉に、俺はどこかがっかりしながらも答える。

ネロはただ真っ直ぐにヘルタント子爵を見ており、ハーメル執事は作り話だと怒鳴りたいけど、あまりにも話の内容が変なので、逆にどうしようかと迷っているようだ。

「ふむ。正直なところを話すと、私は君の話を完全には理解できていない。月で行われたという聖杯戦争とやらも、生き返った過去の英雄というサーヴァントも、そして別の世界というもの自体が、私には想像することすらできない」

「……………はい」

そう、だろうな…………。

いきなりそんな話を聞いて理解できる人がいるはずがない。その直前にサーヴァントの力をその目で見て、自分が生きていた現実が虚構のものだと知った俺ですら、初めて保健室で魔術師ウィザードや聖杯戦争のことを聞いた時はとてもじゃないが理解できなかった。

ましてや、今日初めて会った人物から突然、この世界とは違う世界やらなにやら聞かされても、理解できるどころか、信じることすらできないだろう。

俺はどこか気落ちしながらも、ヘルタント子爵の言葉をおとなしく聞く。

そんな俺にヘルタント子爵は少し微笑んでから話を続ける。

「もう一度言うが、私は君の話を完全に理解できていない。……だが、それでも私は君の話を信じようと思う」

「えっ？」

「なんとっ!」

「領主さま!？」

思いがけないヘルタント子爵の言葉に俺とネロ、そしてハーメル執事の三人は驚きの声を上げる。

「ヘルタント子爵。自分で言うっておいてなんですが、本当に俺の話信じられるのですか？俺が出まかせを言っているとは思われないですか？」

ヘルタント子爵はそれでも微笑みを浮かべながら、俺の言葉をやりわりと否定する。

「君がこんなところでウソをついて何の得がある？それにウソをつくならもつとマシな話を用意するだろうし、なによりも、君の話はこの世界の常識とは何かもかけ離れていた。例え、一流の詐欺師や吟遊詩人でもこんなことは思いつくことすらできないだろう」

「……………」

「それにさっきの話と違って、今の君の話には強い感情が込められていた。ただの作り話や妄想では、こころはならないだろうな」

「しかし……………俺の話は理解できないと、先ほど言っていました  
が……………」

「ああ、確かに私には君の話を完全に理解することができない。だ  
がなタクトくん、勘違いをしてはいけない。理解できない事と、信  
じられない事はいつしよの事ではないのだ。例え自分にその意味が  
理解できないことでも、それが真実ならば人はそれを信じることが  
できる。もし、自分に理解できない事をすべて信じることができな  
いならば、人は呼吸することも信じられなくなるだろ？」

口で言うのは簡単だけど普通の人だったら、理解できないことはや  
っぱり信じずらいと思う。

どうやら俺はまだこの人のことを見誤っていたらしい。

「そなた、大したものだな。為政者にしては弱々しすぎると思った  
が……………。そなたは自分と違うものでも全てを受け入れられる。  
その強さは中々持てる者ではないぞ。うむ、余もまだまだ見る目が  
ない。今にも枯れそうな瘦せ木に見えたが、実は大樹の枝の一本で  
あったとはな」

そこまでヘルタント子爵が話したところで、今まで黙っていたネロが突然立ち上がって話し出した。

「ははは。私はそんな大それたものではないさ。君の言う通り、私は今にも枯れ果てそうな老木でしかない。ただ、私は君達よりも何倍も生きているから、少しばかり柔軟に対応できるだけさ」

「ふ、謙遜するでない。元老院のように無駄に歳を食うだけで、まるで何も変わらない石頭の連中もおるのだ。そなたは十分に聡明であると余が保証しよう」

「ありがたい言葉だな。そういえば君は昔、一国の王だったこともあるのだつたな。ふむ、今からでも敬語で話した方がよろしいですか、陛下？」

「いや、よい。今の余は皇帝ではない。偉大なるローマ帝国の第五代皇帝、ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクスはもういない。今ここにいるのは、ただ愛する者と共にいたいだけの普通の少女、ネロ・クラウディウスだ」

ヘルタント子爵の言葉に、ネロは少し寂しそうに、でもとても嬉しそうなお様子で答える。

それを聞いたヘルタント子爵はネロの言葉に微笑んただけで特に何も言わず、別の話に移った。

「少し話は変わるが、君の話聞いた以上、私は君達に対してでき



るだけの援助をしたいと思っている」

「しかし、それは……」

「遠慮はしないでくれ、タクトくん。君達はここについて全く知らないだけでなく、財産も何も無い。そんな状況では正直どうしようもないだろう?」

「それは、そうなのですが……」

俺がそれでも迷っていると、ヘルタント子爵はにっこりと笑って言葉が続ける。

「君が心配することはなにもない。私も一応、貴族のはしくれだからね。身寄りのない子供を二人養うことくらいなんともない」

「タクトよ、余もこの提案にはありがたく乗せてもらうべきだと思うぞ。他に手があるならともかく、何の手もない今はこの善意をありがたく受け取るべきだぞ?」

「……わかりました。そういうことなら、ありがたくその申し出に乗せてもらいます」

「それは良かった。……ただ、一つだけ問題があつてね……」

二人の言葉に押されて俺がヘルタント子爵の援助を受けることを決めると、ヘルタント子爵は嬉しそうにしながらも、どこか困ったよ

うな顔をしていた。

……どうしたんだろう？

「いや、援助すると言った以上、君達は私の領地で暮らしてもらおうのがいいのだろうが、できれば私は君達にはこことは別の場所で暮らしてもらいたいのだ」

「……？ どういうことですか？」

「それは」

ヘルタント子爵が返事をしようとしたその時、執務室の扉を誰かがノックした。

「お話し中に失礼します。領主さま、御昼食の準備が整いましたが、いかがいたしましたでしょうか？」

入ってきたのは白いエプロンを身に付けた女の人だった。たぶん、この城で働くメイドの一人だろう。

「ああ、もうそんな時間か」

メイドの言葉にヘルタント子爵は驚いたように返事をした。

俺も気づかなかったけど、聖杯戦争の話が思ったよりも長かったみたいだ。

「すまないが、今は旅人の二人と大事な話をしているから、昼食はまたあとで……………、いや、ちよつと待ってくれ。この二人にも昼食を用意することはできないか？」

「へ、旅人さんにですか？ そ、そうですね……………。料理長に聞かなければ詳しくはわかりませんが、領主さまが普段食べるようなお食事ではなく、私達のような城の者が食べるようなものなら準備できるかと思いますが……………」

突然のヘルタント子爵の問いかけに、メイドは目を丸くして答える。  
ていつか、俺達の分の昼食？

「ふむ、そうか。タクトくん、ネロくん。君達が良ければだが、この話の続きは昼食を食べながらでもしないか？ 残念ながら今決めたことだから、君達に十分な食事を準備することはできないんだが……………」

「いえ、俺はそんなの気にしませんから。ネロもそれでいいよな？」

「当然であろつ。ありがたく御馳走になるとしよつ」

「そうか、なら移動するとしよつ」

こうして俺とネロはヘルタント子爵の城で昼ごはんを食べることに  
なった。

？

？

？

「それでヘルタント子爵。どうして俺達をここに住ませたくない  
ですか？ ここはあなたの領地でしょう？」

「うむ、余もそれが気になる。そんなに自分の領地に自信がないの  
か？」

「……………」

食事をしながら俺はヘルタント子爵に先ほどの疑問を聞く。

俺とネロの問いに、ヘルタント子爵は顔を曇らせる。  
心なしか、食事のペースも落ちてきている気がする。

ヘルタント子爵はしばらく何も言わずに食事が続けていたが、やが  
て溜息を一つついてからナイフとフォークを置いた。

「君達は先ほどオーガ三体と戦ったな？ 実はそれが私が君達にここに住んでほしくない理由なんだ」

「異世界から来た君達はまだよくわかってないだろうが、普通オーガが三体も一度に現れるようなことはないんだ」

「む、そうなのか？ それにしてはこの者達は兵も村人もずいぶんと手慣れた感じだったが？」

「ん？」

ネロの言葉に俺は少し違和感を覚えた。

手慣れた感じがした？

確かにこの人達はオーガが出てきたことを知っても、パニックになつたりしないですぐに対応していた。

警備兵もオーガに対して素早く対応していた。

ということとは……………？

「ああ、それが問題なんだ。我が領地には先ほどのオーガのようなモンスターが、他の場所に比べ頻繁に出没する」

くっ、やっぱりそういうことか！

ヘルタント子爵は疲れたように溜息をついて、話を続ける。

「我が領地の北には灰色山脈と呼ばれる広大な山脈が広がっている」

「そこにモンスターが大量に住みついでいて、この村を襲うのか？」

「いや、確かにそれもあるが、それだけならモンスターが人の大量に住んでいる場所を頻繁に襲ったりすることはない。一番の問題は、灰色山脈のく果てしない渓谷と呼ばれる場所に住んでいるブラックドラゴン、アムルタットのせいなのだ」

「ブラックドラゴン!？」

予想だにできなかった言葉を聞いて、俺は思わず叫んでしまう。

「むづ、きな臭いことになってきたな……。つまりそのドラゴンが原因でこの村はモンスターによく襲撃されるというのか？」

「ああ。アムルタットの放つドラゴンファイアのせいで、灰色山脈にはモンスターがぞくぞくと集まってくるのだ」

「ドラゴンファイアとはなんですか？」

「詳しいことは私にもわからぬが、ドラゴンが放つ相手を威圧するオーラらしい。その威圧感にモンスターは惹かれ、そしてアムルタットへの恐怖によりこの灰色山脈を離れることができなくなり、灰色山脈のふもとにある我が領地を襲うようになるのだ」

「なんと……………。それは頭の痛い問題だな」

つまり、アムルタットっていうブラックドラゴンがいる限り灰色山脈にモンスターは集まり続けて、このヘルタントが襲われる可能性も高くなるってことか。

でもそれなら、アムルタットがいなくなればここも普通の場所と変わらなくなるってことだよな？

「ふむ、ならばそのブラックドラゴンを退治すればよいだろう。この兵の力ならばそれも可能なのでないか？」

俺が思ったことをネロがそのままヘルタント子爵に伝える。

すると、ヘルタント子爵はますます表情を暗くする。

「それができればどれだけいいか……………。五十年前にアムルタット目覚めて以来、私は過去に八回ものアムルタット征伐軍を派遣しているが、全て失敗に終わっている」

その言葉に部屋が静かになる。

「で、ですが、失敗したといっても、何らかの戦果はなかったんですか？ ほら、例えばアムルタットに傷を負わすことができた、とか……………」

俺の言葉にヘルタント子爵は静かに首を振る。

「過去にアムルタットに戦いを挑んだ軍はすべて全滅しているので、詳しいことはわかっていないのだ」

その言葉に俺とネロは絶句する。

あの警備兵達ほどの力を持った兵士がみんな全滅したっていつのか  
.....？

「う、む。どうやら余の思っている以上にそのドラゴンは強いよう  
だな.....」

あまりの話にさすがのネロも少しばかり元気を失っていた。

「だ、だったらアムルタットと交渉をしてみたらどうですか？ こ  
の世界のドラゴンが話せるかは俺は知りませんが、もし話せるな  
らどうにかしてここから立ち去ってもらおうか.....」

「残念ながら、ドラゴンと交流するにはドラゴンラージャが必要な  
のだ」

「ドラゴンラージャ？」



また、俺の知らない単語だ。

「ドラゴンラージャとは人間とドラゴンの懸け橋になる特殊な力を持つ人間の事だ。ドラゴンはよりも高位の種族のため、人間がドラゴンと交流するにはドラゴンラージャが必要になるのだ」

「だったら、ドラゴンラージャがいないと人間とドラゴンは会話をすることができないんですか？」

「そのとおりだ。人間と交流できるのはドラゴンラージャと契約を結んだドラゴンのみ、そして、残念ながらアムルタットにはドラゴンラージャがいない。ゆえに、アムルタットとは交渉することもできないのだ」

「なんと回りくどい……………」

ネロがため息をつく傍らで、俺は今の会話を頭の中でまとめていた。

つまり、アムルタットというブラックドラゴンがいる限り、この村はモンスターが大量に出没する。

ただその元凶であるアムルタットは精鋭ぞろいのこの村の兵でも倒すことができず、おまけに交渉することもできないってことが。

俺が考えこむ姿を見たヘルタント子爵が、沈んだ表情のまま再び話

し始める。

「わかったかね。ここではモンスターの襲撃により、毎年たくさん  
の領民が命を落とす。だから、私はなにも知らない君達にここに住  
んでほしくはないのだ」

ヘルタント子爵のその言葉に、俺が感じていた今までの疑問が全て  
氷解していくのがわかった。

この村で最初に感じたあの奇妙な空気。

あれは、この村が今まで何度もモンスターに襲われ、人々の血  
が流れたせいなんだろう。

ジャック達、この村の人達のあまりにも早いモンスターへの対応。

あれは、この村の人達が常にその可能性を考えていて、そして、  
もしもの時の覚悟を決めているからなんだろう。

あまりにも強い、サンソン達この領地の警備兵。

あれは、常にモンスターとの命がけの戦闘を重ねてきたせいな  
んだろう。

妙にテンションの高かったこの人達。

あれは、いつも悲しみに襲われてきたからなんだろう。

殺風景だったヘルタント子爵の執務室。

あれは、たび重なるモンスターの襲撃によって、何度も損害が

でたせいなんだろう。

そこまで考えてから、俺は口を開いた。

「……………わかりました」

「そうか、わかってくれるか。追い出すようですまないが、これも君達のためなんだ……………」

ヘルタント子爵が疲れたように話すが、俺はその言葉に首を横に振った。

「いえ、領主さま。俺とネロはここ、ヘルタント領に住ませてもらいます」

「ふ、やはりな」

「なんだと!」

楽しそうなネロと驚いたヘルタント子爵の言葉が同時に響く。

「俺はまだほんの少し前にここに来たばかりですが、それでも俺はこの村やそこに住んでいる人の事が気にいったんです。居酒屋で会った人達や、警備兵隊長のサンソンさん。ハーメル執事に、もちろ

ん領主さまも。そしてこの村の悲劇を知ってしまった。それなのに、それを忘れて他の所に行くことなんてできません」

俺は強い意志を込めて、ヘルタント子爵に自分の気持ちを伝える。

「しかし何度も言ったが、この村にはモンスターがよく襲撃してくる。今回大丈夫だったからといって、次回もこうして生きていられるとは限らないんだぞ？」

ヘルタント子爵はそれでもまだ迷った素ぶりを見せて、俺を説得しようとしてくる。

もちろん、ヘルタント子爵の言葉はまったくもってその通りだ。

現に今回の戦闘でも俺は死にかけた。

いや、あのとときサンソンが助けにはいつてくれなかったら、確実に死んでいただろう。

それでも、俺はこの村の人達を助けたいと思った。

だって、この村の人達が好きだから。

「わかっています。でも、大丈夫です。だって俺はこう見えても何度も死線を彷徨ってきたんですから。だから俺達の力で少しでもこの村の被害を減らしたいんです」

「き、君はここに住むだけでなく、モンスターまで退治するというのか？」

「はい。……ところで領主さま、警備兵の人達の給料って領主さまが出しているんですよね？」

「あ、ああ……。彼らは村の警護もしているが、名目上はこの城の警備兵だからな」

ヘルタント子爵は突然の話の移り変わりに、目をパチクリさせながら答えた。

「だったら、俺とネロを警備兵に迎え入れてください。そしたら領主さまからの援助も、給料として堂々と受け取ることができます」

「タクトくん、わかっているのかね？　この警備兵の死亡率はとても高いんだぞ。それなのに警備兵に入りたいというのか!？」

「俺の決心は変わりません。俺をヘルタント領に迎え入れてください、領主さま」

「ヘルタント子爵よ、一応言っておくが、我が奏者は一度決めたら中々に頑固だぞ。諦めたほうがよいと思うぞ？」

「……………なぜだ？　君は今まで人並みの幸せを手に入れたことがないんだらう？　それに君は戦うこと自体が嫌いなんだらう？　それなのにどうしてわざわざ、平穏な生活を捨てて再び戦いの日々に帰ろうとするのだ？」

俺とネロの言葉にヘルタント子爵は手で頭を押さえながら、疲れたように言葉を漏らす。

……確かに、ヘルタント子爵の言葉は一部合っている。

俺は戦いが嫌いだ。

戦いで誰かが傷つくのが嫌いだ。

今日のオーガとの戦いだって、できればしたくなかった。

でも。

「……俺は確かに戦いも争いも嫌いです。でも、自分や他の人の命を守るためなら、俺は戦うことをためらいません」

それはあの聖杯戦争で誓ったこと。

「さつきも言いましたが、俺はこの人達が好きになりました。だから、ここの人達が悲しむ顔はできるだけ見たくない。ましてや知らないふりができるほど、俺は大人じゃありません」

別に正義の味方を目指しているわけじゃない。

単純に、俺はここの人達が好きになっただけだから。

だから、守りたい。

ただ、それだけ。

でも、俺にとってはそれだけで命をかける理由には十分なんだ。

「それに、大丈夫ですよ。俺は簡単には死にません。あの聖杯戦争を生き抜いたんですし、なによりも」

そこまで言って俺がネロの方を見ると、彼女は自信満々に笑っていた。

「ネロがいる限り、俺は負けませんから」

俺の話を静かに聞いていたヘルタント子爵は、やがて根負けしたように首を横に振りながら苦笑した。

「そこまで言うならば、もう私からはなにも言うまい。君達の望む道を進めばいい」

「ありがとうございます、領主さま」

「なにを言っているのだ。礼を言いたいのはこちらの方だ。………  
…ありがとう、タクトくん、ネロくん。これから君達の力で我が領民の命を守ってほしい」

「はい、もちろんです」

「ふ、任せるがよい！」

こうして、俺とネロはヘルタント領に暮らすことになった。



## 8 選択（後書き）

更新が遅れてしまって、すいません……………。  
思ったよりも時間がかかってしまいました。

……………おかしいなー。

領主さまとの会話は一話で終わる予定だったのに、どうして二話になっただらう？

不思議ですなー。

とはいえ、これで第零章もほとんどおわり。

うまくいけば今週中には第零章を終わらせられるかもしれません。

第零章が終わった後は、いくつか番外編を挟んでから、ようやくドラゴンラージャ本編に入ろうと思います。

## 9 森の読書家

?

?

?

才能を疑い出すのがまさしく才能のあかしなんだよ。

ホフマン

?

?

?

「「」がそうかな？」

「うむ、そうであろう。このような森の中に家を建てる者はそう多くはあるまい」

俺達は森のはずれの空き地にポツンと建っている家を見ながら話し合った。

俺とネロは今、ヘルタントの村から少し離れたところにある森に来ている。

どうしてこんなところに来ているかと言うと、この森のはずれに住んでいる人物にぜひ会うようヘルタント子爵に勧められたからだ。

何でも、ここに住んでいるカールという人物はとても博識で思量深いため、必ず俺達の役に立ってくれるという話だった。

『そのカールと言う人はそんなに頭がいいんですか？』

『ああ。私など、あいつの足元にも及ばないだろうな』

『領主さまより、ですか？』

『それに信用できる男だ。君達の話聞いても誰にも話さないだろうし、悪用することもあるまい。大丈夫だ、私が保障する』

『わかりました。領主さまがそこまで言うなら、信用できる人なんでしょう。その人にも事情を説明して、力を貸してもらいます』

というわけで、俺はネロといっしょにヘルタント城から、その人物の住んでいると思われる家まで直接来てみたということだ。

「それじゃ、とりあえずノックを試してみるか」

家の前にいてもらちが明かないので、俺は扉を二、三度軽くノックする。

すると中から軽く物音がした後、扉が開いた。

「おや、どなたかな？ 見たところ、ここの村の人ではないようだ

が……」

中から出てきたのは、中肉中背の中年の男だった。

茶色の髪に人のよさそうな顔をしていて、どことなく特徴のない平凡な顔つきをしている。

隣のネロが首をかしげている。

たぶん、この男がヘルタント子爵が推すほど、頭のいい人物なのかどうか考えているのだろう。

「あなたが、カールさんですか？」

「ああ、たしかに私がカールだが……。君達は一体？」

「俺は今日からヘルタントに住むことになったタクト・コノエと言います。こっちはネロ・クラウディウス」

「うむ、よろしくな」

「実はある人から、カールは聡明で色々なことを知っているから、このことについて教えてもらえばいい、と勧められました。だから突然ですが、こうやって押しかけてきたんです」

「ははは、悪い気分ではないが、私はそこまで大した人物ではないよ。……しかし、一体誰がそんな大げさなことを言ったんだい？」

カールは俺の言葉に苦笑したが、そこで不思議そうに首をひねった。俺はカールの眼をしつかりと見ながら答えた。

「あなたのお兄さんです、カール」

思いがけない俺の言葉にカールは目を軽く見開く。

彼、カール・ヘルタントはヘルタント子爵の弟だ。

もつともカールの母親は城の下女　メイドだったらしく、ヘルタント子爵とは異母兄弟の関係にある。

そういった自分の出自から、昔からカールは領主の地位などにはあまり関心がなく、若いころにヘルタントを旅立って、様々なところを放浪していたらしい。

カールがヘルタントに帰ってきたあと、ヘルタント子爵は彼を城で暮らせるようにしようとしたらしいが、カールはそれを断った。

代わりにカールは森で静かに暮らせるように頼み、ヘルタント子爵はその願いを承諾した。

それ以来、カールは税などを免除され、この家で読書生活を送っているらしい。

「ふむ………どうやら何か事情があるようだね。わかった、とりあえずは上がりたまえ」

カールに促されて、家の中に入る。

部屋の中央にはテーブルが一つ置いてあり、その上にはロウソクが立ててある。

壁際には本棚があるが、どう見ても本よりも酒瓶の方が多く置いてある。

本の多くは部屋の床やベットのの上に散らかっている。

……一日中、本を読んでいる証拠だろう。

カールはイスを二つ部屋の隅から取ってくると、俺とネロに座るよ  
うに勧め、自分も別のイスに座る。

俺とネロがそれに従ってイスに腰を下ろすのを見ると、カールはま  
じめな表情で話を始める。

「あの口の堅い兄上が私との関係を話してまで、君達をここに寄こ  
したんだ。何やら並々ならぬ事情があるようだね？」

「はい」

「まずは、君達の事を話してくれないかな？　そうでないと、こち  
らとしても力の貸しようがないからね」

カールはそう言って、軽く微笑む。

たぶん、こちらが緊張しないように配慮してくれたんだろう。

「……今からする話は、はっきり言って信じられないような話です」  
「信じるか、信じないかは話を聞いた後に聞き手が決めることだ。  
君は何の心配もしないで、堂々と話すといい」

俺は少しだけためらったあと、意を決してヘルタント子爵にしたように、月での戦いのことを話した。

？

？

？

俺が話終わって窓の方を見ると、窓から差し込んでくる春の日差しはだいぶ傾いていた。

俺は一息着いてから、カールのついでくれた水を飲んでのどの渴きを癒す。

長話を何度もしたせいで、のどが焼けつくように痛い。

「……なるほど。別の世界に、過去の英霊<sup>サーヴァント</sup>、聖杯か……。確か  
に、にわかには信じがたい話だが……」

「それでも、信じてくれますか？」

難しい顔で考え込むカールに、俺は緊張しながら問いかける。

ヘルタント子爵は大丈夫だと言っていたが、やっぱり心配なものは心配なのだ。

「安心したまえ、コノエくん。兄上がそうだったように、私も君のその突拍子もない話を信じよう」

だけど、俺の心配をよそにカールは普通に答える。

「そんな簡単に信じられるものなんですか？ あなた方の常識を完全に無視したような話なのに」

「そうだな……。確かに、普通なら信じることは難しいだろうな。だがこの大陸にはフェアリーと呼ばれる種族がいる」

フェアリー  
「妖精？」

「ああ。彼らには次元、つまり時間と空間を自由に渡り歩く力があると、昔聞いたことがある。その時はよく理解することができなかったが、今の君の話を聞いて確信した。君の言う異世界というのは、こことは違う次元にある世界ということではないのかな？」

「そう、ですね。たぶんそうだと思います。さっきも言いましたが、



俺自身も別の世界があるって知ったのは、最近………というより、今朝の事でしたから」

俺がそう言つと、カールはにっこりと笑った。

「ほら、ご覧。君はさっき自分の話を『常識を無視した話』と言つたが、実際にはこの世界の常識とも十分繋がっているではないか」

「あつ………」

「それに、私にはどうしても君がウソを言っているようには見えな  
いんだよ。私はほんの少し前に会つたばかりだが、それでも君が平  
然とウソをつけるような人でないことくらいはわかるつもりだ」

……俺つて、そんなにウソが付けられないように見えるんだろうか……  
………？  
いいことかもしれないけど、ちょっとショックだぞ？

……つて、そんなことはどうでもいい。

「ということとは、カールさんも俺の話を通じてくれるんですね？」

「ああ」

「なんとというか……、ありがとうございます」

「はは。お礼などする必要がないだろう。私も君の今の話でずいぶん視野が広がった気がするよ。むしろこっちがお礼を言いたいほどだ」

なんだかカールの今の言い方、ヘルタント子爵に似ている気がする。やっぱり、兄弟ってことかな？

「しかし、君の話はわかったが、兄上はどうして私のところに君を行かせたんだい？ 私はしがいないただの読書家。君の力になれるとは思えないのだが」

カールは少し困ったように言う。

「いえ、領主さまはカールが一番適任していると言っていました」

「私がかい？」

「はい。あの、実は……………お願いがあるんですけど……………いいですか？」

「年長者に頼むということとは、若者の特権だよ。私にできることから、力になるう」

カールがにっこりと笑って言う。

俺は少しだけためらってから、その要件を話す。

「俺に、……この世界のことを教えてくれませんか？」

「この世界のことを？」

予想していた用件とは違ったのか、カールが不思議そうに首をひねる。

「はい……。俺とネロは今日初めてこの世界にやってきました。だから、この世界の歴史とか常識とかが全く分からないんです」

「なるほど、それで兄上は私のところに君を行かせたのか」

カールが納得したように頷く。

めがみもまるで教えてくれなかったので、俺はこの世界のことをまるで知らない。  
異世界というが、俺にはこの世界と前の世界とがどう違うのかもわかっていない。

しかし、この世界で生きていくには必要最低限の情報ぐらいは知っておかないといけない。

歴史や地名ぐらいなら、知っていなくてもバカだと思われるぐらい

だが、一般常識まで知らないとなると、色々とまずいことになってくる。

しかし、常識とはみんなが当たり前に知っているから常識なのだ。俺の事情を知らない人から教えてもらおうわけにもいかない。

領主さまやハーメル執事から教えてもらってもよかったが、あの二人は普段の仕事が忙しく、とても俺一人に構っているわけにはいかない。

そこで、領主さまは信頼できる異母弟おとうとであるカールに、俺の事情を説明して、この世界の事を教えてもらうように勧めてくれたのだ。それにカールは若いころにこの世界のあちこちを旅していたから、普通の人よりも多くの事を知っている。まさに教師としては最適の人物なのだ。

「わかった。非才のみである私にどれだけの事を教えられるかわからないが、私もできるだけの事をしよう」

「ありがとうございます、カールさん」

「カールでいいよ、コノエくん。私としてもそっちのほづが気兼ねしなくていい」

「……わかりました、カール」

俺とカールはお互いに微笑み合うが、ふと思いついたようにカールが困ったような表情になる。

「ところでコノエくん。隣で寝ているクラウディウス嬢をそろそろ起こしてあげるべきではないかな？」

「へっ？」

カールの言葉に驚いて隣を見ると、ネロがイスに座ったままスヤスヤと寝息を立てていた。

「……さつきから、妙に静かだからおかしいとは思っていたけど、まさか眠っていたなんてな……」

俺はかわいいネロの寝顔を見ながら、苦笑する。

「おい、ネロ。起きろ。こんなところで眠ったら、ダメだろー」

「……むうう。……奏者よ……もう、少しだけ……」

「……くうー」

「……だめだ。」

ネロ、完全におやすみモードだ。

これじゃあ、中々起きないぞ……」

「仕方ないなー」

今日はネロもオーガと戦って疲れているんだろう。  
そもそもネロにとっても、この世界は異世界なんだ。  
もしかしたら、精神的にもけっこう疲れているのかもしれない。

俺は肩をすくめて、カールを見る。

「すみません、カール。ネロも疲れているみたいですから、もう少しだけここで寝させてくれませんか？」

「私は構わないよ。そうだ、コノエくん。きみはまだ住む家も決まっていけないのだろう？ よければしばらくの間、私の家に泊まっていかないかい」

「えっ……いいんですか？」

「ああ。見てもわかるように私は今一人暮らしだからね、若者二人ぐらいを泊めるスペースぐらいは残っているよ。もちろん、君が迷惑だと思ふのなら無理には言わないが」

「いえ、迷惑なんかじゃありませんよ。助かります、カール」

俺はカールに頭を下げて、お礼を言う。

外の景色はいつの間にか、ずいぶんと赤くなっていた。  
窓から差し込む夕日が、寝ているネロの顔を赤く染める。

ネロはまぶしいのかときどき顔をしかめたりするが、それでも幸せ

そうに寝息を立てている。  
俺はその顔を見て軽く微笑む。

そのとき、ノックの音が聞こえてきた。

## 9 森の読書家（後書き）

ドラゴンレージャ、一の博識家、カールさんの登場。

……ようやく、少しはドラゴンレージャっぽくなってきたかもしれない……。

次回で第零章は終了です。



10 月光の下で

?

?

?

愛は奇跡であり、愛は恩寵である、天から落ちる露のように。

ガイベル

?

?

?

「今日は来客の多い日みたいだね」

ノックの音を聞いて、カールは玄関へ移動する。

「おや、ネドバルくとスマインターグ嬢じゃないか」

「ようっ！ ひさしぶり、カール」

「おひさしぶりです、カール」

扉を開けたカールは嬉しそうに、新たな訪問者と話し始める。  
「どうやら、知り合いらしい。」

「ちょっと近くまで来たから、カールの家に寄らせてもらったけど、  
いいよな？」

「ああ。今、来客を迎えているところだが、問題はないよ」

「あら、お客様がいらっしゃるなら、私達はお邪魔なのではありませんか？」

「いいえ、そんなことはありませんよ、スマイリー嬢。それに、  
お二人にもぜひ紹介したい人ですから。遠慮なさらずに、どうぞお  
上がり下さい」

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「さ、ネドバルくんも上がりたまえ」

「ああ、わかったよ」

ん？

新しい客を家に上げるのか？

カールのお客さんだから関係ないと思ってネロの寝顔を見ていた俺  
は、慌てて姿勢を正して、玄関の方を見る。

「あら、見かけない人ね？」

「ん？ そうだな？」

玄関から入ってきたカールの新たなお客さんは、意外にも俺とあまり変わらない年に見える若い二人だった。

一人は赤い髪を短く切りそろえた活発そうな少女で、コロコロとした目で興味深そうに俺を見ている。

もう一人は少しボサボサな髪をした少年で、少女の方とは違いどことなく俺を怪しむような目で見ている。

「紹介しよう、ネドバルくん、スマインターグ嬢。こちらが今度からこの村に住むことになった、タクト・コノエくん。……コノエくん。こちらの二人は、フチ・ネドバルくんとジェミニ・スマインターグ嬢。私の歳若い友人だよ」

カールは俺達を見ながら、ニコニコと紹介してくれる。

赤い髪の少女がジェミニ・スマインターグで、少年の方がフチ・ネドバルという名前らしい。

ジェミニはしばらく俺をしげしげと見ていたが、突然、思い出したかのように叫び声を上げ、俺達男性陣三人を飛びあがらせた。

「もしかしてタクト・コノエって、今日の朝オーガ三匹を倒したっていう魔術師さん!？」

「え、えーっと……。たぶん、それで合っていると思いますけど……」

「カールがこの村に住むことになったって言うていたけど、本当なの!？」

「あ、ああ……。本当だけど……」

「きゃー、すごいわ!」

ジェミニの叫び声に驚いた俺はしどろもどろに答えるが、ジェミニはそんな俺を気にもしないで隣で痛そうに耳を押さえていたフチに話しかける。

「ね、ね、フチ。彼がああ、天才魔術師のタクトだって!　すごいわ!　しかもこの村に住むんだって!」

「……天才魔術師?」

「一体いつの間にそんなことになったんだ?」

「ジェミニ、お前いきなり人の耳元で叫ぶなよ!　耳がつぶれるかと思ったじゃねーか!」

「だって、しかたないじゃない！ 今日、村で散々話題に上がっていたタクトがこんなところにいるのよ！ 驚かない方がおかしいじゃない！」

「だからって突然叫ぶやつがあるか！」

「なによっ…！」

「なんだよっ！」

「こらこら、ネドバルくん。それくらいにしないか。スマイインターグ嬢も、コノエくんが驚いていますよ？」

「うっ。わるい、カール、コノエ」

「ごめんなさーい……」

カールに叱られて、ようやく二人の口げんかはおさまった。さすがに知り合いでもない俺の目の前で喧嘩したのが恥ずかしかったのか、二人ともしょんぼりとしている。

「はは。気にしてないからいいさ。カールからも紹介されたけど、俺の名前はタクト・コノエ。気軽にタクトって呼んでくれ」

「わかった、タクト。オレの名前はフチ・ネドバル。ロウソク職人候補だ。オレのこともちって呼んでいいぜ」

「えーと。……ジエミニ・スマインターグと申します。私のことも名前で呼んでくださって結構です、タクト」

「……なあ、ジエミニ。さっきあれだけ目の前でオレとケンカしたのに、今更おしとやかなふりをして無駄だと思っぜ」

フチが呆れたように言うと、ジエミニは頬を膨らませてフチを睨めつけた。

「普通の言葉遣いでいいよ、ジエミニ。俺なんか敬語を使う必要なんてないし、それに俺としてもそっちのほうが嬉しい」

「えっ、そう？　じゃあ、普通に話すわね。これからよろしく、タクト！」

俺の言葉を聞いたとたん、機嫌が良くなるジエミニ。  
どことなく、ネロに似ている気がするのはい気のせいだろうか？

「よろしくな、タクト」

「ああ。こっちの方こそよろしく」

手を差し伸べてきたフチと握手を交わす。

カールは傍で俺達を見ながら、ニコニコと笑っている。

「あら？ タクト。ネロとはいっしょにいないの？ 姿が見えないけど」

「いや、いるよ。でも今日は疲れちゃったのが、こっちで眠ってるよ」

フチとジェミニにイスに座ったまま眠っているネロを見せると、フチはなんだか意外そうな顔をした。

「眠っちゃってるから、俺が紹介するよ。この寝ている少女がネロ・クラウディウス。俺の相棒だよ」

「へー。オーガを倒すほどの女剣士なんだから、もつと力強い感じが大人な感じかと思ってたけど、意外と普通の姿なんだな。ていうか、身長とかはジェミニと大して変わらないんじゃないか？」

まー、確かに、ネロは一見すると普通の女の子だから、モンスターを倒すほどの剣士には見えないよなー。

「うっ！」

しばらくフチは寝ているネロを見ていたが、急に顔を赤くして目をそむけてしまった。  
どうしたんだろう？

ジェミニはおもしろくなそうな顔で、フチを睨みつける。

「ちょっと、フチ！？ なに女の子を見て、赤くなってるのよ！」

「い、いや……。なんていうか、その、服が……………」

「寝ているネロに失礼でしょ！ 謝りなさいよ！」

「痛ててて！ 耳を引っ張るなよ、ジェミニ！」

なんだか怒っているジェミニはフチの耳を引っ張り出した。

うわー、あれは痛そうだなー。

「まったく、耳が取れたらどうするつもりなんだよ、お前は！？」

「ふん！ フチなんて耳が一つ取れたくらいがちょうどいいのよ！」

「どづいう意味だよ、それは！」

「とにかく、寝ている女の子をジロジロ見るなんて失礼でしょ！  
謝りなさい！」

「あー、別にいいよ、ジェミニ。ネロならジロジロ見られたぐらい  
じゃ気にしないと思っから」



「というかネロなら、もっと余の事を見るがいい！ ぐらいのことはいいぞうだ。」

「基本、派手好きで目立ちたがり屋だからな。」

「そうだよな……。あんな服を着ているくらいなんだから、見られることぐらいなんともないんだろうな……………」

「？」

「なんだかフチがぶつぶつ言ってるけど、よく聞こえない。」

「それにしても、やっぱりネロも有名になってるみたいだな」

「俺は少し呆れて、タメ息をつく。」

「ま、俺でさえ天才魔術師なんて呼ばれているんだ。あれだけ活躍したネロが噂にならないはずがないか。」

「ネロだけじゃなくて、タクトもこの村では今一番の話題の人物よ」

「そうなのか、フチ？」

「ああ。オレが今日耳にした話の半分以上はタクトとネロに関する話だったな」

「……マジですか。ていうか、どんな話だったんだ？」

「えーっと。私が聞いた話だと、オーガ十匹を一瞬で倒す紅蓮のレディ・ナイト、ネロ・クラウディウスに、死者すらも生き返らせる若き天才魔術師、タクト・コノエ、だったかな？」

「ちょっと、待ってくれ！話がすごいことになってるんだけど！？」

「ははは。あきらめたまえ、コノエくん。噂話は尾ひれがついていくものだよ」

俺が驚いて声を上げると、カールが楽しそうにニコニコと笑っていた。

……はあー。

「ねーねー。タクトって旅人だったんだよね？」

「ん。あ、ああ……。そうだけど……」

なんか、嫌な予感がするんだけど……。

「だったら、旅のお話を聞かせてよ。いろんなところに行ったこと

があるんでしょ？」

「うわー、やっぱりそう来たか！」

「どうしよう、ヘルタント子爵にしたような話を聞かせるか？」

「でも、あの話はバレル可能性が高いからな……………」。

ジェミニが目をキラキラさせてこちらを見てくるのを、俺は困ったような表情で見つめ返すしかなかった。

「スマインターグ嬢。コノエくんは今日この村に着いたばかりで疲れているんです。あまり無理を言っではいけませんよ？」

カールからの助け船に俺も急いで乗ることにする。

「それに俺の話は長くなるからな。できればまた今度にしてくれるとありがたい」

「そっか…………。タクトはオーガとも戦って疲れているものね。無理を言っつてごめんなさい」

「いや、気にしないでいいよー！」

さっきと違って変わってシヨンボリとするジェミニを慌ててなだめる。

本当に、よく表情が変わる子だなー。  
でも、それだけ表裏がなくて純粹ってことなのかもしれないな。

ただ、どことなくフチがなにか疑っているような感じがしたのはなぜだろう？

？

？

？

「う、うーむ……。ここはどこだ……………」？

「あ、ようやく起きたか、ネロ」

「むう……………？ 奏者よ、ここはどこだ……………？ 余と奏者のマイルームではないようだか……………？」

「寝ぼけないでくれよ。ここはカールの家だろう？」

「……………あ……………」

「思い出したみたいだな？」

「……ち、違うのだ、タクトよ！ 今のはちょっとした冗談で、余は最初からちゃんとここがカールめの家だとわかっておったぞ！  
そ、そうだ。決して寝ぼけてなんかおらんかったぞ！」

「……………ああ、そうだな。うん、そういうことにしておこうか」

「ああ！ 信じておらぬ、信じておらぬな奏者よ！ 余は本当に寝ぼけてなんかおらんかったぞ！ 本当だぞ！」

「……………クラウドィウス嬢？ あまり声を上げては女性としての品位に傷がつきますよ？」

顔を赤くして必死になって否定していたネロは、カールの一声で恥ずかしさからか、さらに真っ赤になってうつむいてしまった。

うーん。

さっきも思ったけど、カールって意外と凜みたいに『いい性格』をしているのかもしれない。

「……………のどが渴いた。カールよ、水が飲みたいのだがどうすればよい？」

「ああ、それなら家の外に井戸があるからそれを利用してください、クラウドィウス嬢」

「うむ、そうか。わかった」

「あ、俺も飲みたいから一緒に行くよ」

ネロと一緒に家の外に出ると、夜の冷たい風が俺達に吹きあたる。

ちなみにフチとジェミニはもう夜遅いから、さつき帰ったばかりだ。結局ネロとは挨拶ができずじまいだったけど、まあ、いいだろう。どうせ今日からこの村に住むことになるんだから、顔を合わせる機会もこれからいくらでもあるだろうしね。

「お！ 見よ、タクトよ！ 空に月が二つも浮かんでおるぞ！」

「ああ、俺もさつき見てびっくりしたよ。カールから聞いた話だと大きいほうの月がセレナ、小さいほうの月がルミナスって言うらしい」

フチとジェミニを送り出すときにあの二つの月を見たときは本当に驚いた。

思わず声を上げそうになるのを必死に我慢したからな。

ネロが何も言わないので気になって横を見ると、ネロは空で淡白く輝く二つの月をじっと見つめていた。

思わず俺は息をのんでしまう。

月光に照らされたその顔はどこか儂くも、とても美しいものだった。

「どうしたんだ？」

俺はなんだか耐えきれなくなって、思わず声をかけてしまう。

「いや……。月を見るのもずいぶんとひさしぶりなことだと思ってな」

「ああ、そうか。セラフには月なんてなかったもんな」

学園ではアリーナから帰って夜になったら、月に似ているものが夜空に浮かんでいたが、あれをネロは月とは呼びたくないのだろう。

「そう言えば、俺も本物の月を見るのは初めてだな。………  
………いや、違うか。思えば月だけじゃなくてこの夜空も、星も、草花も、木も、そして人でさえ、俺は本物を見るのは初めてなんだな  
………」

俺が生まれてから　つまり、NPCにせものじゃなくてマスターにんげん、近衛拓斗として意識が始まってから、俺が見てきたものはすべてセラフの作った電子世界だった。

もちろん、あそこで見てきたものが、全て意味のない物だったとは絶対に言わないが、それでもここにあるものとあそこにあったものは、決定的に違う。

めがみには感謝しても、しきれない。

彼女が聖杯から俺とネロを救いだしてくれなかったら、俺はこんな景色を見ることなんてできなかつたんだから。

「なあ、ネロ。ここに浮かんでいるあの月にも聖杯はあると思うか？」

「ここは異世界なのだろう？　ここが前の世界と違うのなら、やはり聖杯はないのではないか？」

「そうか、そうだよな……………」

不思議な気分だ。

安心したような、落胆したような、そんな変な気分。

ここではあの悲しみの渦巻く聖杯戦争は起こらない。

でも聖杯がないと聞くと、ここが前の世界ではないということが改めて実感できた。

……………なんだか、自分の気分を上手く表現できない。

「ネロ、ありがとな」

「ん？　何がだ、タクトよ？」



「いや、ここまで一緒に来てくれたことが嬉しくて」

俺はそう言つと、なぜかネロは呆れたような顔をした。

「奏者よ。そなたは余に感謝してばかりだな。確かにそなたに感謝されるのは余としても悪くない……………というより、嬉しいのだが……………あまり人に感謝の言葉を送ると、そなたがへりくだつておるよつに思えて嬉しさも半減するぞ？」

「そうか。そうかもな……………」

ネロに言われて、少し前の言葉に反省する。

確かに今までネロには散々お礼を言ってきた。

もちろん、そのすべてが俺の偽りのない本心だったし、ネロには感謝しても感謝しきれないほどの恩があるんだけど……………。

うん、そうだな。

今はネロに素直な気持ちを話してみるか。

俺はそう思つてしばらく言葉を探していると、ネロもこつちの考えに気づいているのか何か期待しているような顔を向けている。

俺はその顔を真っ直ぐに見て、言つ。

「ネロ。俺達は今まで聖杯戦争の中で生きてきた。聖杯戦争の中で

生を受けて、聖杯戦争が終われば死ぬはずだった。でも、めがみのおかげでそんな運命フレイトからも抜け出せた」

ネロは黙って俺の言うことを聞いてくれている。

俺は自分の体が熱くなっているのを感じながら、言葉を続ける。

「俺達はもう再現データ体なんかじゃい。れっきとした普通の人間だ。これからはもう無理して人を殺す必要はないし、自分の守りたいもののために戦うことができる。そして、普通に生きることができる」

普通に生きる。

そんな簡単なことも今まで俺達には許されなかった。

でも、今はもう違う。

違うのだ。

「そう、普通に生きることができる。だから、ネロ」

自分の心臓がすごい勢いで動いているのを実感しながら、俺はネロの顔を見て自分の言いたかったことを素直に言う。

「いっしょに、幸せに生きよう」

「ふえ………?」

ネロのきれいな顔が真っ赤に染まる。

……たぶん、俺の顔も似たようなものだろう。

「た、タクトよ、それはどついう意味だ? またいつものように無意識のうちに、そ、それっぽいことを言ってるだけなのか……?」

「言葉どおりの意味だよ」

俺はにっこりとネロに微笑みかける。

「俺は幸せに生きたい。死ぬその瞬間まで幸せだったって思えるくらい幸せに生きたい。でも、俺一人じゃとても幸せにはなれない。ネロと一緒にしないと、俺は幸せなんかになれやしない。だから、ネロ。もう一回言っよ」

深呼吸を一回。

「ネロ、俺を幸せにしてくれ。俺もネロをそれ以上に幸せにするから」

「本当だな……？ 本当なのだな………？」

今にも泣きそうな顔でネロが弱々しく聞いてくる。  
俺はそれにしっかりと頷く。

ネロはしばらくうつむいていたが、やがて顔を上げて唇を震わせながら熱っぽい目でこちらを見る。  
俺はその表情に体がさらに熱くなるのを感じた。

「よ、余は……。い、いや……。わ、私はそなたを幸せにした  
い。だ、だからタクトも私を幸せにしてくれ………！」

「ああ、もちろんだ」

ネロの言葉に俺は強く頷き、彼女を抱きしめる。  
そして俺は自分の顔をゆっくりとネロの顔に近づけた。

夜空に浮かぶ二つの月が一つになった俺達の影を照らしていた。

## 10 月光の下で（後書き）

難産でした……。

フチを第零章の最後に出すのは決まっていたんだけど、色々と最初の考えからは離れてしまいました……。

まず、最初はフチに拓斗が本当は旅人ではないと見破らせる予定だったんですが……。

（例えば、旅人にしては拓斗たちの服がきれいすぎるとか、荷物がなにかさういった事で見破るみたいな）

でも、ジェミニの前でそんなことは言わない気がして、ジェミニを一旦外に出させて（もしくはネ口みたいに眠らせて）その間に言うてもらおうと考えたんですけど、そもそもフチが人の隠していることに気付いたとしても、それを本人の前で言うとは思えない……って考え直して、現在の形になりました。

拓斗の告白も本来の予定にはなかったんですけど、これまでのあの二人の態度を見ていたらもうこれ以上引き伸ばすのは逆に不自然じゃないか？ いっそのこと告白させるかと、思い切ってやってみました。

……ちなみに、あの場面を書いている時点で時刻は午前二時！ テンションが変な方向に高かったのであんなふうになってしまいました。

……うう、なんて恥ずかしい……。

まあ、これで第零章は終わりです。

次は三話ぐらい外伝を書いた後は、いよいよドラゴンラージャ本編に入ります。

次の話は拓斗とネロのヘルタントでの日常の話です。

外伝 徒然なるままに

三日坊主にだけは気をつけよう！ 315年4月2日 天気

晴れ 記録者 拓斗

引越祝いにカールから日記帳をもらったので、今日から日記をつけようと思う。

さて、この世界、もといヘルタント領に俺とネロが着いてから早くも一週間が過ぎた。

この一週間の間に、カールには本当に色々なことを教えてもらった。まず、俺達が今住んでいるヘルタント領はバイサス王国という国の最西端にある領地だそうだ。

ちなみに日記の年数はバイサス歴といい、初代国王ルトエリノ大王がバイサス王国を建国した年を一年としているらしい。

つまり今はバイサスが建国されてから315年経っているということだ。

バイサス王国が建国されたのは4月2日……………つまり、今日だったわけ……………。

その日は当然重要な祝日……………つまり、お祭り騒ぎができる日と



いうことで……………。  
騒ぐのが大好きなこの村の人達が、そんな日になにもしないわけが  
なく……………。  
つまり、なにが言いたいかと言うと。

俺にはこの村の人達の（あとネロの）テンションの高さについていけないっていうことなんです！

え？

なんでみんな正月だからって、朝っぱらからお酒飲んでるの？

え？

なんでネロまでみんなといっしょに飲んでるの？

え？

なんでみんな、未成年の俺にまでお酒を飲ませようとするの！？

はあ……………。

大変だった……………。

ていうか、ネロがお酒を飲んだら泣き上戸になるのがなんだか意外  
だった……………。

ただ、泣きながら俺に甘えて来るのは、正直反則だと思う……………。

それとそのお祭り騒ぎの中で、新しい家に引っ越しました。

カールの家からは引っ越したけど、当然、まだまだ教えてもらうこ  
とはあるので、これから家には行くことと思う。

最初にも書いたけど、引越祝いにカールからはこの日記帳を貰い、フチからはロウソクを一ダース貰った。電気のないここでは、ロウソクの明かりはとてもまぶしく思える。ちなみにジェミニはネロに花飾りをあげて、感動したネロに抱きしめられていた。

さて、他にも色々書くことはあるけど、長くなりすぎるので今日はここまで！

？

？

？

サンソンの剣妓。 315年4月6日 天気 少し曇ってお  
た 記録者 ネロ

今日も朝はタクトに起こされてしまった……。毎日、今日こそは早く起きてタクトを逆に起こして驚かしてやる！……と思っておるのだがうまくいかぬ……。むう、なぜだ？余もタクトも同じ時間に寝ておるはずなのだが……。

今日は警備兵の訓練に余とタクトも参加した。  
余とタクトは正式な警備兵ではなく、仮所属ということになってい  
るらしい。

なんでもヘルタントに来て日の浅い者を、城の警備兵という重要な  
仕事に就けるのは問題があるらしい。

ふむ、一理あるな。

もっとも、仮所属と言っても給金がでないわけでもないし、待遇に  
難があるわけでもないから余も何も言う気はないがな。

訓練については中々興味深かったぞ。

改めてここの警備兵のレベルの高さには余も驚くばかりだ。

中でもサンソンの剣の動きには無駄がなく、余から見ても美しいと  
思えるほどであった。

あれも一つの芸術だな。

……ただその動きに我が奏者まで見いつておったのは、おもしろく  
なかったがな。

むう。

?

?

?

新しい服  
者 拓斗

315年4月19日

天気 今日も晴れ

記録

今日はネロと服を買いに行った。

服自体はここに来た次の日に、いつまでもその服では目立つだろう、とカールに勧められて行ったのだが、前は時間がなくあまり買えなかったもので、さらに買いに来たのだ。

あまりお金もないので、俺は安めの服を二着だけ買った。

……ネロが不満そうに見ていたが、今日は無視。

ネロ自身はスカートの女性物の服と、ズボンのついた男物の服を一つずつ購入。

「………なんで男物の服まで買う必要があるんだ？」

「う、動きやすいからに決まっておろう！」

「そっか。なら、安心した。美少女を誘惑するためとか、そんな理由だったらどうしようかと思った」

「あ、当り前ではないか！ 余はそんなつもりなど、まるで、ない、ぞ………」

………後半、声が震えていたような気がしたのは気のせいだろうか。

ちなみに、ネロが前に着ていたあの赤いドレスは、剣と同じで魔力で編まれているものらしく、別の服を着けていても瞬時に着替えることが可能らしい。

あの服を着て戦闘するのに慣れているから、これからも戦うときは着替えるらしい。

別の服を着ているネロもいいけど、やっぱりあの服の方がネロらしくていいな、と少し思う。

？

？

？

ひさしぶりに遊んだ。

315年5月1日

天気 朝から雨

記録者 拓斗

今日は警備兵の当番の日でもなく、雨も降っていたので、カールの家に授業を受けに行った。

カールからエデルブロイやカリス・ヌーメンといったこの世界の神のことを教わっていると、フチとジェミニもカールの家に遊びに来たので、今日の授業は中止に。

それでフチ達となにをするか話していたら、カールがトランプを出してきた。

この世界にトランプがあったことには驚いたが、せっかくあるのだからそれで遊ぶことになった。

最初のゲームはトランプの代表的なゲームの一つ、七並べ。

フチとカールが強く、俺とネロは普通。

ジェミニは一人、断トツに弱かった。

「よし、これでオレも上がりつとー！」

「俺も終わり」

「余も上がりだ」

「うわーん！ どうしてわたしだけこんなに弱いのだよー！」

「だってお前、すぐに考えが顔に出るから、ジョーカーを持つてることとか、どこに出すつもりなのかとか、すぐにわかるからな。対処がしやすいんだよ」

「えーん、そんなの卑怯よ！」

「卑怯っていえば、カール。あなたずいぶんとカードを止めてましたよね？ あれで俺、あやうく投げ出しになるところだったんですよ？」

「そうだぜ、カール！ 出せるカードがあるのにパスなんかしやがって！ おかげでオレ、ずっとタクトかネロが止めているんだとばかり思ってたんだぜ！ ……ジェミニが止めてるとは思わなかったけど」

「どつという意味よ！」

「ハハハ。すまない、二人とも。大人げないとは思ってたが、どうせ私も参加しているんだから勝ちに行こうと思ってしまったね」

………最近思っただけ、カールって意外としたたかな一面があるよな。

その次にやったゲームはダウト。

………これは俺とジェミニがほとんどビリだった。  
例えば、こんな風に

(ネロ)「 6 ”だな」

(他のみんな)「「「「「」」」」」」」

(フチ)「 7 ”」

(他のみんな)「「「「「」」」」」」」

(俺)「 8 ”だ」

(フチ、ネロ、カール)「「「ダウト!」」」」

(俺)「なんでわかるんだー!」

(フチ)「 4 ”つと」

(他のみんな)「「「「「」」」」」」」

(俺) 「5」だ」

(他のみんな) 「……」

(カール) 「6」

(他のみんな) 「……」

(ジエミニ) 「え、えーと。……“7”？」

(他のみんな) 「……ダウトッ！」

(ジエミニ) 「ええーん！」

……俺ってそんなにウソがつけない男なのかな？

ちなみに、逆にカールとネロがほとんど一番を独占していた。カールは頭がいいし、何食わぬ顔で違う番号のカードを出すから、とてもじゃないけど敵わないし、ネロはどんな時でも自信満々にカードを出すから、ハツタリなのか本当なのかよくわからないのだ。

最後にやったのはトランプの王道、大富豪。

実はこのゲームだけみんな知らなかったので、最初は俺がルールを説明しながらやったのだ。

でも、みんなあつという間にルールを理解したので、すぐに普通の対戦になった。



大富豪はルー尔的に一度、順位が確定するとほとんど順位が動かない。  
今回の俺達の対戦もその例にもれず、全体を通して順位はあまり変わらなかった。  
ちなみに、その順位とは。

大富豪	ネロ
富豪	カール
平民	フチ
貧民	ジェミニ
大貧民	俺

……うん、なんでみんなと違って初心者じゃない俺が大貧民だったんだろうね。

ネロが言うには、運がないから、ということらしい。

……うん、わかってるよ、それぐらい……。

ただ、この大富豪、最後の最後にとんでもないどんでん返しがあったのだ。

「それじゃあ、もう遅くなってきたから今日はこの対戦で最後にしてようか」

「ああ、そうしよつぜ」

「最後まで華麗に余が勝ってみせよう!」

「うっ、最後まで勝ちたいわ……」

「俺も……」

以下、省略。

「よし、“J”のダブルカード! 誰かできるか!？」

「ふ。“2”のダブルカードだ」

「うわ、まじかよ」

「最後のゲームもクラウディウス嬢の勝ちで終わりそうだね」

「ふむ。ならば余は“Q”のダブルカード!」

「……パス」

「私もパスかな」

「わたしもパス」

「よし!“K”のダブルカード!」

「む、タクトよ。余にカードを二枚も献上したのにまだ“K”を二

枚も持っておったか」

「ずっとこのチャンスを待っていたんだよ！ わるいけど、これで決めさせてもらう！ “三”のフォーカード！ 革命！」

「……えっ！」「」

で、結局なんだかんだ言ってもまだ初心者だった他のみんなは、革命対策なんてしているはずもなく、俺が最後の最後に逆転勝利を収めたのだ！

ただ、ほとんど勝利目前だったネロは俺の革命のせいで負けてしまい、大貧民になってしまっ……。

……すっかり拗ねてしまって、家に帰ってからも俺に一言も話しかけてくれなかった……。

大人げなかったかな！。

？

？

？

フチ、大丈夫かな？

315年5月25日

天気 晴れから曇

今日はヘナーおばさんのところで料理を教えてもらっていた。  
ちなみにネロは警備兵の訓練に参加していた。

俺は剣士じゃないから普段の訓練には毎回でなくても問題はない。  
だから時間の開いた時はヘナーおばさんのところで料理を教えてもらっているのだ。

さすがに俺とネロのどちらとも料理ができないのは問題だと思うし。

店の手伝いをしながらヘナーおばさんに料理を教えてもらっていると、ひさしぶりにおじさん達に出会った。

俺の治したジャックの傷も特に問題ないみたいでホツとした。

夕方になり家に帰っていると、けんかしているフチとジェミニを見かける。

近くで隠れて見ていると、怒ったジェミニがフチを川に蹴り落とすてしまう。

蹴った本人もそこまで強くやるつもりはなかったのか、慌ててフチを引き上げていた。

……フチ、明日風邪ひいたら俺が治してやるよ……………。

?

?

?

無題 315年6月11日 天気 よく覚えておらぬ……  
記録者 ネロ

不覚……。

今日はタクトを守りきることができなかった……。

コボルトという犬のような顔をしたモンスターが村を襲った。  
余とタクト、そしてサンソン達警備兵はすぐにそのモンスターの撃退にあたった。

コボルト自体は大して強くはなかったが、数だけは無駄におった。  
そのせいで余達を取りこぼした一匹が、後方で指示していたタクトの方に向かってしまったのだ……。

幸い、タクトは右腕を浅く切り裂かれただけであったが、余は自分が情けない。

タクトは余が守らなくてはならぬのに、傷を負わせてしまうとは……。

今回はたまたま運が良かったが、もしこれがコボルトでなくあのときのオーガだったら、タクトは今頃きつと……。

っ！  
いやだ、想像もしたくない……。

戦闘が終わった後、サンソンが

「タクトにも剣を教えたほうがいいかもしれないな」

と言っておった。

うむ……そのほうがよいかもしれん。

余ももつと鍛錬を積みねば……。

？

？

？

がんばろう……。 315年6月12日 天気 晴れ 記録  
者 拓斗

昨日は俺が不甲斐ないせいでみんなに迷惑をかけてしまった。

特にネロに。

俺を守れなかったと、昨日ネロは家に帰ってから俺に泣きながら謝ってくれたのだ。

心配かけちゃってごめん、でもネロのせいじゃないからそんなに謝らないで。

だけど……………ありがとう、ネロ。

やっぱり俺も自衛の手段を持たないと、この先いくら命があっても足りない。

ここは二対二で戦うとは限らないのだ。

そこでサンソンやネロにも勧められて、俺も剣の練習をすることになった。

剣の練習とはいっても、なにも俺がこれから前線で敵を斬るようになるわけではない。

俺はあくまで魔術師だ。

基本は後方において、昨日のように敵が近くまで接近しても簡単に死なないようにするために剣を持つことになったのだ。

……………というより、たぶん前にいたらみんなの邪魔になると思う……………

今日の訓練で俺に剣の才能がないことが、いやというほどわかったからな！。

〈今日の訓練風景〉

「タクト、足をもっとうまく動かすんだ！　こう、リズムよく滑る

ように！」

「剣を握る手から力を抜くんだ！ ネロの手を握るように！」

「呼吸は短くするんじゃないで、できるだけ長くしたほうがいいぞ。深く、長くだ」

「剣は道具じゃなくて拳の一部だと思っんだ！ 無理に剣を振るんじゃないで、あくまで自然に腕を振るう感じで！」

……とりあえず、これからは腕立て伏せぐらいはしておこうと思っ  
た。

？

？

？

むう……。 315年7月20日 天気 朝は小雨、昼からは  
暑い程の快晴であつた 記録者 ネロ

今日はタクトがヘナーの店の手伝いに行ったため、余一人で訓練に  
参加した。



今日の訓練は木刀を使った二人一組での模擬戦であった。

最初の相手はセロであった。

さすががこの警備兵だけあって良い動きをする。

……が、余の相手ではなかったが。

軽くフェイントを入れてから、一気に木刀を弾き飛ばし圧勝。

ふふん、奏者にも見せてやりたかったな！

次の相手は余も時々世話になる洋酒屋の息子のターナー。

セロよりもさらに強く、余も中々一撃を入れることができなかった。なんとかカウンターの要領でお手製の木刀をターナーの胸に叩きつけて、辛くも勝利することができた。

最後の相手はサンソン。

言うまでもなく、この村最強の剣の使い手である。

余とやつの試合は圧巻であったぞ！

なにしろ始まってから三十分たっても決着が着かなかったのだからな！

他の警備兵達もみな、余とサンソンの試合に酔っておった！

城で働いておる下男や下女までも仕事を忘れて、余の剣さばきに見とれておったのだからな！

ふ、きつとあの試合はこの先この村で語り継がれる、偉大な試合になったであろう！

余としても鼻が高い！

訓練が終わった後、城に行ってみるとハーメルンのやつが辛気臭い溜

息を吐いておった。  
どことなく疲れた顔をしておったが、なにやら悪いことでもあったのか？

そのあとはタクトのところに戻る前に、サンソンの家に寄っていった。

そしたらサンソンの父親から興味深いことを聞くことができた。  
……ふむ。

家に帰るとタクトが余のために料理を作って待っておった。  
ヘナーの店に行くようになってから、タクトはよく料理を作るようになった。

うむ、今日も美味だったぞ、奏者よ！

今日はよいことも聞けたし、タクトの手料理も食べることができた、実に良い一日であった！

……次は負けぬ  
ぞ、サンソン！

?

?

?

悪くない、むしろ良い！

315年8月9日

天気 一日中晴

れ 記録者 ネロ

今日はタクトともに一日中警備兵の訓練に参加しておった。

この間の襲撃のこともあって、皆いつも以上に気合が入っておった。タクトは剣の練習を始めて大体一カ月がたって、だいぶ上達した。

本人は気付いておらぬが、あれだけの腕あれば十分剣士として合格レベルだと余は思う。

ただ周りの警備兵に比べるとまだまだ腕が落ちるのは明らかであるし、余としても我が奏者にあの程度で満足してほしくはないので、あえて何も言わぬが。

それにしても、ハーメルと領主の様子がおかしい。

やはり何かあったのかもしれない。

?

?

?

星空に願いを。

315年8月30日

天気 曇り

記録者

拓斗

今日は訓練がなかったので、俺はカールの家に話を聞きに行った。ネロはなんだか用事があるらしく、いつしよには来なかった。

カールからはこの世界で使われる単位について詳しく教えてもらった。

ここで使われる長さの単位はキュビットといって、大体1キュビットが43センチから45センチくらいの長さ。

さらに10000キュビットは1ペンキュビットという長さになるらしい。

重さの単位はポンド。

たぶん1ポンドが0.5キログラムぐらいだと思う。

お金の単位は前に教えてもらったとおりセルとパーセルの二つで、1セルは100パーセルになる。

……覚えるぶんには覚えただけ、まだまだ感覚的には前のメートル法の方が馴染んでるな！。

夜になってネロが迎えに来てくれたから、おとなしく帰ることにした。

外に出てみると、夜空には満点の星空ときれいな二つの月が出ていた。

そのあまりの美しさに、俺とネロはカールの家から俺達の家に戻る

まですつと夜空を見ていた。

……こんな日がいつまでも続くといいな。

夜空を見上げながら、俺はネロの手を少し強く握ってそう思っていた。

？

？

？

不吉な予感。

315年9月1日

天気 晴れ

記録者 拓斗

今日、城から知らせが来た。  
なんでも、もうすぐこの領地に首都から騎士の一団が到着するらしい。

騎士を率いるのは首都の名門貴族、ヒュリチエル家の当主、ローネン・ヒュリチエル伯爵。

さらに代々ドラゴンライジャを輩出してきた名門貴族、ハルシユタイル家からドラゴンライジャとホワイトドラゴンまでやってくるらしい。

なんでも領主さまが国王に直々に頼んだらしい。

……… やってくる理由までは言わなかったが、騎士団だけじゃなくホワイトドラゴンまでこんなへんぴなところまでやって来て、おまけに領主さまがそれを頼んだということは、考えられる理由なんて一つしかない。

アムルタットを倒すためだ。

なにかが起ころ。  
そんな気がしてならない。

外伝 徒然なるままに（後書き）

というわけで外伝編第一弾、拓斗とネロの日常でした。

書いててなんだか楽しくなってきたちゃって、予定よりもかなり長くなっちゃったけど、まあ、問題なし！

次回も日常編。

ただし、タクトとネロではありません。

さて、誰でしょう？

外伝　夕日の中で（前）（前書き）

今回の話はプロローグ並みに長いです。  
読むときには注意を。



外伝 夕日の中で(前)

「それじゃあ、この子はもらっていきますね、兄さん？」

今、この部屋は小さな戦場と化している。

部屋の真ん中では少年と少女が対峙している。

彼らの前には命令に忠実に従う戦士がそれぞれ十六体ずつ揃っている。

……いや、揃っていたというべきか。

「や、止める！ そいつを取られたら俺は、俺は！」

最初十六体いた戦士の数は戦いが進むにつれ、その数を減らしていた。

特に少年の方の戦士はもう十体にも満たなかった。

「あはははは！ 勝負とは非情なものなんですよ、兄さん！」

少女が笑いながら自分の戦士に命令を出して、少年の戦士を打ち倒

す。

少年はそれを見て悲痛な叫び声を上げる。

「だ、だったらこれでどうだ！」

少年は戦士に指示を出して、最も近い位置にいた敵の戦士を倒す。

「かかりましたね？」

「な、なんだとっ！」

しかしその攻撃に少女は動揺するどころか、ニヤリと黒い笑顔を少年に向ける。

「王<sup>キング</sup>がフリーになっていきますよ！ わたしはこの子をこの位置に置きます！」

少女の号令で彼女の最強の戦士が少年の陣営を突破する。

「し、しまった!？」

少年が慌てて自分の戦士を陣に戻すが、時すでに遅し。

すでに少女の戦士は彼のどの戦士でも手の届かない場所にまで来ていた。

「これで終わりですっ！ チェックメイト！」

「く、くそ……！」

ついに少女の戦士が少年の王を追い詰め、少年は自分の負けを悟るしかなかった。

こうして、この部屋で行われた小さな戦争は少女の勝ちで幕を下ろした。

「くそ、もう一回勝負だ、椿！」

「嫌ですよ。わたしさっきから何回兄さんと打ったと思ってるんですか」

「くそっ！ だったら衛宮、お前がやれ！ なに一人で部屋の隅でうじうじしてるんだよ！ お前もチェス部の一員だろ！？」

「ああ、わかった、わかった。そんな怒鳴らなくても聞こえてるよ、勇二」

こうして俺も戦場に足を踏み入れることになった。

………といっても、ただのチェスの対戦のことなんだけどな。

？

？

？

ここは日本の地方都市、冬木市にある穂村原学園。  
学生の自主性を重んじる自由な校風が人気の私立高校で、俺が通っている学校でもある。

今、俺達がいるこの部屋は元々は学校の空き教室の一つだったのだが、顧問がわざわざ俺達チェス部のために理事長に頼んでチェス部の活動場所にしてくれたのだ。  
空き教室とはいっても普通の教室となら変わりがあるわけではないので、部員数三人という超弱小クラブである俺達が使うと少々もつたないことになっている。

「それじゃ、やるか、勇二」

俺はそう言っつて青い髪をした少年の前に座る。

「ああ。観念しろよ。ギタギタにされて泣いても知らないからな」

そう嫌味な調子で俺に話しかけてくる少年の名前は、まじゅうゆうじ間桐勇二。これでも俺の友人の一人で、数少ないチエス部の一員でもある。青色の珍しい髪をワックスで固めて、ギンギンに逆立てている。なんでそんな髪形をしているのか前に本人に聞いてみたら、なんでも勇二の髪は天パぎみで、何もしないとその髪色と合わさってワカメみたいな髪形になってしまい、それが嫌だかららしい。

どこか人を見下したような発言をすることが多いが、その実、筋の通らないことは嫌いで仲間思いな面もある。

「何を言っているんですか、兄さん？ 兄さんが衛宮先輩をギタギタに負かすことなんて、できるはずないじゃないですか」

「な、なんだと！」

「だつてそうでしょう？ 実力では衛宮先輩の方が圧倒的に上なんですから。……まあ、まぐれで兄さんが勝つことはあるかもしれませんが」

「つ、椿、おまえなあ……」

さつきから勇二に妙に攻撃的なことを言っている少女は間桐椿<sup>まとうしほき</sup>。  
俺と勇二より一つ年下の二年生で、彼女もチェス部の一員だ。

勇二のことを『兄さん』と呼んでるけど、実際はいとこの関係で本当の兄妹ではないと前に本人達から聞いたことがある。

ただ二人とも幼いころからよくいっしょに遊んでたから、なんとなく兄妹のような関係になっちゃったらしい。

椿は勇二とは違って少し赤みがあった黒い髪をしていて、それを肩まで伸ばしている。

純情そうなかなり可愛らしい顔をしているが、ただ、猫かぶっているというか、少し黒いというか………性格は少しいじわる気味だ。

「衛宮先輩？ なにか変なことを考えていませんか？」

「い、いや、別ににも考えてないぞ、椿」

「おい、何しゃべってるんだよ、衛宮！ さっさと始めるぞ！」

「あ、ああ。そうだな」

勇二に促されて、俺は慌ててチェス盤を見ると、勇二はすでに自分の歩兵<sup>ポーン</sup>を動かしていた。

それを見て、俺も意識を集中させる。

さて、始めますか。

俺も歩兵<sup>ポーン</sup>のコマを一つ前に進める。

勇二はそれを見て考え込むような表情になり、椿は近くでニコニコと笑いながら俺達の勝負を眺めている。  
まだ勝負は始まったばかり、どうなるかはわからない。

ちなみに、俺の名前は衛宮<sup>えみやたくし</sup>拓斗。  
一応このチェス部の主将を務めている。

?

?

?

「くそー！ また負けたー！」

「悪いな、勇二」

「だから言ったじゃないですか。兄さんより衛宮先輩の方が強いって」

絶叫する勇二を椿がおもしろそうに眺める。

俺はその光景に少し苦笑する。

結局、俺と勇二の対戦は俺の勝ちで幕が下りた。

勇二はこう見えて成績は常に学年のトップクラスだし、チエスもかなり上手い。

実際、さっきの対戦でも、勇二があそこで騎士ナイトを動かすというミスがなければ、俺もかなりまずかった。

「勇二。少し自分の方が有利になると、油断して周りが見えなくなるのがお前の悪い癖だな。勝負っていうのは、常に自分が負けるかもしれないと考えて全力でいくようにしないと、あっという間に相手に勝ちが転がり込んでしまうもんだぞ」

「くっ……、珍しく衛宮にしては饒舌じゃないか……。そんなに俺に勝ったのが嬉しいのかい？」

「兄さん、宮先輩はそんな人じゃありませんよ。でも、確かに珍しいことですよ。何かあったんですか、衛宮先輩？」

「いや、なんとなくだけど、このままだと勇二が足元をすくわれて、ひどい目を見るような気がして……」

「ああ、それはわかります！ わたし、絶対に兄さんは自分より格下だと思ってた人に手痛い反撃を食らって、失意のまま死ぬんじゃないかと思うんです！」

「余計な御世話だよ、二人とも！」



俺と椿の言葉に勇二はすっかり機嫌を悪くしてしまう。

「……………ちょっと、言いすぎちゃったかな？」

でも椿の言葉じゃないけど、本当にそんな死に方しそうなんだよな、勇二のやつ。

機嫌を悪くした勇二をどうなだめようか俺が考えていると、誰かがこの教室に入ってくるのが見えた。

「……………あら、みなさん、まだいらしたのですね」

扉を開けて静かに入ってきたのは、綺麗な銀髪が特徴の俺のクラスメイトだった。

「シリア？ 一体どうしたんだ？ ていうか、まだ帰っていなかったのか？」

「ええ。さっきまで藤村先生に英語の資料をまとめるのを手伝わされていたんです」

「そうか、大変だったんだな」

「まったくです。どうして私があのような雑用をしなくてはならなかったのか、まるで理解できません。ああいうのは柳洞華音じゅうどうかのんのような人の役割でしょうに」

「いや、華音は生徒会の仕事がいそがしいんだから、しかたないだろ」

不機嫌そうなシリアの様子に、俺は少し困りながらもちゃんと答える。

教室に入ってきた女子生徒の名前はシリア・オルテンシア。

勇二と同じく俺のクラスメイトで、今は俺の隣の席に座っている。

家は隣町の教会で、母親と二人でいっしょに住んでいるらしい。

見事な銀髪をしていて端正な顔つきも合わさって、何も言わなければまるで天使のように見える。

……………そう、何も言わなければだが……………。

俺がシリアのことを複雑な目で見てみると、シリアは小首をかしげて不思議そうに口を開いた。

「どうしたのですか、衛宮拓斗？ 私の可憐な姿を見て欲情でもしましたか？」

「シリア、例え冗談でもそういうことは言つな」

「いえ、冗談のつもりではなかったのですが？」

「やめる。本当に俺がそういう目でお前を見ていたみたいになるじやないか」

いつも通りのシリアの暴言を、俺は身震いしながらも軽く受け流す。

……シリアが口を開くときは大抵の場合、皮肉か暴言しか言わないので、いつしよに喋るときは本当に疲れる。

この学校に転校した最初のころは、彼女の言葉で何度心を切り裂かれたか……………。

もともと、今じゃもう俺もある程度は慣れちゃったけどな。

楽しそうなシリアを見て、俺は疲れて溜息をつく。  
するとシリアが入ってきてから、ずっと彼女を睨みつけていた椿がこっちにやってきた。

「あの、シリアさん？ 衛宮先輩に迷惑をかけるようなことはしないでくださいませんか？」

「あら、心外ですね。私はただ衛宮拓斗と普通に話していただけですよ」

「あなたはただ喋るだけで周りの人に迷惑をかけるんです。いい加

滅に自覚してくれませんか？」

「本当に失礼な人ですね。あなたこそ私の名前を呼ぶときに『先輩』という敬称をつけていないじゃないですか。上級生に対する敬意の気持ちがい足りないんじゃないのでは？」

「冗談は言わないでください。わたしが『先輩』と呼ぶのは衛宮先輩、ただ一人だけです。というより、あなたに対して敬意の気持ちなんて最初からもってません」

「あら、それはいけませんね。年長者に対する敬意のない人は社会で生きていけませんよ？神もこう申しています。『汝、親や目上の者に孝行せよ』と……」

「……………わたし、神学の知識はあまりないので自信はないんですけど、それって神様じゃなくて孔子とか、そのあたりの人の言葉ではありませんでしたっけ？」

「どちらも同じですよ。偉大な言葉は全て神が仰った言葉なのでから」

「あなた、本当にエセシスターなんですね……………」

……………怖い。

何が怖いって、さっきから顔は笑ってるのに目が笑っていない椿とシリアが怖い。

この二人は仲が悪い。

どれくらい悪いかっていうと、この二人のどちらかと話しているときに、もう片方の名前を出さだけで睨まれるくらいに。

でも、どうしてこんなに仲が悪いのかは、よくわからない。

勇二が言うには去年の二月ごろまでは特別仲が悪かったわけではな  
いらしい。

俺は、どことなくこの二人の顔つきが似ているせいなんかじゃない  
かって勝手に思ってる。

「おいおい、二人ともそれくらいにしろよ。正直、見ている俺らが  
一番めいわ  
」

「ちょっと黙ってくれませんか、兄さん？ 兄さんがしゃべると磯  
の匂いがして気持ち悪いんです」

「黙りなさい、間桐勇二。あなたが近くにいると海鮮物とワックス  
の匂いがいつしよにすんです。だからあっちに行きなさい、駄犬」

「……………」

ああ、勇二が燃え尽きたボクサーのようになってる……………。  
かわいそうに……………。

椿とシリアは教室の隅っこでメソメソと泣いてる勇二なんか目もく  
れないのか、まだ言い合いを続けていた。

「第一、チエス部の部員でもないあなたがどうしてここに來てるん

ですか！ 活動の邪魔なので今すぐ出て行って下さい！」

「拒否します。私がどこに行こうと、それは私の勝手です。後輩であるあなたに指示されるようないわれはありません」

そう言つて睨みあう椿とシリア。

なんとなく、教室の温度が二、三度下がった気がする。

だめだ……。

この冷たい空気を砕く度胸は俺にはない……………。  
だれか、だれか助けてくれ……………。

「部活動中に失礼する。衛宮はここに……………と、何だこの空気は？」

俺が勇二といっしょにブルブルと震えていると、教室のドアが開いてまた女子生徒が入ってきた。

「あ、柳洞会長……………」

「……………柳洞華音、何しに来たのですか？」

入ってきた人物を見て、さっきまで殺気を飛ばし合っていた二人が居心地悪そうに身をよじる。

「この空気の原因はお前達か、間桐妹、オルテンシア。……そう嫌そうな顔をするな、二人とも。私はただ藤村先生から衛宮への言伝を伝えに来ただけだ。用が済めばすぐにここからは去るつもりだよ」

「華音、俺に用なのか？」

「む、そんなところにいたのか。聞いていたかも知れんが、藤村先生からの伝言だ。『明日の放課後に職員室にいる私のところにくるように！』とのことだ」

「呼び出し？ しかも何で今日じゃなくて、明日の放課後なんだ？ 華音、何で呼び出したのか理由は言っただけか？」

「いや、言っただけ。残念ながら、藤村先生はお前の言伝を言ったあと、猛スピードで帰っていったからな。理由を聞く暇もなかった」

「相変わらずだな、藤村先生……………。まあ、それはともかくわざわざありがとうな、華音」

「別にお礼を言う必要はないさ。私はただ先生の命令を聞いただけだからな」

華音はそう言って、腕を組んで静かに微笑む。

柳洞華音。

俺のクラスメイトの一人で、現生徒会長を務めている。

女性らしい抜群のプロポーションに、男性のようなサバサバとした口調とクールな雰囲気。男子生徒からも女子生徒からも絶対的な支持を持つ。

成績は優秀で、言われたこと以上の結果を残すので先生からの信頼も厚い。

だからと言って冗談が通じないわけでも、融通が利かないわけでもないという、絵に描いたような完璧生徒だ。

転校してきた俺に最初に声をかけてきたのも彼女で、そのおかげで俺は早くクラスに馴染むことができた。

「ところで、その近くで真っ白になってる物体は間桐か？　なにかあったのか？」

「聞かないでやってくれ。こいつも大変なんだ……」

「そうか。まあ、大体の事情はわかるしな」

俺の言葉に華音は頷いて、椿とシリアの方をじろっつと見る。その視線に椿とシリアはわたわたと慌てだす。



「間桐妹。何度も言うが仮にも兄と言つのなら、もつと間桐のことを大切にしろ。それでなくても同じ身内で年長者なんだ。それではお前達の関係を知らない人から見たら、どう思われると思う？ お前一人が恥をかくだけなら自業自得だが、お前のことを女手一つで育ててきた母親にも迷惑がかかるんだぞ」

「ふみゆづつ……。う、ごめんなさい……………」

華音に叱られ、椿はさっきまでの勢いもすっかり失ってしょんぼりとする。

「オルテンシア、お前もだ。聖職者を務めるお前が人を諭すこともなく、後輩といがみ合つてどうする。それで他の無関係の人まで巻き込むなど、言語道断なことだ」

「く、仏教徒であるあなたに言われるゆわれはないのですが？」

シリアはさっきも言ったように教会に住んでいて、シスター見習いのようなこともやっているらしい。  
対する華音の家は柳洞寺という歴史のあるお寺で、彼女自身も厚く仏教を信仰している。

「確かに私は熱心な仏教徒だ。だが、仏教もキリスト教も人に迷惑をかけてはいけない宗教のはずだが？」

「うっ……………」

華音の正論にシリアはフラフラと後ずさる。

一応、自分達のいがみ合いが俺と勇二の迷惑になっているという自覚はあったようだ。

「ほら、二人とも。衛宮と間桐にちゃんと謝れ」

「衛宮先輩ごめんなさい……。兄さんも、すみません」

「……………」

「…………オルテンシア？」

「くっ、わかってますよ。……………迷惑をかけて、ごめんなさい」

華音に促され、頭を下げる二人。

「別にいいよ、二人とも。俺も別に怒ってたわけじゃ」

「ふ、ふん！ 謝ったぐらいで俺が許すとも思ったのか！？ 二人とも、何か罰が必要だと俺は思うんだよな！」

「……………勇二……………」

俺の言葉をさえぎるように、復活した勇二が生き生きと叫ぶ。

「ふむ、罰か。確かにこの二人には必要かもしれんな」

「「えっ!?!」」

「か、華音!?!」

勇二のとんでも発言に華音がまさかの賛成を表明する。  
椿とシリアの顔がみるみる内に青ざめていく。

「おっ、話がわかるじゃないか、柳洞!　じゃあ、罰の内容は二人とも俺の」

「というわけで、衛宮、罰の内容を考えてくれ」

「俺が!?!」

「おい、柳洞!　どういことだ!?!」

「当たり前だろ、バカ者。お前に考えさせたらどんなひどい内容になるかわからん。その点、衛宮なら何の心配もないからな」

華音の言葉に勇二はがっくりと膝をつき、椿とシリアは救われたよ  
うな顔になった。

「なあ、華音。これ絶対に考えなきゃいけないか？」

「当たり前だろ。人に迷惑をかけたら罰ぐらいは受けるものだ」

「うーん、だったら……………」

俺は目を閉じてしばらく考え込んでから、思いついた罰の内容を口にする。

「シリア、俺とチェスで戦ってもらおう」

「は？」

俺の言葉にシリアは目を丸くする。

他のみんなも俺の考えがよくわからず、首をかしげている。

「……………それが罰なのですか？」

「ああ」

俺の言葉にシリアはオロオロとします。

「私、チェスなんて上手くできないのですが……………。はっ、まさかそれが狙い！？ 私が手も足も出ずにボロボロになって泣く姿を

皆に晒し出すつもりなのですね。く、衛宮拓斗、相変わらず鬼畜です  
すね……………！」

「そんなわけなからう」

「うッ……………！」

顔を赤くして勝手に妄想していたシリアの頭を、華音が軽く拳骨で  
たたく。

俺は呆れながらも、シリアの勘違いを正す。

「違う、違う。シリアにチェスをやってもらうのはそんな理由じゃ  
ないよ」

「うう。だったらどういう意味があるのですか？」

「もちろん、ただ普通にチェスをやってもそれは罰じゃない。でも、  
さっきシリア自身も言ってたけど、俺とシリアとの間には明らかな  
実力差がある。俺は一応チェス部の主将だし、シリアは素人だから  
な。そこで、シリアは椿と相談しながらチェスを打ってもらう」

「えっ!？」

「わ、わたしですか!？」

「ああ、そうだ。そしたら少しはマシになるだろ？ もちろん、途  
中でまたケンカしただしたら、今度は勇二の罰を受けてもらう」

「わ、わかりました……………」

二人とも渋々、俺の言葉に頷く。

今回の騒動は、元々椿とシリアの中の悪さが原因だ。だっただら協力して同じことをやれば、少しはマシになるかもしれない。

もちろん、俺だってこれで二人が仲良くなるなんて思っていない。でも、これがきっかけで少しは二人の関係が改善してくれたら、俺は嬉しい。だっただら二人とも、俺の大切な友人なんだから。

「ほう、さすがは衛宮だ。おもしろいことを考えつく。どれ、私もこの対局を見学しようかな」

「柳洞会長、いいんですか？ 生徒会の仕事で忙しいんじゃない？」

「いや、今日の生徒会の仕事は終わっているからな。今日はもう自由時間なのさ」

心配そうな椿の言葉に華音は何でもないとように答えて、チェス盤の周りのイスに腰を下ろす。

勇二はぶつくさ言いながらも、やっぱり興味があるのかおとなしくしている。

シリアは溜息をつきながらも、覚悟を決めたのかこちらをキッと睨みつけてくる。

「なにをしているのです、衛宮拓斗？ 早く席に座りなさい。言っておきますが、やるならば私は負けるつもりはありませんよ」

「ふふ。衛宮先輩、残念ながらわたしもシリアさんと同じ意見です。覚悟して下さいね？」

「……ああ、わかってるよ。俺だって負けるつもりはない」

負けず嫌いな二人の迫力に少々気押されながらも、俺は気を引き締めて席に座る。

そして、史上初の樁とシリアの共同作業による対局が始まった。

？

？

？

「チェックメイトだ、二人とも」

「ま、参りました……………」

「うう、悔しいですー……………」

「はっ！ 結局、衛宮の勝ちかよ！」

「相変わらず、お前は強いな」

今度の対局も俺の勝利で終わった。

とはいえ、今度は勇二とやったときよりもさらに大変だった。

アドバースを出していた椿は正直勇二よりもずっと上手いし、シリアも椿が出さないような手を出して俺を慌てさせた。

「本当に衛宮はチェスが上手いな。昔どこかでやっていたのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……………」

悪気がないとわかっていても、華音の言葉に俺は閉口してしまった。

俺には過去の記憶がない。

厳密には過去の思い出と呼ばれるものがないのだ。

俺はこの時代の人間ではない。

およそ四十年以上に俺はこの世界で生を受け、この日本で暮らしていた。

だが、当時世界はテロや紛争が嵐のように起こっており、俺や家族



もそれに巻き込まれた。

死者 人以上の未曾有のテロ。

俺の家族や友人、他にもある有名な科学者もそれに巻き込まれて死んだらしい。

俺はなんとか生き残ることができたが、そのときのテロである脳症にかかって記憶を失ってしまった。

本来なら、そのままその脳症により命を落とすところだったが、冷<sup>コールドスリープ</sup>凍睡眠装置で眠りつき、三十年後のこの時代で医療手術を受け、なんとか俺は一命を取り留めた。

しかし、脳症が治っても一度失った記憶はもう戻って来なかった……。

このことを知っているのは、そのとき俺を手術してくれたNGOの人達と現在の家族だけだ。

「ん、どうした、衛宮？ 何か気に障ることも言ってしまったか？」

「い、いや。何でもないよ。ま、まあ、俺がチエスに強いのは、何というか、才能みたいなのところがあるんじゃないかな」

「ああ、その可能性あると思います。だって衛宮先輩の強さってちょっと普通じゃないんですもん」

話を变えるために俺が適当に言ったことに、椿が納得するようになり同意してくる。

……いや、本気で言ったんじゃないんだけど……。

「しかし、何でチェスなんだ？ お前のその実力なら将棋も同じように打つことができるだろうに」

「同感ですね。なぜ、わざわざチェス部を立ち上げたんですか、衛宮拓斗？」

実は、チェス部は元々あったクラブではなく、一カ月前に転校してきた俺が新しく作った部活なのだ。

いまだできてから半年も経ってない新興の部活なので、この部活の部員はさつきも言ったように俺を含めて三人しかない。

こんな無茶苦茶な部活が認められたのも、生徒会長である華音と顧問の葛木先生のおかげだ。

「確かに将棋もできないわけじゃないんだけど、なんだか将棋ってあまり好きじゃないんだよな」

「へえ、意外だね。お前にも嫌いなものがあつたのか」

「いや、嫌いってわけじゃないんだけど……。取った駒を自分の駒として使えるっていうあのルールがしっくりこなくて」

「わたしは好きですけど。だって一度盤上から消えた駒を自分が好きに使っていいなんておもしろいですし、何より戦略性が増えるじゃないですか」

「それは、そうなんだけど……………」

椿の言葉の通りなんだけど、俺はあのルールがやっぱり好きじゃないんだよな。

一度退場した駒がその後も盤の上にあるっていうのに違和感がある。

「タクトー！ いるー！？」

俺が物思いにふけっていると、本日二度目の来客があった。  
……って、あの声って、まさか……………。

「あっ、見つけた！ へへ……………、タクトー！」

「うっ！ い、イリス姉さん！？」

俺は、突然後ろから抱き付いてきた女性に驚いて声をかける。

「えへへ……………」

俺の背中にギュッと掴まりながら、その小柄な女性は幸せそうな声を上げていた。

「よう、拓斗！ 元気にしてるか？」

「み、美津留まで来たのか!？」

俺の言葉に学校一の美男子と称されるクラスメイトは、ハハハと楽しそうに笑っていた。

突然やってきたこの二人の名前は、俺にくっ付いている女性が衛宮イリスで、笑ってる男子生徒が美綴美津留<sup>みつりみづる</sup>。

イリス姉さんの方は名字からもわかるように俺の今の家族で、俺よりも一つ年が上のため俺の義姉になっている。

体は小柄で、髪は雪のようなきれいな白髪。

体が小さいせいかな年にあわず元気が有り余っていて、家では俺や養父の紫苑さんによく迷惑をかけている。

この間、穂村原学園を卒業したけど大学には進学しないで、今は紫苑さんといっしょにNGO活動をしている。

美津留は俺のクラスメイトで、友人。

強豪クラブ弓道部の主将で、毎日練習に後輩の世話、そして藤村先生の後始末と、毎日忙しそうにしている。

サラサラの茶髪にクールな表情が女生徒から人気を集め、今では穂村原学園一の美男子とまで呼ばれている。

そのためか、同じく女生徒からモデル勇二からは一方的に敵視されている。

ちなみに、美津留は和の文化を深く愛していて、家では和服を常に着ているらしい。

「何してるんですか、イリスさん！ 早く衛宮先輩から離れてください！」

「間桐椿の言う通りです、衛宮イリス！ 女性が男性と気安く触れ合っではいけません！」

「これくらい、いいじゃない。私とタクトは姉弟なのよ。これくらいのスキンシップは当たり前のことだと思っの」

「い、イリスさんと衛宮先輩は本当の姉弟じゃないじゃないですか！」

「仮に本当の姉弟でも、こ、恋人でもない男女が触れ合うことを神は許しておりません！」

「悪いけど、私は腹黒後輩キャラや腹黒シスターキャラに従うつもりはありませーん！ ……それに、タクトは私のものだもーん。ね、タクト」

「い、イリス姉さん。変な言い方をしないでくれ……。誤解される……………」

いまだに俺の背中にしがみ付いたまま離れようとしないうリス姉さんを、椿とシリアがなぜか焦ったように引き離そうとしている。さつき椿とシリアが仲が悪いと言ったが、もう少し詳しく言うと椿とシリアとイリス姉さんの三人の仲がとても悪いのだ。この三人が仲良くやっってる場面を俺は見たことがない。

「み、美津留、華音！ た、助けてくれー！」

俺は一抹の希望を託して、友人二名に助けを求める。しかし。

「お、柳洞じゃねーか。お前、生徒会の仕事はどうしたんだ？ 珍しくサボったのか？」

「そんなわけないだろ。もうとっくに今日の仕事は終わらせている。サボったのはお前の方なんじゃないか、弓道部主将さん？」

「なーに。今日は顧問のタイガーが早く帰りやがったからな。おかげでうちも早めに練習を切り上げたのさ。責任者がいないと万が一が起こった時に事だからな」

「なるほどな。そういえば藤村先生は早く帰っていたな」

「ところで、今度の週末おまえんちに行くからよろしく」

「なっ！ また来るのか、お前は！？ この間来たばかりだろう！」

「？」

「いや〜。一成師匠と和について熱く語りたくてね」

「くっ……。何でお前はそんなに父上と親しいんだ……………！」

だめだ、こつちの話が聞こえてない……………！！

「勇二、助けてくれないか！？」

「断るよ。残念ながら俺は馬に蹴られて死にたくないんだ」

勇二もニヤニヤと笑って、俺を助けてくれそうにない。

「いい加減離れなさい、この変態シスコン！」

「あーあー、きーこーえーなーいー」

「衛宮先輩も早くイリスさんを引きはがしてください！」

「そんなこと言われても、後ろにしがみ付かれるとしがみ付かれた本人がはがすのが難しいんだ！」

「へへーん！ タクトは何の関係もない同級生や後輩よりも、お姉ちゃんのほうが好きだもんね」

「何の話！？ イリス姉さん、それはどどういう意味で言ってるんだ！？」

「「衛宮先輩！」」  
タクト

「ぐわああああ！？」

プライドを傷つけられたのか、怒った二人の鋭い一撃で俺は意識を失った。

り、理不尽だ……………。

でも、一瞬見えた彼女達の目がうつすらと潤んでいたように見えたのは気のせいだったのだろうか？



外伝 夕日の中で(前) (後書き)

長くなりすぎたので、二つに分けます。

すでに後半も完成しているので、明日にでも投稿します。  
この話の詳しい話はそっちの後書きで。

外伝 夕日の中で(後)(前書き)

後編です。

やっぱり今回も長いです。

外伝 夕日の中で（後）

「痛たたたた………」

「染みますか？」

「い、いや大丈夫だよ、シリア。それよりも手当てしてくれて、ありがとうな」

「な、何を言ってるのですか。この傷は私のせいでした。ならば罪を償うために、手当てをするのは当たり前のことでしょう？」

「いや、本当にありがたいと思ってるよ。………他にも責任のあるはずの二人は俺なんて無視してケンカしてるし」

俺はシリアに包帯を巻かれながら、ケンカをしている椿とイリス姉さんを遠巻きに眺める。

実は普段の言動からはあまり想像できないが、シリアはとても優しい。

確かに色々とひどいことを言って相手の心をバツサリと斬り裂くことも多いが、自分の言葉で相手を本当に傷つけたりしたら、彼女は本気でその人に謝る。

彼女の言葉は悪意も含まれているが、基本的にはただの冗談の類と同じなのだ。

……中々そのことを理解できる人は少ないんだけどな。

「ところで、よく包帯なんて持ってたな。どこか怪我でもしたのか？」

「いえ。私は常に包帯を持ち歩いているので」

「常に!？」

「母が何かと役に立って便利だからいつも持っていたほうがいい、と言っているのです」

「ああ、なるほどな。確かに今日みたいに突然怪我したときには命を救うかもしれないもんな」

「ええ。他にも目隠しの代わりにもできますし、丈夫ですからロープの代わりに相手を縛りあげることでもできますしね。ああ、首を絞めるのに使えば護身用にも使えますね」

「……………」

楽しそうに話すシリアから思わず目をそらす。

……………なんだか、さっき優しいと思ったことを訂正したほうがいいのかもしい。

「まったく、あなた達は……！」

「う、ごめんなさーい……………」

「ふん！ なによ、ちょっと騒いだけじゃなーい！」

「ははは。懲りませんね、衛宮先輩も」

「ま、こっちに火の粉が飛ばなきゃ、楽しい見世物なんだけどな」

あっちから他のメンバーがぞろぞろと集まってきた。  
どうやらケンカは終わったらしい。

「はあー……………。衛宮先輩も少しは反省してくれ……………」

「ぶーぶー。何で後輩のあなたに私が叱られなきゃならないのよー」

溜息をつく華音の隣でイリス姉さんは頬を膨らます。

どうやら、うちのわがままお姫様は反省する気はゼロらしい。

「ていうか、今更だけど何でイリス姉さんが学校に来てるんだ？」

さっきも言ったけど、イリス姉さんは今年の三月にこの学校を無事に卒業しているから、本来ならここにいるはずがない。

「それはねー、退屈だったから、ミツル達でも鍛えてあげようかなー、って思って来たの」

そういえば、イリス姉さんは学生時代は弓道部の主将だったって聞いたことがあったな。

百発百中の腕前だったらしく、歴代弓道部第二位の実力者だったらしい。

「あとついでに、かわいいタクトの顔が見たくなったの」

「そつちが本命ですね……」

椿が重い溜息をつく。

俺もついでに溜息をついておく。

「話は変わるんだけどさ。この教室って少しほこり臭くないか？  
衛宮、間桐、ちゃんと掃除とかやってしてるのか？」

「あー……。そう言えばやってないな」

「俺がそんなめんどくさいことをすると思ってるの？」

美津留の言葉に俺と勇二はそれぞれ答える。

「掃除ですか……。確かにやっていませんでしたね」

「いけませんね、衛宮拓斗。掃除とは日常生活の根本をつかさどる大事な労働の一つです。それすらも満足におこなっていないのなら、いくら慈悲深い天の父でも罰を下さないとはいけなくなりますよ?」

「確かに実綴の言う通り、この教室は少しほこりっぱいな。掃除をした方がいいんじゃないか、衛宮?」

「もー、タクトったら!ちゃんと身の回りの整理整頓はちゃんとしなさいっていつもいっているでしょ!」

皆が次々と色んなことを言っている。

まあ、要約すると皆言っていることは『掃除しましょう』ってことなんだろうけど。

俺は腕まくりして、気合を入れる。

「だったらこれから掃除するか」

「そうですね。善は急げとも言いますし」

そう言っつて、教室のロッカーからほうきを持ってくる椿。

「ん? 椿、手伝ってくれるのか?」

「はい。元々ここは私達チエス部の活動場所ですから」

「そうだな。よし、みんな。これからチエス部でこの教室を掃除するから勇二以外はもう帰ってもいいよ。もしそれでも残るんだったら、掃除を手伝ってくれ」

「掃除ですか……。なら、私はお言葉に甘えさせてもらって、先に帰ります」

「私は残るぞ。乗りかかった船だ、手伝うとしよう」

「あつ、俺も残るぜ。元々ほこりっばいって言ったのは俺なんだしな」

「タクトー。お姉ちゃん、先に帰って夕飯の準備しとくねー」

俺の提案に皆、それぞれの答えを出す。

ただ、イリス姉さんとはかく、さつき労働がなんたらかんたら言ってたシリアも帰る気満々なんだな……………。

「ちょっと待ってくれよ、衛宮。ここは一つ賭けをしないか？」

そう言ってニヤニヤ笑っている勇二。

絶対になんかとんでもないことを考えてる顔だ。

椿も勇二を見て冷たい目をしてるし。



「賭け？」

「そう、賭けさ！ 今からお前と俺がチェスで対戦をして、負けたほうがこの教室を一人で掃除するんだ。当然、手伝いはなし！」

「そんなルールでいいのか？ こう言ったら何だけど、お前の方が不利なんじゃ……？」

「そんなことはどうでもいいだろ。で、やるの？ やらないの？」

「ま、まあ。お前がそれでいって言うんなら、いいけど……」

「言ったな！？ ならもう途中で止めるのはなしだからな！」

「別にいいけど……？」

俺がそう言うと、勇二はガッツポーズをして喜んでいた。

……？

何で勇二はこんな賭けを？

絶対に俺が勝つなんて言いきれないけど、どちらかと言ったら勇二の方が不利のはずだけど……？

だけど俺以外の皆はそう思っていないのか、皆一斉に溜息をつく。

「衛宮先輩、兄さんの言葉なんて無視したらいいのに……」

「神は時として善良な人にほど強い試練を課すものです……。がんばってください、衛宮拓斗」

「衛宮……。わかっているとは思いますが、お前は自分でその賭けに乗ったんだ。お前が負けても、私達は手伝うことはできんぞ？」

「お前ってさあ。本当に素直な奴だよ……。いい意味でも悪い意味でも」

「あーあ。タクトって本当に不器用なんだから」

え？

皆、俺が負ける方に一票？

「いや、まだ俺が負けるなんて決まってるじゃないだろ？」

「わかりますよ、それぐらい」

きっぱりと言い放つシリアに皆が頷く。

「はい。もしこれが普通の勝負なら、衛宮先輩が負けるはずがないんですが……」

「今回は賭けだもんね」

「だから、なんで賭けだと俺が負けるんだ？」

俺がそう言つと、みんなは顔を見合わせたあと一斉に口を開いた。

「……………だって、衛宮（先輩）（拓斗）（タクト）って運が悪い  
（）ですから（）（）からな（）（もの）」「」「」「」

……………結局、賭けに負けました。  
何で？

？

？

？

いつもの通学路を間桐勇二と従兄妹の間桐椿はいつしよに帰っていた。

二人はいつしよの家には住んでいないとはいえ、それぞれの家は比較的近くにあるため、女子高生を一人で帰らすのは危ないという親の意向で、こうしていつもいつしよに登下校をしているのだ。

ただ、一緒に帰っているとはいえ、それはとてもじゃないが仲睦まじいものとは言えないが。

「どうして兄さんはあんなバカな賭けを提案したんですか？ あの賭けさえなかったら私は今頃、兄さんなんかとかじゃなくて衛宮先輩といっしょに帰ってたかもしれないのに……………！」

「わ、悪かったって言うてるだろ！ 俺だって掃除なんかしたくなかったんだよ！」

「兄さんの意見なんてどうでもいいんです……………！ 大切なのは私と衛宮先輩のことだけなんですから！」

従妹の放つ黒いオーラに間桐勇二はタジタジと退く。

しばらくすると、ようやく許したのか、それとも単純に飽きただけなのか、間桐椿は視線を間桐勇二からそらす。

ようやく重度の殺気から解放された間桐勇二はホッと安堵のため息を漏らす。

ただ、その間も間桐椿は今度はここにはいないシリア・オルテンシアと衛宮イリスを呪いだしていたが。

「お前つてさ。本当に衛宮のことになると必死になるよな」

「当然です。好きな人を手に入れるためなら、乙女は黒くもなりま  
すし、敵役にもなるんです」

いつも通りの従妹の言葉に間桐勇二は深いため息をつく。

その仕草が気に障ったのか、間桐椿は従兄の顔をキツと睨みつける。

「……なんですか？」

「別に。ただ、あんまり気を張りすぎても逆に上手くいかなくなる  
と思っただけさ」

「………そんなことわかってます。でも、わたしは後悔だけ  
はしたくないんです。母さんみたいに後悔だけは………」

黙り込んでしまった従妹に間桐勇二は何も言わなかった。

しばらくして、間桐椿がポツリポツリと言葉を漏らす。

「……母さんは潔すぎたんです。好きな人をただ見ていただけで無  
理に手を伸ばそうとしなかった。もちろん、母さんなりに努力した  
のはわかってるんです。でも、それでもわたしは母さんがあまりに  
も消極的すぎた気がするんです……。母さんは名前のように美しく、  
でもあまりにも潔く散りすぎたんです」

「……」

「だから、わたしは絶対に後悔だけはしたくない。どんなに醜かったっていい。他の人からどんなに野次られたっていい。わたしは椿の花のように、最後までしぶとく、あきらめ悪く、醜く散りたい。それで、大切な人を手に入れられるなら……」

間桐椿は手を胸の前で合わせて、まるで祈るようにしながら一人独白する。

従妹のそんな一途な姿を見て間桐勇二は一瞬だけ優しく微笑み、すぐにそんな表情など消してどうでもよさそうな表情にする。

「はっ。おもしろいから俺はお前の恋路を遠くから眺めさせてもらうけど、まあ、せいぜい頑張るといいさ」

「……兄さんに言われるまでもありません。絶対にわたしは負けませんから」

「そうかい。ま、一応俺はお前を応援してやるよ。別に何をしてもないけどさ」

「相変わらず兄さんは役に立ちませんね」

不満そうな従妹の顔を見ながら間桐勇二は軽く笑った。

?

?

?

NO SIDE 2

「さて、夕飯の材料も買ってきたし、洗濯物も取り込んだ。あとはイリスとタクトが帰ってくる前に夕飯の準備を終わらせるだけだ」

台布巾でテーブルを拭き終わった三十代ほどの男は満足そうに頷いた。

「それにしても、あなたが死んでからもう十年以上経つんですね。月日が経つのは本当に早い」

その男、つまりこの家の現家主、衛宮紫苑えみやしおんはエプロンをつけながら、しみじみと語る。

そして、居間の端に置かれた仏壇を見る。

衛宮紫苑は元々日本の生まれではなかった。

シオンとはある中東のとある国で少年兵として幼いころから戦場で暮らし、そして家族の温かみ、命の尊さ、人の愛を知らずに生きていた。

しかし、ある日戦場で足を撃ち抜かれ死にゆこうとしていたときに、ある男に助けられた。

その男は世界の様々な戦場を渡り歩き、争いを止め、人々を救う『正義の味方』になるために行動していた。

シオンは今まで自分の考えたことのなかったその生き方に驚き、そして感動し、彼についていくことを決めた。

やがてシオンは彼の養子となり、衛宮紫苑の名前をもらった。

「でも、あなたはあまりにも急ぎすぎた。そしてあまりにも強欲すぎた。だからあんな結末になってしまったんでしょね……」

衛宮紫苑が今暮らすこの武家屋敷は元々彼が住んでいた家だった。それを彼の死後に譲り受けたのだ。

昔、彼が生きていたころは賑やかだったこの家も、今となってはめったに来客も来なくなつた。

「あなたが死んでから、私もN G Oの職員として様々な世界を渡り歩きました。でも、世界は相変わらずでしたよ。……ヨーロッパは西欧財閥の元でどうしようもない停滞におかれ、その他の地域はテロや紛争が止むことはない。正直、どうしようもありませんでした」

彼の失敗を生かし、衛宮紫苑はN G Oの活動で『正義の味方』に近づこうとした。



それは失敗ではなかったが、決して成功でもなかった。

「ですが、私はこの生活を続けるつもりです。私はまだ若く、時間がある。あなたのように生き急いで、あの子達に私のような思いを味わってほしくないから」

仏壇を見ながら、衛宮紫苑は軽く笑う。

夕飯を作るために握った包丁がさつきから一度も振るわれていないことには気づいていない。

「そういえば、言いましたっけ。イリスが私の所属するNGOに入ってくれたんですよ。あのがままなお姫様が見ず知らずの人のために働くって言ったんです。信じられますか？」

衛宮イリスは衛宮紫苑と同じように彼の養子だった。

そのため二人の関係は戸籍上は義兄妹なのだが、二人の年齢差から実質は親子のように二人は暮らしていた。

「あなたにイリスの世話を頼まれたときは、どうしようかと思いましたがよ。当時はまだ私も十代前半でしたし、イリスにいたっては生まれたての赤ん坊でしたからね。でも、断ろうとは思いませんでした。やっぱり、あの子があの子の娘だったからでしょうね……」

衛宮紫苑はどこか痛みをこらえるような顔して、手に持っていた包

丁をギュツと握りしめた。

衛宮イリスの母親は元々体があまり強くなく、衛宮イリスを出産するのと引き換えに亡くなつた。

父親が誰だつたかを明言する前に母親が亡くなつたため、生まれたばかりの衛宮イリスは母親と懇意にしていた彼の元に引き取られた。しかし、当時の彼は『正義の味方』として最も忙しい時期であったために家に帰ることは少なく、結果として衛宮イリスは衛宮紫苑のもとで育てられたのだつた。

「私やあなたの生き方を見てきたせい、あの子はあまり他人を思うことが少なかった。なのに、結局最後はまた私達の生き方に戻ってきた。それは幼いころから私達の考えを聞きながら育つたせいなのか……。それとも、やはり血というものは裏切れないという事なのかもしれませんね。……あなたは、どう思いますか？」

そう言つて、衛宮紫苑は仏壇の方を無言で見る。  
しばらく見続けた後に、首を振つて静かに微笑んだ。

「いえ、違いますね。きっとあの子を変えたのはタクトです。私とイリスの大事な新しい家族。彼がきつとあまり人を信じようとしなかつたあの子を変えてくれたんです」

衛宮紫苑は天井を見上げる。

「彼を救ったのは厳密には私ではありません。眠り続けていた彼の存在を私は知りませんでした。私に彼のことを教えてくれたのは彼女でした。……………彼女のことは話しましたっけ？ 魔術師<sup>ウィザード</sup>としてテロ活動を行っているのに、優しい少女だった彼女ですよ。彼女とは妙に腐れ縁が続いて、なんだかいつの間にか友人のような関係になっってしまったんですよね。いやー、不思議なことですよ」

首を振りながら、衛宮紫苑は軽く笑う。

人を救うNGOの職員と人を傷つけるテロ屋の魔術師<sup>ウィザード</sup>との間に生まれた奇妙な友人関係をおもしろがるかのように。

「でも、そんな彼女が戦場でなく、この家に乗り込んで来た時は何があっただらうって思いましたね。おまけにいつも弱い所を見せない彼女が必死な表情で私に助けを求めてきたときには、世界が終るんじゃないかと思ってしまいました」

日本にまで来た彼女は衛宮紫苑に拓斗の存在を知らせた。

彼女は拓斗を助け出そうとしていたが、身内にいい医者がおらず、衛宮紫苑の人脈を使って、名医を連れてきてもらおうと思ったのだ。そして、拓斗は長い眠りから目覚めたのだ。

「実はタクトの手術をしているときに、彼の心臓が一回止まったんですよ。電気ショックや心臓マッサージをしても動かなかったので、私も医者達も諦めかけましたね。そこで彼女がタクトの胸を思いっきり殴って心臓が動き始めたときには、もう奇跡だと思いましたね」

『借りは返したわよ』

あ の とき、彼女が言った言葉がいまだに衛宮紫苑には理解できなかった。

なぜ、他人と慣れ合うことを嫌う彼女があそこまで必死になって拓斗を助けようとしたのか、その理由を衛宮紫苑は聞くことができなかったのだ。

「それにしても、彼女はどこに行っただんでしょうか？ せっかく助けたのにタクトが目覚める前にどこかに行ってしまうし……。大丈夫だとは思いますが、少しだけ、心配ですね」

そう呟いて、衛宮紫苑は外を眺める。

外はそろそろ日が沈みそうになっていた。

？

？

？

「よ、ようやく終わった……」

疲れ切った俺はきれいにした机の上で伸びていた。

勇二との賭けに負けて教室の掃除をやることになった俺は、皆が帰った後も一人で掃除をしていた。

ほうきで床をはいて、濡れぞうきんで机の上や窓ガラスを拭き、集めたほこりをゴミ箱に捨てる……。

さすがに教室一つを一人で掃除するのはとても骨が折れた。

「さて、帰るか。イリス姉さんも紫苑さんも待つてるだろうし」

自分のカバンを持って俺は教室を出る。

窓から外を見ると、夕方の空は真っ赤に染まっていた。

「ん？ 何だ？」

廊下を歩いてると、階段の上の方から何やら物音が聞こえた。

チエス部の活動場所の教室は校舎の三階にあり、穂村原学園にはこれ以上上の階は存在しない。

だから、上に続く階段から物音が聞こえたということは、屋上に誰がいるということだ。

「先生の誰かか？ いや、でもこんな時間に何の用だ？」

俺は上り階段をじつと見つめる。

屋上は生徒の立ち入りが禁止されているため、俺も行ってみたことがない。

そんなところで誰が何をしているんだらうか？

俺はしばらく迷ったあと、好奇心に負けて階段を登ってみた。

そんなに高くない階段を登りきると、そこには屋上に入るための扉がそっけなくあるだけだった。

俺は息をのんでドアノブを触ってみると鍵は掛かっておらず、簡単に回すことができた。

恐る恐るドアを開けて、屋上に入ってみる。

「ま、眩し……………って、えっ……………?」

屋上に入ると強烈な夕日の光が目飛び込んできた。

初めて入った屋上は夕日に照らされて、どこも真っ赤に染まっていた。

だけどそれよりも俺の目に焼き付いたのは、屋上にいた一人の少女だった。

少女はこの学校の生徒じゃないのか、燃えるような赤色の服を着て、屋上のはしに堂々と立っていた。

残念ながら少女は俺に背を向けて学校の外の光景を見ているため、よくわからないが、年は俺と変わらない高校生ぐらいに見える。けれども、それより俺の目を引いたのは彼女の金色の髪だった。ツインテールにしている彼女のみごとな金髪は夕日の光を存分に浴びて、まるで燃えているかのように輝いていた。

なんだかひどく非現実的な、幻想の世界に入ってしまったようだった。

「この風景を見ていると懐かしい気持ちになるわね。私と彼が最後にゆっくり話した時も、こんなみごとな夕日だった」

突然、少女が話し出したため、俺は驚いて息をのんだ。

だけど、彼女の言葉はただのひとり言だったのか、俺に背を向けたまま話を続ける。

どうやら俺が屋上に入ってきたのに気づいていないようだ。

「でも、少しだけ残念ね。こんな見事な夕日、めったに見ることはできないわ。……どうせなら今日じゃなくて、明日見せてくれたらよかったのに」

少女はそこで軽くため息をついて、首を横に振った。

「いいえ、そこまで言うのは贅沢ね。二度と会えないと思ってた人

にまた会えるんだもの。それだけで十分よね。……さて、下見も終わったしそろそろ帰りますか。本当はもうちょっとこの夕日を見ていたかったけど、やることも色々あるしね」

そう言っつて少女は軽く伸びをしてから、こちらを向いた。

俺はとっさに反応することもできずに、馬鹿みたいに突っ立っていることしかできなかった。

「へ……?」

やっぱり俺に気づいていなかったのか、少女のきれいな蒼眼が俺を見て丸くなる。

「嘘……?」

椿やシリアと比べても見劣りをしないきれいな顔が、驚きの表情でいっぱいになる。

俺は何も言えずに、彼女を見ることしかできなかった。

「ど、どうして、あなたがここに……?」

「いや、その、誰かが屋上にいたから気になって……」



俺は彼女のセリフに若干の違和感を感じながらも、なんとか答える。

「あなたって人は、相変わらず予測のつかないことをするのね。私の思い通りにならないっていうか……。ああ、もう！ そんないきなり現れても私も心の準備ができてないわよ……。！」

彼女は俺の言葉を聞いて、呆れたような、でもどこか泣きそうな表情をしながらぽつりと言葉を漏らす。

「あの……。失礼だけど、俺って君と会ったことがあったかな？」

彼女の言葉に俺への親愛の情が含まれているような気がして、俺はそう問いかける。

「……。いいえ。あなたと私は初対面よ。会ったことは、ないわ」

彼女は俺の問いにどこか悲しそうに答える。

でも気分を切り替えたのか、すぐにそんな表情を消して俺の顔をじっと見つめる。

「な、なに……。？」

「あなた、名前は何て言うの？」

「俺の名前？ え、衛宮拓斗だけど……」

突然の彼女の問いに俺はすぐに答える。

彼女はそう、と言っただけでじつと俺を見続けている。

「き、君の名前は何て言うんだ？」

俺はその視線に耐えきれなくなって、思わず彼女にそう尋ねる。

「私の名前？」

彼女は眼をパチクリとさせたあと、嬉しそうに微笑む。

「私の名前は遠坂凜。今度、ていつか明日からこの学校に転校してくる予定なの」

遠坂凜の言葉を聞いて俺もようやく納得した。  
きっと、彼女はこの学校の下見に来ていたのだろう。  
明日から自分の通うことになるこの学校の。

「そうだったのか。俺は今三年生なんだけど、遠坂は？」

「凜でいいわよ、拓斗。……私も三年生よ」

「そうか。だったら凜と一緒にクラスになるかもしれないんだな」

「ええ、そうね」

そう言いながら凜はニヤリと面白そうに笑った。

………なんだろう、なんだか悪寒を感じただけど………？

凜は髪をかき上げながら、また俺の顔をじっと見つめる。  
その顔はさっきとは違い、ひどく真面目なものだった。

「……………久しぶり、拓斗」

「ん？ 何て言ったんだ、凜？ 悪いけど、聞こえなかったらもう  
一回言ってくれないか？」

小声でつぶやいた凜に俺がそう聞くと、凜は少しだけ寂しそうに顔を振ってから、勝気な笑みを浮かべて俺に向かって手を伸ばす。

「はじめまして。これからよろしくね、衛宮拓斗、って言ったのよ」

「……そっか。うん、俺からもよろしく、凜」

俺は別に何も言わないで、ただ凜と同じように手を伸ばす。  
きれいな夕日を浴びながら、俺と凜は握手を交わした。

外伝 夕日の中で（後）（後書き）

長かった……。

今回の話、あくまで外伝だからそこまで長くするつもりはなかったのに、いつのまにか書くのが止まらなくなって、こんなことになってしまっていた。

もう少し上手くまとめべきですね、反省。

今回の話は主人公のオリジナル、衛宮拓斗の日常でした。

この話は最初から書くことが決まっていたので、無事に書き終えてほっとしています。

ただし、今回の話はあくまで外伝なので、この話を連載する気はまったくありません。

外伝としてこの話の続きを書くことも、今のところ予定にはありません。

ただ、ちょっととした設定ぐらいは載せることもあるかもしれません。書きたくないわけじゃないんですけどね。

本編優先。

ま、それはともかく。

前の後書きで外伝編は三話と言っていたのですが、外伝編はあと一話続きます。

何度も言っていたように、この話が予定外に二話構成になってしまったせいで予定が狂ってしまいました……。

本当に反省。

とうわけで、外伝編は次の話で終わります。

今回の話は外伝というよりも、特別編に近いんですけどね。

ネロ（以下、ネ）「む？ 何だ、このFate/another side saga TIMESなるものは？」

カール（以下、カ）「どうやら、この小説の原作に付いていた付録DRAGON RAJA TIMESを模して作られた特別編のようですよ、クラウドイウス嬢」

フチ（以下、フ）「ああ、五巻から付いていたあれか。ていうことはこの話は座談会とか、アフタートークとかそういったことをやるのかな？」

カ「うむ。おそらくネドバルくんの考えが当たっているだろうな」

拓斗（以下、拓）「……ていうか、普通に俺達が『小説』とか『原作』とかの言葉を使っていいのか？」

フ「問題ないんじゃないか？ DRAGON RAJA TIME Sもそんな感じだったし」

ネ「この話はいくまでフィクションだ。本編の人物や団体、事件とは何の関係もないぞ。……たぶん」

拓「たぶんなんだ!？」

フ「で、結局この話って何をするコーナーなんだ？」

カ「渡されたメモによると、今ここにいるわれわれ四人とゲストが雑談する話らしい」

拓「ゲスト？」

カ「ああ。この特別編の詳しい話は今日のゲストが説明してくれるようだな」

ネ「ならばそのゲストとやらを早速呼ぶとするか」

カ「慌てなくても、もう来ているようですよ」

フ「なあ、タクト。ゲストっていったい誰が来ると思う？」

拓「そうだな。普通に考えたらジェミニかサンソンじゃないか？ただ、あの二人は説明役には不向きな気がするから、意外と領主さまやハーメル執事の可能性もあるけど。ああ、めがみの可能性もあるかな？」

フ「ま、そんなところだろうか」

メガネオオカミ（以下、メ）「はじめまして、みなさん。作者のメガネオオカミです」

フ、拓「お前かよ！？」

メ「どうしたんだ、二人とも？ おれがゲストなのがそんなに嫌か

？」

フ「いや、嫌というか……」

拓「予想外の人選に少し驚いてるだけ……」

ネ「それで、作者よ。今回の話で余達は何をすればよいのだ？」

メ「最初にカールが言った通り、基本はただの雑談だよ。もう少し詳しく言うと、F A S T I M E S は三部構成で、一部はゲストの紹介と今回の章についての雑談。二部は質問の回答と、裏話。三部は次の章の予告って感じになる予定」

ネ「F A S T I M E S とはなんだ？」

メ「タイトルの F a t e / a n o t h e r s i d e s a g a T I M E S が長すぎるから、その略称」

拓「待ってくれ。今気づいたんだけど、タイトルに v o l . 0 1 で付いてるってことは、この話って続くのか!？」

メ「うん。各章が終わるたびに書くつもりだよ」

フ「ただでさえ更新が遅いうえに、最近はバイトまで始めたくせに、そんなことして大丈夫なのかよ？」

メ「まあ、大丈夫だと思うよ？」

拓、ネ、フ「……(大丈夫なのか……!?)」「」



カ「ま、まあ、三人とも。気を取り直して第零章について話そうじゃないか」

拓「それもそうか。とりあえず、今回の第零章はこの小説の二つの原作、『Fate/EXTRA』と『ドラゴンライジャ』を結び付ける章だったな」

ネ「うむ。消滅寸前の余とタクトをめぐみがこの世界に連れて行ったのが始まりであったな」

拓「結局、めぐみの真意は謎のままだったけどな」

フ「でも今回の章だと、おれの出番が全然ないんだよ……」

拓「いや、まあ、そう落ち込むなよ。フチはこれからほとんど出るからいいんじゃないか？」

カ「話を変えるが、今回の章で重要な点は、やはり私や兄上に近衛くんの正体を話したことだろうな」

ネ「うむ、そうであろうな。正直、余も驚いておる。まさかタクトが全て話してしまうとはな」

拓「領主さまには嘘をつきたくなかったからな。この人には話しても大丈夫っていう思いもあったし」

メ「作者としても、最初は正体をばらすつもりはなかったんですよ。ただ、それだとあまりにも拓斗とネロがあの世界に溶け込むのが難しくなりそうだったから、あの展開にしたんです」

フ「それと個人的に言いたい重要な点は、タクトのネロへの呼び方が変わったことだと、おれは思うんだ」

拓「ふ、フチ!？」

メ「ああ、確かに……。それまでずっと拓斗ってネロのことをセイバー、セイバーって呼んでたからね。当然おれも『セイバー』って小説中で書いていたから、いざ『ネロ』って書いてみると、ものすごい違和感。これで、いいのか!? って思ってしまったねー」

ネ「むっ……」

メ「でも、今ではすっかりおれの中でも定着しちゃって。この小説を書いているとき以外でもネロって呼んじゃうんだよね。おかげでEXTRAの話をしているときに、『やっぱり、ネロは寂しがり屋だと思っただよね』っておれが言ったら、『えっ、ネロって赤セイバーのことだっけ? 一瞬誰だかわからなかった!』っていう風に突っ込まれたんだよね」

メ以外の全員「……はははは……」「」「」

?

?

?

カ「では次は、質問の回答と裏話に移るとしようかな」

ネ「むう？　裏話はわかるが、質問の回答というのは何なのだ？」

メ「質問の回答っていうのは、文字通り送られてきた質問へ答えることだよ」

拓「送られてきた質問？」

メ「他ユーザーさん方から送られてきた質問」

拓「え、こんな小説に質問がきてるのか！？」

メ「いいや。一個も来ていないよ」

メ以外の全員「「「ええー……………」」」

メ「まあ、これはあくまでオマケみたいなものだからね。基本は裏話が主になっているはずだよ」

フ「つまり、もし質問が来たらこのコーナーで返事をするってことか？」

メ「そういうことだね。ま、今回はまったく関係ないから君達の質問におれが答えて、それを裏話にさせてもらうね」

ネ「むう、話がコロコロと変わってわかりづらいが、要するに今日は余達がそなたに質問をすればよいのだな？」

メ「そゆこと」

フ「面白そうだな。だったらオレから質問させてもらうぜ。質問1、どうしてドラゴンライジャとFate/EXTRAをクロスさせる気になったんだ？ 共通する点なんてほとんどないだろ」

カ「ふむ、確かにネドバルくんの言う通りだな。実際送られてきた感想でも、世界観がまるで違うのにどうやってクロスするつもりだ？ という感想もあつたくらいだからな」

ネ「というか、お主らの原作の二次創作自体がこの小説ぐらいしかないらしいからな」

カ「それはしかたのないことでしょう、クラウディウス嬢。ライトノベルやアニメ化された作品ならまだしも。ただの海外小説を二次創作することはそうそうないことです。需要があるかもわかりませんしね」

メ「名作だけどね、ドラゴンライジャ」

拓「で、結局なんでクロスしたんだ？」

メ「EXTRAをプレイしたときに、この作品の二次創作小説が書きたい！ っていう衝動が始まりだったね」

ネ「それで、なぜ作った作品がドラゴンライジャとのクロスだったのだ？」

メ「えーっと。理由は大きく分けると二つ。まずは純粹に作者であ

るおれが、ドラゴンライジャが大好きだったっていうこと。前々からこの作品に何か別の作品をからませたいなって思ってたから、都合がよかつたんだよね。もう一つはこれからの本編のネタばれになるからナイシヨ」

カ「ではこの質問はこれくらいにしましょうか。次は誰が質問しますか？」

ネ「余がいくとしよう！」

カ「クラウドイウス嬢ですか。では、よろしく願いします」

ネ「うむ、任せるがいい。質問2だ！我が奏者の名前はどつやつて決めたのだ？何か美しい由来でもあるのか？」

フ「えーっと、タクトの名前はタクト・コノエだったよな？」

拓「元の世界では近衛拓斗になるんだけどな」

メ「もちろんちゃんと意味はありますよ。まず、拓斗の名前はこの小説のためにわざわざ作ったんじゃないかって、元々おれのEXTRAの四週目主人公の名前として出していたんだよね」

拓「つまり、聖杯戦争中の俺ってことだな」

メ「うん、そのとおり。ゲームで消滅した近衛拓斗がエンディングぎりぎりのところで分岐したっていう、どうでもいいおれの脳内設定。……で肝心の名前の由来、ていうか意味なんだけど。まず名字の『近衛』は、Fate/stay nightの主人公、衛宮士郎の名字『衛宮』との対比のつもり。大勢の人を救うという正義の

味方を目指す士朗の名字が、都や町のような不特定多数の人の住む大きな場所全体を護ろうとしている『衛宮』なら。自分や近い者を守るために戦った拓斗の名字は『近衛』っていうことで、名付けたんだよね」

ネ「タクトの名前だけならともかく、そのシロウとやらの名字の意味まで勝手に作るのはまずいのではないか？」

メ「もちろん、これはあくまでイメージの問題。だから、拓斗の名字にはこういうイメージがあるんだよ、ぐらいでいいんだよね」

フ「だったら名前の方はどういう意味なんだ？」

メ「まあ、これもそのまんま。演奏に使う指揮棒タクトと、『何も無い所からでも自分の運命を切り拓く者』っていう意味をかけ合わせているだけ。……これくらいでいいかな、ネロ？」

ネ「うむ、ご苦労だったな、作者よ。タクトの名前の由来を知れて、余は満足だ！ ……ところで作者よ、物は相談なんだが。余も知らないタクトの秘密などがあればぜひ教えてほしいのだが……」

拓「そ、それじゃあ次は俺が質問するか！ 質問3、めがみって結局何者なんだ？」

メ「それは教えられないはずないだろう？ 彼女はある意味では最重要人物なんだから。本編でもまだまだ登場する予定なんだから、そのときに彼女自身から教えてもらいなさい」

カ「それはネオオカ嬢がストーリーに絡んでくるという意味ですか？」

メ「ノーコメント！……………ただ、それじゃああまりにも不親切だから、今教えられる秘密を一つだけ。彼女はただFate/EXTRAとドラゴンライジャをクロスさせるために作られた適当なキヤラじゃないってことぐらいかな」

拓「……………わかった、めがみの正体は本編でめがみ自身から聞くことにするよ。それじゃあ、代わりにもう一つ質問。質問4、なんだかヘルタントの描写が妙に少ない気がするんだけど、それはなんで？」

ネ「ん？ それは作者の技術が低いせいだからなのではないか？」

メ「……………それも否定しないけど、原作でもヘルタントの描写はそんなに多くないんだ」

フ「ああ、確かにな。原作のドラゴンライジャではオレが語り手だから、ずっと暮らしていた故郷のヘルタントはあんまり説明してないんだよな」

メ「フチにとっては当たり前の光景だからね。だから詳しく書くにはあまりにも漠然としていたから、ヘルタントを書くときにはほとんどぼかして書いてるんだよね」

拓「なるほどな」

カ「では次は私が。質問5、明言されていませんでしたが、コノエくんがEXTRA本編でたどったルートは遠坂嬢ルートでよろしいのですか？」

メ「うん。まあ、読んだらすぐわかると思うけどね。プロローグで

も凜にメールを送っていたし。外伝でも出てきていたしね。まあ、  
極論でいえば、この小説事態は凜ルートでもラニルートでもそんな  
に関係ないしね」

ネ「む……。その凜ルートやラニルートという呼び方は、なんだか  
おもしろくないな」

拓「あまり気にするなよ、ネロ。俺が大切に思っているのはお前  
人だから」

ネ「っ！……………ば、莫迦者！　そういう恥ずかしいセリフを普通に  
話すでない！　お、思わず抱きしめそうになったではないか……………！」

カ「二人とも仲が良くていいことだな」

フ「近くで見せつけられると、結構辛いときもあるけどな……………」

メ「ま、これくらいは、あの辛い聖杯戦争を生き残った二人へのこ  
褒美ってことで」

カ「ふむ、二人の勇気と美貌を受け継ぐ2世は、ネドバルくとス  
マインターグ嬢の方よりも、コノエくんとクラウディウス嬢の方が、  
早くおがむことができそうかな」

フ「カアアアル！」



?

?

?

カ「長いようで短かったこの特別編ももうすぐ終わりのようだな」

フ「最後は次回の予告だったけ」

メ「うん。次回からはドラゴンライジャのストーリーに合流するか  
ら、みんなそのつもりだね」

拓「そういえばヘルタントにホワイトドラゴンが到着するんだよな」

ネ「ドラゴンだけでなく騎士も大勢来るようだぞ。やはり、タクト  
の読み通りアムルタット征伐のためか？」

フ「ついにあのくそつたれなアムルタットに引導を渡す日が来たん  
だ！」

カ「ふむ、あまり穏やかな雰囲気ではなさそうだな。私の聞いた話  
では、コノエくんとクラウディウス嬢は重要な話がある人物から聞  
くことになるようだぞ」

拓「重要な話？」

カ「ネドバルくんにも今後の人生を左右するような事件がおこるら  
しい」

フ「そうなのか!？」

カ「だが、どうやらそれは私も例外ではないらしい……」

メ「あんまり、暗い空気にしないで！　いよいよストーリーが始まるんだよ!？」

ネ「そうだぞ、奏者よ！　そのような暗い気持ちでは余は楽しくないぞ!！」

拓「そんなこと言われてもな……」

メ「ええーい！　とにかく、いよいよ次回からは拓斗達の『魔法の秋』が始まります！　読んでくださっているみなさん、楽しみにしててください!！」

ネ「楽しみに待つがよい!！」

特別編 Fate/another side saga TIMES Vol

本編でも言いましたが、バイトが始まったので今後はさらに更新が遅れるかもしれません。

なるべく遅れないように努力しますが……………。

それはともかく、外伝編第三段ならぬ特別編、Fate/another side saga TIMES Vol.01でした。  
次回からは第一章に入ります。

？

？

？

……よって、これらの例からもわかるように、ドラゴンライジャとドラゴンの関係を、人間社会における主従の関係と同じものだと解釈すると、多くの混乱が生じる。ドラゴンライジャがドラゴンにむかって「私の忠実なる友よ」と呼びかけることがあるが、これは国王が家臣にたいしておこなう呼びかけと同じものだと考えてはならぬのだ。だが、ドラゴンライジャの不明瞭な態度が原因で、多くの者が「ドラゴンライジャとドラゴンの関係は主従の関係」だと錯覚している。このドラゴンライジャの不明瞭な態度は、のちに彼ら自身に災いし、バイサス王国にとっても災いとなる……

トロメニ・ア

ツプシリンガー

？

？

？

その姿は俺からして見ても、圧巻の一言だった。

その巨大な姿は頭から胴体だけで、おおよそ90メートルほど。しっぽまで含めたらゆづに100メートルを超えるだろう。ただ大きいだけでなく、その体のバランスも美しい。

頭から首、胴体、しっぽがそれぞれほとんど同じ長さになっていて、均等が取れている。

背中の翼は、今はたたまれているため見る事ができないが、それも体との芸術的なバランスを描いているのは想像するのに難しくない。

だが、なによりもその生物が他の生き物と違うのは、その美しさだと俺は思った。

これほどの巨体なのに、その生物は動いているときにそれほど物音を立てず、気品すら感じることが出来る。

日の光を浴びた巨大な体は剣のように真っ直ぐにそそり立っていて、かの太陽の騎士のように真っ白に輝いている。

ホワイトドラゴンがついにヘルタントに到着した。

「あつ、ドラゴンよ。本物のホワイトドラゴンよ。きゃあ、かっこいい！」

「うむ、あれにはさすがの余でも感嘆を漏らさずにはいられないな！

見よ、タクトよ！ あれ美しくも凛々しい姿……………あれもまた

一種の芸術だと余は認めてもよいと思うのだ！」

雄々しいホワイトドラゴンの姿に、隣にいるジェミニとネロがはしゃいでいる。

……………でも、なんとなくおもしろくないかな。

「ふんつ。まっ白って言えば、月夜の晩にへびを踏んづけたときのおまえの顔とおんなじくらい、まっ白だな」

「きゃあっ！ フチったら、タクトやネロもいるのにその話をしないでよ！」

フチも俺と同じような気持ちだったのか、急にジエミニをからかいだした。

ジエミニは目を吊り上げてフチを睨みつけていたが、当の本人は知らないふりをして笑っている。

「相変わらず、素直じゃないな、フチのやつ」

「まったくよな」

俺とネロは若干呆れながら、いつも通りの友人達の掛け合いを眺める。

それにしても、本当にあのドラゴンの姿はある種の驚嘆の思いを抱かされる。

畏怖の念とでも呼べばいいのだろうか？

恐ろしい程の強さの中に、人を引き付ける魅力がある。

「フチ、タクト、ネロ。見て、見て！ あの子がドラゴンライジャよー！」

でも、だからこそ、そのドラゴンの隣を白馬に乗って付き添う小さな少年の姿には違和感を覚えた。

ドラゴンラージャ。

この世界で知った様々なことの中でも、最も俺の印象に残ったもの。人とドラゴンを結び付ける象徴。

ドラゴンの誠実な友であり、首輪のような存在。

あの白馬に乗った小さな子供が、そうだというのか。

「ドラゴンラージャさまなら、ドラゴンに食われる心配もないだろうが、あの馬は本当に不運なやつだな」

俺が少年をじっと見てみると、フチが突然話しかけてきた。

「どづいつ意味だ？」

「よほどの度胸がなけりゃ、ドラゴンのとなりを並んで歩くなんてできないだろ？」

「ふむ、そうかもしれないな」

「白く生まれた自分の運命をうらむんだな。』まさか、この私を召

しあがるようなことは、なさいませんよね？』なあっておびえた目つきで、ホワイトドラゴンのお供をさせられるハメになっちまったんだから」

「フチったら。あははは」

「わっはっは！ このチビ。うめえこというじゃないか？」

フチの言葉を聞いていたジェミニや村の人達が大笑いしだす。だけどフチの言葉になんだかトゲのようなものを感じた俺は、気になってネロにこっそりと話しかける。

「なあ、ネロ。今のフチの言葉。あれってどういう意味かわかるか？」

「おそらく、貴族をドラゴンに、そして平民を馬に置き換えた皮肉であろうな。元とはいえ皇帝であった余には少々耳が痛い」

「なるほど……」

フチは少し不機嫌そうにしていたが、ジェミニはそんなフチの様子に気づくこともなく背伸びしたりして必死に前を見ようとしている。人ゴミが多いから背の低いジェミニでは前の行列がよく見えないんだろっ。

そんなジェミニの様子を見てフチは舌打ちを一回してから、いきなりジェミニの腰を掴みだした。



「ふ、フチ!？」

「むだなことをすんなよ、ジェミニ」

フチは溜息をつきながら、そのままジェミニを持ち上げて肩車をしだした。

なるほど、確かにこれならジェミニでも楽に前を見ることができ  
な。

よし、だったら……。

「よいしょっと」

「な、何をする、タクトよ!？」

俺はフチのまねをしてネロを肩車してあげる。  
すると、ネロは俺の突然の行動に顔を赤くして、目をパチクリとさ  
せている。

「いや、ネロとジェミニってそんなに背の高さは変わらないだろう  
? だからネロもこのままだと見づらいかかって思ってる……それ  
ともやっぱり嫌かな?」

「う……。な、ならば頼むとしょじ……。……」

恥ずかしそうなネロの言葉に俺は少しだけ笑ってから、再び前を見る。

俺達は今、大勢の村人といっしょに、ホワイトドラゴンとドラゴンラージャ、そしてそれを護衛してきた騎士達のパレードを見学している。

巨大なホワイトドラゴンの隣には白馬に乗ったドラゴンラージャが寄り添っており、その後ろに数名の騎士が歩兵を連れて行進している。

歩兵の数はそこまで多くはない。

たぶん、あのホワイトドラゴンだけで十分だと思ったんだと思う。

「よく見えるだろ？」

「うん……。こうやってよく見ると、ドラゴンラージャは、まだ十歳にもならない男の子よ」

ジエミニの言う通り、白馬に乗って大きなマントを着たドラゴンラージャは、十歳程の少年だった。

うつむいているせいで少年の表情はよくわからないが、村人たちの歓声を受けてもあまり嬉しそうではないのはわかった。

「ちつ。ドラゴンラージャってのは、年齢とは関係ないだろ。ドラゴンの目には、五歳のガキだって、八十すぎの賢者だって、みんな子どもにしか見えないんだから」

「どうしたんだ、フチ？ 今日は何だかずいぶんと機嫌が悪いな」

「……別に？ オレはいつも通りだぜ」

やっぱり、今日のフチは普段より機嫌が悪いように思える。  
一体どうしたんだ？

「ドラゴンラージャよ、ハルシュタイルよ、ばんざあい！」

「ハルシュタイル、万歳！」

村人たちが一斉に少年の名前を叫び出す。  
少年はそれを聞くと、ますます顔を伏せてしまう。  
もしかしてあの少年、恥ずかしがってるのか？

……それにしてもハルシュタイルか。  
カールの話だと名門貴族の一つで、代々ドラゴンラージャを輩出し  
てきたんだっただけ？  
でも、確か他にも何か言っていた気がしたけど……。

「偉大なるホワイトドラゴンよ。カッセルプライムよ、ばんざあい  
！」

「カッセルプライムよ、万歳！」

再び聞こえてきた村人たちの大歓声に、俺は思考から現実に戻された。

どうやら、あのホワイトドラゴンの名前はカッセルプライムというらしい。

どう考えても、この村の人達がそんな名前を知っていたとは思えないから、たぶん領主さまの城の人達が村人たちに教えてあげたんだろう。

「アムルタットをやっつけろ！」

「アムルタットをぶっころしてくれ！」

「くそつたれのアムルタットを殺してくれ！ あの凶悪なドラゴンを一撃で！」

さっきまで浮かれた感じだった村人たちの雰囲気、アムルタットの名前を聞いたとたんに一変した。

多くの村人がアムルタットの名前を呪い、フチまでもが腕を振り上げて罵声を叫んでいる。

このヘルタントはアムルタットのせいで、数え切れないほどの犠牲と悲しみを背負ってきた村だ。

俺の友人であるフチも、昔ヘルタントを襲撃したアムルタットに母親を殺されたらしい。

いつもは温厚で純朴な村の人達も、アムルタットの存在にだけは憎悪の念を覗かせる。

しかたないのかもしれないが、俺はあまりにも悲しすぎてそんな村の人達の姿はあまり見たくはない。

「ちよつと、フチ！」

フチが興奮して騒いだせいで、ジェミニは上から落ちそうになって悲鳴を上げた。

慌ててネロがジェミニを支え、フチも正気に戻って体を掴んでいた。

「あ、危な……」

なんとかバランスを取り戻したジェミニを見て、俺は安堵のため息をついた。

「ジェミニ！ 悪い、悪かったよ」

「おろして……」

さすがにフチも素直にその言葉に従って、ジェミニを下におろす。

「タクトよ。余も十分あの光景は堪能させてもらった。そろそろ、おろしてもよいぞ」

「わかった」

促されて、俺もネロを下におろす。

ジェミニと違い、ネロは結構満足そうな表情をしていた。  
楽しんでもらって、なによりだ。

「わざと、やったんでしょ。ねえ？」

よほど怖かったのか、ジェミニは下に降りてからも泣きながらフチの腕をつねっていた。

あれ、意外と痛いぞ……。

フチはしばらく、どうやってつねられた仕返しをしようかと考えていたようだが、やがてニヤリと笑ってジェミニの耳元でなにかささやいていた。

何を言っているのかはわからないが、ジェミニの顔が泣きそうになっているのを見ると、どうやらまた、ろくでもないことを吹きこんでいるらしい。

「それにしても、本当にあのホワイトドラゴンは強そうだな」

「見かけ倒しではないようだな。ここらでも他を寄せ付けぬ、強力な圧迫感を感じたぞ」

俺とネロは領主さまの城に向かって行く、行列を眺めながらそんな話をしていた。

ネロはしきりにあのドラゴンと戦えなくて残念だと呟いて、俺に冷や汗を流させた。

やがて行列は完全に見えなくなって、集まっていた村人たちも次々と帰って行った。

「領主さま、今晩は眠れんじやろ」

「違いねえ。あんなばかりでっかいドラゴンが、自分ちの庭にいるんだぞ。眠れるもんか！」

広場に残った数人の村人が楽しそうに話をしている。

「強そうなやつじゃねえか。あれなら、アムルタットもイチコロだな」

「アムルタットもドラゴンだったことを忘れてねえか。アムルタットは獰猛なモンスターだ。そうかんとんにいくもんか」

村人からアムルタットの名前が出ると、フチの目に再び憎悪の火が燃え上がった。

俺達はそんなフチを心配そうに見る。

「フチ、大丈夫か？」

「フチ？」

「……大丈夫だよ。なんともない」

俺達の心配そうな表情を見て、フチは慌てて笑みを浮かべる。けどその目には、まだ微かに炎が燃えていたけど。

「むづ。余にはそうには見えぬが……」

「大丈夫だって。それよりも帰ろうぜ、みんな。日が沈んじゃう」

フチの言う通り夕日はすでにかなり傾いていて、通りからもほとんど人影が消えていた。

「そうね、ふーっ。それにしてもかっこよかったわ！ ネロもそう思ったでしょ」

「うむ。あれは実に美しかったな！」

ジエミニは深呼吸をしながら目をキラキラさせて、ネロも横で頷いていた。

……ふむ、やはりおもしろくない。  
その時フチがいたずらっ子の笑みを浮かべて、口を開いた。



「……ところでさあ。ドラゴンはジェミニのような赤毛の娘を食べるとき、本当にしあわせそうな顔をするんだってさ。さつきおまえがオレの後ろに隠れているとき、あいつが舌なめずりをしながら、おまえを見ていたんだぜ。全然気がつかなかっただろっ？」

フチの意地悪に俺も便乗することにした。

「あれ？ さつきドラゴンが舌なめずりをしていたのは、ジェミニを見ていたからなのか。ハーメル執事からドラゴンは赤毛の少女と同じくらい、金髪の少女が好きだって聞いたから、俺はてっきりネロのことを見ていたのかと思っただけだ」

「ああ。だとしたら、好物の二人を見てしあわせそうな顔をしたのかも」

俺とフチの言葉に二人の少女は顔を青くする。

「ふ、ふん！ た、タクトよ。余を怖がらせようとしても無駄だからな。あのようなドラゴンの一匹や二匹。余が華麗に倒してみせようぞー！」

ネロは勢いよくそう言ったが、よく見ると顔色が少し悪い。

さすがのネロもあんなドラゴンの好物だと言われると、あまり気分がいいものではないらしい。

ジェミニにいたっては顔を真っ青にして、泣きそうになっている。

「どうやら、今日この村で眠れない夜を過ごすのは、領主さまを含めて三人になるようだ。」

？

？

？

俺とフチは、二人の少女を怖がらせたことに関する罰を受けていた。すっかり怖がってしまったジェミニは、一人では家に帰れないと、フチの腕にしがみ付きながら言っつて、それを見ていたネロも真似して俺の腕にしがみ付いてきたのだ。さすがに、しばらくするとジェミニは普通にフチの後ろを歩くようになったが、ネロは嬉々として俺の腕を離そうとはしなかった。

「……………いや、ある意味ではすっごく嬉しいけどさ。はっきりに言っつて、この格好はかなり恥ずかしいぞ？」

「おい、ジェミニ！ おまえは十七歳なんだぞ。ひとりで家に帰れないってのか？」

「怖がらせるようなこと言ったのは誰よ!」

フチと一緒にジェミニを家に送っていると、ジェミニがフチに怒鳴る。

そこで俺はふと疑問に思って、ネロに聞いてみた。

「なあ、ネロ。ジェミニの家って森のなかにあるんだよな」

「ん？ それがどうかしたのか？」

ジェミニの家は代々森を管理する仕事をしているため、自宅も村ではなく森の中にあるのだ。

「いや、いくら怖い話を聞いたからって、ずっと森の中で育ってきたジェミニが夕暮れの森を一人で帰れないほど怖がるのは、何でだろうなって思ってたさ」

「……はあ。そなたは本当に乙女心のわからぬものよな」

ネロは心底呆れたと言いたそうに、深くため息をついた。

俺はネロのその態度がよくわからず、思わず聞き返してしまう。

「どづという意味だ？」

「いや、よいのだ。ある意味ではそなたのそういうところは、余にとつてもありがたいことだからな。そなたは気にせず、今まで通りでいるがよい」

俺が意味がわからず首をひねる様子を、ネロは妙に優しい目で見ていた。

「そうだ。タクト、ネロ。これからカールの家に行かないか？」

少し前を歩いていたフチが立ち止まって、俺とネロの方に向き直った。

突然フチが立ち止まったせいで、後ろを歩いていたジェミニは危うくぶつかりそうになっていた。

「カールの家に？」

「ああ。カールだったら今日来たドラゴンのことでおもしろい話を聞かせてくれるかもしれないし、それに、どうしてカールがドラゴン見物に来なかったのか気になるしな」

そういえば、カールの姿を今日は見ていなかったな。

フチの言う通り博識のカールだったら、なにか良い話を教えてくれるかもしれない。

どうせ帰っても特にやることもないから、これからカールの家に行

くのも中々いいかもしれない。

「そうだな、だったら俺もついていこうかな。……ネロはどうする？」

「余もついていくぞ」

「ちょっと待ってよ！ 私はどうする気なの!？」

「あと少しだろ。ひとりで行けよ」

「私ひとりで、どうやって家まで帰っていつもの。カールの家までいっしょに行くわ。そのあと絶対に、家のまん前までおくってつてよ」

怒ったようなジェミニを見てフチは無言でさっさと行ってしまい、ネロはそれを見てなんだか楽しそうに頷いていた。

カールの家はジェミニの暮らす森のはずれにあるため、しばらく俺達は歩き続けた。

やがて目的地に近付くと、斧で何かを切る音がしてきた。

「おや、ネドバルくんにコノエくん達じゃないか。何かあったのかい?」

家の前ではカールがせつせと薪割りにいそしんでいたが、俺達に気づくとにつこりと笑って斧を下ろした。

本来なら、薪を扱うには領主さまの森の番人であるジェミニの父親の許可が必要なのだが、カールは領主さまの異母弟のため、好きに薪を使うことができる。

そのため、ジェミニは少しだけカールのことを怪しく、というより不思議に思っているようだ。

「おひさしぶりです、カール」

「まったく無精者もいいとこだ、カール。日が暮れる時間になって夜に使う薪を割りはじめるなんて」

ジェミニが軽く膝を折ってあいさつし、フチも馴れ馴れしく声をかける。

「フチの言う通り少し薪を割るのが遅くないですか、カール。昼間もたっぷり時間があつたでしょうに」

「どうせいつものように、本を読むのに夢中で割るのを忘れておつたのだろう。うむ。本を読むのはよいことだが、あまり熱中しすぎるのも問題であるぞ、カール」

「……いや、それをネロに言う資格はないと思う……」

「はっはっは。耳に痛いすな、クラウディウス嬢。それとネドバルくん、コノエくん。私が知っている真正正銘の無精者の話をしよ

うか。薪をめんどくさがって、ひと晩じゅうふるえながら眠った男がいるんだぞ。ははは。さてと、ひさしくお目にかかりませんでしたな。スマインターグ嬢」

俺達の容赦のない言葉にも、カールはやっぱりと受け止めてあいさつを返す。

ジェミニは普段呼んでもらえない名字で呼ばれて嬉しそうに上品に笑って、それを見たフチが気味悪そうに身をよじっていた。

「カール、そんないいかげんなことを言ったって、誰も信じないぜ。いくらなんでも、そこまでひどいやつがいるはずないだろ」

「ネドバルくん。私の友人には、本当にそんなやつがいるんだ。割りが嫌だといって、ぶるぶるふるえながら夜をすごし、風邪をひいて死にかけた男が」

「本当ですか、カール？ さすがにそんな人はいないと思うんですが」

「風邪をひいたくらいで、死ぬやつがいるかよ。嘘ばかり言ってる」

「おいおい。年長者の言葉を信用しないとは、まったくけしからん若者達だな。ははは。はいりたまえ。スマインターグ嬢とクラウディウス嬢もどうぞ。うるわしきレディが二人もお訪ねくださったのに、このように立たせておいては失礼にあたりましょう」

「それでは、お言葉に甘えて」

「そ、そうか？ う、うむ。そなたがそこまで言うのならはしかたないな」

カールの言葉に、ネロが嬉しそうに身をよじらせる。

……………ネロ？

「お、おい、タクト。なんだか今、すごい顔になってたぞ」

フチがなんだか少し怯えたように俺に声をかけてくる。

……………反省。

俺達がカールの家に入ると同時くらいに、外の夕日も沈んでしまった。

暗い部屋の中で、カールがロウソクをともすと、まばゆい光が部屋を照らした。

電気のないこの世界では、夜になると星明かり以外は明かりは完全になくなる。

そのため、こんな小さなロウソクでも信じられないくらい明るく感じるのだ。

「飲んでみたまえ、ネドバルくん。りんご酒だ。スマインターグ嬢とクラウディウス嬢もどうぞ。うまい具合にできているはずですよ。そういえば、コノエくんは酒は初めてかな？」



カールが酒をそそぎながら、俺に聞いてきた。

「そうですね。まだ飲んだことはないですね」

「ではこれが初めての酒ということになるな。安心したまえ。アル  
コールは若干高めかもしれないが、味はジュースとあまり変わらんよ」

そうやって俺の前に酒の入ったコップを出す。

「一応俺って未成年なんだけど……」。

「ま、いいか、フチ達も飲むみたいだし、あまり飲みすぎなければ大丈夫だろ。」

カールはコップを持ったまま、なにやら考え込みだす。

「ええつと、そうだな。青春まつさかりのカップル達の、永遠の愛を願って……」

「はい？」

「カアアアル！」

「か、カール！」

フチとネ口の絶叫にカールは少し驚いたようだが、すぐにニヤリと笑って口を開く。

「おっと、つまらなかつたのか。それなら、二組の若者の勇気と美貌を受け継ぐ二世のために……」

……………カールさん、なんだかノリノリである。

「ちょ、ちょっと待つがよい、カールよ！ 確かに奏者は余にとつて大切な存在だが、だ、だからと言って、子供とかそいつった話はまだ全然早くてだな……………！」

ジエミニは恥ずかしいからか全身をよじらせているし、ネ口は何だか混乱していた。

フチもカールのからかいの言葉にしばらくむくれていたが、やがて何かをひらめいたかの、コップを高く掲げる。

「アムルタットの破滅を記念して、乾杯しようぜ」

フチの言葉にカールは顔をしかめて溜息をするが、すぐに陽気な顔に戻った。

「そうだったのか。うむ、わかったよ。きみがそこまで意思をかた

めていたとは知らなかった。いつ出発するつもりだ？ 勇猛果敢なネドバルくんが、あの悪名高きアムルタットを打ちやぶり、ついにドラゴンスレイヤーの名誉を……」

「へっ？」

「違うのか？ それではコノエくんとクラウディウス嬢が？ まさかスマインターグ嬢と言うつもりではないだろう？」

「くっ、くくく」

「ぷっ、ぷぷぷっ。あはははは！」

カールの冗談にジェミニは盛大に笑って、ネロやフチも笑っている。もちろん、俺も笑っていた。

おかげで部屋を覆っていた悪い空気も全部どこかに行ってしまった。

「ドラゴンラージャがきたそうだな」

「そうさ、カール！ アムルタットに引導を渡すためにやってきたんだ」

「うむ。あの光景は壮観だったな。ドラゴンラージャもまだ幼い童子で中々に可愛らしかったぞ」

カール達はお酒を飲みながら穏やかに話している。

俺もせっかくなのでカール特性のりんご酒を飲んでみる。

「む、ぐっ……」

飲んだ瞬間、熱い液体が俺ののど元を通り過ぎ、熱が全身に行きとどいた。

頭にも熱がこもったみたいでくらくらする。

「ふ、ふ、あぐん。あ、本当にすばらしいお酒ですわ、カール」

「光荣です、スマイインターグ嬢」

ジエミニも初めて酒を飲んだのか、俺と同じような反応をしている。カールは俺の方を見ながらニコニコと笑う。

「初めての酒の味はどうか、コノエくん」

「おいしいですけど、結構きついですね。俺にはあまり酒は向いてないのかもしれない」

「そうか。まあ、無理をしないで少しずつ飲んでいくことだ。そして慣れる日も来るかもしれない」

「カール、どうしてドラゴン見物にこなかったんだ？」

カールはフチの言葉にニコニコと笑いながら答える。

「ごらんのとおり、薪割りでいそがしくてね」

「余にはそうは思えぬがな。やはり、本を読んでいたのではないか？」

「クラウドディウス嬢は厳しいですな。まあ、それはともかく。壮観だっただろう」

「もちろん。ドラゴンライジャはさっきネロが言ったみたいに、やとと六つか七つになるくらいの子供だったけど、ドラゴンのほうは、それはもう巨大で強そうなホワイトドラゴンだったんだ」

「あれは本当に良かったな。ドラゴンの巨大で雄々しい姿に、ドラゴンライジャの小さく愛くるしいあの姿！ まるで一枚の絵画のよう美しい光景だったな！」

ネロは久しぶりに芸術家の魂が震えたのか、ずいぶんと興奮していた。

話を聞いていたカールはそこで面白そうにウインクした。

「ようし、当ててみようか。ホワイトドラゴンだな。そいつの名はカッセルプライムだろう」

「せ、正解です」

俺はびっくりして思わず答えてしまう。  
よくわかるな、本当に。

ネロは感心したように頷き、ジェミニは目を丸くしている。  
フチだけは平静でいるように見える。

「もうひとつ。ドラゴンライジャの少年は、ハルシュタイル以外の  
何者か、だろ？」

あれ、これは違うな。

「はずれ、というべきかどうか……。ハルシュタイル、で正しかっ  
ただけだ」

フチの言葉にカールは驚いているようだった。  
そして一口酒を飲むと、にっこりとほほ笑んだ。

「若き男女が年長者のもとを訪ねてくれたときには、年長者は自分  
の生きてきた歳月がむだではなかったことを知らしめるためにも、  
自分の知恵の巻物をひもといてみせなければなるまい」

「なにか興味深い話でも？」

「……ハルシュタイルだと。あの家系に、いまでもドラゴンラーヂヤの血統が受けつがれていることになるじゃないか。……ありえないな」

「ありえない？」

「どついう意味ですか？」

「どこかからかドラゴンラーヂヤの資質をもつ子どもを連れてきて、ハルシュタイル家の養子にしたんだよ」

カールは間違いないと、自信満々の表情でそう言い切った。でも、なんでそこまで言い切れるんだ？

ハルシュタイル家はドラゴンラーヂヤの力を約束された一族だと、前にカール自身が教えてくれたはずだけど……。

「カールがそこまで断言する理由は？」

真剣な顔でフチが尋ね、ジェミニはそんなフチに見とれている。

カールはフチの問いに、何でもなさそうに答える。

「かたんなたし算ひき算の答えさ。ハルシュタイル家にドラゴンラーヂヤの血統が許された期間は三百年。その最後の三百年目がすぎてから、すでに十五年になる。それなのに、今日やってきたラーヂヤの少年は六、七歳だというんだろ？ つまり、その子がハルシュタイル家の血統ならば、ドラゴンラーヂヤのはずがないんだよ」

そうか、そういえばそうだったな。

以前カールの授業で習った内容を思い出した俺とネロは、納得してしきりに頷いた。  
だけど。

「三百年ってというのは、なんのことだ？」

「ああ、ネドバルくん、ネドバルくんよ！ 鳥の巣を探しまわる時間があったら、本を読みたまえ、本を！ それともコノエくんやクラウディウス嬢達といっしょに私の話を聞きに来たまえ！」

カールは心底情けないとでも言いたそうな表情をして、フチは真っ赤になってしまった。

ちなみに、ジエミニはそんなフチを見て笑っている。

……… さっきとはえらい違いだな。

がんばれよ、フチ。

「きみという人間は、祖国の歴史も知らんのか。三百年、いや、三百年前といえは、記念すべきわがバイサス王国建国の年ではないか。＜栄光の七週戦争＞当時、ドラゴンロードはハルシュタイル公の忠誠に応え、その証として、ドラゴンラーヂャの血統を約束したのさ。ハルシュタイル家には、三百年にわたってドラゴンの友情がともにあり、ドラゴンラーヂャの資質を持った子孫が生まれると



な。わかったかい」

カールからこの世界の基本的な事柄を教えてもらっていた俺とネロや、頭の回転がすごいフチでさえ、カールの話を完全に理解することはできていなかった。

ジェミニにいたっては、目を回している。

「ええと……クラウディウス嬢。復習です。バイサス王国が建国される前は、この地上は誰が支配していたでしょう?」

「たしか、ドラゴンの王であるドラゴンロードであろう? その者がこの世界に住む人間やエルフなどの種族を治めていたのだったな」

カールは自分の説明が足りないことにすぐに気付いて、今度は優しく説明してくれた。

「正解です。では、スマインターグ嬢。バイサスが建国されたのはいつのことかね?」

「ルトエリノ大王がドラゴンロードを討ちやぶり、<栄光の七週戦争>で勝利を収めたときです」

「そのとおりです。建国王であるルトエリノ大王は、<栄光の七週戦争>の最後の日、深い傷を負いながらも、ドラゴンロードを討ちやぶることに成功した。では、次の質問だ。コノエくん、やぶれたドラゴンロードはどうなったのだろうか?」

俺はカールから習ったことを思い出す。

「ドラゴンロードはルトエリノ大王の剣で大きな傷を負いましたが、致命傷にまでは至らず、そのまま逃走したのでしたね」

「そう。ドラゴンロードは忠義の騎士であつたハルシュタイル公に救いだされ、ドラゴンロードは命の恩人であるハルシュタイル公に祝福を授けた」

「それがつまり、三百年に渡つて、ハルシュタイル家にドラゴンロードが生まれるという約束」

「そのとおりだ、ネドバルくん。そして、第四代国王、エリネド陛下が北方征伐に乗りだし、ついにハルシュタイル公を服従させたんだ。つまりエリネド国王は、ルトエリノ大王に反逆したハルシュタイル家を根絶することよりも、主従の関係を結ばせることを選んだのさ」

「むづう、合理的な判断よな。余がその者の立場だつたならば確実に、感情の赴くままハルシュタイル家を皆殺しにしていたであろうな」

元、暴君の言葉に俺とカールは苦笑いを浮かべる。

「ですが、実際にはエリネド国王にもほとんど選択肢はなかったん

です、クラウドデウス嬢。代々ドラゴンラージャが排出する家門が根絶すのはじつに惜しいことだ。いや、危険と言ってもいい。ドラゴンラージャを失ったドラゴンは、暴走し始めるからな。それもまた大陸にとって大きな脅威になる」

ジェミニはカールの言葉に顔を青くして、ネロは何かを考え込んでいる。

「で、その三百年はすでに過ぎてしまったと」

「そうさ。よってここに興味深い事件が発生した」

「興味深い事件？ 何なんですか、カール」

カールが小声で話し、俺達はそれを前かがみになりながら真剣に聞く。

「ハルシユタイル家というのは、他の建国功臣と違って、もともとが反逆者の家系だろう。それが代々ドラゴンラージャを輩出する家系だという理由から、これまで栄華をほしいままにしてきた。だがハルシユタイル家から、これ以上、ドラゴンラージャが生まれないことになったら」

「はーん。そこで、養子を？」

「おそらくな。貧しい家で生まれた、ドラゴンラージャの資質を持

「た子どもたちを、むりやりに養子としてひっぱりこんだんだろう。いや、待てよ。それでは語弊があるな。金で買っただけと聞いたほうが正しいだろう。貧しい家ではなければ、子どもをあっさりひきわたすはずがないからな」

「か、金で養子に？」

「ドラゴンロードとの約束の期限は、すでに過ぎてしまった。そこでドラゴンラーヂャを集めて、ドラゴンラーヂャの血統を、新たに作りだそうというんだらうな」

「ちょっといいですか、カール。ハルシュタイル家の人間以外にも、ドラゴンラーヂャは生まれることがあるんですか？」

俺はどうしても気になったことをカールに尋ねる。

「ああ、ごく稀にだがね。だが、まったくないというわけでもない」  
「なるほど……。三百年の約束による不確かな血統ではなく、偶然ドラゴンラーヂャの資質をもった人達を使って、遺伝的に確かなドラゴンラーヂャの血統を作りだす。まるで、交配を重ねることでの速い馬や、よく乳を出す牛を作りだすかのよう……」

自分で言っていて胸やけがしてきた。  
その話が本当ならハルシュタイル家の人間は、他の人間を動物や家畜のようにしか見ていないんだらう。

ジェミニは酒を口にしながら、顔をゆがめた。

「いかがわしい行為だわ」

「スマインターグ嬢のおっしやるとおり。三百年間にわたって権勢をほしいままにしてきただけでは飽きたらず、その権勢をさらにひきのばそうと、貧しい親たちから子どもを奪い、ハルシュタイル家にひきずりこんだ」

「むう。どこの世界でも権力を持つ者は変わらぬな。だが、カールよ。ある意味ではその子供にとつても救いの話であったかもしれないぞ。貧しい家庭で死にゆくだけであつた者が、ハルシュタイルのおかげで、生き延びたような事例もあつたやもしれぬ」

「そうかもしれないね」

複雑そうな顔をしながら話すネロに、カールも酒を飲みながら頷く。そのとき、カールの話聞いていたフチがぼつりと言葉を漏らす。

「どこにでも運が味方するやつはいるんだな」

「うらやましいのか、フチ？」

「うらやましくないっていったら、嘘になるだろうな」

「ネドバルくんは十七歳だし、状況を判断する余裕もあるだろう」。

だが六、七歳の子ども親からひきはなして、見ずしらずの大人をいきなり親と呼ばせるようなことは、むごい仕打ちだよ」

「ちえつ。そいつらだって、五年ほどたってから、自分が生まれた掘建て小屋に帰してやる、って言われてみる。死んでも帰りたくないって大騒ぎするだろうよ！」

「……飲みすぎだ、フチ。もう少し落ち着け」

溜息をつく俺を見て、フチも言いすぎたと思ったのか、顔を赤らめてコップをじっと見ていた。

俺もコップに入ったりんご酒を見ながら考える。

フチの気持ちもわかるけど、やっぱり養子にされた子供達の多くは親の元に残りたかっただろうな。

いきなり訳もわからないまま知らない場所に連れて行かれ、周囲の人達に、ドラゴンラージャだ、と言われて、元からそうであるかのように振舞わされる……。

それがとても辛いことだと言うことを、俺は知っている。

……そう言えば、あの子はとうだったんだろつ。

ヘルタントに来た、あの恥ずかしがり屋な少年は。

?

?

?

「いひひひっ！ ひひっ！」

「その笑い方、やめろっ！」

「なあによー。まったく、笑っちゃうわよね。むにゃ」

「なにが？」

「わかんない。ただおつかしいの。きゃははは」

「……なにやら大変なことになっておるな」

「……ジエミニって笑い上戸だったのか……」

フチに背負われたまま奇声を上げて笑い続けているジエミニを見て、俺は冷や汗を流す。

カール特製りんご酒は飲みやすかったが、アルコール度数はかなりきつかったらしい。

おかげでいざ帰ろうとしていると、ジエミニがグデングデンに酔っぱらっていたのだ。

少しはお酒に飲み慣れていたはずのフチでさえ足がふらふらしてい

るのに、俺と同じく初飲酒だったジェミニが耐えられるはずがなかったのだ。

ちなみに俺はあまり飲まなかったのであんまり酔ってないし、ネロにいたっては普段とほとんど変わらない。

生前にかなり飲んでいたので、お正月のときのようによっぽど常識外な飲み方をしない限りは大丈夫、というのが本人談。

「おろしてよ、フチー！」

「ジェミニ、無茶は言わない方がいいぞ。今のお前じゃ、とてもじゃないけどちゃんと歩けないだろ。おとなしくフチに背負われていた方がいい」

「はあー。おまえ、さっさと家に帰って、冷たい水を頭からかぶって、寝たほうがいいぞ」

「だって、こんな状態で家に帰ったら……。私、殺される」

「……………まあ、そんなに派手に酔っぱらっていたらなあ……………」

「この辺で少し休んで、酔いを冷ましたほうがよいのではないかな？ ジェミニはもちろん、背負っているフチも足がふらふらではないか」

ネロの言葉に従って、俺達は木にもたれかかって休みことにした。全員、酔いのせいで顔が赤く染まっている。



「はあーっ！ おまえ十歳のころから、背はそんなに伸びてないくせに、体重ばっかり増えたんだろ」

「……フチよ。それは乙女には決して言うてはならん事だぞ？ そなた、わかっておるのか？」

「うおおお！？ す、すまん、ネロ！ 悪かった！ 俺が悪かったから！」

フチの軽口にも、ネロが本気の殺気を出す。  
ていうか、ネロ、お前もそついうの気にするんだな……。

ふと、ジェミニを見るとなぜだか体を震わせていた。

「どつした、ジェミニ？ 寒いのか？」

「ううん、違うの……。なんだか変な音が聞こえてきて……」

「変な音？」

俺は一度目をつぶって、周囲の様子に注意を向ける。  
すると、ガサガサと葉の擦れる音が聞こえてきた。

「あの音のことか？ 風の音だろ」

「いや、違うみたいだぞ、フチ」

俺は目を開けて、気配を感じたほうを睨みつける。

ネロもいつのまにか戦闘用の赤いドレスを身にまとって、俺の隣に立っていた。

フチも立ち上がっていたが、酔っているせいで力が入らないのか、木に手をつけてなんとか立っている状態だった。

しばらくすると、辺りが明るくなって、人の話し声が聞こえてきた。さらに話し声のほかに、カチャカチャと剣の擦れる音も聞こえる。

敵か？

敵だとしたら、俺とネロだけで戦えるか？

俺は今剣を持っていないし、ここにはフチとジェミニもいる。

二人をかばいながら戦うのは難しいし、かといってこんな酔った状態じゃ二人を先に逃がすのも難しい。

どうする？

声のするほうを警戒しながら見ていると、たいまつの方が見えてきた。

「さ、山賊よー！」

「いや、違ってると思っぞ、ジエミニ」

俺は体の力を弱めながら言った。

「新しいタイプの山賊だな。名はく悪のたいまつ団とかいう」

「フチ。ときどきお前のそのユーモアのセンスを欲しくなる時があるよ」

ネロも元の服装に戻って、たいまつのみかりを持った謎の集団を興味深そうに見ている。

謎の集団はたいまつを掲げて、話し声や足音を隠そうともしない。

さすがにあれば山賊のようなものではないだろう。

ジエミニニの表情が明るくなった。

だが、なぜかフチの顔色は先ほどと変わらず悪い。

「ジエミニニ、どうしよう。バレたら、少なくともオレとお前はおしまいだぞ」

「えっ？」

「オレたち二人、酒に酔ってるんだぞ。おまえの親にバレたら……」

「きゅっ」

ジェミニは慌てて、近くにあった木につかまる。

「いや、さすがに無理だろ」

ジェミニ以外の三人が呆れた顔をしている中、当の本人は木に登ろうとしていた。

ただどいくら森で育ったジェミニでも、酔っぱらった状態で木のぼりなんて芸当ができるはずもなく、ジェミニはお尻を打ちつけて悲鳴を上げていた。

「何者！」

ジェミニの悲鳴を聞き付けた謎の集団が、剣を引き抜きながらこちらに走ってきた。

俺とネロはなんとなく集団の正体があったので、なにもせずに見ておく。

「夜中に<領主の森>をうるつきまわるとは、きさまら……。ありや、なんだ。フチ？ ジェミニ？」

「えへへへ……」

「おいおい何だ？ フチとジェミニだけじゃなくて、お前達までいたのか？」

「いや、まあ、色々あってね、サンソン」

俺が肩をすくめながらそう言うと、サンソン達、ヘルタント領警備兵の面子は呆れた顔をしながら、剣を鞘に納める。

サンソンの他にも、ジャレンやターナー、ハリーなど、俺のよく知っているメンバーが集まっていた。

でも、警備兵がなんでこんな時間に、こんな場所にいるんだ？

サンソンはニヤニヤ笑いながら、俺達に近付いて匂いを嗅ぐ。

「ふふーん。これは、なんの真似だ？ おまえら、酒を飲んでるな？」

「えへへへ……」

「そうか、このフチがなあ……。ついに、こんな悪さをしでかすようになったか」

ん？

なんだか、サンソンがろくでもないことを言うような予感。

「酒を買った金の出所はどこだ？ 愛の力と呼ぶべきか、欲望の力と呼ぶべきか。とにかく酒を手に入れてだな、ジェミニをふらふらになるまで酔わせたんだろ。フチ、意外と気が小さいんだな。酔わせなければ、自信がなかったか」

……………予感、的中。

周りの警備兵が大爆笑する中、ジェミニが必死に弁明する。

「誤解だわ！ 大体、私とフチだけじゃなくて、タクトとネ口も酔ってるじゃない！」

「だから、その二人も誘ったんだろ？」

「サンソン！？」

おまけにこっちにまで火の粉が飛んできた。

……………ネ口の顔が赤いのは、酒のせいか、羞恥心のせいか……………。それにしても珍しいな、フチのやつがからかわれて何も言い返さないなんて……………

そう思っつてフチの方を見ると、なにやら意地の悪い微笑みを浮かべていた。

「城外の水車小屋では、水車がガタゴトと音をたてて……………」

ん、この歌は？

サンソンはこの歌を聞くと、不自然なくらい慌てだした。

「危険の多い夜中に歩いてどうするんだ？　コホンツ。よしっ！  
タクトとネロが無事に家まで送ってくれるから、二人とも急いで  
帰りなさい！」

「きょうも、乙女が人の目をさけて、水車の音を探しもとめる……」  
「フチー！」

警備兵のみんなが今度はサンソンを指差して大笑いしているなか、  
俺はジャレンに声をかける。

「なあ、ジャレン。あの歌って……」

「ああ、あれか？　あれはサンソンの恋人のことを歌っている歌ら  
しいぜ」

思い出した、思い出した。

前にも警備兵の中でうわさになっていた、あれか。

結局、サンソンの恋人が誰かはわからなかったんだよな。

……………サンソン、かわいそうに。

まあ、サンソンも悪いから、わざわざ止めるようなまねはしないけ  
ど。

「月明かりに照らされた乙女、目に焼きついたあの足どり」

いっこうに歌を止めないフチに、サンソンが飛びびかかろうとするが、素早くターナー達三人に羽交い絞めにされる。

「これは、反乱か！ はなせ！ オレは兵隊長だぞ！」

「笑わせるな。だまれ、サンソン。いい歌じゃねえか？」

「乙女の頬をなでるそよ風、慕わしい香り」

「フチ！ てめえ！ たのむ！ 神さま！ フチさま！」

サンソンは泣きそうな声で叫ぶが、フチはそれを完全に無視する。

「厨房の料理のにおい？ 洗い場の洗濯物のにおい？ 貯蔵庫のワインのにおい？ …… 厨房のマーガレットか……。洗い場ならば金髪の、そう、アンだ……。貯蔵庫ならば、あのクラデイスなのか……」

警備兵のみんなは緊迫した雰囲気で見意見を交わし合っている。

ついでに、ネロもその会議に参加していた。

俺は同情の視線をサンソンに送る。

まあ、フチもああ見えて義理堅いやつだから、本当にバラすようなことはしないだろう。



「三人のうちの誰だろう、このにおいは、この、におおおいは…  
…」

ついにフチの歌が佳境に入った。

ネロと警備兵のみんなは、期待に満ちた顔で息を弾ませている。

サンソンは………、赤くなったり、青くなったり、なんかすごい顔になっている。

そのとき、独特のにおいが俺の鼻を刺激した。

「む？ これは何のにおいだ？」

「花の香りみたいだけど……なんの花だったかしら？」

ジエミニが首をかしげながら呟き、ジャレン達も不思議そうに顔を  
見合わせている。

そんな中、ガサガサという音が俺の背後から聞こえてきた。

「たぶん、この私の体から発せられたにおいでしょ」

俺の背後の森をかき分けて、誰かが歩いてくる。  
背は低い、というより小さく、身軽そうな服を着ている。

俺は突然やってきた少年を見て、言葉を失った。  
ジェミニが驚いた顔で叫ぶ。

「ドラゴンラージャ！」

ハルシュタイル家の養子となったドラゴンラージャの少年が、そこ  
には立っていた。

## 第一章 太陽に向かって走る馬 1 ホワイトドラゴンとドラゴンライジャ（後

バイトとレポートのせいで更新の遅れたメガネオオカミです。  
言い訳ですね、すみません。

というわけで、ドラゴンライジャの本編にようやく入りました。  
今回はとりあえず、原作の第一話と同じところまで進んでみましたが、どうでしょうか。

やはり長すぎますかね？

そもそもこの小説を読んでくださってる方は、一話一話が長い方がいいんでしょうか、それとも短い方がいいんでしょうか？

今後、この作品を書いていくに当たって、一話の話をどこまで書けばいいのか、アンケートをとりたいと思います。

もちろん、答えたい方だけでけっこうですのでお願いします。

1、原作の一話一話とできるだけ同じにする。（大体、今回の話と同じくらいの長さ）

2、原作と同じでなくてもいいから、ちょうどいいところで区切って、長めで。（外伝編、『夕日の中で』と同じくらいの長さ）

3、ちょうどいいところで区切って、短めで（第零章の話と同じくらい）

答えてくださる方はお手数ですが感想から答えをお願いします。  
アンケートの期間は、おれが次の話を投稿するまでで。

できるだけ早く投稿できるようにおねがいます。  
それでは！

## 2 溪谷の黒い影

?

?

?

運命はわれわれを導き、かつまたわれわれを潮奔する。

ヴォルテール

?

?

?

ドラゴンラージャの少年はゆっくりと歩きながらこっちにやってきました。

いたずらがバレた子供のようなきまわずそんな笑みを浮かべていて、こっ見ると本当に普通の子供と何ら変わることはないように見える。

「ハルシュタイル公。ついてこないようにと申し上げたはずですが」

ようやく警備兵達の拘束から解放されたサンソンが、困ったような表情で少年に向かって話し出す。

「歌声も聞こえだし、笑い声も聞こえてきたから……それほど危なくはないのでは、と思って」

ハルシュタイルの少年はおどと答える。  
やっぱり気の弱いタイプなのかもしれない。

「おっしやるとおりです。よし、任務にもどろつ。フチとジェミニはさっさと家に帰れ！ タクトとネロは……まあ、おまえたちも家に帰って休むといい」

サンソンの言葉にジャレンやターナー達が残念そうな溜息を吐く。  
……そんなにサンソンの恋人が知りたかったのか？

「こんな真夜中に、森でなにをしているの？」

「おおつ。オレとしたことが。ジェミニ、おまえが手伝ってくれたら、助かるな」

「はい？」

「オレたち、ミントを探しにきたんだ。夜中にいきなり探せっつていわれても、なかなか見つからなくて」

「ミントですって。あ！ このにおい、ミントのにおいだったのね  
「！」

ジェミニは手をポンと打つ。

俺は失礼にならないように少し距離を取ってから少年のにおいを嗅

ぐと、確かにジエミニの言う通りミントの香りがしてきた。  
少年はジエミニの言葉を聞くと、俺のことなんて気にも留めないで  
嬉しそうな表情をした。

「ああ、お姉ちゃん。お姉ちゃんは、ミントがどこにあるのか、よ  
く知っているの?」

少年の言葉にサンソン達は驚いて動きを止めて、少年自身もすぐに  
自分の失敗を悟って固まっていた。  
俺とネロ、そしてフチは、お互いに顔を合わせて、しかめっ面をし  
た。

やっぱりカールの推測通り、この少年はハルシュタイル家に養子に  
出された子のようだ。  
生まれてからずっと貴族として育ったのなら、どんなことがあつて  
もあんな言葉遣いはできないだろう。

「あつたりまえでしょ。よく知ってるわよ。なんてったって、私  
の父さんは、領主の森を」

「おい、ジエミニ」

「守る森番でございませうから」

酔っぱらって、つい普通の子供と話すようにハルシュタイル家の少

年に話しかけていたジェミニも、俺が少し話しかけると、すぐに言葉遣いを改めた。

……あぶない、あぶない。

「そうか。では、この者たちを助けてやってほしい」

少年は自分でできる精一杯の虚勢をはって、ジェミニに命じる。

少年には悪いけど、正直、かなり微笑ましい光景だ。

ネロなんてうっとりとした顔で少年を見ている。

「でも、なんでこんな時間にミントを探しに来たんだ？ 首都から来た人達のせいでミントが足りなくなったのか？」

肉の保存方法が確立していなかったこの時代、貴族などの一部の人は肉料理を食べるときに香辛料を使って、肉の生臭さを消して食べている。

普通の貴族ならシナモンやクローブという高級な専用の香辛料を使うが、お金のない領主様はそのへんで採れるミントで代用をしている。

そのため、城には常にそれなりの量のミントが保存されている。だけど、やっぱり今日城に来たこの少年や、あの騎士の人達に使ったらなくなってしまうのだろうか？

サンソンは俺の言葉を聞いて、頬をかきながら説明してくれた。



「いや、それが少し違うんだ。人の食事のためじゃなくて、ドラゴンの食事のためなんだ。城内にあるミントを全部さしあげたんだが、まだたりないらしい。そこで大あわてで探しにやってきたんだ」

思いがけないサンソンの言葉に、フチは開いた口がふさがらないようだ。

そう言う俺も、結構驚いていたけど。

いや、まあ、ドラゴンだって生き物なんだから、肉の生臭さが嫌いなのも、当然なのかもしれないけど……。  
うーん、なんかイメージが崩れるな……。

寧ろ、喜んで生臭い肉を食べているイメージがあっただけ……。

ジェミニとネロも呆れたような顔をしている。

「ミントなら、サバイン渓谷にいくらでも生えてるわ」

さすがここで育っただけあって、ジェミニはこの森のことをよく知っているようだ。

「おお、あそこか。確かにあそこにはミントがたくさん生えておっ  
たな」

「ん？ ネロ、お前サバイン溪谷のことを知ってるのか？ 俺は行ったような記憶がないんだけど」

「うむ。この間ジェミニと一緒にちょうどその辺りまで遊びに行ったのだ。無論、溪谷の中までは行かなかったがな。行く意味もあまりなかったし、万が一のことがあつては危ないしな」

ネロとジェミニは結構仲良しだ。

俺とフチを置いて、二人だけで遊ぶようなことも時々ある。どうやら、さっきの話は俺とフチが置いてけぼりにされたときのことのようだ。

「いやっほう！ そうか。じゃあ、さっそく案内してくれ」

サンソンがそう言うと、ジェミニは迷うような顔をした。たぶん、怖がりのジェミニはこんな真夜中に溪谷まで行きたくないんだと思う。

「オレが案内するよ。オレも場所を知ってるから」

フチはそんな様子を見て、仕方ないとも言いたそうな表情でそう言った。

サンソンも嬉しそうな表情になった。

「おう、そうか？ 助かるな。じゃあ、ジェミニはここで帰ってよし」

サンソンとしてもこんな時間にジェミニをサバイン溪谷に連れて行って、足でも滑らせてケガでもさせたら困るだろうからな。

特に、今のジェミニは酔っぱらっているしな。

その点フチなら年相応の運動神経を持っているから、溪谷でケガする可能性も低いだろう。

「それで、お前たちはどうする。このままオレたちについてくるか？」

サンソンが俺とネロを見ながら、そう言った。

「そうだな。俺達はジェミニを家に送っていくよ。いくら見知った森の中でも、今のジェミニをひとりで帰らせるのは危険だし、そっちのドラゴンラージャの護衛もそれだけいければ良さそうだしな。ネロもそれでいいか？」

「む？ 余は別に構わんが……」

ネロはなんだか迷っているような顔をしていた。  
どうしたんだ？

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 私、別に帰るなんて言ってないわよ！」

ジェミニが慌てたように叫ぶ。

「はあ？ お前、ついてくる気なのかよ」

「当たり前でしょ。フチなんかにはせたら不安なんだもん。もしこれでフチが場所を間違っただけなら、領主さまにも迷惑がかかるじゃない」

「建前はわかった。本音は？」

「う……。だって、今家に帰ったら、私……」

ああ、そうか。

そういえば今家に帰ったら大変なことになるんだっけ。

「だめだ、ジェミニ。こんな時間にお前を連れていくわけにはいかん。ケガでもしたらどうするんだ」

「で、でも……」

サンソンの言葉にジェミニが泣きそうな顔になる。  
しかたないな……。

「まあ、そう言うなよ。どうしてもジェミニがついて行くっていうんなら、俺とネロもいっしょに行くからさ」

「おまえとネロが？ だけど、おまえたちも酒を飲んだらどう？」

「大丈夫さ。俺はそこまで飲んでないし、万が一戦闘になっても、今日は剣を持ってないから後衛に徹するつもりだしな」

「うむ、余も戦闘に支障をきたすほど酔っているわけではないからな。問題はあるまい」

「そうか？ わかった。だったらジェミニもついてきてよし」

「わーい！」

ジェミニは嬉しそうにぴよんぴよん跳ねて、俺達はそれを見てみんなで笑い合った。

？

？

？

秋になり、だんだんと肌寒くなってきた夜風を浴びながら、俺達は薄暗い夜の森を歩き続けた。

俺とサンソン、そして道案内のフチが先頭に立ち、ハルシユタイル家の少年はハリーやジャレン達に護衛されながらその後ろを歩いている。

ネロはまだ完全に酔いのさめてないジェミニと一緒に、一行の一番後ろでおしゃべりをしながらついてきている。

俺はハルシユタイル家の少年と話をしてみたかったが、俺やネロだけならともかく、さすがにこれだけ他の人の目があるのに、平民の俺が貴族である少年と話すのはまずいと思って、話しかけることができずにいた。

というわけで、今は代わりにフチ達と話をしている。

「ドラゴンのやつ、笑わせてくれるよな。くさくつて、肉が食えねえっていうんだろ？」

「しかないだろ。ドラゴンだって生き物なんだ。中には生臭い匂いがだめなのがいたって不思議じゃない」

「ずっとミントを使い続けていたそうだな。首都では、つねに膨大な量のミントが用意されていたらしい」

サンソンの声に多少の不満が交じっているを感じた。

命令とはいえ、こんな夜中にミントを取ってこいなんて言われたら、不満が交じっても不思議ではないが。

「ちえっ。それであるドラゴンラージャにもミントのおいが染み  
ついているってわけか」

「でも、逆に言えばミントのおいが染み付くほど、あの少年はドラ  
ゴンに傍にいたってことだな。仲がいいじゃないか」

「それもそうか。ところで、あのドラゴンラージャは、なんだって  
サンソンたちのあとをついてきたんだ？」

「ドラゴンがなにも食べないから心配なんだろう。じっとしてい  
られない、ってついてきちゃった」

「ふうん。ドラゴンラージャとドラゴンの友情ってやつか。タクト  
の言葉通り、あのホワイトドラゴンとは仲がいいみたいだな」

「そつみたいだな」

ドラゴンとドラゴンラージャの関係は主従関係に近いと以前聞いた  
ことがあったが、どちらかというと、マスターとサーヴァントの関  
係に近いものだと考えたほうが楽そうだな。

「足元、気をつける。このへんは、砂利が多いから、すべりやすい  
んだ」

「了解」

「わかった」

満月に照らされた森の山道を進みながら、フチの言葉を聞く。月やたいまつ（たいまつ）の光があるとはいえ、足元の道はひどく見えづらい。慣れているフチ達にならともかく、俺なんかは少しでも気を抜いたら本当にすべって転びそうだ。

「あのドラゴンラーヂヤの名前は、なんていうんだ？」

フチが後ろを見ながらサンソンに尋ねる。

「ハルシュタイル公だろ？」

「それは家の名前だろ。じゃなくて、あの子の名前だよ」

「おまえ、酒の飲みすぎじゃないのか。貴族の名前なんか、オレが知るわけないだろ？ ハルシュタイル公って呼べばすむんだから」

サンソンが呆れたように言い、フチは不満そうな顔をしている。俺も会話に入りたかったけど、今は滑らないように歩くのに必死で、残念ながらそんな余裕はなかった。



それからしばらく歩くと、急に道が途切れて谷間が見えた。

「お。ついたみたいだな」

「うははははー！」

「って、フチー!？」

「こら！ フチ、危ないぞ！」

サバイン溪谷に着くのと同時に、フチが笑いながら溪谷を駆け下りてしまった。

あいつ、まだ酒が抜けきってないな!？

茫然とした俺達が見ている中、フチの姿はあっという間に暗闇に飲まれて見えなくなってしまった。

「きゃー！ フチー!？」

「ま、待つがよい、ジェミニよ！ 気持ちはわかるが、さすがに危険だぞ!？」

「フチ！ どこだー？ 大丈夫か？」

「おーい、フチー!？」

驚いた俺達は崖下に向かって大声で叫ぶ。

ジエミニなんて今にも溪谷の底に向かって走り出しそうになっていて、それをネロが必死になって押さえていた。

「おっせえぞ！ とつとつ、おりてこいよお！」

俺達の心配をよそに、崖下からは酔っ払いの友人の元気な声が聞こえてきた。

「おい！ なんにも見えないのに、どうやっておりるんだ！」

サンソンが怒りに震えながら怒鳴ったが、下からは何の返事も帰って来なかった。

しかたなく、俺達はこのことをよく知るジエミニから安全な溪谷の下り方を教えてもらいながら、ゆっくりと崖を降りて行く。暗い闇の中、崖を降りて行くのはかなりの度胸が必要だった。溪谷の底からは、こっちの心情などまるで考えていないフチのお気楽な歌声が聞こえてくる。

「城外の水車小屋では、水車がガタゴトと音をたて……」

「フチイイ！ うわっ！」

「サンソーン!?」

冷静さを失ったサンソーンが足を滑らせて、崖下に滑り落ちていく。俺は慌てて下に目をやったが、真っ暗で何も見えなかった。

「サンソーン! 大丈夫かー!?」

「うづうづ。もう、嫁さんをもらうのあきらめた」

……生きてるみたいだけど、なにか大切なものをひどく打ちつけたらしい……。俺が心の中でサンソーンに合掌をしていると、感情のこもったフチの歌声が聞こえてきた。

「……乙女は涙でベッドシートを濡らす。あの人のナニが完全にダメになってしまった……」

「フチイイイイ!」

今度は崖下からフチの悲鳴とサンソーンの怒声が聞こえてきた。まあ、放っておいても大丈夫だろ。

俺達はひどく苦勞しながら、サバイン溪谷の底に降り立った。

俺やネロは普段着だから少し疲れたぐらいですんだけど、ターナー達は革の鎧を身につけているからもうバテバテになっている。いくら優秀なこの村の警備兵とはいえ、重い革の鎧を着て下の見えない溪谷下りをすれば、体力も精神力も削られるに決まっている。ジエミニとドラゴンラージャの少年は元々体力がないため、いつ倒れてもおかしくないほど疲れきっている。

溪谷の底で追いかけてこをしていたフチとサンソンも、全員降りて来たのを確認したらこっちに帰ってきた。

「お疲れになったでしょう、ドラゴンラージャ」

あえいである少年の様子を見たフチが声をかける。

「はーっ、はーっ。はい。はーっ」

「もう着いたんですよ。すわってお休みください。ミントはすぐそこの丘に、たくさんありますから」

少年は素直に頷いて、フチもそれを見て優しく微笑む。

「さあさあ、なにをしているんです！ さっさと立ちあがって、ミントにむかって突撃！」

溜息をつきながらも警備兵のみんなが立ちあがってフチについて行く。  
この短時間座っていただけである程度回復したらしい。  
さすがだ。」

「俺達も手伝うか。ここまで来てサンソン達だけに任せるのも悪いしな」

「そうだな」

「あつ、私も手伝うよ!」

無理やりついでしてきた俺達三人もミント摘みに加わる。  
ちなみに警備兵は三人がたいまつを持って闇を照らして、残りのメンバーがミントを摘んでいた。

「なんだ、おまえら。もう少し休んでいてもいいんだぞ?」

「いや、俺だつて一応警備兵の一員なんだ。おまえらが働いているのに、俺だけがやすむんわけにはいかんだろ」

「すまん、タクト。それに比べて……」

サンソンはそこで言葉を切って、腕組をして立っているフチを睨みつける。

「おい、フチ！ おまえも三人を見習って、ちょっとは手伝え！」

「オレの役割は、ここまでの案内」

「勝手にしろ！」

フチはしかたないなどでも言いたそうな顔をして、口を開いた。

「月明かり美しい夜、われらが勇士たち。胸に抱いた情熱をミントに注ぐ」

お、今度は普通の歌だ。

フチは基本的に歌がうまいから、ふざけた歌を歌わない限り、聞くのはそこまで苦痛じゃない。

俺はミントを摘みながら、フチの歌に耳を傾ける。

「空にはセレナ、勇士たちのロングソードを冷たく照らす」

ジエミニは熱い目でフチを見ている。

確かに月光の下で歌い上げるフチの姿は中々絵になっているかもしれない。

「いかなるミントがこの勇士たちの手を逃れられようか」

ミントを採りながら、警備兵達がくすくすと笑う。

「満ち月のもと、採取されしミントは、最高の香りを放つであろう」

ネロはうらやましそうにフチを見ている。

たぶん、フチの歌唱力をうらやましく思ってるんだろう。

「ライカンスロープを祝福する満ち月よ。勇士たちを祝福したまえ」

サンソンが笑いながら怒鳴る。

「このやろっ！ オレたちにオオカミに変身しろっていつのか？  
こうやって吠えながら？ うおお……」

『ウオオ……ウオオオオ……』

なんだ！？

サンソンがオオカミのまねをしようとしたそのタイミングで、本物のオオカミの咆哮が聞こえてきた。

ジエミニは悲鳴を上げてフチに抱きついて、他のみんなも茫然と立ちずくんでいた。

俺とネロは素早く周囲の様子を探る。

「ちょ、ジエ、ジエミニ、離れろって！ ほら、大丈夫だからさ……。しかし、びっくりしたな。サンソン、友達が呼んでるぞ？」

「おどろかせやがる。ったく、間のいいやつらだな」

「サンソン、油断するな！ ただのオオカミじゃないぞ！」

ぎこちなく苦笑いを浮かべていたサンソン達に、俺は素早く警告する。

最初のオーガとの戦闘ではわからなかったが、ヘルタントで多くのモンスターと戦った結果、俺はモンスター特有の気配を感じることができるようになった。

一般人のフチだけでなく、警備兵として数多くの戦闘をしてきたはずのサンソン達までも殺気や気配を感じることがほとんどできない。もしかしたら、この世界の人達はそういうのを感じる力が俺達よりも低いのもしれない。

だからサンソン達は気付いていないが、俺とネロはこの渓谷にまがまがしいモンスターの気配が迫ってきているのがわかっていた。

『ウオオオオ……グルル……ウオオオオオ！』



オオカミのような咆哮が再び溪谷に響き、それと同時に力強い地鳴りのような足音が聞こえてくる。

「ふむ、これだけのたいまつがあるのにこちらに向かってくるか。夜の獣が火を恐れぬとは、やはりただのオオカミではないようだな」

「これでフチの歌のとおりだったら、かなりやばいんだけどな」

ネロはすでに戦闘用の赤いドレスに着替えて剣を構えており、サンソン達も素早く剣を抜き去る。

戦闘能力のないフチやジェミニ、そしてドラゴンラージャはブルブルと震えている。

サンソンはそれを見て、警備兵に指示を出す。

「みな、ハルシュタイル公とフチ達をかこめ。剣を持っていないタクトは、万が一のためにハルシュタイル公の近くにいろ」

「わかった」

無難な指示だ。

この場で一番危険なのはまだ幼いこのハルシュタイル家の少年だろうし、俺だったらもしモンスターがこっちにやってきたとしても後からコードキャストで援護できる。

「ネロ。悪いが今回は後ろでハルシユtail公を守ってくれ。もし相手がライカンスロープだったら、コーティングされていないお前の剣じゃあまり役に立たない」

「しかたあるまいな。わかった。後ろのことは任せておれ」

「ジャレン、ハリー、あとコーティングされた剣を持っているのは誰だっけ？」

「オレだ」

前に出たターナーを見て、サンソンとジャレン、ハリーも同じように前に進み出る。

俺達残りの警備兵も素早くフチ達を囲んで身構えた。

「あ、あそこ！」

震えるジエミニが指差した先には月光を背に受けて、五キュビット二メートルを超える程の巨体が現れていた。

四足歩行ではなくしっかりと二本の足で大地に立ち、ナイフのような爪と鋭い牙がキラキラと不気味に輝く姿は、見ていてかなり迫力がある。

「ウェアアウルフだ！」

ウェアウルフ　　つまりオオカミ男のことか！

ウェアウルフはこちらの様子を窺うように、丘の上からこちらをじっと見下ろしている。

グルルという唸り声が漏れているが、こちらの人数を見てすぐに襲うのをためらっているようだ。

サンソンはそのすきに次々とハリー達に指示を飛ばす。

「ジャレンは左。ターナーは右。ハリーはオレのうしろやつが動き出したら、ジャレンとターナーは両側から切りつける。ハリーは頭に切りかけ！」

サンソンの指示を受けた三人がすぐにT型の陣形を作る。

俺はその陣形を見て思わず呟いてしまう。

「なるほどな。サンソンがウェアウルフの注意を引きつけているすきに、背後のハリーに頭を狙わせる作戦か」

「うむ。背がそこそ高いハリーならば、サンソンが前にいたとしても楽に頭を狙えよう。万が一敗したとしても、そのときはジャレンとターナーが左右から切りつければよいだけの話。そうなればサンソンも自然と反撃することができるであろうしな」

「……うまい作戦だ」

なによりも、そんな作戦を戦闘の始まる直前に指示できるサンソンがすごい。

俺も一対一、もしくは二対二ぐらいまでなら負けなくらいの指示ができる自信があるが、これだけの人数の戦闘には未だに慣れていない。

『グアアアッ！』

動きのないこちらにしびれを切らしたのか、ウエアウルフは咆哮を上げながら真っ直ぐにサンソン達に飛びかかる。

軽く地鳴りを上げながら真っ直ぐに突っ込んでくるウエアウルフを、サンソンは笑みを浮かべながら待ち構える。

ウエアウルフは横殴りに拳を振るうが、サンソンは素早く屈みこんでそれを避け、逆にそのままの体勢で無防備なウエアウルフの足に向かって斬りかかる。

慌てたウエアウルフが自分の足下を見るが、その瞬間、サンソンと共に飛びこんでいたハリーの剣が正確にウエアウルフの頭を狙った。

『グアッ！』

足元のサンソンに注意が向かっていてハリーの存在に気付かなかつたウエアウルフは、簡単にその首を剣で貫かれた。

「受けてみる！」

サンソン、ジャレン、ターナーが同時に剣を振るう。

飛びこんだ態勢のままサンソンが剣を上を斬り上げて、ウエアウルフの足を斜めに切り裂く。

サンソンはそのまま、勢いのまま地面を転がっていく。

堪らず膝をつくウエアウルフの左右から、さらにジャレンとターナーが斬りかかる。

よし、いける！

「なっ！？」

だが、戦闘を見ていた俺は思わず声を出してしまう。

ウエアウルフは首に剣が刺さった状態のまま、両手で二人の剣を受け止めたのだ。

ドクドクと両手から血があふれだすが、ウエアウルフはその大きな手のひらで完全に剣を握りしめて離そうとしない。

まさか今のを防ぐなんて……。

「だが、これで決まったな」

「ああ。あのウエアウルフはもう動けねえだろうからな」

同じ警備兵のセロ達の話に耳を傾けながら、俺も内心で頷く。  
ウエアウルフは足をサンソンの剣で切り裂かれたせいで立つことも  
できず、さらに両手でジャレンとターナーの剣を握っているから身  
動き一つできずにいた。  
こちらもジャレンとターナーは動くことができないが、いまだに首  
に剣を突き刺したままのハリーや、地面を転がっていたサンソンは  
自由に動くことができる。

転がっていたサンソンは素早く起き上がると、身動きができないウ  
エアウルフの無防備な背中に剣を突き刺す。

「きゃあ！」

サンソンが背中から剣を突き刺したせいで、ウエアウルフの正面に  
いたハリーに大量の返り血が降りかかる。  
その光景を見ていたジェミニは思わず声を上げてしまうが、ハリー  
はひるむことなく、そのまま首に突き刺した剣を思いっきり斜めに  
振り下ろした。  
ウエアウルフは首を半分切り裂かれ、口から血を吐き出しながらそ  
のまま前に倒れ込む。  
倒れたその背中にさらに四本の剣が次々と急所に突き刺さるが、ウ  
エアウルフはもうピクリとも反応しなかった。

……………終わったか。

俺は剣に着いたウェアウルフの血を布切れで拭っているサンソン達を、複雑な気持ちで見ている。

モンスターとはいえ、俺はいまだに命が奪われる光景を見るのが好きではなかった。

ネロや凜に言わせてみれば、きっとこれは俺の甘さなんだろうな……。

隣で息を呑み込んで戦いを見守っていたフチ達もようやく肩から力が抜けた。

ヘルタントで育ったフチとジェミニはともかく、ドラゴンラージャの少年の方はいまだに顔を真っ白にしている。

……無理もない。

貴族やら平民やらという前に、この子はまだ十歳にも満たない幼い子供なんだ。

あの光景は子供が見るには少々刺激が強すぎるだろう。

「このやろつ！ 噂をすれば影、って言葉があるだろう！」

「うわあ！」

フチは戻ってきたサンソンにボカボカと殴られていた。

うわ、サンソンのやつ本気だ。

サンソンのあの太い腕で殴られたら、かなり痛いだろうな……。

「ぐわっ。……や、やっつけたんだから……よかったじゃないか？  
……」

今度は首を絞められながら、フチが弱々しく叫ぶ。

……「こつやって命がけの戦いのすぐあとにぶざけ合うこともできるのも、この村の人達がこれくらいのことにはもう慣れてしまっているからだ。」

それが良いことなのか、悪いことなのかは、俺にはわからない。

サンソンは笑いながら、ようやくフチを解放する。

そして、顔面蒼白の少年に優しく声をかける。

「ハルシユタイ公、もう大丈夫です。ご安心ください」

「お、おじちゃん、って、ほ、本当に、すごいんだね？」

少年はまだ混乱しているのか、おそらく地の言葉遣いであるが普通の言葉で話していた。

ネロがそれを見て少し眉をひそめる。

「むっ、少し意外な気もするな」

「何がだ？」



「聖杯戦争で戦ったアリスもそうであったが、あのくらいの年の童児はまだ生き物の生き死にがよくわかっていないものではないか。普通の童児ならあの戦闘を見て、興奮をしたとしてもあの者のように、怯えたりはしないような気がするのだが」

「いや、それは個人差があると思うけど……。まあ、あの子はどちらかといえば内向的な性格みたいだし、それにあの年にしては結構聡明みたいだしね。アリスと違って……。ただ無邪気なわけじゃないんだろう」

俺とネロがぼそぼそと話している間に、サンソンと少年も警備兵の剣について話をしていたようだった。

「ハルシュタイ公、この剣をごらんください。私と残る三人の剣は、銀でコーティングされております。剣光が美しいでしょう？」

サンソンが月光で剣を照らすと、刀身がキラキラと光を反射する。

カールやサンソンの話では、ライカンスロープのようなアンデットモンスターと戦うときには、普通の剣ではあまりダメージを与えることができないらしい。

世界の法則を破って生きているそのモンスターに普通の物理攻撃は効果が薄いらしく、サンソンが今回ネロを前線に出さなかったのもそれが理由だ。

本来なら、祝福を受けた純銀の剣がアンデットモンスター対策には

一番らしいが、それではあまりにも一本の剣に費用がかかりすぎる。だからお金のないヘルタントではサンソンやハリーのような一部の優秀な警備兵だけが、代用品として銀メッキを施した剣で戦っている。

……それでもかなりの費用がかかるらしいが。

「こんな田舎の警備兵なのに……。諸君は首都の騎士よりも勇敢だ」

「ハルシユタイル公。この村の警備兵は、アムルタットという、ふるいにかけられたエリートばかりですから」

「えっ？」

「アムルタットのせいで、この辺りにはモンスターがうようよいます。モンスターと闘いながら、数多くの警備兵が死んでいきました。生き残った警備兵は、過酷な試練をくり抜けた者たちなのです」

それを聞いて、俺はひさしぶりにあの聖杯戦争のことを思い出した。

一週間に一度、全てのマスターが一斉に他のマスター一人と殺し合う。

生き残った者はまた次の週に誰かと殺し合う。

それを繰り返すうちに、強い者だけが生き残っていく。

レオヤリンのように最初から強かった者。

そして俺のようにしだいに成長せざるをえなかった者。

生存が許されるのは一度も敗北をしなかった者だけという過酷なルールの中で、全てのマスターは大なり小なり成長した。

それはまるで、今のヘルタントと。

……………いや、やめよう。

あまりにも意味のない思考だ。

俺は頭を強く振ってくだらない雑念を追い出す。

そばにいたネロやジェミニが驚いたように目を丸くしていたが、俺は特に何も説明しなかった。

俺が考え事をしている間にハルシユタイル家の少年との話を終えたサンソンは、ターナーと共に先ほど殺したウエアウルフを調べていた。

「見たことのある顔だ」

「ああ」

「四年前のウエアウルフ侵入事件のときから、失踪したままになっているカールドさんだ。川むこうに住んでいた。死体が見つからないから、まさかとは思っていたんだが……。ウエアウルフにおそわれた傷が原因でライカンスロープになって、いままで生きていたんだな」

苦々しい表情をしたターナーの言葉に、俺達の間にも重くなるしい空気が流れる。

ウェアウルフやヴァンパイア等のライカンスロープは、病気のように伝染する。

ヴァンパイアに血を吸われた人がヴァンパイアになる話は有名だが、その他のライカンスロープに傷をつけられた人も、同じライカンスロープになってしまう。

カールドという人を俺は知らないが、その人も四年前まではヘルタントで暮らしていた普通の人だったんだろう。

……ウェアウルフである以上、そのモンスターが元は人間である可能性が高いことを、俺はすっかり忘れていた。

「奏者よ。そう、気にもむな。あのカールドという者には悪いが、今回はこうするしかなかったのだ。カールが言っていたであろう。一度ライカンスロープになってしまった以上、もつどのようなことをしてもその者を元に戻すことはできぬ。……例え、そなたのコードキャストをもってしてもだ」

暗く沈んだ俺の心情に気付いたネロが、優しく声をかけてきてくれる。

「でも……」

「全ての人を救うことなどできぬ。そんなものは決して叶うことのできぬ夢のようなものだぞ。タクトも本当はわかっているのである

じっ」

「……」

なおも俺が迷ったような素振りをしていると、ジェミニが心配そうな顔をしてくれる。

「えっと、よくわからないけど、タクトはカールドさんを助けられなかったことを悔やんでいるの？」

「……………うん」

「だったら気にしないで。カールドさんがこんな事になっちゃったのは、悲しいけど……。でも、それはタクトのせいじゃないでしょ？ だからそんなに落ち込まないで」

「ジェミニもこう言うっておるぞ。どうするのだ、タクトよ？」

「……………そうだな。ごめんな、二人とも。余計な心配をかけちゃって」

俺は二人に対して軽く頭を下げる。

サンソンはそんな俺達を見て軽く微笑んでから明るい声を出す。

「さあ、とつとと片づけちまおう。死体を收拾して、報告はオレが明日にでもすればいいだろう。さあさあ、遅くなっちゃったぞ。村にもどったらオレが酒をおごるから、もうちょっとだけがんばって」

くれ」

「わーい、サンソン隊長にはんざーい！」

「こーんなときだけ、万歳か？」

警備兵は笑いながら再びミント採集にはげみだし、俺達もその手伝いをする。

しばらくすると、サンソン達の持ってきた袋はミントでいっぱいになった。

サンソンはフチを見ながらニヤリと笑う。

……おや、またくだらないことが起こる予感。

「さあさあ、フチ。歌の代償は、きっちり払ってもらおうぞ」

「ええっ！」

サンソンは笑いながら、持っていた袋をフチに肩に落とした。

フチはよろけていたが、たぶん演技だと思う。

いくら大きな袋でも中身がミントなら、そんなに重たくはないはずだし。

「四人とも、今日はつき合わせてしまつて、悪かつたな」

「……悪いと思つてるなら、早くこの袋を自分で持てよ！」

「じゃあ、フチ以外」

「……」

「別にいいさ。元はといえば、俺達が勝手についてきたんだしな」

「そうか？ ならいいんだが。お前達はこれからどうする？」

「オレはジエミニを家まで送っていくよ。こいつ一人で帰らせたらどうなるかわからないし」

「ちょっと、フチ！」

「余とタクトも帰らせてもらおう。今日は少し疲れた。早く家に戻ってベットで眠りたい」

「へー。なるほどな……」

サンソンがニヤリと笑う。

……まずい、今日何度も見たいたずらっ子の笑みだ。

「そうか。愛されているじゃないか、タクト」

「止める、サンソン。それ以上、そのネタで俺をいじるなら俺にだつて考えがあるぞ」

「へー、どんなのだ？」

「フチ、例の歌を歌ってもいいぞ」

「……厨房の料理のにおい？ 洗い場の洗濯物のにおい？ 貯蔵庫のワインのにおい？」

「ぎゃー、このやろっ！」

再び追いかけてこを始めた二人を皆で笑い合う。

……ただネロだけは顔を赤くして、それどころじゃなかったみたいだけ。

「じゃあ、帰ろうか」

そうやって、皆で笑いながら帰ろうとしたその矢先。

冷たい殺気が俺達を襲った。

「っ！？」



「むづ!? タクト、サンソン、気をつけよ! この感じ、只者ではないぞ!」

ネロに言われなくても、聖杯戦争で数々の強敵と戦った俺にはわかる。

心臓が止まりそうな、脳が凍りつきそうな、この死の感覚……。

間違いない。

この殺気を放つ何ものかは、さっきのウェアウルフなんて比べ物にならないくらい……強い。

だけど、この殺気を受けて俺がなによりも衝撃的に思ったのは、この殺気がモンスターのものではないということだった。

「な、なんだ、この感じ……」

「まるで心臓を直接握られているような、この気持ち悪い感じは……!」

ターナーやハリー達まで震えだした……!?

気配を感じる力がそこまで高くないこの人達にまではっきりと感じることのできる程、強い殺気だとも言うのか!?

冷や汗を流しながらも、サンソンが真剣な表情を俺に向ける。

「タクト。これがお前達の言っていた殺気ってやつか?」

「……ああ、たぶんそうだ」

「そうか……。実際に感じてみると、思っていた以上に嫌な感じだな」

サンソンはそう言って、黙り込む。

フチ達は声を出すこともできないようだが、無理もない。  
歴戦の戦士の集まりであるこの警備兵ですら、体を震わせるほどなのだ。  
なんの戦闘能力も持たないフチ達が耐えられるはずがない。

「ぬ、奏者よ、あそこだ！」

ネロが剣で崖の上の一か所を指し示した。  
俺がその方向を見てみると

そこには黒い影が一つあった。

「なん、だ……。あれは……。？」

「人、なのか……。？」

警備兵達がざわめく。

崖の上にひっそりと佇む黒い影は、夜の暗闇と、距離が結構あるためよく見えない。

大きさは普通の人間と大して変わらず、その手には何も武器らしきものを持っていなかった。

全身を黒いぼろきれで覆っているせいで男性か、女性かもよくわからない……いや、実を言うと、見えている輪郭からかろうじて人型であるのはわかるが、本当に人間であるのかも俺には確認が持てなかった。

おまけに、奇妙なことにその影をじっと見てみると時々その姿が揺らめいているように見えた。

だが、ぼろきれの奥からわずかにのぞくその目は、ナイフのように鋭く冷たい。

……俺はそれに似た目を前に見たことがある。

聖杯戦争で何度も俺を殺そうとした因縁のある男。

電脳死すら乗り越えて、ただ俺を殺すために存在した亡霊。

最後は大切な思い出を胸に抱え、人間らしく死んだ暗殺者。

ハ ウエイの黒蠍 ユリウス・ベルキスク・ハ ウエイ。

黒い影の目は、ユリウスが何度も俺に見せたその目に、とてもよく似ていた。

あれは、獲物を見る目だ……！

「……………」

なんとか戦闘態勢を整える俺達を、黒い影は何も言わずにただ眺めている。

腕はダラリと垂れ下がったままで、一見すると俺達を襲うつもりなどないように思える。

だが、放たれる殺気が、俺達に対して悪意を持っていることを明確に示していた。

「ネロ……」

「わかっておる」

ネロは俺の心情を読み取って、他の皆よりも一歩だけ前が出る。

ただ、一歩だけ。

でもたった一歩分だけでも他の皆より前に出ることで、例えばあの黒い影がここにいる誰を狙ってもネロは充分に対応することができる。

「……………」

黒い影はそれを見ても何もしようとはしない。

ただ、変わらずに殺気を出しているだけだ。

……？  
何もする気はないのか？

俺がそう思ったその瞬間だった。

「……………ケイコク……………スル……………」

「っ！？」

重苦しい声が渓谷に響いた。  
この声は、あの影の声か！？

「……………ケイコクスル……………。……………ウンメイノ……………ワハ……………ク  
ルッタ……………。……………クルッタママ……………ウンメイノワハ……………マワリ  
……………ダス……………。……………クルッタワハ……………ドコニ……………ムカウ  
……………？」

男か女かはつきりしない声が俺達の耳に突き刺さる。

「ただ、俺はこの声にこもった感情を感じることができた。この声に感じられるこの感情は……憎悪……？」

「……コレ……ハ……ケイコク……ダ……」

混乱する俺達を余所に黒い影はそこまで言うと、今度ははっきりと揺らめきだした。

そして、そのままその場から消えてしまった。

「……消え、た？ テレポルト……瞬間移動の類か……？」

茫然としたまま、俺は力なく呟いた。

後ろから聞こえてきたドスンという音に振り返ってみると、そこには尻もちをついたハルシュタイル家の少年の姿があった。その顔は完全に血の気を失っている。

「ハリー、ターナー、ジャレンはハルシュタイ公をかこめ。他の者はさらにその外側からかこめ！ いなくなつたとはいえ、やつが再び現れるとも限らんぞ！」

我に返ったサンソンが次々と指示を飛ばしながら、少年に近付く。

「大丈夫ですか、ハルシュタイル公？」

「い、い、今のは……？」

「わかりません。新手のモンスターか、もしかしたらハルシュタイ公を狙った暗殺者かもしれません。とにかくここはもう危険なので、急いで城に戻りましょう」

少年は力なく頷くだけだった。

サンソンは少年に手を出して立つの手伝いながら、こっちを見る。

「タクト、ネロ。悪いが、オレたちは城にハルシュタイル公を送り届けないといけない。だから、フチ達のことを……」

「ああ、わかっている。フチとジェミニの事は心配しないでくれ。俺とネロが責任を持って家に送るから」

「頼む」

サンソン達はそのまますぐに溪谷を登って行ってしまった。

俺とネロ、そしてフチは茫然としたジェミニをなんとか正気に戻してから溪谷を出た。

帰りはみんな無言で、ジェミニはフチに抱きついたらそのまま離れようとしなかった。

ネロも硬い表情で、周囲を警戒していた。

俺は隣のフチ達を心配しながら、さっきの影のことを考えていた。

さっきの影は一体なんだったんだろう。

人間のように見えたけど、普通の人間じゃ絶対になかった。

でも、モンスターのようにも思えなかった。

それにあの強烈な殺気……。

そして、あの殺気について、俺は一つだけ気づいていたことがあった。

あれはあそこにいた全員に向けて放った殺気なんかじゃなくて、ただ一人にだけ向けて放たれた殺気だ。

他のメンバーはその煽りを食らっただけにすぎない。

影が殺気を放っていたその人物とは

たぶん、俺だ。





## 2 溪谷の黒い影（後書き）

アンケートに答えてくださった皆様、ありがとうございました。  
とりあえず、1と2の票がよく集まったので、これからは長めの話を投稿しようと思います。

バイトのせいで更新スピードがいよいよ遅くなってきましたが、できるだけがんばろうと思いますので、これからもよろしくお願います。

### 3 旅の老人

?

?

?

希望と恐れは切り離せない。希望のない恐れもなければ、恐れのない希望もない。

ラ・ロシュフーコー

?

?

?

窓から差し込む朝日が俺の顔を明るく照らした。そのまぶしい光が俺を夢から現実へと連れ戻してくれた。

できればまだ寝ていたいけど、そういうわけにもいかないか。

俺はしばらくベッドの上でまどろんでいたが、やがて観念して上半身を起こす。

そのまま軽く伸びをして、残った眠気を追い払う。

そしていつものように、俺の隣で寝ているネロを起こそうとする。

「ネロ。ネロ。朝だぞ。起きろ」

「んー……。もう少し……。もう少しだけ……。……。くうー」

「はは。やっぱり、一回じゃ起きないんだな」

まったく、可愛いな、本当に。

俺は苦笑しながら、幸せそうな顔で寝ているネロの頭を軽くなであげる。

ネロは子供扱いされることを嫌うので、起きているときに頭をなでるとすぐに機嫌を悪くしてしまうのだ。

だから、毎朝寝ているネロの頭をなでるのが、俺のささやかな楽しみになっていた。

「さて、と」

できればいつまでもこの幸せタイムを満喫していたいが、残念ながらそうするわけにもいかない。

ネロは朝はまるで役に立たないから、自然と朝食の準備などの朝の家事は全部俺の仕事になっているのだ。

俺がベッドを出て、家の外にある井戸に顔を洗いに行くと、早朝ということもあり辺りはまだ薄暗かった。

「うおっ、冷たっ！」

井戸からくみ上げた冷たい水で、無理やり意識を覚醒させる。九月になりだんだんと冷たくなってきた朝の風が、俺の顔を拭って行く。

ふと、朝日を見てみると、朝の日差しはいつものように暖かく、優しげに見えた。

「さて、今日も一日、がんばりますか」

俺は用意していたタオルで顔を拭いた後、部屋に戻って朝食の準備を始めることにした。

？

？

？

「それにしても、昨日のアレは何だったんだろっつな？」

「あの黒い影か？ ううむ、余にもよくはわからなかったな」

朝食を食べながら、ネロと昨日のサバイン溪谷で見た謎の影について話す。

……ちなみに、ネロは朝食ができあがる頃になってようやく起きてきた。

普段はもう少し早く起きるのだが、やはり昨日のアルコールが少しは関係するのかもしれない。

「あの黒い影、俺にはモンスターのようには見えなかった」

「では、タクトはアレを人間だと言うのか？ 確かに人のような姿はしておったが、それだけで人間だと決めつけるのは早計だと余は思うぞ。カールの話では人間にそっくりな姿をしたモンスターもいるという話だしな」

「でも、あの気配はモンスターの気配というよりは、人の気配に近かった。ネロもそう感じなかったか？」

「む。それを言われると、余も首に縦に振るしかないが……。しかし、なあ……」

ネロは難しい顔でムムムと唸る。

それを見ながら、俺はフチから作り方を教えてもらった特製パンケーキを口に頬張る。

それからしばらくネロは考え込んでいたが、やがて諦めたように溜息を一つ吐く。

「むづ。やはり情報が少なすぎるな。タクトよ、この話はまた今度

にするがよい。今の状態では結論などではずもないしな」

「それもそうだな。ごめん、ネロ。朝からこんな話をしちゃって」

「いや、よい。そなたがアレを警戒しているのはよいことだ。あの異様な姿を見てなんの警戒もしていなければ、寧ろそっちの方が心配だからな」

ネロは笑いながらそう言う。

俺も微笑み返して、ネロと朝食を楽しく取った。

？

？

？

「だから、一分間に十回だって言ってるだろ！」

「いいや。オレは確かに五回羽ばたくところをこの目で見たんだ」

「お前ら、間違ってるぜ。カッセルプライムは六回羽ばたいていた。これが間違いない」

「あー、そうだなー。わしも六回だった気がするぞー」

「十回だ！」

「六回！」

「五回だな」

「六回じゃないか」

「俺も六回だったと思うぜ」

「皆さん。ビールを持ってきましたよ」

「おお！ ありがとな、タクト」

今日、俺はヘナーおばさんが女手一つで経営しているヘルタントで唯一の居酒屋<サントレラの歌>で、お手伝いをさせてもらっている。

ちなみにネロは警備兵の訓練に行っているため、今日はほとんど別行動だ。

「いやー、タクトが働き者だからヘナーのやつも助かるだろうな」

「いいえ、そんな大したことはしてませんよ」

「ところで、タクト。お前は何回だと思っ？」

「やっぱり、六回だよな！？」



「あー……。すみません。カッセルプライムが飛んでいたときは、店で注文を取っていましたから」

「なんだ。見てないのかよ」

「惜しいことしたな。あれは本当にすごかったぜ！」

はしゃぐお客の相手をしながら、注文された料理やビールを配っていく。

お客さんの話によると、例のホワイトドラゴン、カッセルプライムが灰色山脈に向かって飛んで行ったらしく、村中で話題になっているらしい。

カッセルプライムがわざわざこんな早朝に灰色山脈の方に飛んでいたということは、今度始まる戦いに備えて、偵察にでも行ったのかもしれない。

残念ながら、俺は直接見ていないから何とも言えないけど。

……それにしてもあのドラゴンが飛んでいたのか。

……あの巨体が空を優雅に駆け回る。

確かにそれは、少しだけ見てみたかったかもしれない。

ちなみに、さっきの人達が何を熱心に話しているのかというと、例のホワイトドラゴンが一分間に何回羽ばたいて飛んでいるのか、ということらしい。

……いや、別に回数なんて決まってるじゃないと思っけどなー。

「おや、コノエくんじゃないか。今日はこの手伝いの日なのかい？」

厨房に戻ろうとしたら、聞き覚えのある声がある。俺を呼びとめていた。振り返って声のした方を見ると、いつも通り人のよさそうな笑顔。顔を浮かべたカールとどこことなく疲れたような顔のフチが入口に立っていた。

俺は呆れて肩をすくめる。

「カール、こんな朝っぱらからフチと一緒にお酒ですか？ あんまり飲んでばかりだと体を壊しますよ。あと、フチもまだ未成年なんだから、こんなに堂々と酒を飲みに来るのはどうかと思うぞ」

「おいおい、お前はオレのことを何だと思ってるんだよ」

「……朝から居酒屋に遊びに来る、どうしようもない不良少年？」

「……タクト。お前、少しカールに似てきてないか？」

容赦ない俺の言葉にフチは頭の痛そうな表情になった。カールは楽しそうに笑いながら、俺に話しかけてくる。

「残念ながら、今日はただ酒を飲みに来たわけではないんだ」

「だったらどうしてこんなところに？」

「先ほど大通りでタイバーンという旅のご老人と知り合ってたね。それでタイバーン殿にこの村のことを詳しく話してあげたくて来たのさ」

「それでここに？」

「ああ。村の様子を知るにはこういう場所が一番だからね」

なるほど。

確かにそれは一理あるな。

「それで、そのタイバーンという人はどこにいるんですか？」

「あれ、そっぴやいないぞ？」

「あタイバーン殿なら私たちと一緒に来たはずなんだが……。おや、どこに行かれたのかな？」

はぐれてしまったのか、カールとフチが困ったように辺りを見渡す。

「わしなら、ここにゐるぞ」

すると、入口の方から聞き覚えのない声がしてきた。  
カールはその声を聞いて、ほっとしたように目を細めた。

「タイバーン殿、そちらにいらっしやいましたか。はぐれてしまつたかと思ひ、心配しましたよ」

「そうだぜ、タイバーン。あんたは目が見えないせいで、他の人よりもはぐれやすいんだから、ちゃんとオレたちの袖を掴まんでおかないとだめじゃないか」

フチの軽口を聞いて、やってきた老人は笑い声を上げる。

「これ！ 老い先短いわしのような老人を、そなたのような鼻をたらしした幼い童といっしょにするでない！ ははは。なに、ちよつとこの店の客に話しかけられてな。世間話をしていただけじゃよ」

「そうでしたか。どうでした、有意義な時間は過ごせましたか？」

「うむ。中々興味深い話を聞くことができた」

「ちょっと待ってくれ！ タイバーン、さっきさり気なくオレをガキ扱いしたよな!？」

「おや、そうだったかな？ すまんが、まったく覚えておらんないやー、年をとると頭の動きが鈍っていかんな」

「ウソつけ!」

ムスツとしたフチを見て、カールとタイバーンという旅の老人は楽しそうに笑い合っていた。

でも俺は話の輪に加わりもせず、そのすぐ近くで見ただけだった。

いや、正しく言えば、タイバーンという老人から流れている圧倒的な威圧感のせいで、俺は口を開くこともできず、ただ見ていることしかできなかったのだ。

な、んだ……、この人は………？

この人、ただの老人なんかじゃ、絶対に、ない。

フチ達が連れてきたタイバーンという老人は、姿は非常に特徴的なものだった。

服は素早く動き回るのは向いてなさそうな、真っ黒な色の分厚く、丈がかなり長いローブで、頭を覆うことのできるフードもついている。

手には自分の背丈よりも長い杖を持っていて、背中には旅の道具が

詰まっていると思われるカバンを背負っている。

全身をローブで覆っているため、ローブからのぞく顔と、杖を持っている右手以外は全く見ることができない。

いくら夏が終わったとはいえ、まだこの季節ではその格好では暑いのではないかと、思わず心配してしまう格好だ。

さらに特徴的なのは、その見えている腕と顔に刻まれた複雑な刺青だ。

黒い刺青は顔と右腕の全面に限なく刻まれている。

おそらくだけど、見えてない左腕や両足、体の全身にかけて同じ刺青が彫られているんだろう。

この世界に詳しくない俺ではその複雑に刻まれているその刺青が、文字なのか紋様なのかはわからない。

そして、ローブからのぞいている目は瞳がなく真っ白で、その老人が日の光を見ることができないのだとすぐにわかった。

特別、武器は持つてはおらず、全身には老いの症状が広がっている。そして他のものを見ることができない白い瞳。

普通なら、こんな盲目の老人が今までよく旅を続けることができた、と、心配するだろう。

なのに、俺にはこの老人が今まで出会って来たどんな敵よりも、強大に、そして恐ろしく見えた。

冷静に考えたら誰でもおかしいことだと気づくはずだ。

自動車も新幹線もないこんな世界では旅とは決して楽なものでも、安全なものでもない。

旅をしている途中で食べ物なくなることもあるだろうし、怪我や病気をしても街につくまでは医者にかかることもできない。

さらに人を襲う盗賊や、モンスターまでもいるのだ。

目の見えない老人が無事に旅を続けられるはずがない。

にも関わらず、タイバーンのローブは薄汚れていて、杖やカバンはよく使い込まれており、この老人が今までかなりの年月を放浪の中で暮らしていたことをはつきりとさせている。

それに……、なんだ、この魔力は………？

あの、規格外サーヴァントの存在達からも、こんな濃密で巨大な魔力は感じたことがないぞ……！？

タイバーンの全身からは莫大な魔力が感じられ、さらに刻まれている刺青からも微かにだが、強力な魔力の波動が流れているのが感じられた。

……いや、刺青はともかく、厳密には全身からは魔力が放たれていないというわけではない。

でも、魔力の塊のようなサーヴァントと数多く戦ってきた俺には、タイバーンの体の奥底に眠る巨大な魔力を感じる事ができてしまった。

「……………」

「ほう……。その少年、わしの魔力に気押されておるな？ それに、少々おかしな感じではあるが、魔力も感じる……。ふむ。おぬし、魔術師じゃな？ それも若いというのに、かなりの使い手の」

絶句する俺を余所に、タイバーンは好奇心の感じられる口調で、楽しそうに言った。

「ん？ 魔力に気押されるって、どうということなんだ、タイバーン？」

「あまり詳しく言うとおぬしにはわからぬだろうから、端的に言うと、魔術師というのは自然世界にあるマナと魔力を動かすことができる者のことをいうのじゃ。だから、魔法というものはマナを動かすことで自然力と反発させることで、自然界における法則に乱れを起こすということだ。」

「ごめん、タイバーン。もっとわかりやすく。」

「む。つまり、魔術師はマナや魔力の流れに敏感になってしまつので、他の魔術師が近くにいとそれを感知する場合があるということじゃ。」

「そうなのですか？ 初耳です。」

タイバーンの言葉にカールが驚きの声を漏らす。

「無論、めつたにあることではない。普通の魔術師ならば、魔法を使う時ならともかく、何もしていなければマナを乱すようなことはないし、乱れていたとしてもそれを感じることはできん。じゃが。わしのように長い年月、魔法に関わっていると、何もしてなくても僅かながらマナの流れを乱すことがある。この少年はそのマナの乱れを起こしている、わしの魔力を感じて、気押されているのじゃろ。」



……実際は、マナの流れとかそんなんじゃないで、タイバーンの魔力自体を感じているのだが、それは言わなくてもいいだろう。

たぶん、異世界出身である俺だからそんなことができるんだろうし。

無言のままの俺を見て　いや、本当に見えているわけじゃないだろうが　タイバーンは申し訳なさそうな顔になる。

「すまぬな。こう言っでは失礼じゃが、こんな田舎の村にこれ程の魔術師がいるとは思っていなかったの。つい、魔力の制御を緩めてしまっていたのじゃ。余計な警戒をさせてしまったことを、許してくれ」

そう言いながら、タイバーンは頭を下げる。

すると同時に、タイバーンから感じられた暴力的なまでの魔力が収まっていくのを、俺は感じた。

「い、いえ。気にしないでください。別にタイバーンさんが何かしたわけでもないんですし……」

怖い程の力を持つてるけど、とりあえずは悪い人ではないようだ。警戒はした方がいいかもしれないけど、わざわざこちらから関係を悪くしなくてもいいだろう。

「じゃが、何かお詫びをしなくてはならぬな。よし、ならばおぬしに何かをおごるとしよう。どちらにせよ、この二人にもおごるつもりだったしの」

「えっ、いや……。別にいいですよ。それに今は俺、店の仕事がありますし……」

「いいじゃんかよ、タクト。せっかくおごってもらえるんだから、おごってもらえよ。大体仕事って言ったって、タクトは結構この店で働いてるんだから、たまには休んだっていいと思っぜ。な、ヘナ  
ーおばさん」

フチがこの店の主人であるヘナーおばさんに話しかけると、ヘナーおばさんもニヤリと笑って、口を開いた。

「そうだね。あんたと違って、タクトは働き者だからね。それに元々この店は私一人でも十分だからね」

「で、でも……」

「どうせいつも訓練をしてるか、この店の手伝いをしているかのどつちかで、ろくに休んでもいないんだろう？ 今日くらいはゆっくりしなさい」

「……わかりました。ありがとうございます、ヘナーおばさん、フチ」

俺は二人にお礼を言って、席に座った。

既にフチとカール、そしてタイバーンは席に座っているのを見て、ヘナーおばさんが注文を取る。

「それじゃあ、ビール二杯に、牛乳二杯でいいですかね？」

「ビール三杯！」

……フチ、何度も言うけど俺達まだ未成年なんだぞ。

この年でそんなに酒に溺れていいのか？

ていうか、お前昨日あんなにカール特製りんご酒を飲んだのに、朝っぱらからよく飲めるな。

「いや、ひとつは、ワインをいただく。ミュラカイン・サポーネはあるかな？」

俺がフチの言葉に呆れていると、タイバーンが奇妙な名前のワインを注文した。

聞いていたヘナーおばさんの顔色が一瞬で変わる。

「あの、あることには、あるんですがねえ。でも、あのう……」

ヘナーおばさんが齒切り悪くそう言つと、タイバーンは嬉しそうに笑ってふところから何かを弾いた。

タイバーンの弾いた何かは、日の光を浴びて金色に輝きながら、宙を舞った。

………つて、あれは!?

「き、金貨!？」

俺が驚いて声を上げている間も、タイバーンの弾いた分厚い金貨は空中でぐるぐると回転していた。

店に集まっていた村の人達も茫然としながら、こちらを見ていた。そして店中の視線が集まる中、ヘナーおばさんはおどおどしながらも、金貨をスカートで受け止めた。

「あの、お客さま。金額をおまちがいじゃあ？」

「うむ？ たりないか？ これはいかな。百セル金貨のつもりだったのに？」

ひゃ、百セル金貨!？

「ははん、老いぼれたもんじゃ、指先が鈍くなっていかん」

「待ってください、タイバーン！ さっきのは百セル金貨で間違いありませんから!」

「そ、そうです。まちがいございません」

タイバーンが再びふところに手を突っ込みそうだったので、俺とヘナーおばさんが必死にそれを止める。

「そうか。ははは。わしの指もまだ大丈夫じゃな。よしよし。おぬしすらも注文せい」

ご機嫌そうなタイバーンに言われて、俺やカール、フチも思い思い物を注文する。

「では、私はビールで」

「俺は牛乳でいいよ、ヘナーおばさん」

「ミュカラサネポー！」

「……フチ？」

「ミュラカイン・サポーネだよ！ この大ばか者！」

「……ビール」

注文を聞いたヘナーおばさんは厨房の奥へ行ってしまった。とりあえず、注文した飲み物が来るまで、俺達は自己紹介をするこ  
とになった。

「それでは改めて自己紹介を。私はこの村のはずれに住んでいる、カールと申します」

カールが相変わらずの穏やかな微笑みを浮かべながら、タイバーンに自己紹介をする。

「……フチ・ネドバル」

さっき注文したときにヘナーおばさんに殴られたフチは、それどころじゃないのか頭を押さえながらの短い自己紹介だった。

「タクト・コノエといいます。一応、これでも魔術師のようなものです」

「一応、とは？」

「はい。俺は特殊な魔術師なので、普通の魔法はあまり使えないんです。そのかわり、俺独自の魔法をつかうことができますが」

「ほう、それは確かに珍しいな」

タイバーンはやはり俺の魔術について興味を覚えたようだが、特に掘り下げて聞くようなことはしなかった。

単に礼儀正しいのか、それとも他のチャンスを狙っているのはよく

わからないけど。

「わしはタイバーン。旅の魔術師で、余生を静かに過ごせる場所を探してある」

タイバーンの言葉にフチとカールは特に反応しなかった。たぶん、既に聞いていたのだろう。

そんなことをしていると、ヘナーおばさんが注文した品を持ってきてくれた。

ヘナーおばさんはタイバーンの前にミュラカイン・サポーンというワインを置いた後も、まだ未練があるのかぶつぶつと呟いていたが、それでも金貨を見ながら魂を抜かれそうになっていた。

「とても雰囲気の良い居酒屋じゃな」

タイバーンがミュラカイン・サポーンを口に含めながら、満足そうに言った。

「村のようすを知るには、こういう場所が一番でしょ」

対するカールもビールは飲みながら答える。

「うむ、なかなか、よい村のようじゃ。領主の人柄がつかがいしれる」

「なにかにつけて弱いところがある、と言ったほうが正確でしょうがね」

「悪いことではなからう。で、カッセルプライムは？」

「アムルタットのせいです」

「中部街道のどこかに、ブラックドラゴンに痛めつけられている村があるとは聞いておったが」

「この村のことです」

「まったく、ひどい話じゃ。こんな美しい村に、そのような苦しみがあるとは」

「前後関係が逆でしょう。アムルタットがいるからこそ、この村は美しいのです」

「おぬしは、そのように申すのか？ まあ、そういうこともあるかもしれないが……」

カールの言葉を聞きながら、タイバーンは複雑そうな表情でミュラカイン・サポーンをさらにもう一口飲んだ。

……それよりも、今のカールの言葉は、一体……？



「ちょっと、カール。それ、どういう意味だよ？」

フチが慌てたようにそう言うと、カールは一瞬戸惑ったような顔をしてから、またいつもの優しい顔になってフチの方に向き直った。

「この村は強くもあり、また静かでもある。ネドバルくん、大陸のどこを探しても、この村のようにすばらしい場所はない。大都市に見られるような喧騒も、複雑な人間関係もないじゃないか。アムルタットのせいで犠牲を強いられるはいるが、それゆえにたがいを思いやりながら力強く生きていける村なんだ」

この話はネロといっしょにカールの授業を受けているときに聞いたことがあったな。

俺もネロもこの話にはほとんど賛成なんだけど……。

「それは、前にも聞いたよ」

フチもやっぱりカールから聞いたことがあったのか、頷きながらも先を促す。

「そうだったな。村人たちの生活は貧しく、厳しい試練を強いられるはいるが、それに負けないくらい温かい村なんだよ。この村では一介の兵士だって、オーク五、六匹なら簡単に始末できるだろう。」

ほら、きみの友人のサンソン・パーシバルくん。私は、あの青年をこのままにしておくのはもったいないような気がするんだ。彼くらの実力なら、オーガとだって互角に闘えるだろう。しかし、彼だつてこの村にいるからこそ、純真な田舎青年のままでいられるんだ。もし首都のような大都市だったなら、複雑な人間関係に巻きこまれて、騎士団隊長あたりをねらう出世志向型の人間になつていただろう」

確かに、な。

カールの言う通り、サンソンの実力はかなりのものだ。

仮に俺とネロがサンソンと戦つたとしても、必ず勝てるとは言いきれない。

それだけの力を彼は持っている。

だからこそ、もしサンソンが都市の騎士団なんかに所属していたら、仲間にその実力をうとまれて排除されるか、逆に周りの邪魔者ライバルを蹴散らして貪欲に地位をねらうか、そのどちらかしかない気がする。

でも、それをここで……………フチに言うか？

「それで？」

フチは大人しく話を聞いているが、俺にはだんだんとその言葉に苛立ちが含まれていつているような気がしてならない。

一瞬、止めたほうがいいかも、と俺は思った。  
でも、今はフチとカールの二人が話をしているんだ。  
だったら、俺は口を挟まずに二人の会話を聞いていたほうがいいだ  
ろつ。

カールはフチの様子に気づいているのか、いないのか、調子を変え  
ずに話を続ける。

「それ以上のことはなにもない。この村の人々は強い人間ばかりだ  
が、温かくて、静かな村だ。われわれは、アムルタットと一種のバ  
ランスを保って生きている、ということだよ。しかし、カッセルプ  
ライムがやってきた」

「カッセルプライムは……」

「カッセルプライムがアムルタットを討ちやぶれば……この村はも  
ともと地理的に恵まれているから、大きく発展するだろう。この村  
が、かなりの発展をとげる可能性を秘めた位置にある、ということ  
は、きみもよくわかつているはずだ。いまだ開拓されていない大陸  
の西部をめざそうとすれば、この村が関門になる。今でもミュラカ  
イン・サポーンネにお目にかかれるくらいの村なんだからな」

「それ、そんなに珍しい酒なのか？」

「まあ、珍しい酒には違いないだろう。国王陛下ですら、気のむく  
ままに栓を抜けるようなワインじゃないんだからね」

うわ、そうなのか!?  
じゃあ、さっきタイバーンが百セル金貨を使ったのは適切な値段だったのか……。

「アムルタットがいなくなれば、この村も変わってしまうだろう。繁栄を余儀なくされる」

「いいことじゃないか」

「だがこの村が繁栄を手に入れたら、その後はどうなるかな?」

「えっ?」

繁栄を手に入れた、その後……。

「この村をねらう輩がおおぜい現れるだろうな。村人だって利権と経済に聴くなる」

「……」

「この村の領主さまは心やさしいお方だが、この村を手に入れようとたくらむ連中が押しよせてきたら、はたしてその地位を守りとおすことができるだろうか。いまでこそ、アムルタットの庭みたいなのこの村に、あえて手をだすやつはいないだろう。だからあんな気が

小さい領主さまでも、地位を維持してられるんだよ」

そうだろうか？

確かに領主さまは気が強い方じゃないだろうけど、それでもあの人が  
だつたら今の地位を守りぬくことぐらいはできると思つけど……。

「つまりこの村がこれだけの地理的条件と肥沃な土地にかかえなが  
らも、大陸のいかなる人間の関心も引かず、静かで、たがいに愛  
しながら生きる村として存在するのは、つきつめてみれば、すべて  
アムルタットのおかげというわけだ」

「ちょ、カール。いくらなんでもその言い方は」

「ふざけたこと言うな！」

俺の言葉を遮って、フチの怒号が店に響き渡った。  
だけど、やはり予想していたのか、カールの反応は薄い。

「ならアムルタット、この村の仇であるあの野郎に感謝するべきだ  
つていうのか？ 村が楽園のように美しいのは、すべてアムルタッ  
トさまのおかげでございます、ってな。アムルタットさまのおかげ  
で村人の生存欲求が高まり、勤勉誠実な人間が増えました、って、  
礼を言えいいのか？ あなたさまのおかげで、うじゃうじゃとお  
しよせるモンスターどもが、村の弱い人間ほとんど殺してくれまし  
た。おかげでこの村は強い人間ばかりが残りました。ありがとうご  
ざいます、ってな。あなたさまのおかげで、中部街道の関門である

この村が、発展もせずに牧歌的なまま残されていることに感謝いたします、ってな」

フチは顔を真っ赤にして、カールに向かって怒鳴りつける。  
俺は慌てて、二人の間に割って入る。

「待てよ、フチ！ カールの言い方は悪かったけど、お前だってもう少し冷静になるべきなんじゃないのか!？」

「タクトは黙っててくれよ！ 百歩ゆずって、タクトやタイバーンがそんなふうと言ったんなら、まだ許せるんだ。でも、カール！ カールがなんでそんなことを簡単に言えるんだ？ カールだって、嫌って言うほど見てきただろ。ひと月のうちにひとり、二人と殺されていく村人を……。その家族が泣きさげぶ姿を見てきただろ？ じゃあ、いますぐにその足で、川むこうに行ってみるよ。死体になって四年ぶりにもどってきたカールさんの家族の前で、同じことを言ってみろってんだ!」

俺は昨日のウエアウルフの最後の姿を思い出して、声を詰まらせてしまう。  
フチはカールだけを真っ直ぐに見て、カールもその視線を受け止める。

「その話は私も聞いた。それから、ネドバルくん」

カールは一旦言葉を止めて、ビールを一口飲み、再び口を開いた。

「きみの言ったことは、すべて正しい」

「おい。フチとかいったな。わしが見たところ、このカールという男、ずいぶん若い時分に人間というものに失望してしまったようじゃ。そのせいで、まだ人間を愛してやまぬ、若いおぬしには理解できないようなことを口にしたんだろう」

「ほつといてくれよ！ あんたになにがわかるってんだ。今日、会ったばかりじゃないか」

フチに怒鳴られても、タイバーンは表情一つ変えずに口を開いた。

「だが、こういう人間をずいぶんと見てきたからな」

その言葉には、深い思いが込められているように、俺には思えた。

「フチ。俺はまだこの村に来て半年も経っていない。だから、俺にはさっきのカールの言葉が正しいのか、それとも正しくないのか、そんなことを言える権利はないと思う。でも、この村は美しいと俺も思う。何よりも、カールの言う通り、村の人達の心が。それがアムルタットがいるからなのかはわからないし、ヘルタントがひどい状況にあるのは間違いないと思う。……………けれど」

俺もフチの目を真っ直ぐに見て、言葉を紡ぐ。

「けれど、奪われるばかりのそんな状況でも、手に入るものは確かにあると思っただ」

フチはなにも言わないで、ただ俺を睨む。

俺もそれ以上はなにも言えないので、その視線をただ黙って受け止める。

「コノエくん、もういいだろう。ネドバルくん、私が間違っていたよ。許してくれ」

カールはいつもと違う弱々しい笑みを浮かべながら、口を挟む。

「酒のいきおいで言ってしまったことだ。忘れてくれたまえ、ネドバルくん」

フチはそれでも何も言わずに俺達を見ていたけど、やがて席を立って、背を向けた。

「ネドバルくん？」



そのままフチは背を向けたまま、店から出て行ってしまった。  
俺はそれを見て、溜息をつきながら席に座りなおした。

「カール。さすがにあれは言いすぎですよ」

「そうだな。でもネドバルくんならば、少しは私の言っていることもわかってくれると思ったのだが……」

カールも溜息をつきながら、ビールを一口飲んだ。

「……フチはカールと違って、この村を出たことがありませんからね。どんなに他の人にこの村の人達が素晴らしいと言われても、やっぱり実感が持てないんでしょうね」

「そうか。……そうだな」

「人間は、身近にどんなに価値があるものがあっても。それを失うまでは気付かぬものじゃ」

「コノエくん。きみは、私とネドバルくん、どちらが正しいと思うかね？」

「………わかりませんよ。そんなの」

俺はカールの質問に、少し拗ねながら答える。

……フチの言っていることがもちろん正しいんだけど、カールの言ったことも一理あるのも間違いないんだよな。

レオの目指した、完全平等な不確定要素のないこう着した社会。  
凜の目指した、未来への展望が望める混沌とした社会。  
トワイスの目指した、発展のための万人平等の闘争の社会。

本当に正しい社会なんて、まだ世界をほとんど見ていない俺なんかにわかるはずがない。

……わかるなんて言ったら、命をかけて世界を作りなおそうとした彼らに対する侮辱になるだろう。

俺は牛乳を一气飲みしながら、そんなことを考えていた。

### 3 旅の老人（後書き）

今回の話、ものすごい難産でした……………。

詳しい話は、F A S T A I M E S で書くことにしますが、……………

…いやー、本当に大変でした…；

ちなみに、タイバーンの言っている、マナの流れうんぬんの話は自己解釈が多分に含まれていますので、注意が必要です。

…………… 次回は、もう少し早く更新すると思います。

#### 4 大切な約束（前書き）

珍しく早めの投稿ですが、今回は残念ながら短いです。

## 4 大切な約束

？

？

？

この世を動かす力は希望である。  
やがて成長して果実が得られるという希望がなければ、農夫は畑に種をまかない。

ルター

？

？

？

「サンソン達が今回のアムルタットとの戦いに参加する！？ それは本当なのか、ネロ！？」

「うむ、間違いないぞ。今日の午前中に城の裏門で、そのサンソン本人から聞いたのだからな」

<サントレラの歌>で俺達とフチが大ゲンカしたその日の夜。  
訓練からずいぶんと遅く帰ってきたネロと一緒に夕飯を食べながら、ネロと今日一日のことを話しあう。

俺がフチとケンカしたことを話すと、ネロは深刻そうな顔で聞いて

くれて、その後には本気で心配してくれた。

それとタイバーンの話をしているときに、昨日見た黒い影と関連性があるんじゃないかと怪しんでいた。

そして夕食が終わったあと、今度はネロから話を聞いたんだけど、そしたらいきなり衝撃的な話を聞くことになった。

「どういうことだ？ 確かにサンソン程の実力があつたら、征伐軍にいてもおかしくはないだろうけど、サンソンは城の警備兵隊長だろ？ そんな大きな責任を持つ立場の人間が、勝手にその役割を放棄してもいいのか？」

「いや、サンソンが勝手に志願したわけではないようだ。今回の第九次アムルタット征伐軍には、主な警備兵は皆参加するらしい」

「なっ……」

ていうことは、サンソンだけじゃなくて、ジャレンやターナー、ハリー、セロ……、他のみんなも参加するかもしれないのか！？

「一体、どうしてそんなことになったんだ？ サンソンは何か言っ  
てなかったか？」

「それなのだ、タクトよ！ 余もそこが気になって、すぐにサンソンにその訳を問うたのだ。そしたらな、なんとサンソンが言うには、ヘルタント子爵が今回の征伐軍に参加するつもりらしい」

「はぁ！？」

思いがけないネロの言葉に、俺も驚きを隠せなかった。でもすぐに、何で領主さまがそんな無茶を言い出したのか、その理由に思い至った。

「……………例のアムルタットに殺されたっていう息子さんのかたき討ちのためか？」

「おそらく、な。無論、それだけが理由ではないようだが……………」

俺とネロは暗い顔で、思いを巡らす。

カールに聞いたことがあったんだが、領主さまには昔、『アルバン・ヘルタント』というひとり息子がいたらしい。

優秀な人だったらしく、今も続いている隣国ジャイファンとの戦いで功績を立て、男爵の地位とヘルタントとは違う領土を貰ったほどだ。

しかし、彼は生まれた時からヘルタントを苦しめ続けてきたアムルタットに深い憎悪の念を抱いていた。

十年少し前の第六次アムルタット征伐作戦のときに、彼は自分の領土から自ら軍隊を率いてアムルタット征伐軍に合流した。

そしてその三週間後、ヘルタントにはアルバンスの使っていた兜だけが帰ってきたという……………。

「今回の征伐軍には、首都から例のホワイトドラゴンとハルシユタ

イルのあの童児に加えて、ヒュリチエルとかいう伯爵家からも貴族の輩が来ているであろう？　ここの領主よりも身分の高い人物が戦場に行くというのに、肝心のここの領主が参加しないというのはマズイ……………というのが、表向きの理由らしいぞ」

「なるほどな。そして領主さまが戦場に行く以上、領主さまに雇われている形になる城の警備兵もいっしょに行くしかなくなるということか。……………って、ちよつと待て。俺とネロも警備兵だろ？　それなのに、どうして俺達には何の説明もなかったんだ？」

「ヘルタント子爵が余計な気をきかせたようだ。余とタクトは正式な城の警備兵ではないから、今回のアムルタット征伐軍には参加する義務もない、とな」

俺の言葉に、ネロは溜息をつきながら答える。

「……………領主さまらしいな。こうなったらアムルタット征伐軍に参加しようとしても、絶対に許してくれないだろうな」

「どうするのだ。無理にでもヘルタント子爵に頼んでみるか？」

ネロはあまり気乗りしなさそうな顔でそんなことを言うが、俺も首を横に振って否定する。

「いや。領主さまのこともちろ心配だけど、今回のアムルタットとの戦いは主にカッセルプライムが受け持つはずだから、人間の



部隊はそんなに戦うことはないと思う。それに万が一戦闘になったとしても、サンソン達警備兵が護衛しているなら、領主さまに危険が及ぶ事は少ないと思うしね」

「なるほど……。そうかもしれないな」

「それに……………、俺としてはこの村のことも心配なんだ。警備兵がどれくらいアムルタットとの戦いに参加するのかわからないけど、この村の戦力が低下するのは間違いないだろうからな。それなら領主さまのことはサンソン達に任せて、俺とネロはヘルタントの防衛に専念した方がいいと思うんだ」

「サンソン達も秋になれば、収穫した作物を狙ってモンスター襲撃が増えると言っておったしな。ならば余とタクトが村を守っておるほうが、ヘルタント子爵やサンソン達も安心するかもしれないか」

「ああ」

それにしても、サンソン達が今回の戦いに参加するなんて……。遠くから少し見ただけだが、カッセルプライムの強大な力は理解できた。

ただどそれは同時に、同じドラゴンであるアムルタットもそれほど力を持っているということだ。過去、アムルタットと戦った軍隊はすべて全滅したと、領主さまは言っていた。

カッセルプライムがいるとはいえ、勝っても負けても、こちらの被害は大きなものになる気がする。

「いつ出発するか、わかるか」

「城で訓練をしているときに、下女たちが八日後に出発すると言っておったな」

「たった、一週間ちよつとか……………」

思っていた以上に早い。

警備兵が参加するとはいえ、それだけでは征伐軍の数が足るはずがない。

必然的に不足している人員は、村人からの志願者で埋めるはずだけど、これでは一週間も訓練期間を取ることができない。

警備兵や村の自警団に所属している人はいいけど、当然、今まで武器を握ったこともない人だっているはずだ。

いくらカツセルプライムがいるとはいえ、そんなに本当に大丈夫なのか。

すると、不安になってきた俺を見たネロが、慌てて安心させようとする。

「あ、安心しろ、タクトよ。他の者はわからぬが、サンソンならば大丈夫だ。あやつは今回の戦いが終わったら、例の恋人と婚礼の儀を上げるらしいからな。うむ！ むざむざと死ぬようなことはあるまい！」

「……………ネロ、それ、ちっとも安心できないんだけど」

寧ろ、不安が八割増したような気がする。

「何を言っておるのだ！ 大切な者と約束した者は強いのだぞ、タクトよ！ 生きて帰ろうとする気迫が他の者とは違うのだからな。……そなたも、そうであったであろう？」

「っ！」

そうだった……。

聖杯戦争のとき、俺は何度も約束をした。

ネロとは、一緒にこの部屋に帰って来ようと、マイルームで何度も約束した。

一人だけだったら……、自分の命だけを背負って戦っていたなら、俺は今、ここにいない。

ネロに命を預けて、同時に彼女の命を自分でも背負っていたから、俺はこうして生きている。

七回戦のとき、凜と必ず生きて帰ると約束した。

レオと太陽の騎士との戦いのとき、凜との約束があったから、俺はより一層勝って帰ろうと思うことができたんだ。

そうだ、ネロの言う通りだ。

大切な約束をした人は、いつもの何倍も強くなることができるんだ。

「そうだったな。うん。だったら、サンソンが無事に帰れると信じよう。もちろん領主さまや、他のみんなのことも、ね」

俺はネロに微笑みながらそう言うと、ネロも満足そうな顔でえっへと胸を張る。

「うむ、その通りだぞ、タクトよ。しかし、楽しみだな。ただの婚礼の儀というだけでも、楽しみなのに、それがあのサンソンの婚礼の儀ならば、さらに胸が躍るな！」

「そうだね。それにこの世界の結婚式っていうのが、どういうものなのか知っておきたいしね。いつか俺達もしないといけないんだし」

「なっ  
」

俺の発言にネロは顔を真っ赤にする。

「た、タクトよ。そ、それはつまり余との  
」

「わざわざ説明する必要はないだろ？」

あたふたするネロの言葉を遮り、俺はにっこりとほほ笑みかける。

……ありがとう。

ネロ、本当にありがとうな。

また俺に大切なことを教えてくれたことへの感謝の気持ちを、心の中  
中で何度も繰り返しながら。

#### 4 大切な約束（後書き）

次回の話の展開の都合上この部分を次の話に入れると、妙に区切りが悪くなるので、短いですが別の話にしました。

次回は久しぶりの戦闘になると思います。

## 5 襲撃と救援

？

？

？

目の前の恐怖に真っ向から立ち向かう経験をするたび、  
あなたは強さと勇気と自信を身につけることができます。

エ

レノア・ルーズベルト

？

？

？

タイバインと出会い、フチとケンカしたあの日から三日。  
今日は俺とネロに、サンソン、ハリー、ジャレン、ターナー、セロ  
などの総勢十人という、いつもより多めの人数で村のパトロールを  
していた。

「それにしても、あのサンソンが結婚するなんてなあ」

「ああ、正直まだ信じられないぜ」

「こんなオーガが旦那さんだと、奥さんも大変だろうな」

「まっただくだな」

「……お前ら、あとで城の裏門まで来い」

「そういえば、タクトとネロはいつ結婚するんだ？」

「えっ？」

「そ、そなたら、突然何を申すか!？」

「いやー、だって二人ともこんなに仲がいいしなあ」

「いつそのこと、サンソン達といっしょに結婚式をあげればいいんじゃないか？」

「確かに」

「そうしたいのは山々なんですけど、ネロはともかく、俺はまだ半人前ですから。ネロにふさわしい人間だって自信を持って言えるようになるまでは、そんなことはできませんよ」

「た、タクトよ……」

「……よく、人前でそんなこと言えるよな」

「さすが、タクト……」

「はあー。オレも彼女がほしいぜ」

「真面目な話。タクトと結婚する女性は幸せになれるだろうな」



「ああ、そつだな。それには頷ける」

「だったら、逆にサンソンとだったら……」

「うーん。微妙だろ」

「よし、おまえら。今日はここで訓練をしましょう。……訓練の内容は、おまえらがオレの剣を延々と避け続ける、というものにするぞ」

「おお……。サンソンの目が笑ってない……」

「ターナー、安心しろよ。こんなオーガなんかと違ってオレは、ちやんとおまえの可愛い妹を幸せにしてやる自信があるから」

「ぶっ殺すぞ！」

そんな感じで、みんなで他愛のない話をしながら見回りを続けていると。

「っ！」

「む！？ モンスターか！？」

村の外れから放たれた人外の殺気に、俺とネロはいち早く気づいた。ヘルタントでは一月に一、二回はモンスターが襲ってくる。

そのためたび重なるモンスターの襲撃のおかげで、俺とネロの気配

を感じる能力はかなり強くなっている。

おかげで今では村の周辺にさえいれば、モンスターが村のどこから侵入してもわかるようになってきた。

……喜んでいいのか、微妙な気分だ。

「モンスターの気配を感じたのか。二人とも、場所はどのへんだ？」

サンソンが険しい表情を浮かべながら、俺に尋ねる。

俺とネロが来るまで気配のことを知らなかったサンソン達も、この半年余りの付き合いのおかげで、今ではすっかり俺達の気配察知を信用してくれるようになった。

「たぶん、村の外れ。ここからだちょうど南西の方角」

「その方向なら、大通りのはずれ辺りか。よし、タクトとネロはオレといっしょに先に向かって、逃げ遅れた村人の救出。セロは城で待機しているやつらを呼んで来い。残りは、隊列を保ったまま、オレたちのあとを追って来い！」

サンソンの命令でジャレン達はすぐに隊列を組み、セロはすぐに城に向かって走り出した。

俺も早く準備をしないと。

「move speed」

俺もすぐに肉体強化の呪文を使う。<sup>コトドキャスト</sup>  
<sup>コトドキャスト</sup>呪文を唱え終わると、俺の体の中心から力が湧いてくる感じがした。  
よし、いける！

「急ぐぞ、二人とも！ 下手すれば、クソったれなモンスターにも  
う誰かが襲われてるかもしれない！」

「ああ、わかってる！」

「安心せよ。余とタクトがいる限り、村人には傷一つ付けません！」

俺とネロ、そしてサンソンは全力で走りだした。  
誰も、死なせるもんか！

？

？

？

「きゃあああああー！」

「…」

「くそっ、遅かったか!？」

前方から聞こえてきた女性の悲鳴に、俺達は顔しかめる。くっ、モンスターの所まであと少しだって言うのに!

「タクト、サンソン、前を見る! 誰かおるぞ!」

まだ距離があるためよくは見えないけど、目を細めて前を見ると、確かに何人かの人が集まっているのが見えた。逃げ遅れた村の人たちか!?

「あれは……、フチか!? くそ、あいつこんなところで何してんだ!」

集団の中にフチの姿を見つけたサンソンが悪態を漏らす。

逃げ遅れたのはフチのほかに、村人らしい男性が四人と、一目で重傷だとわかる女性が一人だった。

重傷を負った女性は男性の一人が背負っているけど、あのままだとかなりマズイ状態だろう。

……いや、待てよ。

あの人たち、どこかで見たことがあるような……?

「なっ……! タクトよ、あのフチ以外の者たち。余達がここに来

て最初に出会った村人たちではないか!？」

「えっ……」

慌てたようなネロの言葉に俺も急いで目を凝らして見ると、逃げ遅れた人の中におじさん達がいるのが見えた……!

しかも、大けがをしているあの女性は、あのおきのおばさんじゃないか!

「ちくしょう! これでも受け取れ!」

フチが悲痛な叫びを上げながら、近くの鍛冶屋からスキヤクワを放り投じているのが見えた。

おじさん達はニヤリと笑いながら、それを拾い上げている。

「まさか、モンスターの足止めをするつもりなのか!？」

おじさん達の顔には、いつか見たあの死を覚悟した表情が浮かんでいた。

そんなこと、させるもんか!

「言い残す言葉は!」

「もう伝えてあるから心配すんな。さっき背負われていったのは、

うちの女房だ！」

「ソフィアへ。約束を守れなくてすまない」

「ジャックへ。約束どおり、母ちゃんを」

「そんなことを言う必要はありませんよ、おじさん！」

おじさんの言葉を遮るように、俺は全力で叫ぶ。  
なんとか、間に合った！

フチやおじさんは突然聞こえてきた声に驚いていたみたいだけど、  
やってきたのが俺達だとわかると、喜びで顔を輝かせた。

「た、タクト、ネロ、サンソン！」

「話は後だ。フチ、お前は早く逃げる！」

サンソンに怒鳴られると、フチは慌てて走り出した。  
俺はひどい傷を負ったおばさんに回復呪文をかける。

「recover」！

まばゆい光がおばさんの全身を包み、そのひどい傷を癒していく。

recover)は俺が使える中でも最高の回復呪文だ。  
もしこれで効き目がなかったら、かなりまずい。  
頼む、効いてくれ！

光が消えると、俺は祈りながらすぐにおばさんの状態を確認する。

「た、タクト。女房の様子は……？」

おばさんの旦那さんが、心配そうに聞いてくる。

俺はおじさんの目を真っ直ぐに見て、答えを言う。

「大丈夫です、おじさん。傷はほとんど塞がりましたし、呼吸も脈も問題ありません。命は助かったはずですよ」

「ほ、本当か？」

「はい。おばさんは助かりましたよ」

俺が笑って言うと、おじさんは涙を流しながら、何度もお礼を言うてくれた。

……ありがとう、凜。

凜のくれた礼装のおかげで、また大事な命を守ることができたよ。

俺がとりあえず安心していると、他の人達から話を聞いていたネロが苦々しい顔つきでこっちにやってきた。

「タクト。あの者達が言うには、今回侵入してきたモンスターはトロールのようだぞ。おまけに数は十体はいるそうだ」

「トロールか、厄介だな」

俺もネロに負けないくらい苦々しい顔になる。

トロールは体の大きいモンスターで、武器として石斧をよく使う。力は強いが、ずいぶん前に戦ったオーガほどではないし、頭がかなり悪いため、簡単な罠にもすぐに引っかかる。これだけならたいして強いモンスターのように思えないが、実は数多くいるモンスターの中でもかなり面倒な相手に入る。

その理由は、トロールの再生能力にある。

トロールには受けた傷を自動再生するという、ネロの『インウィクトゥス三度、スビリートゥス洛陽を迎えても』のような能力を生まれながら持っている。

そのため元々の強靭な生命力に合わさって、かなりひどい致命傷を受けない限りトロールは死ぬことはないのだ。

……二か月前に初めてトロールと戦ったとき、そのあまりのしぶとさに俺はあの移動城塞バーサーカーとの戦いを思い出した程だ。



「よし、事情はわかった。おまえ達もすぐに逃げる！」

サンソンに言われ、状況を説明するために残っていた男の人達も、まだ意識の戻らないおばさんを背負って走り出した。

一瞬、おじさん達から心配そうな視線を向けられたけど、俺が何も言わずに笑顔を向けると、一つ頷いて背を向けてくれた。

「ネロ、あまり時間もないからさっそくいくぞ！ gain | s t  
r ( 3 2 ) ! さらに、 gain | c o n ( 3 2 ) !」

「うむ、よいぞ。力が湧いてくる！」

おじさん達が走り去った後、俺はすぐに二つの肉コードキャスト体強化の呪文を使って、ネロの筋力と体力を底上げする。

……さつきから、モンスターの気配が強くなってきている。  
たぶん、もうすぐここまでやってくる。

「ネロ、サンソン！ そろそろ来るぞ！」

「任せよ。余はいつでも戦えるぞ！」

ネロは自信満々の表情でお手製の大剣を構え、サンソンも持っていた槍をすぐにも投げられるようにしている。

俺も腰に差していた剣を抜いて、辺りの気配を探る。

「ネロ、それとタクト。オレたちの役目は、あくまであの人たちが逃げるまでの足止めだ。わかっているとは思いますが、無茶な行動は避けるよ!」

「わかってる!」

サンソンに言われるまでもない。

ただでさえトロールとの戦いは骨が折れるというのに、今回は十体以上の集団できているというのだ。

いくらネロとサンソンが強いとは言っても、それだけの数を相手にするのは不可能だ。

それに少し待てばジャレンやハリー達が到着するはずだし、上手くいけばゼロの呼んだ応援部隊も来るかもしれない。

これだけの条件がそろってるんだから、俺達の仕事はそれこそ足止めぐらいで大丈夫だろう。

そんなことを考えながら三人で固まって陣を作っていると、前方から今までのよりも強烈な殺気とモンスター特有の気配が近づいてきた。

「ギルルルル!」

「む!」

「きたな!」

それとほとんど同時に、明らかに人間のものではない叫び声が前方から聞こえてきて、ずんぐりとした黒い影が現れた。

ん？  
でも？

「数は二体だけか。トロールのくせに一丁前に斥候のまねごとか？」

サンソンの言う通りやってきたのは話にあった集団ではなく、たった二体のトロールだった。

「いや、単純にあいつらだけ他のトロールよりも足が速いだけじゃないかな？」

「まあ、どちらにせよ、ラッキーだ。二体だけだったら、オレたち三人だけでも十分に戦える」

「サンソンよ、作戦はどうするのだ？」

「仲間が合流する前にあの二体をさっさと倒す！ ネロとタクトは左のやつを頼む。オレは右のやつを片づける！」

「わかった」

「うむ、任せるがいい！」

サンソンの指示に従ってネロは右のトロールの前に出る。  
するとネロの体から放たれる鬨気に気付いたのか、トロールは咆哮を上げながら石斧を振り上げて突進してきた。  
だけど。

「さっそく、余の出番だな！」

ロサ・イクトウス  
「花散る天幕！」

そっちのほう为好都合だ！

トロールが反応するよりも早く、ネロの剣がその無防備な体を斬り裂く。

「ギルルルルル！」

右わきを斬りつけられたトロールは怒りの形相で後ろに振り向き向こうとする。

だけど、そのときにはすでにネロが次の攻撃の体勢を整えていた。

「まだ終わらぬぞ。」

ロサ・イクトウス  
「花散る天幕！」

「ギルルルルルルル！」

間髪いれずに放たれたネロの一撃に、さすがのトロールもしばし悶

絶する。

はつきり言つて、トロールの再生能力はかなり強力だ。

でもだからと言って、別にトロールは不死身でもなんでもない。

再生能力を上回る傷を受ければ、普通に死ぬ。

……だつたら、こつちは最初から全力でトロールにダメージを負わせればいい。

悪いとは思つけど、このまま一気に終わらせる！

「ダツシュ！」

「はっ！」

「ギル!?」

両わきから流れる血に気を取られていたトロールは、突然自分の真

正面に現れたネ口にすぐに反応できない。

その隙が、このトロールの命取りになる。

「ふっ！ やっ！ たあっ！」

見ているこつちが惚れ惚れするようなネ口の剣技に、あっという間に負傷していたトロールは新たに七つもの鮮やかな剣痕を受ける。上半身のいたる所に深い傷を負ったトロールは口から血を吐いて、持っていた石斧を取り落とすが、そこに回転切りの要領で振り落とされたネ口の剣が襲いかかる。

「斬り捨てる！」

すでに普通の生き物なら致命傷になりあえる傷を体のいたる所に負っているトロールには、避けることも、防ぐこともできず、頭の先からこの必殺の一撃を受けるしかなかった。

「ギ……………」

ちよつと体の中心を真つ直ぐに斬り裂かれたトロールは、短いうめき声を上げ後ろに倒れる。

ネロは表情を変えずに、倒れたトロールの頭に無慈悲に剣を突き刺す。

……正直かなりおぞましい光景だけど、ここまでしないとトロールは再生してまた襲いかかってくるかもしれないのだ。

ふと、サンソンの方を見ると、体に槍が突き刺さり仰向けに倒れているトロールの首に、何度も剣を振り落としている最中だった。

「うむ、向こうも終わったようだな」

すると、顔についた返り血を嫌そうにふき取りながらネロが戻ってきた。

「でもすぐにも次のトロールが現れるかもしれない。一応、サン

ソンのすぐ近くにいたほうがいいだろうな」

「うむ、そうだな。……お。ちょうど他の者たちも着いたようだな」

ネロに言われて後ろを振り向くと、応援を呼びに行ったセロ以外の六人の仲間がこっち向かって駆け寄ってくるところだった。

さすがに距離があったせいか、どうやら応援部隊はまだ到着しないようだ。

俺とネロはやってきたハリー達と一緒に、素早くサンソンの周りを囲む。

「トロールだ。二匹片づけたが、まだ五匹以上は……ちくしょう！

また、やってきやがったな」

サンソンが早口で状況を説明していると、新たなトロールの集団がこっちにやって来るのが見えた。

トロールはこちらに気づくと、ズラリと並んで睨みつけてきた。

全部で八体。

少なくとも、おじさん達が目撃したトロールはこれで全てだろう。

「総員、戦闘準備。タクトは後ろでオレたちの援護に集中。残りはトロールとの戦闘に参加。わかっているだろうが、絶対に無理はするな！」

サンソンは難しい顔で考えた後に、俺達に指示を出す。

数の上では九対八と俺達の方が有利に思えるけど、実際には俺が直接戦闘に参加できないし、相手はあのしづといとロールだ。

下手すれば、こちらもかなり危ない。

実際、警備兵の損害を考えればここは一旦退くというのも一つの手なのは間違いない。

それに今回はかなり早い段階で城で待機しているメンバーに襲撃を伝えることができたから、援護部隊がこちらに来るのもそんなにからはないはずだ。

援護部隊と合流してから戦うというのが、一番安全で確実な策だろう。

ただどこで俺達が退けば、当然トロール達もこちらを追いかけにくる。

そうなったら逃げ遅れた村人がこのトロールと遭遇する可能性だってでてきてしまう。

だから、俺達はここで退くという選択肢はできるだけとらないほうがいいのだ。

俺はトロールの方から注意をそらさないまま、ネロに話しかける。

「……ネロ。俺が一番前にいるやつを怯ませるから、その間にそいつを一撃で倒すことはできるか？」

「聞き方が間違っておるぞ、タクトよ。そなたがそうして欲しいというのなら、余はそれが例え、美しき天上の星々を手に入れよとい



「無茶な願いでも、必ず達成してみせるぞ？」

「……わかった。だったら、頼む」

「任せよ！」

ここでネロがトロールを倒すことができたら、こちらの勝率　と  
いうよりも生存率　はかなり上がる。

ネロにはかなり無茶なことを頼むことになるけど、上手くいけばこの戦いはすぐに終わらせることができる。

サンソン達はなにも言わないけど、さっきの会話は聞こえていたはずだ。

それでも何にも言わないということは、向こうも俺の賭けに乗ってくれるということだろう。

俺は一回深呼吸してから、目をつぶって神経を集中させる。

そして、目を開け呪文を唱えるのと同時に手を眼前に突き出す。

「shock(64)！」

目視できないほどの速さで撃ち出された黒い魔力弾が、他のトロールよりも前に出ていた一体を襲う。

「今だ、ネロ！」

「うむ！」

俺はトロールがshock(64)を受けて動きが鈍くなるのを素早く確認してから、ネロに指示を出す。  
そしてネロが剣を構えて駆けだす。

そのときだった。

「……………ウン……………メイ……………ノ……………ワ……………」

529

「っ!?!」

「ぬう!?!」

「なに!?!」

突然襲ってきた冷たい殺気に、走りだそうとしたネロも、そのネロを援護しようとして構えていたサンソンも、他の警備兵達も、そしてもちろんこの俺も、この場にいた全員の動きが止まった。

この人間のものとは思えない冷たい殺気に、機械的な没個性的な声……、そして、なによりも直接見なくても感じられる、この猟犬のような鋭い視線　！

俺は誰よりも早く、殺気の放たれたであろう方向に視線を向ける。

そこにはやはり、サバイン溪谷で出会ったあの黒い影が存在していた。

？

？

？

「……………」

黒い影は不気味なくらいに沈黙を保っている。

相変わらず俺に対してバンバンに殺気をたたき込んでいるが、だからといって別に襲ってくるわけでもないし、何か言うわけでもない。直立不動のまま、ただこちらを睨んでくるだけだ。

俺はその間に、できるだけ冷静に黒い影を観察するように努力する。

姿は前にサバイン溪谷で見たときと同じように、黒いぼろきれで全身を覆ったような姿。

昼間だというのに相変わらずその姿からは、男なのか女なのか、ましてや本当に人間であるかどうかさえもわからない。

だけど、あのとときと違って俺は一つだけ確信したことがあった。

それは。

「体が揺らめいている……？」

黒い影を見ていたハリーが茫然と呟く。

そう、それなのだ。

前回会ったときは夜だったので見間違いかもしれないと思った。だけど、違った。

あの黒い影は比喻でもなく言葉通り『体が揺らめいて』いる。

まるで霧のように体の輪郭ははっきりとせず、ぶれて見えるのだ。

「……むう。ただの幻覚か、それとも盗賊アーチャーや暗殺者アサシンのようになんら



「なに!？」

そのとき、ネロが黒い影の攻撃を防ぐことができたのは、正直、運によるものが大きかったと思う。

俺はもちろんのこと、ハリー達やあのサンソンでさえも、あの黒い影の攻撃にちゃんと反応することができなかったのだから。

突然襲いかかってきた拳をネロはとっさに剣を構えて防御することに成功する。

だけど完全に勢いを殺しきれなかったのか、その顔は苦痛にゆがんでいた。

「アアアアアアアアッ！」

黒い影はそんなネロの様子を気にすることもなく、狂ったように拳を振るう。

風を鋭く切り裂きながら、次々とネロに向かって拳が飛んでくる。

単調ながらも一つ一つが非常に重く、速いその攻撃を、ネロは右に左に細かく剣を操ることなどでなんとか防ぐ。

「っ………！ 舐めるでない！」

しばらく守勢に回っていたネロだったが、黒い影の見せた隙をついて強引に剣を大きく横に振る。

さすがの黒い影もその攻撃には、後ろに飛んでかわすしかなかった。

「ギルルルル！」

黒い影が後退したのを見て正気に返ったのか、今までこちらをポカッと見ていたトロール達が一斉に向かって来た。

「全員退却！」

我に返ったサンソンは素早く俺達に指示を出す。

突然の黒い影の出現に茫然としていた警備兵達は、その言葉で冷静さを取り戻して踵を返して走り出す。

黒い影と戦っていたネロも、相手がトロールの咆哮に気が向いた隙に離脱して、すぐに俺達に合流した。

トロールは一瞬茫然としていたが、すぐに血相を変えて追いかけてきた。

もちろん、あの黒い影も一緒だ。

今回のサンソンの指示も的確だ。

一見すると恐怖にかられた作戦のようにも思えるけど、実はそうではない。

先ほど言ったように、俺達警備兵は村人への被害を抑えるためにモンスターとの戦いで退くことはない。

ただし、それはこちらと向こうの戦力がある程度拮抗しているときだけの話だ。

あの黒い影がトロールの味方だとは思えないけど、それでも俺達の敵なのは間違いない。

事実上、八対九の戦力差で、おまけにこちらはあの黒い影の突然の出現に少なからず動揺している。

こんな状態で戦うのは危険すぎる。

だったら敢えて一旦退けば、その間に警備兵の頭を冷やすことができるし、援護部隊とも合流することができるかもしれない。

そうなればこちらの勝利はほとんど揺るがない。

……唯一の懸念は、やっぱりトロール達が村人を襲う可能性だけだけど、それもたぶん大丈夫だろう。

モンスターの襲撃自体はセロがもう城に報告しているだろうし、詳しい話はきつとおじさん達が話してくれているはずだから、もうこっちの方には誰も残っていないはず。

「って、フチとジェミニ!?　なんで、こんなところにまだいるんだ!?!」

思わず絶叫してしまう。

なぜか、先に逃げたはずのフチと、さっきまでいなかったはずのジェミニが道の真ん中にいたのだ。

俺達に気付いたフチはどうしようもないとでも言いたそうな顔で、こっちを見る。

「ジェミニが動かなくて……」

慌てて見ると、ジェミニは青白い顔で前のトロール達だけをうつろ



な目で見ていた。

しゃっくりを何度もして、一見して放心状態にあるのがわかる。……突然、トロールと遭遇してしまったから恐怖のあまり、正気を失っちゃったのか……。……いや、それともあの黒い影の殺気を浴びたからか？ どちらにせよ、すぐには正気には返りそうにないな。

フチは必死になってジェミニを抱き起こしていたけど、次の瞬間、サンソンと目があった。

「ジェミニをたのむ。言い残す言葉は……おまえは生まれたときからずっと、このオレに恥をかかせてきたけれど……」

「半人前が、なに気どってやがる！」

ごっんっ！

おお、いい音がした。

悲壮な表情で最後の言葉を語っていたフチの頭に拳骨をたたき込んで、サンソンは再びトロールの群れに突っ込んだ。

……ジェミニがこんな状態の以上、もう逃げることはできないからな。

ごっんっ！ ごっんっ！ ごっんっ！ ごっんっ！ ごっんっ！  
ごっんっ！

ターナー達もフチの頭を叩きながら、サンソンに加勢する。  
七人もの人数に脳天を叩かれたフチは軽く涙目になっている。

「ネロ、お前も行ってくれ。俺はここでなんとかジエミニを正気に返してみる」

「うむ、わかった。……それと、フチ。「冗談でもあのようなことは二度と言つでない」

「ごつんっ！」

ネロもまたフチの頭に容赦のない一撃を加えてから、再び黒い影と相対する。

「……………大丈夫か、フチ？」

「正直、死にそう……………」

うん、もうフラフラだね。

少しだけフチに同情しながら、俺はジエミニの様子を見る。

ジエミニは完全に力が抜けているらしく、だらんとした様子で伸びている。

なんとかフチが抱きかかえているけど、もし今フチが手を離したらそのまま地面に倒れ込んでしまうだろ。

「ジエミニ。おい、ジエミニ」

俺は名前を呼びながらジエミニのほおを軽くたたくが、相変わらずジエミニの様子は変わらない。  
くそっ、さすがにまずいかな。

「アアアアアアアアアアアッ！」

「むっっっ！」

後ろから絶叫が聞こえたので慌てて視線を移すと、そこには黒い影の猛攻を受けているネロの姿があった。

さっきと変わらず黒い影は単調ながらも、肉体強化したネロでさえたじろがせる程の強力な攻撃をしている。  
ただどさっきと違う点が一つあった。

それは、黒い影がいつの間にか手に『武器』を持っていたところだった。

『それ』を見たフチがぎょっとしたように声を上げる。

「あ、あれってオレが鍛冶屋から取ってきたクワか!？」

黒い影が手に持っていた『それ』は、さっきフチが放り投げていたクワだった。

別に何ら変わることはない普通のクワで、刃の部分は鉄製で握り手の

部分は木製という一般的な物だ。  
木製であるということ差し引いても、とても武器としては向いてない農機具だ。

それなのに、黒い影はそれを剣か槍かのように振り回しているのだ。

「くっ！」

猛攻を続ける黒い影の前に防戦一方のネロは、なんとかクワを弾き、その隙に横薙ぎに大きく斬りつけようとする。

しかし、黒い影は軽い動作でクワの柄の部分でネロの剣を防ぎ、そのまま反撃を開始する。

ネロは態勢を崩しながらも、なんとかその攻撃を防ぐ。

その攻防を見た俺は思わず呟く。

「……………おかしい」

ネロの攻撃をいとも簡単に防いだ黒い影の技術にも驚いたが、それよりも不可解だったのはその手に持っているクワの方だった。

いくらクワが武器に向かないと言っても、刃の部分が鉄である以上、当然殺傷能力はある。

だからそれでネロを攻撃するのは……まだわかる、理解できる。

だけど鉄製なのはあくまで刃の部分だけで、残りの部分は完全に木製だ。

ただ細く削られただけで、何の加工もされてはいない。

それなのに、さっき黒い影はその木製の柄の部分でネロの剣を防いだのだ。

……そんなこと、普通あり得るはずがない。

「いや、待てよ……」

よく見ると、黒い影の持っているクワは真っ黒になっていた。

さっきフチが放り投げたときは普通の色をしていたから、あの黒い影がなにかしたのだろう。

おそらくクワが妙に頑丈になっているのと、色が変わっているのは、何か関係があるに違いない。

強化の呪文……？

それともなんらかのスキルか……？

「くっっ！」

考え事に集中していると、ネロ達とは別の方向から悲鳴が聞こえてきた。

慌てて見るとターナーが足を石斧で打ちつけられていた。

トロールは咆哮を上げながら再び石斧を振り上げるが、そのとき近くで戦っていたサンソンに体当たりを食らわされ、バランスを崩してしまった。

「ターナーさまの命の代償として、きさまら三匹の命をいただくぜ！」

その隙にターナーはよろよろと起き上がり、剣を構える。  
だが足の骨が折れたのか、その顔は痛みで真っ青になっていた。  
……まずい、このままじゃじり貧だ。

ネロが抜けて七人でトロールと戦うことになったサンソン達は、数の違いから徐々に劣勢に立たされていた。

俺もshock(64)をトロールに撃ち込んで動きを鈍らせているけど、相手の数が多すぎてあまり役に立っているとはいえなかった。

ネロの方は、黒い影がほとんど防御を放棄してネロに肉迫して攻撃を続けているため、離れている俺からは援護ができない状態だった。……俺がネロに指示を出し続ければあるいは状況を挽回できるかもしれないけど、サンソン達が劣勢な以上、下手すればトロールが俺とフチ達の方に向かって来る可能性もあるため、俺はネロの方に集中するわけにもいかず、どっちつかずの状態にいるしかなかった。

「うっ……ぐ！」

「ネロ!?!」

黒い影の振るったクワがネロの腰を激しく打ち付ける。

ネロは痛みで顔を歪ませながらも応戦するが、その動きはさっきまでよりも格段に落ちていた。

どうする。

このままじゃ、本当に………!!

「ああ、ありがとう……あ！」

「トロールじゃな？」

「はいっ！ あ、あんた、魔術師だろ？ あいつらをどこかにふきとばしてくれよ！」

俺が必死に考えていると、後ろからフチと別の誰かが話しているのが聞こえた。

どうやら、前の戦闘に集中しすぎて後ろから近づく人の気配に気づかなかつたらしい。

慌てて俺は後ろを見る。

「タイバーンさん？」

振り向くとそこには未だ意識の戻らないジエミニを背負ったフチとこの間村にやって来た魔術師のタイバーンがいた。タイバーンは見えない目で俺とフチを見る。

「この声には聞きおぼえがある。＜目の見える盲者＞に＜若き魔術師＞じゃな。さて、フチとやら。悪いが、なにか見えんことには、ふきとばすなんてことは……」

「な、情けない！ じゃあ、魔法がいったいなんの役にたつて…

…

「おぬしが……。いや。おぬしらがわしの目になれ」

……？

どつという意味だ？

「なんだつて？」

フチも俺と同じ気持ちだったのか、うるたえたような声をしていた。タイバーンはそんな俺達の様子にイライラしたように叫ぶ。

「距離と方向。早く！」

なるほど！

そういうことか！

俺は未だによくわかっていないフチの代わりに大声で叫ぶ。

「方向は北東で、ちょうど俺達の前方。距離は……。……三十キユビツト。敵はトロール八体に、……。……よくわからない何かが一体です！」

「おお、あの奇妙な魔力を発しているやつじゃな。なんの魔術をしなくても、あの感覚はわかるわ」



……奇妙な魔力？

そつえば戦いに夢中で気付かなかつたけど、さつきからあの黒い影と持っているクワから魔力を感じるような……？

「でも敵味方が入り乱れて戦ってるんだ！」

「かまわん」

俺の疑問とフチの懸念を余所に、タイバーンは腕をすつと上げた。次の瞬間、俺は自分さつきまでの疑問が吹き飛ぶほどの驚愕的な場面を目撃した。

「い、入れ墨が……！？」

タイバーンの腕に彫られている刺青が、輝きだした。

おまけにただ輝きだしただけじゃない。

光といつしよに、この間タイバーンと初めて会ったときと同じ、いやそれ以上の魔力が噴きあがっていた。

光と魔力はだんだんと強くなり、そのまま首と頬の刺青からも放たれはじめる。

絶句する俺とフチを見て、タイバーンはニヤリと笑う。

「呪文を体に彫りつけて、体を魔法書として使う技だ。おぬしらは

いま、世にも珍しいものを目にしておるんじゃないぞ!」

な、なんだって……!?

俺達の反応を待たずに、タイバーンは呪文を唱えだす。

ちゃんとした魔術師ではない俺でもわかる、複雑かつ緻密な詠唱だ。やがて詠唱の終わったタイバーンは腕を振り上げて、叫ぶ。

「ディテクトメタル! ディテクトマジック! プロテクト・フロム・マジック! リバースグラビティ!」

「なっ!?!」

「うわああ!」

「ギルルル?」

タイバーンの呪文が発動した瞬間、トロールと黒い影が全員、空中に向かって結構な速さで浮かび上がる。

俺やフチはもちろん、さっきまで戦っていたネロやサンソンたちも皆、驚愕の表情でその光景を見ていた。

トロール達は手をバタバタして抵抗していたが、どうすることもできずに上昇していつてしまった。

黒い影もいっしょに浮かび上がったが、その殺気をたたえた鋭い目

で俺を睨んできた。  
悪寒が体中を駆けまわる。  
やばい！

「アアアアアアアアッ！」

咆哮を上げながら、黒い影は手に持ったクワをまるでブーメランのように俺の方に投げしてきた。

「程度があろう！」

ただどその悪あがきのような一撃は、黒い影の行動を読んでいたネ口によってたやすく防がれた。  
あ、危なかった……。

黒い影は怨嗟の目で俺を見ながら、空に向かって消えていった。

「ふむ、無事に終わったようじゃな」

「タイバーン、今のは……………？」

黒い影が完全に見えなくなってから、俺は腕を上げたままのタイバーンにさっきの魔術について尋ねる。

「なーに、ちょっとあいつらの重力を逆さまにただけじゃよ」

……いや、それってちょっととは言わないと思います。

この人、どれだけすごいんだろう………？

「さて、そろそろかの。おおーい、警備兵たちよ。みんな、ちょっと下がってくれ」

言葉のない俺達を置いて、タイバーンが気楽そうに言うと、サンソン達は青ざめた表情で、後ずさった。

フチが皆下がったことを伝えると、タイバーンは頷いてから腕を下におろした。

すると、今まで感じていた魔力が消えたのがわかった。

魔術の消えたトロール達は、今度ははるか上空から悲鳴を上げながら地面に向かって落ちてきた。

うっ………これは………。

「ギルルル！ ギッ！ ギギッ！」

あまりにも凄惨な光景に、その場にいた全員が目をそらした。

ちなみに、意識がはつきりしてないとはいえジェミニにこんな光景は見せられないと思ったのか、フチは自分の手でジェミニの目を塞

いでいた。

「……さすがのやつらも、こうなったらどうしようもなかるうな」

「……再生する暇もなかっただろうからな」

完全にバラバラになったトロールの体をできるだけ見ないようにしながら、俺とネロは言葉を交わす。

「うむ……。ところで余と戦っていたあの面妖なやつはどうなった？」

「……あそこでトロールと同じ状況になっているよ」

俺は一瞬だけ視線を『黒い影だった何か』に向けて、すぐに逸らす。……あれは、トロールの死体以上に見てはいけないものだ。

「おぞましい音じゃ。ふふん、目が見えないことで得することもあるんだな」

タイバーンが笑いながらそう言っていると、サンソンが青ざめながらこつちにやって来た。

サンソンは頭を下げてから、震える声で話し始める。

「サ、サンソン・パーシバル。ヘルタント城の、け、警備兵隊長で  
あります。ま、魔術師どのは……？」

「タイバーン。放浪者。全部片づいたのか？」

「は、はい？」

「あれで全部か？」

「あー！」

タイバーンの指摘にサンソンは驚いた声を上げ、すぐに指示を出す。

「侵入したトロールがほかにもいないか、捜してこい！ 食料蔵だ  
！ 村の食料蔵にむかえ！ 村はずれの農家も見まわれ！ ハリー  
は城にむかって、セロたちにこのことを伝える！ それから、タク  
ト、ネロ、おまえらはターナーを見てやれ」

警備兵達はすぐに走り出して、俺もすぐにターナーに駆け寄る。

「大丈夫か、ターナー？」

「す、すまない。どうやら足の骨が折れたみたいだ」

ターナーの足を見ると、確かにパンパンに赤黒く腫れていた。俺はすぐに呪文を唱える。

「h e a l ( 3 2 ) !」

俺の手から出た光がターナーの足を包むと、すぐに腫れが引いて行った。

「どうだ、まだ痛いか？」

「いや、もう大丈夫みたいだ。ありがとう、タクト」

「気にしないでくれ。俺は今回、あんまり役に立てなかったんだから、これくらいはしないとな」

俺が苦笑すると、ターナーも微笑んでくれた。

「驚いたの。タクト、おぬし、そんなこともできるとはな。はは、わしの出る幕でもなかったようだな」

その光景を見ていたタイバーンが少し驚いたように言った。

「ターナー、歩けそうか？」

「本調子とは言えないかもしれないが、戦闘になってもなんとかするとは思っぜ」

ターナーがニヤリと笑って言うと、サンソンも一つ頷く。

「わかった。ターナー、ネロ、タクト。オレたちもすぐに食料蔵にむかうぞ」

「待ってくれ。まだジェミニの意識が戻ってないんだ。さすがにこの状態で放っておくのはまずいから、俺はここに残ってもいいか？」

「そうだな、わかった。だったらタクトはこの場に残って、ジェミニの介抱をしてくれ。もちろん、意識が戻ったらすぐにおまえもオレたちに合流しろよ」

「わかってる」

俺が頷くと、サンソンとターナーはすぐに走り出した。

ネロは一瞬迷っていたようだったが、俺が大丈夫だと言うと、真面目な顔で頷いてからサンソン達の方へ駆けだした。

ネロが行ったあと、ジェミニを見ると、相変わらず虚ろな目でぼうつとしていた。



「ふむ、なにかあったのか？」

目が見えないタイバーンは状況がよくわかってないみたいだ。  
フチがすぐに説明する。

「ああ、この娘がおかしいんだ」

「なにい？」

……いや、フチ、その説明じゃ全然わかんないと思うぞ。  
ジェミニが心配だからって、慌てすぎだ。

「さっきトロールの姿を見てから、ずーっとうつろな目をして、し  
ゃっくりばかりしてるんだ。意識がないみたいんだけど」

「よくわかっておるな。意識がないんじゃないよ」

タイバーンがニヤニヤ笑いながら言う。

「どうすればいい？」

「タイバーンさん、俺からもお願いします。俺もこういうのには慣  
れていませんから、正直どうすればいいのかよくわかんないんです」

俺達二人が頼むと、タイバーンはジェミニの顔に手を伸ばして触りだした。  
自分の顔を触られても全く反応しないジェミニに、フチはいよいよ心配になってきたようだ。  
タイバーンはしばらくジェミニを調べていたが、やがてフチの方を見て神妙な顔で口を開く。

「おぬしの恋人か？」

……。

「……よけいなことを聞く前に、なんとかしてくれよ」

「おぬしの恋人なら、かんたんな方法がある」

「は？」

「気絶してしまった娘を眠りから覚ます、伝統的な方法があるじゃろ」

毒りんごを食べた女性や、茨の森で眠っていた女性の目を覚ましたアレか？

「……眠りこけたお姫さまじゃなかったか、それ？」

「気絶も、眠りも、似たようなものじゃ」

フチはタイバーンの言葉を聞いて頭を抱えて、本気で悩みだす。  
うーむ。

フチのやつ、心配のしすぎで軽く理性が飛んでるなー。

「タイバーンさん、フチをからかうのもほどほどにして下さいよ」

俺が呆れながらそう言うと、タイバーンはニヤリと笑ってジェミニの目の前でパンツパンツと手を打った。

すると、ジェミニのしゃっくりが止まって、小さな悲鳴が聞こえてきた。

「うっうっ……。うわあ！ トロールよ！」

ジェミニは悲鳴を上げながら、フチの胸に飛び込む。

フチは顔を赤くしていたが、それでも震えるジェミニを優しく抱きしめてあげていた。

よかった、よかった。

ただ、どうしてジェミニは目の前にいたタイバーンや俺を絶妙にかわして、わざわざフチの胸に飛びこんだろっ？

？

？

？

その後、食料蔵に侵入していたトロールも、ネロやサンソン、そして城から出撃した残りの警備兵の活躍で全滅させることができた。どうやら俺達の戦ったトロールが警備兵の注意を引いて、その間に残りが食料蔵を略奪するという、陽動作戦だったらしい。

そのため、強いトロールは俺達と戦ったあの十体ぐらいで、略奪していたトロールは数も少なく、そこまで強くもなかったらしい。

おかげで俺とタイバーンが食料蔵に着いた時には、すでに事態は終息していた。

今回の襲撃は、死亡者ゼロというこのヘルタントでは奇跡的ともいえる結果になった。

怪我人はおばさんやターナー以外にも何人かいたけど、みんな命にかかわる怪我ではなかった。

この結果に俺の働きが全くないとまでは言わないが、やはり一番の功労者はトロールと黒い影を一瞬で片づけたタイバーンだろう。

タイバーンがあそこで来てくれなかったら、下手すれば俺達が全滅していたかもしれない。

というわけで、俺とネロとサンソン、そしてフチは、他の警備兵がトロールの死体を片づけている中、タイバーンに感謝の言葉を伝え

るために<サントレラの歌>に向かった。

?

?

?

「いひひひ、ひひっ」

……<サントレラの歌>に入った俺達を待っていたのは、完全に酔っぱらってしまったジェミニの姿だった。

「あーら、フチ？ はやくこっちに……ひひひっ！」

酔っぱらったジェミニは茫然としているフチの姿を見つけると、満面の笑みを浮かべながらその手を取る。

フチがジェミニに引きずられるようにしてイスに座ると、タイバーンはニヤニヤ笑いながら話しかける。

「フチじゃな。おぬしに、かくも魅力的なほほえみをもつ恋人がいるとはな。この、しあわせ者めが！」

「ぶーっ。なに、ふざけたことを！」

「わっははは！」

真っ赤になったフチの言葉は、残念ながら店にいたほとんどの人の笑い声にかき消されてよく聞こえなかった。

ちなみに、その中でも一番笑っていたのはサンソンで、次に笑っていたのはネロだった。

「おい、どういっつもりで酒なんか飲ませたんだよ！ タイバーン  
「！」

フチの言う通り、タイバーンとジェミニが座っていたテーブルにはあのミュラカインサポーンの瓶が置いてあり、おまけにジェミニの前にあるコップは完全に空になっていた。

「うわーお……。」

「酒は万古の霊薬じゃ。悩み、心配、不安、そういったわずわらし  
いものを、きれいさっぱりと忘れさせてくれる」

「おお、まさしくそのとおりだぞ！ タイバーンと申したか？ お  
ぬしとは気が合いそうだな」

「そう言っお譲さんは誰だったかな？ このとおりわしの老いぼれ  
た目にはもうお譲さんの顔が見えなくてな。できればあいさつぐら  
いしてもらつと、ありがたいのじゃが」

「これはすまなかつたな。余はネロ・クラウディウス。タクトやサンソンと共にこの村の警備兵をやっておる」

「なるほど。おぬしがカールの言っていたネロか。知っているかもしれんが、わしはタイバーン。ただの老いぼれた魔術師じゃよ」

意外にもちゃんと会うのは初めてだったタイバーンとネロはお互いに笑いながらあいさつを交わす。

話に割り込まれた形になるフチは少し拗ねたようにして、ヘナーおばさんに注文を取る。

「ヘナーおばさん！ 注文だ！」

「フチ・ネドバル！ いい度胸じゃないか。あんた、また酒を……」

「オレじゃなくってサンソン！ いったいオレをなんだと思ってるんだ？ この年で酒におぼれたロクデナシか？」

いや、ロクデナシかどうかはともかく、酒におぼれたというのはそんなに否定できない気がするけど……。

俺とネロとサンソンもそれぞれ注文して、席に着く。

席に着くとサンソンはタイバーンに頭を下げながら、話し出す。

「お力ぞえくださり、ありがとうございます。領主さまにも報告させていただきます。領主さまが魔術師どのに、できるかぎりの謝礼を用意されることでしょう」

真面目な話のようなので、俺達は口を挟まないでおく。

「謝礼？ すてておけ。カッセルプライムの食事の支度だけで、軍資金も底をつきかかっておるじゃろ。土地でもくれるってのか。ふん。大陸でもっとも貧乏くさいこの土地を？」

タイバーンは失礼なことを言っているようだが、実はほとんどその通りだったりする。

ヘルタントの領地を治めている、つまり所有しているのは当然領主さまで、村の人達は領主さまから土地を借りて耕作している小作人という立場だ。

領主さまは村の人達がモンスターの襲撃で殺されるたびに、その遺族に領地を少しづつ分けている。

とはいえ土地を所有したからといって、村の人達には何の価値もないし、どうにかできるわけでもない。

そこで村の人達は土地を領主さまに売って、また元の小作人生活に戻る。

事実上、領主さまが遺族に無償でお金をあげているようなものだ。

現金を直接渡さないのは、この時代の貨幣が国王の物であるという



原則で成り立っているから、領主さまの所有物である土地と違って勝手に渡すことができないからだそうだ。

だけどモンスターの襲撃が頻繁に起こるこの村では、犠牲者の数もかなりのものになる。

おかげですっかり貧乏になってしまった領主さまを心配して、村の人達は土地の大きさに関わらず、全てこの世界の最小単位であるパーセル　つまり、元の世界では一円とか十円とかそんな感じで売ることにしたらしい。

それを聞いた領主さまは怒ったらしいが、俺としては村人の好意なんだからありがたく受け取るべきだと思う。ここまで領民に慕われる領主は本当に珍しい。

というわけで、タイバインの言ったような、この村の土地は大陸でもっとも安い土地なんて冗談が言われるようになったんだ。

「お言葉がすぎませんか？」

「おい、まちがったことを言ったか？　わしは思ったことをそのまんま口にしただけじゃ。おぬしの領主といっても、わしの領主ではないからな」

「あの、領主さまの顧問として城にむかえられるかもしれませんが、それに……」

「官職？　望んでおらん。この年で、朝っぱらから領主のご機嫌うかがいするなんてこと、わずらわしいだけだな」

まあ、それはそうかもしれないな。

サンソンは困ったように頬をかく。

「なんと申しあげたらよいのか、あの、私にはよくわかりません。とにかく領主さまに報告すれば、正当かつ、魔術師どのも満足されるような謝礼を準備されることでしょう」

……それはどうかな？

タイバーンは百セル金貨をほいほい投げるような人なんだぞ？

「おぬしが報告するというなら、とめはせん。その報告のおしまいにでも、わしはなんにも望んでおらんとつけくわいておいてくれ」

「あ、はい」

「さあ、今度はわしの番じゃ。質問をいくつかしたいんじゃないが、かまわぬか？」

「はい。いくらでも」

タイバーンは酒を一口飲んで、口を開く。

「この村の雰囲気は、領主の人柄にはじまって、城の警備兵隊長、  
＜目の見える盲者＞にいたるまで、わしを心底驚嘆させたんじゃ。  
実に興味深い」

「あ、あの……どういふことですか？」

「ふむ。こんなふうに言うとは誤解されるかもしれんがな。わしは、  
この村になみなみならぬ興味を抱いたんじゃ。今回のような事件が  
しょっちゅう起こるのか？」

「しょっちゅう起こります」

厳密に言えば、多い時には一月に何回も、少ない時でも二カ月に一  
回は起こるんだけどな。

タイバーンもそういうふうな答えが聞きたかったのか、にこりと笑  
うと質問を変えた。

「おぬし、何度ほど戦闘に参加した？」

「ええと……待てよ。チャールズが死んで、オレが警備兵隊長にな  
ったのが、二十二回目の戦闘のときだった、かな。おそらく三十五、  
六回くらいではないでしょうか？」

サンソンがそう答えると、タイバーンは不思議そうな顔をした。

「三十五、六回？」

「あの、正確なことはわかりません。剣をにぎる者が、こんなことを気にするなんておかしいでしょうが、戦闘を重ねれば重ねるほど、つぎに死ぬ確率が高くなるような、そんな気になってしまつて……。あえてかぞえないようにしているんです。私の前任者であるチャールズは、百回におよぶ戦闘を称えられ、領主さまからおほめにあずかりました。ですが、そのつぎの戦闘で死んでしまつたんです。そんなことを見てきたもんですから……。城の史料官に問い合わせてみれば、正確な記録が残っているでしょう。今日の戦闘を報告するさいに、たずねてみればわかるのですが、あの……」

「うむ。おぬしの気持ちはわかつた。いそがしい人間をひきとめて、悪かつたな。もう行っていいぞ」

「はい。ところで魔術師どのはどちらにお泊りですか？」

「わしはカールの家におる」

「ああ、カールの家ですか」

サンソンは納得したように頷く。

まあ、カールは俺とネロの二人を泊めていてくれたときもあつたからな。

サンソンの態度にタイバーンは不思議そうに首をかしげる。

「む。驚かんのか？」

「はい。あ、えーと、その。ここにいるタクトとネロも村に来たばかりのころは、カールの家に泊まっていたから」

「なるほど。そういうことか」

「それじゃ、オレは領主さまに報告してくる。タクトとネロはここでゆっくりとしておいてくれ。どうせ他のやつらもすぐに来るだろうしな」

納得したように頷いたタイバーンを見たサンソンは、俺達に向かってそう言つと、タイバーンに頭を下げてから店を出て行った。

サンソンに手を振って見送った後、ふと、ネロがずいぶん静かにしているのに気がついた。

横を見てみると、ネロはイスに座ったまま静かに寝息を出していた。今日は久しぶりの実戦だったし、疲れたんだろうな。

俺は感謝の気持ちを含めながら、自分の上着をネロにかけてやる。どちらにせよ、しばらくは俺もここにいるつもりだし、無理に起こすこともないだろう。

最悪、俺がネロをおぶって家まで運べはいいだけだし。

ちなみに、ジェミニも完全に酔い潰れてテーブルに顔をうずめて眠ってしまったって、フチがそれを見て頭を抱えていた。

「三十五、六回と言ったな？」

突然、タイバーンがぼつりと呟く。

「はい？」

「どうしたんですか？」

「いやいや、悪かったな。盲者の悪い癖じゃな。ふだん話するときも聞いている人間が見えぬもんじゃから、ひとり言のようだな。つい、ひとり言が口からでてきてしまっくんじゃ」

「疲れる癖があつたもんだ。本音をベラベラとしゃべっちまうってことだろっ？」

「なあに、おぬしらくらいの若者ならいざしらず、わしくらい年をとると、内と外の心の差なんかありはせんのだ。疲れることもないんじゃよ」

「外の心？ おかしな言葉だな」

つまり、本音と建前が同じってことかな？

確かにタイバーン程の人だったら、それも可能かもしれない。

長い時間を生きてるし、思慮深いしね。

……でも、自分の本音なんて中々わからないもんだとも同時に思う。あのダン・ブラックモアでさえ、死ぬその瞬間になるまで自分の本当の心ねがいがわからなかったかんだから。

「それはそうとタイバーン老人。あなたの智慧のおかげで、ジェミニがすっかり酔いつぶれてしまったんだ。なんとかしてくれよ」

フチが少し怒ったようにそう言つと、突然寝ていたはずのジェミニががばつと頭を起こして叫んだ。

「私、酔っぱらってなんか、いないわよおお！ うひひひくひつ！」

「……………酔っぱらっている人は、みんなそういふんだぞー」

小言を言いまくるフチと、耳を塞ぎながら再びテーブルに突っ伏したジェミニを、俺は少し呆れながら眺める。

「なあ、タクト。おまえの魔法でジェミニの酔いを覚ますことはできないのか？」

「残念ながら、俺のコードキャストじゃ無理だな」

正月のとき、酔っぱらったネロにcure（）をかけてみたけど、全く効果がなかったからな。

「だったら、タイバーン。あんた、酔いを覚ます魔法を知らないか？」

「酔いを覚ますとな？ ふふふ、ある魔術師の話思い出したぞ。」

その魔術師は酒におぼれて、魔法の勉強をする時間も、魔法を使うだけの精神状態も維持できなかった。ある日、意を決して、酒を断ったのじゃ。それから全身全霊を傾けて、酔いを覚ます魔法を研究し、そしてついにその魔法は完成した。名前もたいそうりっぱなものつけてな。キュアドランクン。好きなだけ酒を飲んで、そのキュアドランクンの魔法で酔いを覚まし、また魔法の勉強に精をだすつもりだったんじゃな」

「……俺も少しだけ、その魔法が欲しいかも」

「ずいぶん利口なやつがいたもんだな」

「なに？ 利口じゃと？ わははは。そのキュアドランクンも魔法の一つなんじゃぞ。魔法を使うには、酔いが覚めるまで待たなくてはならない。じゃあ、そのキュアドランクンがなんの役に立つというんじゃ？」

「前言撤回……」

「え、嘘だろ……。そんなバカみたいな」

俺とフチは笑い、タイバーンも笑みを浮かべる。

「それで、どうなった？ その魔術師、結局、勉強をあきらめたのか？」

「いいや。その魔術師も自分のあやまちに気がついんだんじゃ。自分の弟子を呼んで、その魔法を教えた。弟子は確実にその魔



法を習得した。そこで魔術師は、心おきなく酒を飲み、弟子にキュアドランクンをかけるように命じた。さて、どうなったと思う？」

「どうなっ たんですか？」

「なんと、弟子の精神がピキーンと覚醒されてしまったんじゃ。もともと自分のために作った魔法だから、呪文を唱える本人を対象にしたものだったじゃろ？」

「ぶふふふー！」

「くくく……！」

「頭に来た魔術師は、弟子とともに何日も徹夜して、魔法の研究に没頭した。そのキュアドランクンを作りなおすためにな。さて、その結果はどうなったと思う？」

「えっと、どうなっ たんだろう？」

「かんたんなこと。酒好きの師匠と徹夜つづきで研究にはげんで、その弟子も、すっかり酒の味を覚えてしまったんじゃ！」

「ぶふー、ぎゃははー！」

「あはははははー！」



## 5 襲撃と救援（後書き）

更新……………一か月ぶり……………！

本っ当に、申し訳ございませんでしたー！（土下座）

……………一応、更新が遅れた理由はあるんですが、言い訳にしかならないのでここではふれません。

これからは、一週間、遅くても二週間に一回の割合で更新したいと思っております（……………それでも遅いですが……………）

今回は、今回あまり目立てなかったネロが活躍（？）します。  
遅くならないようにしなくては……………。

## 6 魔術師の助手

？

？

？

ふくらんだ財布は心を軽やかにする。

ベン・ジョンソン

？

？

？

村のわきに広がる野原には、九月とは思えないほどの熱気が充満していた。

いや、気温は普通なのかもしれないけど、野原に整列する兵士達とそれを見守る村人達の興奮のせいで、そう感じてしまうのだ。

今、俺達のいる野原には、第九次アムルタット征伐軍が隊列を組んで展開している。

征伐軍は五つの部隊に分かれていて、どの部隊にもそれぞれ五人の騎士が馬に乗って前方に立っている。

彼らは総司令官のヒュリチエル伯爵と共に首都からやってきた人達で、全員がおそろいのハーフプレートを着用していて、長いロングソードを腰に差している。

部隊を識別する旗のついたハルバードを持っていることから、彼

らがそれぞれの部隊を指揮する部隊長の役割をしているのだろう。

五つの部隊の内、一番前に展開しているのは、チエーンメイルを着用して、ロングソードと大きなタワーシールドを装備したヘビートウルーパー部隊だ。

彼らも首都から来た人達で、詳しくはわからないけどただの兵士がこれだけ豪華な装備をしているということは、もしかしたらヒュリチエル家の私兵なのかもしれない。

次の部隊はライトフットマン部隊で、サンソンやハリー達、城の警備兵で構成されている。

統一された装備のヘビートウルーパー部隊に比べて、サンソン達ライトフットマン部隊の装備はばらばらだ。

領主さまを含めてみんなあまり裕福ではないし、警備兵の死亡率も高いこの村では、わざわざ新しく武器を作るよりも戦死者やモンスターが使っていた物を使うことの方が多いためである。

ちなみに、俺の使っているライトレザーや剣もそういった過去に使われていた物の一つで、結構な年代物だ。

……俺がそれを使うと言ったとき、ネロがずいぶんと不満そうだったのは、まあ、ネロの性格を考えれば当然のことだろう。

三番目の部隊は、軽い革製の鎧であるライトレザーに身を包み、フオーチャードという三日月型の刃のついた槍を持ったパイカー部隊だ。

四番目はアーチェリー部隊で、隊員はパイカー部隊と同じようにラ

イトレザーを着て、手には簡単な作りのショートボウが握られている。

パイカー部隊とアーチェリー部隊の多くは征伐軍に志願したヘルタントの村人たちで構成されている。

村の自警団に参加していた人も中にはいるだろうが、その多くは普通の村人だ。

今回はカッセルプライムがいるため人間の兵の数は少ないし、志願兵の訓練期間も短かったみたいだけど大丈夫なのだろうか？  
少しだけ心配だ。

最後の部隊は、補給隊や医務隊、工兵隊などの後方支援を担当する部隊をまとめたバックアップ部隊だ。

そして、征伐軍の隣いるのが今回の戦いのカギになるホワイトドラゴンとドラゴンラージャだ。

カッセルプライムは相変わらず圧巻の雰囲気をもとって堂々と立っている。

対するハルシュタイルの少年の方はこれだけの群衆に見られるのが恥ずかしいのか、それともこれからの戦いに緊張しているのか、ずっと俯いたままだった。

カッセルプライムがいる限り彼に身の危険が及ぶ事はないと思うけど、それでも心配だな。

「あそこよ。見つけたわ」

俺達といっしょに征伐軍の見送りに来ていたジェミニがフチの肩を

ひっぱる。

ジェミニが指差した先にはパイカー部隊が整列していた。

驚いたことに、パイカー部隊にはフチのお父さんが所属しているらしい。

俺も何度か会ったことがあるけど、フチのお父さんはロウソク職人で、フチと同じように明るく冗談好きな、誰でも好感が持てるようないいおじさんだった。

すでに亡くなっているおじさんの後を継いだ後、城に納めるロウソクを作り続け、奥さんがいなくなったあとは男手ひとつでフチを立派に育て上げたという立派な人でもある。

当然、これまで槍を握ったこともなかった人だ。

それなのに今回の征伐軍に参加したその理由は、やっぱりアムルタットに殺されたというフチのお母さん、つまり彼の奥さんの復讐のためらしい。

ジェミニはパイカー部隊の一点を指差しているけど、残念ながら俺にはよくわからない。

「ネロ、フチ、わかるか？ みんな同じような姿をしてるし、兜に隠れて顔がよく見えないから、俺にはよくわからないんだけど……」

「さすがにこの距離では判別が難しいな。フチ。そなたはわかったのか？」

「ああ、自分の親父だからな」

フチはそう簡単に言いながらも、その間もジェミニが指差した方向を食い入るように見ていた。  
俺達もフチの気持ち痛い程感じられるので、それ以上にも言わずに黙って部隊を眺める。

部隊の前方では領主さまが出発前の演説をしている。

もう結構なお歳のはずの領主さまだが、ヘルタント家の家紋のついたハーフプレートを身に付け、戦車の上で堂々と演説している姿は十歳は若返って見える。

ようやく念願のアムルタットの征伐軍に参戦できるから、興奮しているのだろう。

ちなみに、領主さまが馬ではなくて戦車に乗っている理由は、領主さまが馬の乗り方を忘れてしまったからだというのがもっぱらな噂だ。

俺としてはさすがにそんなにひどくはないと思うが、混乱する戦場で馬に乗り続けるのは難しい、というか危険だとは思っているので、戦車というのは良い選択肢だと思う。

……さらに余談だけど、あの戦車はサンソンの父親であるジョイスが荷車を片手間で改造して作ったらしい。

「むう、ヘルタント子爵め……。あやつには演説の才能がないのか！？ どうでもよいことをクドクドと話しておって！ セリフばかりで観客を退屈させるような下作中の下作の演劇と大して変わらぬではないか！」

「あれ？ でもネ口も昔、自分で講演した劇で観客に逃げられんじや……」



しかもその後、公演中に観客が逃げないように出入り口を封鎖したら、壁をよじ登ってまでして逃げようとされたとか……。

俺がそう言つとネロがすごい形相でこちらを睨みつけてきた。

………やばい、地雷を踏んじゃったかも。

ネロの様子に気がついた周りの人達もそつと後ずさりし、フチも気の毒そうな顔をしながらもジェミニの手を引きながら俺と距離をとっていた。

………はくじょうものー！。

「………奏者よ。そんな話を余が聞いて喜ぶとも思ったのか？ それとも奏者は余の恥ずかしい話をするのが楽しいのか？ うん？ そうなのか？」

俺は喋ることもできず、ただ首をブンブン横に振る。

怖い。

今のネロは怖すぎる。

ネロは俺の様子を見ると、まるで天使のような笑みをその顔に浮かべた。

「そう怯えるな、我が愛しのマスターよ。余とて鬼ではない。誰しも間違えることはよくあることだ。肝心なのはその失敗を繰り返さぬことだ。そうであるう？」

コクコクと首を縦に振って同意する。  
よかった。

どうやら許してもらえそうだ。

「うむ、今回は一回目だからな。よい。特別に許す。……だが、もし次にその話をしたら」

「し、したら……？」

恐る恐る俺が聞くと、瞬間、ネロは天使の笑みを消し無表情のまま小さく呟く。

「そなたといえど、容赦はせん。地獄タルタロスを見ると思え……！」

ガクガクガクガク……。俺は震えながら何度も頷く。

元、暴君のその言葉にはすさまじい程のリアリティがあった。

「ま、まあ。確かにちょっと長すぎるよな。アムルタットに会う前に、日射病で倒れちまいそうだな」

「日射病？ 秋なのに？」

「いや、日射病とは限らぬぞ。 退屈になった兵士たちが、立ったまま寝てしまつということもありえるぞ？」

「まあ。 ネロつたら」

震える俺に気を遣ってくれたのか、フチが軽い冗談を言ってくれる。 ついさつきまで怒っていたはずのネロも冗談を返しているあたり、意外と怒りの根は浅いのかも知れない。

もちろん、今度言つたらどうなるかわからないけど……。

頭を振つて思い浮かべた怖い想像を追い出しながら、俺は再び隊列に目を戻す。

領主さまは相変わらず、アムルタットに対する思いつく限りの罵詈雑言と、カッセルプライムを派遣してくれた国王への賛美を情熱的に演説している。

もっともあまりにもその演説が長すぎるから、さっきの俺達の会話からもわかるように聞いている大半の人達はすでにうんざりしてしまっている。

視線を領主さまの横に向けると、そこには征伐軍の総司令官であるヒュリチエル伯爵がうんざりしたような顔で馬に乗っている。

さすがは伯爵の位にある貴族だけあって身につけている武器も立派だ。

全身を包むプレートアーマーは一目で高価なものだとわかる品があったが、だからといってただの飾りなんかではない剛健な雰囲気も漂わせている。

乗っている馬にもバーディングと呼ばれる専用の鎧を着せていて、いつでも戦闘可能といった感じた。位に合わず、意外と武闘派なのかもしれない。

「む、ようやく終わったようだな」

ネ口の呟きを聞いて視線を戻すと、領主さまが演説を終えるところだった。

興奮しすぎたのか、若干涙目になっている。

村人の拍手が終わり、次は総司令官のヒュリチエル伯爵の番になった。

ヒュリチエル伯爵は軽く頭を下げ、毅然とした表情で宣言する。

「第九次アムルタット征伐軍、出発いたす」

ヒュリチエル伯爵は短くそう言うと、すぐに片手を上げて出発の合図を兵士に送る。

「短ければよいというものでもないのだがな」

その様子にネ口が呆れながら呟く。

「『第九次アムルタット征伐軍、出発いたす』」

ヒュリチエル伯爵の短い宣言を兵士たちは復唱し、騎士の号令に従って動き出した。

予想外の短い演説に村人のみんなは慌てるけど、きちんと拍手をして征伐軍を送り出す。

村人たちの拍手と歓声の中、第一部隊から順に行進していく。

「サンソン！ ハリー！ ジャレン！ セロ！ みんなー！ 必ず帰ってこーい！」

「村のことは余とタクトに任せよ！ 安心して戦地に赴くがよい！」

警備兵達が主流の第二部隊が通り過ぎるとき、俺とネロは声を張り上げてサンソン達を見送る。

集まっている村人みんなが大声を出しているから、サンソン達に俺達の声が聞こえたかどうかはわからない。

でも、前にいたサンソンだけはこちらを向いてニヤリと笑い、そのまま意気揚々と行進して行った。

村の人達も今回の征伐軍に期待を寄せているのだろう。

みんな興奮して、絶叫に近い声を上げ腕を振り回しながら行進する征伐軍を見送る。

その興奮は、一番後ろを歩いていたホワイトドラゴンとドラゴンラージャが通り過ぎるときに最高潮に達した。

「カッセルプライム、万歳！ 征伐軍、万歳！ 彼らにユピネルのご加護を！」

「アムルタットに呪いを！ ヘルカネスの名において呪いを！」

人々は口々に神の名を叫びながら、祝福と呪いの言葉を繰り返していた。

その興奮は、カッセルプライムの巨大な後ろ姿が地平線に消えて見えなくなるまで続いた。

「盛大であったな。少しだけ、ローマの凱旋式を思い出した」

征伐軍を見送ったネロが少し上気した顔で、感慨深げに息をついた。

「フチ、行きましょう」

「ああ、行こう」

フチは部隊が消えていった方をじっと見ていたが、ジエミニに急かされると軽く息を吐いてから返事をして歩きだした。

俺と一緒に帰りながら、不安半分のフチの横顔に声をかける。

「お父さんは見失わかったか？」

「ジエミニおかげでなんとかな。……ちえ、聞いてくれよ。親父のやつ、あんなに村の人たちが集まっていたのに、オレのことを真っ

直ぐに見つめてきたんだぜ。オレは中々親父を見つけられなかったのに。若いオレよりもあんな年取った親父のほづが目がいいのかって話だぜ」

「まだまだフチがお父さんを超えてない証拠ってことだろうさ」

冗談を言いながらも多少沈んでいる様子のフチに、俺も軽い冗談で返す。

「あら、カールよ」

歩いていたジェミニが、野原の隅にある木の下で語り合っているカールとタイバーンの二人を見つけた。

フチは今すぐにでも帰りたいって顔をしていたけど、ジェミニとネロが駆けだしていたのでぶつぶつ言いながらその後を追った。

俺も肩をすくめて、皆の後を追う。

「こんにちは、カール。先日の手厚いおもてなしに、お礼を申し上げます」

「久しぶりだな、カール。余も最後にあっただのはりんご酒をもらったあのときだったか？」

「これはこれは、スマインターグ嬢にクラウドィウス嬢。むさくるしいところにおこしくださり、このうえない光栄とぞんじております」

おおつ……。  
相変わらず、カールは女性に対してはやりすぎなくらい丁寧だな。  
満更でもなさそうなネロとジェミニの様子に、俺とフチは溜息をつく。  
ついでにカールの隣にいたタイバーンまで呆れた顔をしていた。

「やあ、カール」

フチはしばらく迷っていたようだけど、やがて軽くカールにあいさつをする。  
そういえばフチはあのケンカした日以来、カールに会っていないなかったんだっけ。  
俺やタイバーンとはすでにトロールの件もあって、なし崩し的に仲直りしたけど、カールとはまだだったからやりづらんだろう。

「やあ、ネドバルくん。ようやく私のあやまちを許してくれるかね」  
「許すだなんて。大声だしたりして、オレのほうが悪かったよ」

さすが、カールだ。  
あっという間にフチの中のわだまりを消してしまった。



「見おくりに来たんだろ？」

「タイバーンを案内してきただけなんだ。私はべつに見物するつもりもなかったんだが」

「タイバーン。あんたはどことなく見物>をするつもりなんだ？」

フチが意地の悪いことを言っても、タイバーンは笑って軽く受け流す。

「それなりのコツはあるもんじゃ。音だけを聞いて想像の翼を広げてみれば、けっこうおもしろいもんじゃぞ」

想像の翼、という言葉聞いてネロがうんうんと頷いていた。芸術家としては、なにか思うところもあったのかもかもしれない。

「おもしろい？」

「ああ。ずいぶん高揚した雰囲気じゃったな。ドラゴンを征伐に出発にする兵士たちとおもえんくらいにな」

「おたくは腕ききの魔術師じゃないか？ ヒュリチエル伯爵が手を貸してくれ、って言ってこなかったのか？」

「おお、意外と世情にも長けておるんじゃないな。なあに、わしが断つ

たんじゃ  
」

「理由は？」

そう質問するフチの表情は険しく、言葉は硬い。

アムルタットに恨みがあり、父親が今回の征伐軍に参加しているフチとしては、先ほどのタイバーンの発言にちよっとした怒りを覚えるのも当然かもしれない。

ただど当のタイバーンはそんなフチの様子がわかっているのか、いないのか、穏やかに普通に返す。

「いろいろと問題があつてな。師匠に歯むかうことになるから、どうにも複雑な心境じゃ」

「師匠？」

「言つたじゃろ？ 魔法とはもともとドラゴンのもの。よってドラゴンに魔法を使用するということは、師匠に反旗をひるがえすようなもんじゃ。まったく笑い話にもならん」

そうなのか。

ドラゴンが魔法を使うことができるっていう話は聞いたことがあったけど、そんな話は聞いたことがなかったな。

「え、たったそれだけの理由で？」

フチがタイバーンの言葉に呆れたような声をだすと、その瞬間、タイバーンの目が鋭くなる。

……ていうか、殺気が！？

「おぬしが、『たった』と言ったことについて、とがめはせんよ。魔法について多少なりとも知識があるか、せめて騎士道についてわずかでも心得があったら、この場で脳天をかち割っていたじゃろうがな」

口調は穏やかだし、表情もあまり変わってないけど、すごく怒ってるのが嫌でも感じられる。

殺気を感じることでできないフチ達はともかく、俺とネロは冷や汗が止まらなかった。

やがてタイバーンは殺気を沈めて、かわりに疲れたような溜息をつく。

「この日このときまで魔法をきわめてきたが、できることといったら、殴り殺すか、ひねり殺すか、そんなものばかり。わし自身がつまらない人間に思えてな。おぬしが理解できるよう、簡単に理由を挙げるとすれば、死ぬのが嫌なんじゃ。盲者の魔術師に、数百年にわたって魔法をみがいてきたドラゴンと闘えというのは、むごすぎ」

「盲者っていうけど、トロールをあんなかんたんに始末したじゃな

いか？」

「おい、トロールが魔法を使うのか？ わははは。カッセルプライムがうまくやってくれるはずだ。ヒュリチエル伯爵も同じように考えたんじゃない。わしをひきずりこむことに、さほど関心もなさそうだった。わしが見たところ、これは第九次アムルタット征伐軍ではなく、第一次アムルタット カッセルプライムの対決だ。わしみたいな人間魔術師が、割ってはいえるようなことはできないぞ」

確かに。

それにタイバーンには別の仕事もあるしな。

「それはそうかもしれないな。ほかの兵士はただの見物客だろうし」

587

そう明るく言うフチの顔には、若干影ができていた。

カッセルプライムという強力な味方がいるとはいえ、それでもまだ今回の戦いも必ず勝てるという保証はない。

フチが不安になるのも当然だ。

「うむ、そのかわりといってはなんじゃが、わしはべつの仕事を任されてな」

「べつの仕事？」

「その仕事を遂行するにあたって、助手を選ぶ権利もえておる」

「ちょっと、ちょっと。べつの仕事って、いったい？」

「ちなみに、すでにタクトとネロを助手に選んでおる」

「タクトとネロを？ いったい、どついう仕事なんだよ？」

「ああ、そうじゃ！ おぬしもわしの助手になってくれんか？」

フチの質問を完全に無視するタイバーン。

……楽しんでるな！

「くそつ！ だから、その仕事ってのは、なんだよ」

「ヘルタント領地の警備。警備兵が全員出征してしまつたら、この村はどうなる？ とくにいまのような収穫の季節には、モンスターが目をむいて押しよせてくるじゃないか？」

そう。

前にネロとも話したが、それが一番怖いのだ。

今回の征伐軍に警備兵の大部分は参加し、村の大人達もかなりの数が志願した。

警備兵も全員が参加してないし、俺が治療したとはいえ安静をとつて村に残つたターナーのような実力者もいる。

村だつてこの季節は警備兵の他に、自警団をつくつてモンスターの襲撃に備えている。

だけど、やっぱり今回はあまりにも戦力が減りすぎている。俺とネロは最初からこの村に残って警備をするつもりだったけど、所詮はたった二人。

できることは限られてしまう。

そこで、この間のトロールとの戦闘で多大な貢献をしたタイバーンを、非公式的とはいえ、村の警備の任せることにし、その補佐として非警備兵の俺とネロをつけることになったのだ。

タイバーンの話を聞いたフチがコロツと態度を変える。

「そ、それは、悪くないよな。助手の俸給はいかほどで？」

「<サントレラの歌>で毎日、酒を一杯。どうじゃ？」

……タイバーン、フチはまだ未成年です。

なんだかみんな普通に未成年に酒をすすめるな。

この世界も飲酒は成人してからのはずなんだけどな……。

「酒じゃなくて、財布に入れて持ち運べるものを」

ここで普通に、金をくれ、って言わないのがフチらしいな。

「この若者は、世の中に金よりもずっと価値あるものが存在する、ということを知らんようじゃ。おぬしを助手にして、人生というも

のについて、みっちり教えてやる。俸給じゃと？　これでどうだ」

タイバーンはそう言うと、懐から何かを取り出してフチに向かって弾いた。

つて、また百セル金貨か！

「タ、タイバーン。百セル金貨以外には持ってないのか？」

受け取ったフチもオロオロしている。

その隙に、ジェミニが横からそれを取り上げ、目をキラキラさせたネロといっしょに熱心に見ていた。

「おい、鳥頭！　それには準備金もふくまれている。自分なりに武装を整えておけ。ひと月くらいの短期雇用にしては、報酬がべらぼうだがな。どうじゃ？」

「賛成！　一言なし！　ユピネルとヘルカネスの名において！」

「ようし。わしの事務所は<サントレラの歌>じゃ。毎朝、訪ねてこい」

そのとき、ジェミニが元気よく割り込んできた。

「あのー、魔術師さま。もう一人、助手が必要ではございませんか？」

「いいや」

泣き顔になったジェミニにかわり、今度はネロが期待に満ちた顔でタイバーンに話しかける。

「余はジェミニと違って、フチと同じそなたの助手だな？ ならば余にも俸給があってもよいのではないか？」

「そうじゃな。というわけで。ほれ、タクト。おぬしにも俸給じゃ」

「って、俺!？」

いきなり俺に向かって弾かれた金貨を、慌ててキャッチする。見ると、今度はネロが泣きそうなお顔になっていた。なんだか、目の前でこはんを取り上げられた子犬みたい表情で、かなり可愛い。

そのネロの表情が見えたわけではないだろうけど、タイバーンが楽しそうに続ける。

「なにを心配しておるんじゃ。フチとタクトの金はお譲さんたちの金であり、お譲さんたちの金はお譲さんたちの金。人もつらやむよ



うな恋人関係においては、金銭とはそのように扱われるべきじゃ。金とは愛する女性に無条件でささげられるもの」

「「タイバーン！」」

タイバーンの言葉に、フチとジェミニが同時に声を上げ、俺とネロは赤くなった。

？

？

？

「で、とりあえずどうする、フチ？」

「そうだな……」

思わぬ臨時収入に、俺とフチは頭を悩ませている。

武器やら防具やら買わないといけないフチと違って、俺は基本的な装備はすでにそろっている。

だからタイバーンに百セル金貨を返そうかとも思ったんだけど、そうしたらすごい剣幕でネロに怒られる気がしたのでとりあえずそのまま持っている。

まあ、お金はどれ程持っていても困るものじゃないしね。

「武装、武装か……。そうだ、剣だ！」

考え込んでいたフチが顔を上げて、名案だと言いたそうな顔で叫んだ。

「鍛冶屋に行くつもり？」

「いや、それよりも城の武器庫に行ったほうがいいんじゃないか？  
使い込まれた立派な剣が残ってるし、ただでくれると思うしな」

俺とジェミニがそう言うと、フチは首を横に振った。

「いや、まず居酒屋に行こう。鍛冶屋に注文をして作らせていたんじゃない、時間がかかりすぎる。居酒屋なら、酒代の代わりにあずけられた剣があるはず。そいつを買いえばいいんだ」

「ん？ だったら、やっぱり城の武器庫でもいいんじゃないか？」

「無粋なことを言うでない、タクトよ。せつかく金があるのだ。派手に使った方が気持ちいいではないか。なあ、フチ？ ……まあ、中古品を買おうとするその気持ちは、余にはわからんがな」

ネロの言葉にフチは苦笑する。

「いや、別にお金を使いたいわけじゃないんだけど。ヘナーおばさんが前にバスタードソードを持っていたのを思い出したから、それを売ってもらおうと思ってな」

そつえば、前にヘナーおばさんが、場所だけ取ってなんの役にも立たないジャマな剣がある、って言ってたっけ。

「なるほどね。だったら、まずは<サントレラの歌>に行こうか」

？

？

？

「なんだって？」

「オレの言ったことが聞こえなかったのか？ 金を払うから、あの剣をオレに売ってくれないか」

<サントレラの歌>に着いたフチは、さっそくヘナーおばさんと交渉を始めた。

「あのね。あることはあるけど……あんたが、あれをどうしようってんだい？」

ヘナーおばさんは、店の奥から取り出してきたバスタードソードを胸に抱きながら、怪しむような目つきでフチを見る。

バスタードソードは長剣のため、ただ持つだけでも結構大変だ。

「おばさんは、金だけ受けとればいいだろ。それをどう使うかは、オレの勝手だ」

堂々とそう言うフチを、ジェミニはキラキラした目で見ていた。フチも満更でないのか、若干得意そうな顔をしている。

「ほう。年上の者にこれだけ堂々と言うとは、中々よい度胸があるではないか」

ネロが軽く笑いながらそう言うと、フチはいよいよ鼻が高くなっていった。

というか、何を考え始めたのかわからないけど、だんだん顔がニヤケだしてきた。

……………うん。

少しだけ、ひく。

「あんた、そのしまりのない口は、どういうわけなんだい？」

ヘナーおばさんが呆れた様子でそう言うと、ようやく気がついたのか、フチは慌てて表情を正した。  
ただ、さすがに気になるのか、今度はバスタードソードに視線がいつている。

「いてっ！」

「こらっ！ 昔っからね、あんたみたいな悪ガキが、こういうものにぎったら最後、大変なことをしでかしてしまうもんなだよ。でも、はあーっ。あんたも、自分で自分の身を守ることを考えなきゃならないだろう。ロウソクを作って食べていくのが嫌だっつてんなら、こいつが役にたつかもしいからね」

バスタードソードに伸ばされたフチの手を、軽く叩きながらヘナーおばさんが嘆息する。

「売るのか、売らないのか、どっちなんだよ？」

「売るつもりはないよ。さあ、持っていくな。あんたにやるうかと思ってたんだ。それをあんたから出向いてくるとはね。持っておいきよ」

そう言いながら、ヘナーおばさんは優しい顔でフチに剣をぎゅっと握らせる。

フチは目をパチクリさせながらも口を開く。

「戦士とは自分の武器にたいして、正当な代価を支払うもの。よって……」

がつんっ！

余計なことを言おうとしたフチの頭に、ヘナーおばさんの容赦ない一撃が加えられた。

？

？

？

<サントレラの歌>を出た俺達は、とりあえず、長いこと放っておかれたバスタードソードを手入れするために鍛冶屋に行くことになった。

途中で、念願の剣を手に入れたフチが浮かれすぎて転んだり。ジエミニが笑いながらも、フチに手を差し伸べたり。

転んだフチを見て笑っていた村の人に、今度はジエミニが顔を真っ赤にして怒ったり。

それをネロがなだめてたり。

その隙に汚れていた服を拭いていたフチを、俺が手伝ったり。

まあ、そんなことはあつたけど、無事に（？）鍛冶屋に着いた。

「たのもー！ 邪魔するぞ、ジョイスよ」

「おう、ネロか。相変わらず元気だな。いつもより早いけど、どうしたんだ？」

鍛冶職人で、サンソンの父親でもあるジョイスは笑いながら、そう尋ねた。

「というか鍛冶屋に着くなり、ネロのテンションが妙に高い。

一体どうしたんだ？」

「いや、今日は余ではなくフチが鍛冶屋に用があつてな。余はただの付き添いにすぎぬよ」

「フチがか？」

ジョイスは不思議そうに首をかしげる。

「この剣を研いでほしいんだ」

フチが真剣な表情でバスタードソードをジョイスに手渡す。するとそれを受け取ったジョイスも真面目な表情で一言言った。

「誰のおつかいだ？」

「オレの剣だよ」

「……おまえが使うのなら、あっちがちょうどいいんじゃないか？」

そう言いながらジョイスは、木刀で遊んでいるサンソンの弟を指差す。

フチはしばらく地団駄を踏んでいたけど、やがてタイバーンから貰った百セル金貨をジョイスに突き出す。

得意そうな顔をするフチと百セル金貨を見ながら、ジョイスは頭をかく。

「おつりを数えるだけで、一日仕事になりそうだな」

あはは……。

フチ、思惑が外れたな。



フチは無然とした表情をしながらも、それ以上は何も言わずに近くにあったタルに座った。

どこから持ってきたのか、ネロもイスに座っていたので、俺も一言断ってからフチと同じようにタルに腰を下ろす。

ちなみに、ジエミニは金属を打つ甲高い音や飛び散る火花が怖いのか、フチの後ろでオドオドしていた。

そこら辺は男女の違いかな。

結構、男はこういうのが好きな人多いんだけど。

「これは……幻想的な剣だな」

突然、丁寧に刃を調べていたジョイスの声が変わる。

フチはゴクンとつばを飲み込み、俺も耳を傾ける。

「これが剣だというのなら、鳥撃ちパチンコは空想上の兵器」

……………哀れ、フチ。

ネロはイスに座ったままお腹を抱えて大笑いし、ジエミニも負けないくらい大笑いしながらフチの肩を叩いている。

俺は反対の肩に手を置いて、フチを慰める。

「そんなにひどいのか？」

「冗談だ」

「……」

情けなさでいっぱいの顔になったフチの問いに、ジョイスがウインクをしながら間髪いれずに答える。  
ネロとジェミニはさらに笑い声を大きくし、俺はがっくりと頂垂れるフチを、いいことあるさ、と慰める。

ようやくネロたちの笑い声が収まったあと、今度こそジョイスが真面目な顔で話を始める。

「ヘナーが持ってた剣だな？ よく使いこまれている。こういう剣に手をいれるのは、よけいにむずかしいんだ。がちがちだからな。それにきちんと保管されずに、ほったらかしにされていたようだ。剣を長く使おうと思ったら、毎日手入れをしなければいかんのに」

「じゃあ、そのバスタードソードはもう使えないんですか？」

「なあに、任せておけ」

ジョイスはそう言いながら、バスタードソードのグリップから釘を引き抜く。

「ええっ!？」

グリップを抜いたジョイスの取った行動に、俺は思わず声をあげてしまう。

なんとジョイスはバスタードソードを燃え上がる火坑の中に放り投げたのだ。

剣は完全に炎の中に姿を消し、それを俺は茫然と見ていた。

ジョイスはそのまま鎌作りを始めてしまい、まるで今さっき火坑の中に突っ込んだフチの剣など忘れてしまったかのようにだ。

「ちょ、ちょっと、ジョイスさん!？」

「ほったらかしておいて、本当に大丈夫なの?」

俺とジェミニは慌てて声をかける。

口には出していないけど、たぶん、いやきつと、フチも同じ気分のはずだ。

俺とジェミニの問いにジョイスはただ頷くだけで何も答えず、再び鎌作りに集中していた。

このままじゃバスタードソードが完全に溶けてしまっんじゃないだろうか?

同じようなことを考えた俺達は、不安げに顔を見合わせる。

ただ、ネロだけは興味深そうにジョイスの行動を見ていただけだったけど。

ジョイスはしばらく鎌作りを続けていたけど、やがて火坑をちらり

と見ると、ゆっくりと手袋をはめ出す。  
そして鉄を使って火坑の中からバスタードソードをとりだした。

「うわっ！」

俺達はみんな驚いてその姿を見つめた。

取りだしたバスタードソードはまっ白に白熱していた。

まるで剣自体が炎でできているようで、薄暗い鍛冶屋の中を照らすその姿は、ひどく幻想的だった。

フチは食い入るように光の剣を見つめ、ジェミニも目をキラキラさせている。

自称、至高の芸術家であるネロも、その絵画のような光景に見入っていて、ジョイス以外の他の鍛冶職人の人達も感嘆の声を漏らしている。

もちろん、俺も。

「やっぱり大丈夫だったな。こうでもしなければ、自由に扱わせてもらえない剣だ」

ジョイスは笑みを浮かべ、そのまま発光するバスタードソードを鉄床に乗せて打ち始めた。

ガツンッ！ ガツンッ！ ガツンッ！

金槌が剣を打つたびに、火花が弾け飛ぶ。

「粘りがなさすぎるな。表面もすつきりしていないし、少し刃もこぼれている」

金槌が正確に刀身の表面をならし、こぼれた刃の部分を潰す。

その後、水桶の中に剣を入れる。

「ジュワー！」

急に冷たい水に入れられた刀身から、湯気が立ち上る。

ジョイスはすぐに剣を水から出し、再び金槌を振るう。

「焼入れ作業かな？」

でも、二回ほどバスタードソードを焼入れすると、ジョイスは作業を終えた。

「さあ、おしまいだ。これ以上焼入れをする必要はない」

「は、はい？」

「どういうことかよくわかっていない俺達に、ジョイスは剣を研ぎながら説明を始める。」

「一度完成した剣を火に入れるのはご法度だ。だがこいつはずいぶん長い間、手入れもされずに放っておかれた剣だから、砥石で研ぐぐらいでは、もとの刃先を取りもどすことはできません。鉄もほとんど粘りを失っていたからな。この鉄はジャイファンで取れた鋼鉄だ。ジャイファンではあまり焼入れをしないから、剣がしなるような性質をもたないんだ。それだと使いこむにつれて、鉄が粘りを失い、

運悪くすると衝撃を吸収せずに、ぽつきりと折れてしまう。相手の骨や鎧を何度もぶつたぎっているあいだにな。焼入れをていねいにやっておけば、強靱な剣になるんだ」

「じゃあ、これを使っていた人間はずいぶん長く使ってたってことだな」

「そうだ。だから、よく使い込まれている。当時は、ちゃんと手入れもされていたようだ」

剣を研ぎ終わったジョイスは、グリップをはめ込んで再び釘で固定する。

そしてバスタードソードを鞘の中に入れると、フチに差し出した。

「抜いてみる」

ジョイスに言われるまま、フチはバスタードソードの柄を握って一気に引き抜く。

「ほっ」

ネロが感心したように言葉を漏らす。

さつきまでとはまるで違い、バスタードソードは快音をたてて鞘から抜き放たれた。

抜かれた剣は日光を受けてキラリと光り、刀身には見いつているフ

チの顔が映し出されている。

その光景は、剣が完全によみがえったことを如実に知らしめていた。

「戦士の真似をして、親指で刃先に触れてみよう、なんてことを考えるんじゃないぞ。そいつはいま、髭剃りだってできるような状態だからな」

「だ、そうだぞ。フチ？」

今まさに刃先に親指をもって行っていたフチは、ジョイスの言葉にどきつと動きを止めた。

がっかりとしたフチに、ジョイスは剣を研ぐための砥石と布を渡した。

「おまえにできるかどうかはわかんないが、まあ、誰でも剣に触れながら覚えていくもんだから、心配するな。毎日時間を決めて、剣を研いでやれ。そんなにいていねいに研ぐ必要はないぞ。ほんの一、二回でいいんだ。まあ、使いこんでいくうちに、少しずつ回数を増やすんだな」

まあ、そこら辺は問題ないだろう。

フチは器用だし、俺だってできるようになったんだからな。

ジョイスは鍛冶屋の隅に行つて、おつりの計算を始めた。

他の鍛冶職人もそれに加わり、ジェミニはその光景がおもしろいの

か、一人で笑っていた。  
フチも剣を見るのに忙しそうだったので、俺はイスに座ってなにやら考えことをしているネロに話しかける。

「それにしても、驚いたな。あの剣があそこまでよみがえるなんて」「うむ。さすがはジョイスだ。独創的な作品を作れるかどうかは、まあ、別にしても。純粹な鍛冶の腕前では余もやつには敵わぬな！」

そういえば、ネロがいつも使っている剣って、彼女のお手製なんだっけ。

……………うん、まあ。  
確かにあんなのを作れるんなら、ネロも鍛冶の腕前は高い……………方、なのかな……………。

「なぜ疑わしげな視線を余に向けるのだ、タクトよ！ 余は至高の芸術家だぞ。鍛冶ぐらい、ましてや剣を作るのぐらいはお手の物なのだぞ！ そなたも余の作品の素晴らしさは知っていよう！」

うん、確かに知ってる。  
だからこそ、色々と不安なんだけど……………。

「……………まあ、よい。余はそなたに芸術家だと何度も言ったが、肝心の作品については、ほとんど見せたことがなかったからな。そなたが疑うのも当然か」



意外にもネロの怒りのゲージがすっと、落ちた。

「あれ？ 意外と怒らないんだな？」

普段なら機嫌が直るまでもっと時間がかかるもんだけど。

「うむ、今回はな。余の芸術の素晴らしさについては、今度たっぷりと教えることにしよう。ついでに鍛冶の腕前もな」

「すごく不安だけど、まあ、いいか………？  
自信満々な様子のネロになんだか不安になるけど、そこで俺はふと思いついたことがあったので、聞いてみる。」

「そういえば、ネロ。おまえって結構この鍛冶屋に来てるのか？」

最初この鍛冶屋に入った時も、ジョイスはネロがたびたび来ているようなことを言っていたし、日記にも時々このことが書いてあったしな。

「うん？ そうだぞ。余はよくここに遊び来るが？」

「何しに来てるんだ？　こんなところ、まさか本当に遊ぶために来ているわけじゃないんだろ？」

というか、日記にはここが書かれているときは、いつも俺がいないときなんだよな。

例えば俺が警備兵の訓練に参加しない日とか、ネロは城からの帰りによくここに寄るみたいだ。

こんなところに寄るくらいなら、早く帰ってきてほしいんだけど。

俺の気持ちを知ってか、知らずか、ネロはなんだか楽しそうだ。

「気になるか、タクトよ？　……そうだな。ここで、なにもしておらぬ！　と、しらを切ってもよいのだが……。うむ。ここは、秘密、と言っておこう」

「ひ、秘密？」

俺が驚いた声を上げても、ネロは楽しそうに微笑むだけだった。

「そうだ。そなたにも秘密だ。なあに、心配しなくてもいいぞ。秘密と言っても一時的なもの、すぐにそなたにも教える。だが、余が教えるまではどうか余計な検索はしないでほしい」

「……………」

「安心せよ。そなたを裏切るようなことは何もしておらぬ。だから余を信じているならば、とりあえず、今はなにも聞かないでくれ」

「……わかった」

すごく気になるけど、ネロがそこまで言うならこれ以上はなににも聞かない。

でも、本当にこんなところで何してるんだろう……？

そんなこんなしていると、ジョイスがため息をつきながらこちらにやってきた。

「どうやってもおつりがたりないんだ。おまえ、鎧でも買わないか？」

「そうしたほうがいいぞ。ていうか、鎧なしで剣だけで戦うなんてよほどの達人でもないかぎり、死ぬようなもんだぞ」

もつとも、俺も結構長い間、鎧なしで戦っていたんだけど、……まあ、それはいいだろう。

フチが頷いたので、ジョイスはフチの体格に合ったハードレザーを持ってきてくれた。

俺も使っているけど、ハードレザーは鎧の中でもかなり軽いから、剣士じゃないフチでも不自由なく使えるだろう。

「おまえ、ロウソク職人じゃないか。油の扱いはわかってるよな」

「あつたりまえだろ！」

そう言いながら、フチはさつそくハードレザーを着用し始める。でも、首の下にある穴に中々ひもを通すことができない。あれは俺も慣れるまで苦労したな！。

「私にまかせて。そんなんじゃ、いつ終わるかわからないわ」

あまりにもぎこちなくひもを通すフチの様子に、ジェミニはいてもたってもいられなくなったようで、フチからひもを受け取るとそのまま穴に通し始めた。

フチにぴったりと寄り添ってひもを通すジェミニの姿は、なんだか夫のネクタイを結んであげている奥さんのように見えて、かなり微笑ましい。

ジョイスも俺と似たような気持ちなのか、目を細めて笑っていた。

「物語に登場する、レディと騎士候補生のようだな」

ジョイスの言葉に、フチとジェミニは顔を赤くし、俺達は温かく笑った。

？

？

？

ちなみにその後の展開。  
というか、いらぬ才手。

フチは鎧のほかにもロングブーツと手袋を買った。  
どちらも野外での活動には必要な物だからな。

さらにジェミニもフチから新しい洋服を買ってもらっていた。  
ジェミニは小躍りして、本当に嬉しそうにしていた。

そしてネロも、新しい服を買ってもらっていた。  
それはもう、ネロも嬉しそうだった。

……。  
うん、俺が買ったんじゃないくて、フチに買ってもらっていた。

なぜそんなことになったかというところ、鍛冶屋を出た後、フチはロングブーツと手袋を買いに行き、ついでにジェミニに服を買ってやっていた。

すでに武装が整っていたから今日まだなにも買っていなかった俺は、ここでネロに服を買ってあげようと思ったのだ。

ところが、いざ服を買おうとしたらフチが、いつものお礼と称してネロの服の代金を全部払うといいだしたのだ。

俺はもちろん反対したのだが、フチは気が大きくなっているのか、それとも本当に俺なんかに恩を感じているのか、頑として譲らず。

ネロも、険約は嫌いだ、蓄えるのならば話は別だ、とか言い出す羽目で……。

結局、二人に押し切られてネロの新しい服はフチが全額出してしまったのだ。

おかげで、フチの百セル金貨は全部なくなってしまい、逆に俺の百セル金貨はそっくりそのまま残ってしまったのだ。

どうしよう、この百セル金貨……。

やっぱり、今からでもタイバーンに返しに行こうかな……。

いくらお金は使うものとはいえ、さすがにこれは使いづらいし……。

でもそんなことしたら、ネロが確実にキレルよな……。

ハア……。

## 6 魔術師の助手（後書き）

むづ。

ネロを活躍させるつもりだったのに、あまり上手くいかなかった。  
なぜだ……。

## 7 悪魔の召喚

？

？

？

約束を容易にしないものは、その実行において最も誠実である。

ジャン＝

ジャック・ルソー

？

？

？

第九次アムルタット征伐軍がヘルタントを出発してから数日がたち、俺達の生活も少しばかり変わる事になった。

まず俺はこれまでよりも早く起きて朝食の準備や家事を簡単に済ませて、そのあといつまでも寝ているネロを起こしてから二人で朝食をとって、家を出発する。

途中でフチと合流して、そのまま三人でタイバーンの待つくサントレラの歌へ向かう。

タイバーンはいつも牛乳を飲んでいるけど、俺達が店に入るとすぐにあいさつをしてくる。

そのあと、全員で城に行つて征伐軍に参加しなかった警備兵から昨日の夜のパトロールの報告を聞く。



俺とタイバーンは報告を聞きながら話をするけど、フチとネロはその間、訓練場で体を動かしている。フチはまだ剣の扱いに関しては初心者だから、ネロや警備兵のみならず色々な教わっているみたいだ。

「足をもつとうまく動かすんだ！ リズムよく踊るように！」

「手の力をもつと抜くんだ！ ジェミニの手首をにぎるようにつもりで！」

「呼吸は短くするんじゃない！ 長くしろ！ 深く、長くだ！」

「剣は道具じゃなくて拳の一部だと思え！ 腕を振る感じで剣を振れ！」

……………うん。

どっかで見たような光景だ。

城での仕事が終わったあとは、村の周辺に罠を張る作業をする。

警備兵が大量にいない今、残った戦力だけで村の全てを警戒するのは難しい。

どうしても監視から漏れる場所がでてしまう。

そこで、モンスターが侵入しそうで、かつ俺達が警戒するのが難しい場所 例えば、大通りから離れた小さな道とか にタイバーンが魔術で罠トラップをしかけることにしたのだ。

村の地形に詳しいフチと一緒に歩きながら、タイバーンは様々な質問をし、俺とネロも警備兵で習った知識を提供する。

「それならば、接近ルートとしては、ここがもっとも適しておるな」

タイバーンはそう言いながら、木や石に不思議な模様を俺達に描かせて、呪文を唱える。

ぱっと見た感じでは何も変わっていなかったが、その効果は実験材料にされたフチがその身を持って教えてくれた。

「タイバーン！ 助けてくれ！」

「……一体、なにをしたんですか、タイバーンさん？」

「なあに、ちょっとした幻覚じゃよ。今フチのやつは、五匹のドラゴンに囲まれて、どうやって食べられるか話し合われている最中だろうな」

「……………」

フチに新しいトラウマが生まれてないか、心配になった。

そうやって罫を仕掛けた場所はフチが地図に書き込んで記録する。間違つて警備兵が引かなかつたら大変だし、タイバーンが言うには毎日罫を張つた場所に行かなくてはいけないから必要らしい。

「自然力というものは、一か所に非正常的に魔力が集中することを拒否するんじゃない」

強化の魔術コードキャストの効果が一時的なものと同じ原理かな？

ある日、タイバーンの仕掛けた罠に獲物がかかった。

俺達が急いで罠に向かう途中、村中に響き渡るんじゃないだろうかと思われるほどの悲鳴が聞こえてきた。

「あの大声……もしかしてオーガなんじゃないかな？」

「いや、ガーゴイルかもしれないん。あやつらは甲高い声で鳴くからの」

「あの声から考えるとラミアの可能性も」

「それならセイレーンの叫び声かもしれないぞ？」

「いくらなんでもこんなところにセイレーンはでないと思うけど」

ようやく罠を張ったところまで来ると、そこには叫び声を上げながら必死になって逃げ惑っている………ジェミニの姿があった。

笑いをこらえきれなかった俺達を、ようやく助け出されたジェミニがすごい形相で睨んでいた。

「ジェミニ。こんなところまで、なにしにきたんだ？」

「みんながなにをしているのか、見てみたくなって……」

「まったく、そなたは……」

「好奇心は発見への近道だが、体をぼろぼろにする近道でもある」

放っておくと、またジェミニが罾を無駄に発動させかねないので、ジェミニもこれからは一緒に連れて行くことにした。

タイバーンが仕掛けた罾は直接危害を加えるものはないけど、下手したらシヨックで頭がどうにかなくなっちゃうかもしれない危険も一応あるので、それが一番だと俺も思う。

ちなみに、なんだかんだで俺達と一緒に行動できることになったジェミニはすごく嬉しそうだった。

村中の罾を見て回った後は、やることも特別なので<サントレラの歌>に戻って俺達は解散する。

そのあとはみんな思い思いの行動をしている。

俺は城で警備兵と訓練するか、<サントレラの歌>でヘナーおばさんの手伝い。

ネロも俺と一緒に城で訓練するか、一人でどこかに行っている。

残念ながら、どこでなにをしているのかまでは教えてくれなかった。フチは口ウソク作りか一人で剣術の訓練。

タイバーンは<サントレラの歌>で村のみんなにこれまでの冒険談や、ためになる深い話をしている。

今までは俺とネロは警備兵の仕事で、夜も交代制で村のパトロールをしていたが、今は朝も早いのでそれは残った人たちに一任している。

サンソン達がいらない今、俺はともかくネロはこの村の重要な戦力のため、いつでも全力で戦えなくてはまずいからだ。

万が一、夜にモンスターが襲撃をしかけてきても、タイバンの張った罫もあるし、殺気さえ感じられたらネロはすぐにでも起きるところができるので問題ない。

というわけで、夜は俺とネロは家でゆっくりと過ごしている。

?

?

?

その日も、俺達はいつも通り罫の魔法の更新を済ませてくサントレラの歌>に戻った。

フチはくサントレラの歌>に残ってタイバーンやジエミニ達と話していたけど、俺とネロは先に別れてヘルタント城で訓練をしていた。ターナーとネロが人間離れした動きで木刀を打ちあっているのを見ていると、突然、モンスターの気配を感じ、それとほぼ同時に人間ではありえない咆哮が聞こえてきた。

「む、またジェミニが罾を発動させたか？」

「ネロ、こんなときに冗談はやめてくれ。どう考えてもモンスターだろ」

俺は呆れながらも先ほどの気配や咆哮から、モンスターの場所を特定する。

「東の……丘の方かな？」

「あそこならタイバーンが罾を仕掛けていたはずよな」

「ああ。確か近付くと炎が飛んできたりする場所のはずだ」

俺とネロはターナー達といっしょにすぐさま現場に急行する。

タイバーンの魔法の罾が発動したのか、遠くの東の丘では目を覆う程の眩い閃光が炸裂していた。

さらにその後、丘の上に真っ黒な雲が集まりだし、雷鳴が轟いた。……いや、ていうかあれは死んだんじゃないのか？

「す、すごいな……。的確にモンスターの出現する場所を見抜いたのもすごいけど、あの罾の魔法はさらにすごい」

「只者ではないことは知っておったが、本当にあの者は何者なのだろうか？」

しかし、続いて聞こえてきた怒り狂った叫び声に、今回の相手もまた只者ではないことに俺達は気付いた。

「急ぐぞ！」

ターナーに言われるまでもなく、俺達はさらに移動スピードを上げた。

かなりの速さで走ったが、城から村の外れの丘まではかなりの距離があるため、どうしても到着するのに時間がかかる。さっきの畏で、少しなりとも敵の動きが鈍っていたならいいんだけど……。

「見つけたぞ、モンスターだ！」

「む！ フチとタイバーンもいるみたいだぞ」

ようやく丘が見えてくると、そこには走っているモンスターの大量の姿があった。

おまけに、ちょうど俺達とモンスターの間地点に人影があった。フチとタイバーンだ。

どうやら村にいたフチ達の方が先に着いたようだ。

疾走するモンスターの方を見ると、三メートルを超える巨体が十二

体も並んでいた。

手には人の背丈ほどあるバトルアックスが握られ、その頭部はヒトではなく雄牛のものだった。

「くそつ、ミノタウロスか！」

「迷宮の守護者たるミノタウロスが一匹ならともかく、十二匹もだと!? 相変わらずここは悪魔の巣窟のような場所だな！」

ネロが舌打ちをしながら剣を持った手に力を込める。

ミノタウロス達は怒り狂った叫び声を上げながら、フチ達の方に突進している。

対するタイバーンもすでに魔法を発動させようとしているのか、体の刺青が光を放っている。

よし、これならミノタウロス達よりも早くフチ達の所に着くことができそうだ。

「グオオオオオオオ！」

「なっ!?!」

「いかん！」

一番前で走っていたミノタウロスが、魔法を発動させようとするタイバーンを始末しようとバトルアックスを放り投げてきた。



「ネロ！」

反射的にネロに指示をだすけど、いくらネロでも間に合う距離じゃない。

あまりにも遠すぎた。

ヒュウン、ヒュウン、ヒュウン！

恐ろしい風切り音をだしながら、超重量の鉄の塊がタイバーンに向かって飛んでいく。

タイバーンは目が見えないためそのあまりにも暴力的な死の気配にも気がつくことができない。

俺は声を上げることもできずに、ただその光景を見守ることしかできなかった。

だけど。

「死んでみよう！」

そんな声が聞こえたと思った次の瞬間。

グワアアン！

鉄の塊同士がぶつかる激しい音が丘に響き、バトルアックスが見当違いの方に飛んでいった。

「は、ははは……」

「おお！ フチめ、やるではないか！」

あまりの出来事に、俺は気の抜けた笑いをだし、ネロは感嘆の叫びをあげた。

なんとタイバーンの隣にいたフチがいきなり前に出たかと思ったら、そのままバスタードを叩きつけて、飛んでくるバトルアックスの軌道を変えたのだ。

無我夢中の行動だったんだろうけど、はっきり言って、すごすぎる。

「敵をばらばらにせよ！ バーログ！」

タイバーンはその光景にも気づいていないのか、そのまま呪文を完成させる。

「な、なんだあれ……」

「黒い影！？ いや、全然違うか……？」

続けて起こったあまりの出来事に俺達はどこか茫然とした声をだす。

タイバーンの魔法が発動した瞬間、強烈な硫黄のにおいと共に真っ黒な巨体がフチ達の目の前に現れた。

黒い鎧兜に身を包み、黒煙を全身に漂わせているその姿は、先日倒した謎の黒い影を思い出す。

しかし、あの黒い影は四メートルをゆうに超える巨体などではなかったし、なにより気配がまるで違った。

この間のアレはもっと、おかしい気配だった。  
ミノタウロスの方を見ていた謎の怪物はやがてゆっくりと振り返った。

しかし、振り返った怪物には顔が存在しなかった。

巨大な角のついた黒い兜の下には果てしない闇だけが広がっていた。

「敵は？」

怪物ののっそりとした声にタイバーンがいら立つ。

「このうすのろめ！ あのミノタウロスに決まっておるじゃろ？」

「形式は？」

「殲滅！」

タイバーンの指示を聞いた怪物はミノタウロス達の方に向き直ると、背中に漆黒の翼を広げものすごいスピードで突進した。

「クアアア！」

驚いた一体のミノタウロスがバトルアックスを振り回すが、怪物はそんなの意に反さないように地面に降り立つと右手に持った鞭をミノタウロスの腕にからませる。

グシャッ！ グジャッ！

怪物が軽く引つ張ると、そのままミノタウロスの腕は切断された。絶叫を上げるミノタウロスを余所に、怪物はそのまま鞭を別のミノタウロスに巻き付け、同時に左手に持った巨大な剣で腕を失くしたミノタウロスの上半身と下半身をきれいに分ける。

「あれはキャット・オ・ナインテールか？ またずいぶんと無粋かつ凄惨な武器を使うのだな」

ミノタウロスが絡みついたまま鞭を振り回して、また別のミノタウロスを吹き飛ばす怪物を見ながら、ネロが呻くように呟く。

「キヤット・オ・ナインテール？ あの怪物の持っている鞭の名前か？」

俺も怪物が片手でミノタウロスを振り回しながら歩き、他のミノタウロス達を次々となぎ倒していく様を見ながら、ネロに尋ねる。

「ああ。戦闘用の鞭のことをスコージと呼ぶのだが、あれは先端が九つに分かれています。あれで叩かれるとネロが引つかいたような跡が残るので、キヤット・オ・ナインテールというのだ。本来は殺傷能力の低い拷問用の武器なのだが……」

ネロは一旦言葉を止め、キヤット・オ・ナインテールでミノタウロスの目を潰している怪物を見る。

「……あれは先端が金属のスパイクになっているうえに、あの大きさだからな。十分すぎるほどに武器としての役目を果たしてある」

まあ、芸術性のかけらもない無粋な武器には変わらぬがな、と言葉を締めくくり、ネロは再びミノタウロスの虐殺場面に目を向ける。正直、あまり見たい場面ではないが、かといってモンスターから目を離すわけにはいかないので、黙ってそれを眺める。

怪物は倒れたミノタウロスを足で踏みつぶし、そのまま巨大な剣

あれはクレイモアか？　で容赦なく突き刺していく。

その間に他のミノタウロスが斬りかかってくるが、怪物はそれに視線を向けることもなく、キャット・オ・ナインテールを絡ませて自分の足元に這いつくばらせる。

そして血まみれのクレイモアでさっさと首を切り落とし、次の獲物に攻撃の手を移す。

「フ、フチ！　あれは、なんだ……？」

茫然としていたターナーが力を振り絞って、フチに尋ねる。

フチは俺達がいたことに気づいていなかったのか、一瞬驚いたような顔をしていたが、すぐにターナーの疑問に答える。

「あの真つ黒なやつは、タイバーンが呼びだしたんだ！　オレたちの味方だ」

「いや、オレもそれは見たんだけど……。あれ、もしかしてバーログか？」

「バーログ？」

「ターナー、やつを知っているのか？」

確かにタイバーンもそんなふうに言っていたような気がするけど。

「魔術師どの。私が見たところ、あれはバーログのようですが……。あの鞭は、たしかにバーログの武器」

「ほう、さすがじゃな」

「<アビスの迷宮>を守るバーログが、なぜわれわれの味方を？」

「わしが呼びだしたのを見たど、先ほど自分で言ったではないか」

ターナーは啞然とした顔でタイバーンを見る。

「あの、精霊ならいざ知らず、あいつは悪魔でしょう?」

「たいしたもんだな。エルフの精霊召喚についてもくわしいんじゃないな」

「常識レベルくらいには……」

確かに俺もカールから習ったから、エルフが精霊を召喚できることを知ってるけど、普通はあまり知らないと思う。意外とターナーって博学なんだな。

「ですが、いったいどういうことなんです。バーログは召喚するとか、そういうやつではないはず。人間と同じように、この世に存在するものではないですか?」

「そうじゃ。なあに、ちょっとくアビスの迷宮から、わしがここに連れてきたんじゃ。召喚とは違う。いわゆる空間移動じゃな」

「連れてきたからって、バーログがわれわれのために闘ってくれるなんて信じられません。どういうことですか？」

ターナーはそう言いながら、逃げようとするミノタウロスを始末しているバーログを見る。

「約束があつてな」

「約束ですって？」

「わしが望むままに敵を抹殺するという約束。言いかえれば、わしはやつに血を提供するわけじゃ。いまも大はしゃぎで、ミノタウロスの返り血を浴びておるはずだ」

タイバンの言葉が終わるとほとんど同時に、最後のミノタウロスがバーログに倒される。

断末魔の悲鳴を上げながら大量の血を吐いて倒れるミノタウロスに見向きもしないで、バーログはさっさとこちらにやってくる。

四メートルを超える巨体がこちらに翼を広げて飛んでくると、まるで雲に覆われたかのように空が覆われ、辺りが暗くなる。

ぎよつとしたターナー達が剣を構えると、バーログはそれを見て無感情のままタイバンに問いかける。



「やつらもか？」

「っ！」

それを聞いた俺達に一齐に戦慄が走る。

「なんじゃと？ こいつらは違うぞ！」

「そうか？ おかしな気を発するものが何人かいるようだが」

まさか、俺とネロのことか……！？

「おぬしには関係あるまい」

俺が冷や汗を流していると、タイバーンが不機嫌そうに答える。

「それなら、すぐに送りかえしてくれ」

「なんじゃ、急ぎの用か？」

「わが迷宮にしのびこんだ冒険家どもがいる。そいつらを攻撃していたのに、そなたが私を呼びだした」

「そうか。ありやりや……。テレポトワープの呪文をど忘れしたな」

タイバーンがそう冗談めかして言うと、バーログは血まみれのキャット・オ・ナインテールを振り上げる。

「危ない！」

「ぬう！」

俺はいつでも呪文コトドキヤストを使えるように右手を上げ、ネロも素早くタイバーンとバーログの間に体を割り込ませる。  
他の警備兵達も突撃の態勢をとる。

だけどしばらくすると、バーログは振り上げた鞭をだらりと下げた。

「タイバーン、早く思いだせ。迷宮の侵犯者を生きて返すわけにはいかぬ」

「その冒険家たちを血祭りにあげるつもりじゃな」

「よく聞くがいい。そなたは、昔のタイバーンとは違う。魔術師は、目が見えなくなつては、死んだも同然。どうやって生きながらえているのか、不思議なくらいだ」

「それで？」

バーログは沈鬱な声と対照的に、タイバーンの表情は穏やかだ。

「私がそなたと契約を交わした当時は、しかたなくだった。血対暴力。それほど悪い契約ではなかったがな。だが、いまのそなたなら、指一本でも簡単に始末できる」

「そうか」

「私を送りかえせ。私がまだ、そなたとの契約を守っているのだ。そなたも私の名誉を傷つけぬよう、行動せよ」

タイバーンはニヤリと笑うと、ゆっくりと呪文を唱え始める。そして、追い払うように手を振る。

「失せろ、運の悪い悪魔め。その冒険家たちも、とうに逃げだしておるじゃろ」

その言葉が終わらないうちに、黒煙に飲まれてバーログは消えてしまった。

……できれば、タイバーンの言った通りその冒険家の人達が逃げ出していますように。



## 7 悪魔の召喚（後書き）

若干短めですが、今回はこんなところですよ。

それにしても、これでようやく一巻の半分まできたんですよ……。  
自分の書くスピードの遅さに、自分のことながら嫌になりますね。

?

?

?

あなたのする善行、あなたの提供する親切、あなたの送り出す愛と善意は、いろんな面で何倍にもなつて戻ってきます。

ジョセフ・マフィー

?

?

?

黒煙の中にバーログが消え去ると、それまで丘の上に漂っていた闇のように暗く、重苦しかった雰囲気はあつという間に霧散して、あとはいつも通りの丘の光景が広がっていた。  
それだけバーログの発する闘フレッシヤ気が強かつたんだらう。

バーログの威圧感が消えると、フチは緊張が解けたのか、腰を抜かすようにして座り込んでしまった。

……無理もない。

あのネロやターナー達ですら若干疲れたような顔をしているのに、フチが平気でいられるはずがない。

おまけにフチの場合はその直前に、『飛んできた人間程の大きさを

持つバトルアックスを弾き飛ばす』なんて無茶をやったのだ。安堵のあまり力が抜けても、だれも文句は言えまい。………ただし、その光景を見ていない人は別として。

「おい、助手三号。いくぞ。ミノタウロスの死体を片づけんとな、それにやつらが突破したブービートラップを、もう一度しかけておかねば」

盲者魔術師タイバーンの無慈悲な一言に、ウソだろーと言いたそうなフチ。

「タイバーン……。足が、がたがたふるえて、一步も動けないよ」

「こんな不誠実な助手が、なんの役に立つんじゃ。タクトとネロの二人もおるし、いつそ解雇してしまおうか」

「なんだって？ 誰のおかげで生きていられる思ってただよ！」

「ううん？ なんの話じゃ？」

「さっきあなたが呪文をとなえていたとき、ミノタウロスがバトルアックスを投げつけたんだぞ。オレが防いでなかったら、あなた、とっくにくたばってたはずだ！」

やはり気づいていなかったらしく、タイバーンの顔に驚きの表情が浮かぶ。

「おい、それは本当か？」

「本当ですよ。俺もこの目でバトルアックスを弾いたのを見ました」

「うむ、あれは実に爽快な光景だったな。あれだけで劇の脚本が一本仕上がるぞ。それもとびっきりの傑作がな」

タイバーンはしばらく豪快に笑ってから、楽しそうに言う。

「これはこれは。フチがわしの命の恩人ということになるな。よし！ フチ、なにかひとつ願いごとを申してみよ。わしが、かなえてやるぞ」

……ランプの精？

「本当に？」

さっきまでの不機嫌さもどこにいったのか、フチの目がキラキラと輝きはじめる。

「じゃが、あせるとつまらない願いごとを口走ってしまつかもしれん。じっくりと考えてみるんじゃないかな。まずは仕事を片づけてしまお



う。死体の山に群がってくるのが、蠅だけとは限らんぞ」

「魔術師どのの言うとおりでぞ。おまえら、さっさと作業を始めるぞ」

「ネロ。今日は逃げるのはナシだぞ。サンソン達がいらないから、俺達だけじゃいつもより時間がかかるからな」

「う………………。な、なにを言う。この余が！ 元、神聖ホニヤララ帝国を戴く絶対皇帝であり、そなたの最高の剣でもあるこの余が！ 一体なにかから逃げるといふのだ！」

「いや、ネロって戦闘が終わったあと片づけになるといつもいないよね？ あきらかに逃げてるよね？」

「うぐっ……………」

「はい。わかったら、さっさと片づけを終わらせるよ」

ものすごく嫌そうな顔をしているネロを引きずりながら俺も作業に加わる。

バールグが『殲滅』したミノタウロスの死体を拾い集めて、一か所にまとめる。

そのとき死体を焼くときに邪魔になる武器や防具は別にして、戦利品として城に持って帰る。

とはいえ、ミノタウロスの装備はどれも、大人一人程の大きさもあるバトルアックスなど、普通の人間では使うことができないものばかりなので、おそらくほとんどのものはジョイスの鍛冶場リサイで作クルりなルおサれることになると思う。

バラバラになつた死体を集め終えると、タイバーンが呪文を唱えてそれに火をつける。

……俺の効果が偏っている呪文「ドキャスト」では火をつけるなんて簡単なこともできないので、そこは少しだけ羨ましい。

俺もこの世界の魔術を覚えたほうがいいんだらうか？

そしてミノタウロスの死体が完全に燃え尽きるのを全員で確認して、ウキウキ気分のフチと一緒に俺達は村に戻った。

？

？

？

「なにがいいかな？ ううむ。魔法のロウソク製造機でもだしてもらおうか」

「フチ……いくらなんでもそれは短絡的じゃない？」

「ジエミニの言うとおりだぞ。第一、そういう安易な考えでは余がつまらぬ」

「あれ、そういう問題なんだ」

「当たり前であるう、フチよ。どちらにせよ、余には関係のないこと

なのだ。ならば少しでも面白いほうがよいではないか！……タイバーンもタイバーンだ。この間の百セル金貨のことといい、なぜフチにばかり色々と思ひ、余にはなにも貢ごうとしないのだ！」

「はい。ネロ、嫉妬しないの」

顔を膨らませるわがままお姫様の頭を、ナデナデとやさしくなでてあげる。

するとネロは顔を真っ赤にして俺の手を乱暴に振り払う。

恥ずかしかったのかな？

まあ、なんとなくわかってたから別にいいんだけどね。

「……タクトって、ときどきすっごく大胆よね」

「？ なんのことだ？」

「なんでもないわよ」

なぜだか俺以外のみんながため息をつく。  
いったいどうしたんだろう？

「それで、結局どうするつもりなんだ？」

俺の言葉に、フチはうーん、と頭を悩ませる。

フチが今悩んでいるのは、当然のことながら『願いを一つだけ叶えてやる』というタイバーンの例の問題発言のことだ。

俺達が村に帰ると、誰が伝えたのかわからないけど早くもさっきのフチの驚愕の行動が噂されていた。

おまけにどこでどういう風に伝わったのか、フチは『雨脚のように飛んでくる十本のバトルアックスを一度にたたき落として、呪文の詠唱中で完全に無防備だったタイバーンの命を救った勇士』という、警備兵隊長や太陽の騎士もびっくりの英雄になってしまった。

おかげでたくさん少女がフチに近づいてきたため、ジェミニはさつきからずつとフチのそばから離れようとしないう。

幼馴染を盗られないかと心配なんだろう。

「ははは。フチはモテるな。村中の少女が言い寄っているんじゃないか？」

「……そなたも最初に村に来た時はこれくらいすごかったのだぞ？」

「ん？ そうだったか？」

「うむ……。余がそなたに近づくとお邪魔虫共を追い払うのにどれだけ苦労したか……。この世界に来てようやく凜がいなくなったと喜んでおったのに……」

そなたは油断ならん、と今日一番の不機嫌そうな表情でネロは言った。

なるほど、気付かないうちにネロにいらぬ心配をかけてしまっていたらしい。

おわびとして、家に帰ったらたつぷりと慰めてあげよう。

……でも、ネロも心配しすぎだと思っけど。

女の子達だって、村にやって来たばかりの見知らぬ人が珍しかっただけだと思っし。

それはともかく、当のフチはタイバーンに叶えてもらっ願い事を考えるのに忙しくてそんなのに構っている暇はないみたいだけど。

「かんとんに、お金をたくさんくれって、たのめば？」

「金？ そんなの嫌だぜ。だつて品がないだろう。お姫様を救い出した勇士が金を要求したなんて話、聞いたことがあるか」

……聖杯戦争で戦ったあの女海賊ライダーなら、普通にそんなこと言いそうだけど。

「ただで助けたとでも思ったのかい？ アタシはあくまで海賊だからねー。あらん限りの感謝の言葉よりも、びた一文でもお金をくれるほうが遥かにありがたいのさ。そうだ。どうせなら今回の分だけじゃなく、もつと余分に払ってアタシを雇わないかい？ どうせ死んだらどんな金銀財宝だつて意味ないんだ。それだつたら一切合財をこのアタシに投資したほうが何倍もいい。そうは思わないかい？

ああ、安心しな。前金だけもらってトンスラなんてセコイ真似はアタシの流儀に反する。給料分の働きはきつちりとこなすさ。もち

ろん、どうするかはクライアント次第だ。さあ、どうするっ？」

……………なんだろう。

今、ライダーの声が聞こえた気がする。

「そんなの物語でしょ？」

「嫌なものは嫌だ。待てよ。オレの剣に魔法をかけてくれたの  
んでみるか」

「おお、それはよいな！ 魔法剣か。胸が躍るのう！」

「だろ。やっぱりいいよな」

「でもさ」

「魔法剣でなにをするつもり？」

「うっむ。そうだな」

「むっ。余はいいと思うぞ。魔法剣」

「だったらネロが自分の剣を魔法剣にしてってたのんだら？ やっ  
てくれるかはわからないけど」

「む…………。それはだめだ。余の隕鉄の鞆アエストゥス・エストゥス「原初の火」はただの剣で  
はなく、余自らが鍛えた至高の芸術品だぞ。そんな簡単に他の者に  
手は加えさせられん！」

そう言っつて顔を真っ赤にさせるネロ。

まあ、芸術家肌のネロには耐えられないことだろうな。

そのあともしばらくの間悩んでいたフチだったけど、やがて自棄になったのか髪をかきむしって投げやりに叫んだ。

「ええい、わかんねえや。力を強くしてくれつたのむことにした  
！」

……そんな願いでいいのか、フチ？

周りを見ると、他の二人も俺と同じような顔をしていた。

「力が強ければ、便利じゃないか。重いものを持つことにはじまつて、油桶を運ぶときも楽だし、悪くないだろ？ 腕たてふせでできたのも、めんどろっだしな」

俺達の視線を感じたのか、フチは肩をすくめる。

「でも……あんまりにも動物的じゃない？」

「だから、なんだ。おまえは動物じゃないのか？」

「それ、どっとういう意味よ！」

「しかし、本当にそれでよいのか？」

「ああ。どうせオレはヘルタント領のロウソク職人候補でしかないんだ。魔法剣とか、そんな大層なものをもらってもしかたないだろう？」

まったく、お前は。

せつかくの願い事をそんなことに使うなんてな。

いつも俺や村の人たちに純真すぎるーって文句言ってるけど、お前も十分純粋なほうだと思うぞ？

そんなことを言いながら、我ながらいいアイデアじゃないか、と一人頷いているフチを見ながら、俺は一人そう思っていた。

「……なんだよ、タクト。その妙に生温かい視線は？」

「いや、なんでもないよ」

相変わらず勘が鋭いフチに、俺は苦笑を返す。

？

？

？



フチの願い事が決まり、俺達はすぐにタイバーンの待つくサントレ  
ラの歌>に向かった。

店で酒を飲んでいたタイバーンにフチが願い事を言うと、案の定、  
大爆笑されていた。

「ひいつひいつ、理由はなんじゃ？」

「荷物を運ぶのも楽そうだし、仕事をするのにも役に立ちそうだし」

再びタイバーンは爆笑し、フチはその様子に無然とした表情を浮か  
べている。

タイバーンはそうやってしばらく大笑いした後、フチに部屋にある  
自分のカバンを取って来させた。

「それを、おぬしにやるぞ」

タイバーンはカバンを受け取ると、その中から何かを取りだす。

それは、黒色の皮でできた手袋だった。

手の甲と手のひらの部分を小さな銀色のチェーンが隙間なく覆って  
いるが、それ以外は特におかしい所はないように見える。

一見すると、妙な形をしたただけの手袋だ。  
……だけど、俺にはその手袋の中に魔力が渦巻いているのがわかった。

この手袋、なんだか向こうの世界の礼装と同じような印象を感じる。

「む、これは……?」

たぶんネロも手袋から放たれる魔力を感じたんだろう、テーブルに置かれた手袋を見ながら怪訝そうな顔になっている。

まあ、重力を反転させたり、悪魔を召喚させたりすることができるあのタイバーンだ。

礼装みたいな品を一つや二つ持っていてても不思議ではない。  
危険もないだろう……たぶん。

フチも俺達の様子に怪しむような顔をしていたけど、素直に手袋を自分の両手にはめた。  
だけど、すぐに眉をひそめる。

「これ、なんだよ? なんにも変わらないんだけど?」

首をかしげながら手をグーパーさせるフチ。

笑いをこらえながら見ていたタイバーンは、ジェミニに店の隅にある薪を取って来させていた。

そしてその薪をそのままフチに持たせる。

「左右にひっばってみる」

えっ……。

まさか……。

タイバンの言葉通りにフチが薪を左右に引つ張ると、薪はまるでやわらかい紙のように真つ二つに裂けた。

「ひいっ？」

あまりの出来事にヘナーおばさんが変な声を上げている。そついう俺達は驚きのあまり声も出ていなかったが。

「な、な、なんだ、こりゃ？」

「ふむ。今度は両方の手に力を入れてみる」

次にタイバンに言われフチが手に力を込めると、二つになっていた薪はまるで雪のようにボロボロと崩れ去った。

「ふええ？」

ジェミニの驚いた声だけがすっかり静かになった店の中に響いた。俺も他のみんなも茫然と、『薪を握りつぶしたフチ』という信じがたい光景を見ていた。……いや、タイバーンだけはニヤニヤと楽しそうに笑っていただけだったけど。そんな中、いまだに動揺している客の一人がフチに青銅製のコップを差し出した。

「よお、フチ。こいつを左右にひっぱってみてくれ」

「だめえ！」

ヘナーおばさんから必死の制止の声が出るが、すでに哀れな青銅のコップは真つ二つになった後だった。

……というか、なんてデタラメな力なんだ。

サーヴァント時代のネロだったらこんなこともできたかもしれないけど、今のネロじゃ *gain|str* (32) を使ってもこんなことできないぞ……。

いや、もしかしたらあの頃のネロでも無理かもしれない。

「な、なに。こんな怪物みたいな手袋が……？」

「よく肝に銘じておくんじゃない。それは物理的な力だけを強くするように作られておる。健康や精力のようなものとは、関係ないんじゃない。よって、娘さんたちを喜ばせるようなこととは縁がない」

大げさに肩を落とすフチを、ジェミニが思いっきりつねる。  
うわー、あれは痛そうだ。

「タイバーン！」

「わははは。とにかくフチ、おぬしが言ったとおり、荷物を運ぶときにはとても重宝するじゃろう。この瞬間から、おぬしの腕は、生きた熊の心臓を抜きとれるほどの力を持った」

……すごい例えだ。

ほら、ジェミニなんて真っ青になっちゃったじゃないか。  
ん？

待てよ……。

俺はそこで少し気になったことをタイバーンに尋ねてみた。

「タイバーンさん。今のフチなら、ライオンを絞め殺すことってできますか？」

「ん？ 無論、できるぞ。どうしたのだ、タクト？ おぬし、まさか自分でやってみたいとは言っまいな？」

「ははは、まさか。ちょっと気になったただけですよ」

そう言いながらネ口をチラッと見ると、彼女はものすごく不機嫌そうなお顔をしていた。

ゴメン。

でも気になったんだから、しかたないだろう？

「ともかく。おぬしは今、ものすごい力を手に入れた。うまく使いこなすんじゃない。パンを粉々にしちまって腹をすかせる、という愚かなふるまいをせんように、食事のときはその手袋を脱いだほうがいいぞ」

「ああ、わかったよ。ところで、これ、ずいぶん高価な品なんじゃないのか？」

「いくら値がはるといっても、自分の命より高い物があるか？ 遠慮なく持っていけ」

「じゃあ、本当に遠慮なくもらってくぞ？ あとで返してくれなんて言うなよ。ユピネルと……」

「ヘルカネスの名において。これでいいな？ わしはな、ふふふ、これまでそれほど多くの願いごとをかなえてやったというわけではないが、こんな単純バカみたいな願いごとを聞かされたのははじめてじゃ」

そう言って豪快に笑うタイバーン。

ま、普通そうだよな。

フチなら聖杯を手に入れても悪用しないで使ってくれそつだ。

いや、フチならむしろ使わないかな？

手袋をはめた手をグーパーさせて喜んでいるフチを見ながら、俺は  
なんだか温かい気持ちになった。

？

？

？

そんな俺の温かい気持ちは、次の日になるとどこかに飛んで行って  
しまった。

代わりにフチとあんな品物を簡単に渡したタイバーンへの恨みつら  
みでいっぱいになっていた。

何があったのかというと、それはもう色々あった。

モンスターの襲撃が頻繁に起こるこの村でも、こんなに色々な事件  
が起こったのは初めてのことだろう。

ただし、その厄介事の原因は全部同じだった。

というより、全部フチの仕業だった。

今日、フチはさっそく昨日手に入れた手袋を使って何かをしてみた  
くなったらしく、いつもの見回りが終わった後、村中のあちこちに  
行くつもりだった。

俺とネ口も今日は訓練に行くつもりもなかったから、フチについて  
行った。

……今思えば、なんでついて行ったんだろう？

そして、悲劇が始まった。

フチは村のあちこちで村人の手伝いを始めた。

それは、材木を運ぶような力が必要な仕事から、赤ん坊をあやすような特に力と関係ない仕事まで、それこそ本当に色々な仕事をしてきた。

それだけだったら、別に俺も何も言うつもりはない。

むしろ、褒めてあげるべきだろう。

だけど、急に怪力を手に入れたフチは自分の力を完全にコントロール出来ていなくて、様々なトラブルが発生した。

例えば 材木を運ぼうとして持ち上げると、その材木が粉々になるし 工事現場で基礎になる柱を建てようとしたら、その柱がてっぺんまで全部埋まるし 井戸の水汲みを手伝ったら、おけが飛んで行って中にある水がぶちまけられてしまう。そんなことを一日中繰り返していた。

おかげで俺とネロはその後始末に追われていた。

粉々になった材木の料金を俺が立て替え、埋まってしまった柱をなんとかネロが引き抜いて、水がかかってご立腹だったネロを俺が必死になだめて……………。

最後のは少し違う気もしたけど、とにかく大変だった。

おまけに、俺や村の人達がどんなに言っても、フチは面白がって決して手袋をはずそうとしなかった。



結局、そんなフチの怪力騒ぎは、泣いてる赤ちゃんを高い高いしていたら、そのまま勢い誤って空にぶん投げてしまっ、なんて冗談みたいな事件が発生するまで続いた。

フチはなんとか赤ちゃんを受け止めることはできたけど、顔を真っ白にした母親に殺されそうになっていた。

あのときは、本当に死んだかと思って覚悟を決めそうになった。

もちろん、母親に殺されそうになっていたフチじゃなくて、ブツ飛ばされた赤ちゃんのほうだけど。

フチについては……………自業自得だ。

とにかく、俺とネロは何もしてないのに、とてつもなく大変な一日だった。

？

？

？

「わははは…」

居酒屋<サントレラの歌>に今日もタイバーンの大爆笑の音が響く。

「あはは、あはは。死ぬ。死ぬ。うへっ。うへへへ！」

フチはすっかり落ち込みながら、ネロは顔を真っ赤にして怒りながら、そして俺はできるだけいつも通りに勤めながら、三人で今日あったことをタイバーンに報告すると、タイバーンは周りにいたお客といっしょに大笑いした。

……こっちはとても笑う気になれないけどね！

「これ、力の調節をする方法はないのか？」

「こいつめ。自分の力を扱う方法は、自分で体得せんとな。誰もが訓練を通じて、力を身につけるじやろ。その訓練課程こそが、結果的に力の調節装置になるんじゃない。じゃが、おぬしはなんの苦労もせずに、力を手にいれただろう。これから、その苦労を味わうしかないな」

タイバーンがそういうと、フチもその通りかもしれないと頷いていた。でも、ちょっと、待てよ。

「タイバーン。つまり、昨日フチにあの手袋を渡した時点でこうなることはわかっていたってことですよな？」

「おお。その通りじゃな」

「……なんで、言ってくれなかったんですか？」

「そう怖い顔になるな。もしかしたらすぐに扱えるようになっていたかもしれないじゃろ？」

「もし、その前になにかあったら？」

「おぬしとネロがなんとかしとったじゃろ。現に、今日もそうしておったろ？」

そう言っただけで見えない目でウインクしてくるタイバーンを見て、俺は溜息をつく。

「……だめだ、勝てない。」

話を聞いていたネロも疲れたような顔をしていたが、フチとタイバーンはそんな俺達を無視して話を進める。

「でも、ちょっと困ったことがあるんだ。力の調節を覚えるためには、ずっと力を使いつづけなければいけないじゃろ？ でも、力を使うたびに事故が起きてしまうんだ。おかげで、ずいぶんタクトとネロには迷惑をかけちゃったし」

「……フチ、迷惑をかけていた自覚があったならもっと早くあの手袋をはずしてほしかたっただぞ。」

「フチよ。おぬしが事故が起きるところばかりに手をだしておるんじゃない。だからタクトたちにいらん苦勞をかけさせたんじゃない。……」

…しかたあるまい。この村が粉々になってしまう前に、わしが明日から少々手を貸してやるか」

それを聞いたフチは嬉しそうにしていた……。

？

？

？

「それで、タイバーンさん。明日はどんなことをするんですか？ どうせあなたのことです。またとんでもないことでもしよつとしているんでしよつ？」

「ははは。フチが心配か？」

「いつもなら。でも、今回はちょっとばかりの無茶なら見逃します。思いつきりやっってください」

「そうだな。余もタクトも今日はずいぶんとあやつに酷い目にあわされた。おぬしが明日フチのやつに罰を与えぬなら、余が直々にあわせるとしよつ」

「別に罰のつもりはないんじゃないかな。それで、どのくらいまでなら

見逃してくれるんじゃない？」

「フチに新しいトラウマが刻まれるくらいまで！」

「フチのやつが死なん程度までなら、なんでも」

「ははは！ わかった、わかった。そんな心配せんでも、あのガンレットを使いこなすようになるには生半可な方法では無理じゃからな。おぬしらも満足できるじゃろう」

？

？

？

NO SIDE

その日、フチは朝から機嫌がよかった。

なにしろ、今日はあのタイバーンが自分を直接指導してくれるのだ。さすがに魔術師だから剣の使い方を教えてくれるわけじゃないだろうけど、それでも気分は高揚する。

いや、タイバーンならもしかしたら盲者魔術師だけじゃなくて、盲者剣法の達人でもおかしくはないぞ。

そんなことを考えながら、フチはいつも通り<サントレラの歌>に

入る。

ちなみに、今日は最初から完全フル武装。  
レザーアーマーにバスタードソード、手にはちゃんと例の手袋もは  
めている。  
やる気満々であった。

「タイバーン！ はりきっていこうぜ！」

「わかった、わかった。今日はやけに、はしゃいでおるな？」

いつも通り牛乳を飲んでいたタイバーンに元気よく声をかけると、  
少しだけ呆れたような返事が返ってきた。  
そして周りを見渡してふと、気付く。

「タクトとネ口はいないのか？」

「あの二人なら先に城に行つて準備をしておる」

「準備？」

昨日のことをちゃんと謝りたかったのだが、いないのならばしかた  
ない。

まあ、城にいるならあとで会えるしその時でいいか、とフチは呑気  
に考えていた。

城に着くと、警備兵隊長代理のターナーが出迎えてくれた。

「おはようございます、魔術師どの」

「うむ。練兵場はあいておるか？」

「はい。タクトとネロが説明してくれたので、いつでも使えるようにしています。それで、いったいなにをするつもりなんですか？」

タイバーンが耳打ちすると、ターナーの表情が引きつる。

「はい？　いくらなんでも……」

「あいつの頭ではそうするしかないんじゃない。それにそこまでせんと、タクトたちが納得せんだろうしな」

「そ、それは確かに……」

なんなんだ？

小声で話されてるせいでいまいちよく聞こえない。

フチが怪訝そうな顔を見ると、ターナーが憐みの視線で答えてくれた。

本当に、一体何なんだ？

「承知いたしました。練兵場は自由に使ってください」

ターナーはそう言うと、他の警備兵を呼びに行った。

「フチ、練兵場のまんなかで立っておれ」

タイバーンに言われたまま練兵場の中央に行くと、言いようのない心細さをフチは感じた。

なにしろ、中央というのは全ての方向に均等に神経を集中させなければならぬのだ。

おまけに、ターナーに集められた警備兵やいつの間にか来ていた拓斗とネロが練兵場の左側に整列して見ているのだ。

心細くもなる。

タイバーンは何度か頷くと、呪文を唱えだした。すると、突然フチの目の前に魔法陣が出現した。

「うわ！ あれを見る！」

興奮した警備兵達の言葉にあわせるように、魔法陣から黒い煙が上り、硫黄のにおいが辺り漂い出した。

一昨日バーログが召喚されたときと似たような状況に、フチの心に不安が募る。

また、バーログが現れるのか？



魔法陣は黒い煙以外にも、強い光の柱を放っていた。  
やがて光や煙が消えると、そこには大きな何かが立っていた。

「お、懐かしいな。オーガではないか」

練兵場の外でネロが声を上げる。

ネロにとって、オーガはこの世界で初めて戦ったモンスターだ。  
色々と思うことも多い。

現れたオーガはあのときとほとんど同じような姿だった。  
いかつい肩に、筋肉のよくついた肉体。

六キュビットはある大きな背丈に、大人の腰回りはあるような太もも。

手にはコピシユを持ち、ギョロつとした目で周りを見渡している。  
相変わらず美しくない、とネロは眉をひそめる。

「でてきたようじゃな？」

「は、はい。本当にあいつを呼びだしたんですか？」

「よし、フチ！ 相手をしてやれ」

茫然としているフチに、タイバーンが無情なことを告げる。  
ぎよつとしたフチに、さらに知りたくもない事実を突きつける。

「そっじゃ、一つ言い忘れたことがあったな。その手袋、OPGじや」

「OPG?」

「オーガ・パワー・ガントレット」

「ヒエーツ!」

驚愕の事実を聞いたフチは、前にカールが言っていたことを思い出していた。

『ネドバルくん、コノエくん、クラウディウス嬢。モンスターと人間では、アイデンティティの形成からして差があるもんなんだ。人間、ネドバルくんを例にとってみようか。ある日、ネドバルくんが大通りを歩いていると、自分そっくりの姿、自分そっくりの言葉づかいをする男が、むこうから歩いてきた。そして、きみを見つけると、おどろいて「おまえは誰だ?」と食ってかかってきた。どういう気分かね? 頭が変になりそうだろうか? ……コノエくん。大丈夫かね、なんだか顔色が悪いようだ。……ふむ。わかった。話を戻そう。だが、人間の精神は柔軟性があるから、ある程度落ちついてくると、まずこれはどういうことか考えようとする。自分でもまったく知らなかった双子がいたんだろうか、なんていうふうだね。うん? どうしたんですか、クラウディウス嬢? そんな難しそうな顔をして。問題ない、昔のことを思い出しただけ? そうですか。

いらぬ心配だつたようですね。……話を戻しますが、モンスターの精神は、それほど弾力的にできていないんだ。そこでアイデンティティをおびやかされると、反射的に相手を殺そうとする』

他にも、モンスター能力を持ったものは、大きな利点を得ることができるが、同時にとんでもない危険を伴うという話も思い出していた。

例えば、<サラマンダーの心臓>を持つている者は、あらゆる炎から身を守ることができるが、本物のサラマンダーと出会つと命の危険にさらされる。

<オーガ・パワー・ガントレット>を持つている者は怪力を身につけることができるが、本物のオーガと出会つたらどちらかが死ぬまで闘わないといけない。

そんなことをフチが考えている間に、オーガはフチの存在を確認し、そしてそのままフチの手にはめられたOPGに釘づけになる。

「グルルル！」

オーガの怒りに満ちた唸り声を聞いて、フチの体が細かく震えだす。そんなフチの様子などまるで気にしていないかのように、オーガはコピシュを振り上げる。

「グワアア！」

「タイバーン！ あ、あんた、オレをこおろおすきかああああ！」

タイバーンを呪いながらも、バスタードソードで向かって来るコピシュを防ぐ。

グワワアン！

まるで大きな鉄の塊がぶつかり合ったような音をたてながら、バスタードとコピシュが離れる。

驚いたことに、タイバーンはそんな様子を見ながらも笑いながら城の中に入って行ってしまった。

さらにターナーまでもがため息をつきながら、整列して座っている警備兵の方に行ってしまう。

「みんな、だまって見物してる。それから、となりの者に伝達」

ターナーの言葉が伝えられていくと、座っていた警備兵の顔が引きつる。

「魔術師なんていうのは、ひと筋縄出はいかないもんだが、いくらなんでも……」

「死んだらそこまで。生き残ったら、見どころがあるってことなんじゃないのか」

「半死の状態になるまで、助けるなっ？」

「フチーッ！ オレたちが苦勞しなくてすむように、少しは抵抗して傷でもおわせてみる」

勝手なことを言う警備兵達に、怒りを通り越して呆れすら感じる。

「うむ、まるで闘技場のようだな。剣闘士達と猛獣の闘いを思い出すぞ。あれは心躍ったな」

「ああ、確かに今の状況は娯楽「ロシムのための闘いって感じだな。俺はあんまり楽しくはないけど」

「タクトーッ！ ネローッ！ 助けてくれよー！」

警備兵に交じって呑気に会話している友人達に必死になって呼び掛けるが、返って来たのは無情な答え。

「余もタクトも一応、警備兵だからな。隊長代理のターナーの命令には逆らえん」

「フチ、自業自得だ。少しは反省してくれ。それに心配するな。本当に死にそうになったらみんなで助けるから」

「あんたら全員、初夜に不能におちいるだろうよおお！」

役立たずな外野キヤラリーに精一杯の呪いの言葉を吐く。

その間もオーガは癪に障るフチを潰そうと、一切の容赦のない攻撃を続ける。

対するフチは剣の腕はまだまだ未熟だし、OPGの怪力にも慣れておらず、自分の力に振り回されることも多かった。

しかし、まるで勝機がないというわけでもないことに、フチは気付いていた。

まず、オーガの動きが鈍いことだ。

元から大きな体格をしているため、どうしても全体の動きがゆっくりとなってしまう。

おかげで闘いに関しては素人のフチでも十分に攻撃を防ぐことができる。

それでも普段ならネロと闘ったときのように、その怪力がその動きの鈍さをカバーしてくれる。

しかし、今の相手はOPGをはめ、オーガと同じ力になったフチだ。自慢の怪力もなんの役にも立たない。

「このやろっ！ おまえとオレは、同等の怪物なんだ！ よっし、死んでみようっ！」

「グアッ！」

フチの剣がオーガの腰を斬り裂く。

予想外の相手の反撃にオーガはたじろいで、後ずさる。

絶好の追撃のチャンスだったが、フチ自身も自分の行動に驚いて固まってしまう。

「フチ！　こらー！　今すぐ飛びかかれ！」

警備兵達の声に我に返った時には、すでにオーガは態勢を整えてコピシユを構えなおしていた。

隙の消えたオーガに攻撃できるはずもなく、しかたなくフチもバスタードを構えてオーガと睨みあう。

オーガは先ほどの攻撃で頭が冷えたのか、慎重に弧を描きながら動いてフチの隙を探す。

フチもオーガの動きに合わせて反対に動くが、その顔は恐怖で今にも泣きそうだった。

「うわあ、たいしたもんだ。足の運びも、なかなかのもんだな」

「よいぞ、フチ。そのままオーガの隙を探すのだ！」

「足を地面にぴったりとくっつけたまま、すべらせるように動くんだ！」

無責任な警備兵達の歓声にフチの堪忍袋の緒が切れる。

「口ばつかじゃなくって、ちょっと助けてくれよ！　あんたらみんな、殺人共犯者だぞ！」

「おや、犬が吠えたのか、鶏が鳴いたのか」

「タイバーンどのの言いつけだから、おまえが死ぬ前に、かならず助けてやるから」

「ようよう。運悪くフチが死んじまったら、誰がジエミニにその事実を伝えに行くんだ？ くじ引きで決めようか？」

「あ！ オレは嫌だぜ。くじ引きはどうも苦手なんだ！」

相変わらずの警備兵の態度に腹が立ってくる。

おまけにいつもなら味方になってくれる拓斗も、今回は本気で手伝う気がないらしい。

フチとオーガの戦闘を見ているその顔はどこまでも無表情だ。

その感情のない顔と冷めた目が拓斗の内心の怒りを表しているようでとても怖い。

昨日ちゃんと謝っておけばよかったと、フチは今更ながら後悔する。

「おい、オーガよ。あの男どもと手合わせしたあとで、あんたの相手をしたいんだがな？」

フチの軽口に対して、オーガはコピシュを振り下ろすことで答える。だが、さすがにその動作はフチも予想していたらしく、すぐに迎撃する。

腕を振り上げる動作を利用し、遠心力のまま体全体を回転させてオーガのコピシュを弾くと、そのままもう一回転してオーガの体を狙う。

残念ながらバスタードはオーガの顎をかすめるだけだったが、さすがのオーガもそのデタラメな行動にぎよっとする。



「うわあ！ かつこいいぞ、フチ！」

「……なんちゅう、無茶苦茶な」

警備兵の歓声と拓斗の呆れた声がこちらに聞こえてくる。

「う……これはシャレになんないぞ」

怪力を利用した強引な回転切りは、フチにひどい腰の痛みという代償を残した。

しかし運のいいことにオーガの方も顎を割られそうになったことでフチへの警戒心を高めておりすぐに襲いかかってくることはなかった。

力は同じで、動きはこちらの方が鈍い。

一撃で決められなければ、危険なのはこちらだ。

だが、腕の長さはこちらの方がずいぶん長いのである、距離を上手く取れば向こうは攻撃できなくなる。

そう考えてオーガはフチとの距離を測りながら後ずさる。

「うりゃあー！」

後ずさるオーガの考えを見抜いたフチは距離を離される前に自分から間合いをつめる。

オーガの腕は確かに自分より長いが、相手の武器よりも内側に入れたらどうしようもないはずだ。

そう考えたフチはバスタードを振り回しながらオーガの懐に飛び込む。

しかしオーガの方もフチの行動を読んでいたらしく、飛びかかってくるフチに対して慌てることなく足で迎撃する。

柱ような太い足で蹴り上げられたフチ、なすすべなく飛んでいき地面に転がる。

衝撃で動けないフチに、オーガは止めを刺そうと飛びあがりながらコピシュを振り上げる。

「死んでみよう！」

フチは最後の賭けで必死になって体を起して、バスタードを突き出す。

「グアア！」

落下するオーガの自身の力と突き上げるフチの力がいつしよになることで、バスタードは筋肉の塊のようなオーガの腹部を貫通することに成功する。

オーガの口から血が噴き出すのを見てフチは勝利を確信する。

しかし、オーガは最後の力を振り絞ってコピシュを再び振り上げる。フチは慌ててバスタードを構えようとするが、バスタードはオーガの肉にしっかりと刺さってしまっていて抜くことができない。茫然と、フチは自分に向かって振り下ろされるコピシュを見ているしかなかった。

「ジエミニニー！」

悲痛なフチの悲鳴が練兵場に響き渡った。

？

？

？

闘いは終わった。

OPGのおかげで同じ怪力だったとはいえ、フチもあのオーガ相手にかなり善戦した。

しかし、やっぱり今のフチではオーガを倒すことはできなかった。

まあ、しかたない。

フチ、お前はよくやったよ。

首を横に振る俺の周りではネロやターナー達が練兵場の中にいるフチを見ながら大爆笑していた。

そう言う俺自身も笑いを堪えることができない。

「く、くくく。反省しろよ、フチ」

フチはオーガの体に剣を突き出した態勢のまま、茫然と座っていた。もちろん、ちゃんと生きている。

オーガの姿はどこにもなく、死体もなければ、血の一滴すらも残っていない。

茫然と魂を手放しているフチに、ターナーが涙を流しながら声をかける。

「ひいつ、ひいつ。こいつめ。安心しろ、ひひひつ、にせものだ」

「イリユージョン！」

ターナーの言葉を理解したフチはそのまま力なく地面に倒れる。

イリユージョン。

名前の通り幻覚を見せる魔法。

もちろん、見せられるのはただの幻だから肉体にはなんのダメージもない。

今回、フチの闘っていたオーガはイリユージョンで作られた幻だったのだ。

OPGの怪力に慣れるためにはやはり思いっきり力を使うことのできる戦闘が一番いい。

だけど、まだまだ戦闘の初心者であるフチが実践を行えばどうなるか？

考えるまでもない。

そこで、死ぬことなんてありえないイリユージョン相手にフチは闘ってもらったことになったのだ。

そうすればOPGの力に慣れることもできるし、実践経験を積むこともできる。

おまけに昨日散々迷惑をかけたフチに対するちようどいいお仕置きになる。

まさに一石三鳥のいいアイデアだったのだ。

まあ、下手したらフチの精神が死ぬ可能性はあったんだけど、あのタイバーンがそんなヘマをするはずがないので、俺達は安心してフチとイリユージョン・オーガの闘いを見ることができたのだ。

いやー、胸がスカツとした。

周りの警備兵のみんなはいよいよ本格的にフチをからかいはじめる。

「聞いたか？ 『ジエミニイー！』だって。かっこよかったよな」

「ああ、うらやましいな。オレは誰の名前を呼びながら死のうかな。お母ちゃーん？」

「タクトはいいよな、呼べる相手がいるんだから」

「からかわないでくださいよ」

「逆にネロも名前を呼ぶのか？ 『タクトオー！』みたいな感じで」

「……余を怒らせたいのか？」

「よお、フチ！ ああいうときは、呼び捨てじゃだめだぞ。私の魂の鍵を握る、うるわしきレディ・ジエミニよ！ こんなふうには、言っつてやんなきゃ」

「おお、それはよいな！ ジエミニもきつと喜ぶぞ！」

「確かに、それが今際の際の言葉じゃなかったら喜ぶかもな」

俺達が笑い合っていると、それまで地面に転がっていたフチが黙って立ちあがった。

あ、やばいかも。

俺はすぐに逃げられるように、( move | speed ) ( ) を使っ  
つておく。

「フチ？」

さすがに不安になったターナーが声をかけると、ゆっくりとこつちを見る。  
そして。

「あんたらは、死ぬとき誰の名前を呼ぶつもりだ？」

俺たちを見ながら、フチはそれはもう『いい笑顔』を浮かべてそう言った。

「逃げるぞ、ネロ！」

「無論だ、タクトよ！」

俺とネロは一足早く逃げ出して、他のみんなもすぐに散らばる。

そして、後ろからは鬼オーガのような顔になったフチがオーガの怪力でバスタードソードを振り回しながら追いかけてきた。

でもいくら力が強くなっても足の速さは変わらないので、フチは俺達に追いつくのも大変そうだ。

おかげで警備兵のみんなは逃げながらもフチをからかう余裕がある。

「タクトオー！ おまえ、なんでイリユージョンだって教えてくれ

なかつたんだよおー！」

「それだつたら無意識に手を抜いちゃうだろ。だからさ！」

「ウソつけ！ どうせオレが必死になって闘うの笑いながら見たかつたからだろう？」

「違う、違う。昨日散々迷惑かけられたから、少しはフチにも酷い目にあつてもらおうと思つただけだ！」

「同じようなもんじゃねえか！」

「鬼さん、こちら。手の鳴るほうへ」

「ターナー！ おまええ！」

「ジエミニニー！ おまえのナイトが、オレたちを殺そうとしてるぞ！ 助けてくれえ！」

「うわああ！ いいかげんにしろおー！」

ま、そんな感じで俺達の追いかけてこはフチの体力が尽きるまで続いた。

これで少しはフチも懲りただろう。  
うん。





## 8 O P G (後書き)

今回、若干拓斗が腹黒くなくなってしまったような……？  
もしかしたらあの腹黒読者家のせいかもしれませんね。  
困ったもんです。

それと、できれば今年中に第一章を終わらせたいと思います。  
まさかここまで時間がかかるとは……。

## 9 不吉な予感

？

？

？

人間は、不幸にありては希望が救いの主。

メナンドロス

？

？

？

「見ろ！ レディ・ジエミニのナイト、フチ卿だぞ！」

「ぐあああ！」

からかう村の子供達を追いかけるフチ。

その顔は必死だ。

例の、『フチの怪力制御作戦』 別名、『調子に乗ったフチへのお仕置き作戦』 でフチとオーガが戦ったあの日から、今日で三日。

すっかりフチのあの発言は村中に広まってしまい、このとおり村の

人達にいいネタにされている。

……若干、罪悪感が生じないでもないけど、やっぱりあれはフチの自業自得だと思う。

「すっかり村の人気者になったな」

「誰のせいだと思ってるんだよ！ くそー。このままだとこの先三カ月はレディ・ジェミニのナイトってからかわれちまう」

「よいではないか。ジェミニも嬉しそうだぞ」

「ちょ、ちょっと、ネロ！」

「オレは嬉しくないんだよ！」

そんなことを言いながらみんなで歩いていると、村の本屋から出てくるカールを見つけた。

カールは俺達に気がつくど、にっこりと優しそうに笑った。

「やあ、フチ卿！」

「……三か月どころか、一生言われ続けるかもな」

「ちくしょー！」

哀れ、フチ。

「カールまで。いいかげんにしてくれよ！」

「ははは。命の危機が迫ったときに叫んだ、真実の心を否定するな」

カールの言葉に周りにいた全員が深く頷く。

「あのときは、どうかしてたんだよ！ 気が変だったんだ！ いや、オレみたいに頭の悪いやつは、ときどき的是はずれなことをやらかすんだ。よく知ってるくせに」

フチの必死ないい訳をカールは笑って受け流し、俺達と一緒にいたタイバーンに話かける。

「お元気でしたか、タイバーン。今日も訓練ですか？ 一度、私も見てみたいものですな」

「お好きなように。わしらのうしろをついてくる行列が見えんのかね？」

俺とネロに、フチ、タイバーンといういつものメンバーの後ろには村の人達が行列を作っついてきている。みんな一様にわくわくした顔で楽しそうにしている。

フチの訓練　と、あの恥ずかしい言葉　が村中に広まった次の日には、訓練に多くの村人が集まるようになった。九月も終盤。

忙しい秋の収穫もほとんど終わって暇になった村の人達にとってフチの訓練というのはかなり面白い見世物になったようで、中には弁当持参で来る猛者までいるのだ。

おかげで<サントレラの歌>から城までに村の人達が一人また一人とついてきてしまい、大行列になってしまふのだ。

「さあさあ、カール。どこに賭けますか？」

俺とカールが行列を見ながら苦笑していると、酒屋の主人の息子であるミティーが楽しそうにそう聞いてきた。

「賭ける、とは？」

「今日の訓練で、フチがだれの名前を呼ぶか、賭けてるんです。いまのところ、ジェミニが圧倒的な人気だから、ほかの名前を選べば配当が高くなりますよ。ちなみに、ジェミニ以外だとネロやタクト、あとサンソンの名前が人気ですね」

「ちょっと、待った！？　ネロはともかく俺やサンソンまで人気があるのか！？」

「ああ。おもに選ぶのは女性だけだな」

……まじか。

俺が絶句しているのを無視してミティーが話を続ける。

「最近、若い娘たちが、フチに色目を使いながら、私の名前を叫んでって、尻尾ふってるの、ご存知ですか？」

どうしてこの村の人達はみんな、こんなにもアグレッシブなんだろう？

最近はだいぶ慣れてきたけど、それでもこのノリには時々ついていけなくなるんだけど……。

カールも俺と同じようなことを考えているのか、呆れたような顔をしている。

「おい、ミティー。今日こそフチが死ぬってというのは、まちがいねえのか？」

「もちろん、もちろん。タイバーンが今日はキメラを呼びだすって、おっしゃってましたから」

「おお、それでは今日は英雄ベルレフォーンの伝説が再現されるのだな！ ……む、しかしよく考えればベルレフォーンの使っていた武器は弓矢であつたな」

「ネロ、ギリシャ神話は俺以外が理解できないからあまり言わないでな」

会話を聞いていたフチがうんざりしたような顔をしながらタイバーンに文句を言う。

「もう少し、おしとやかな、コボルトみたいなやつを呼びだしてくれないか？」

「おまえはOPGをもっておるじゃろ。互角に勝負せんとな」

「オレとキメラが互角なのか？」

「死ぬわけでもないのに、ずいぶんと不満が多いな？」

「ぞつとするんだよ！」

「あんまり気を悪くしないで。最近互角に闘えるようになったじゃない」

「ジェミニの言う通りだと思うぞ。剣を握って一カ月もしないのに、もうあれだけ闘えるようになったんだ。十分すぎると俺は思うぞ？」

「それはそうだけどさ」

タイバーンのイリユージョンのおかげで、フチはオーガ以外にもガールやフリアなど、数々の珍しいモンスターと闘うことになった。

かなり強引なやり方だったが、おかげでこの短期間でOPGの力もほとんど制御できるようになったし、なによりも今まで闘ったこと



のなかったフチに、かなりの実戦経験を積ませることができた。一回の実戦は、万の練習に匹敵する。今ではフチはモンスターとも互角以上に闘えるほどの力をつけた。もちろん、まだ基礎ができていないフチの剣は、俺から見てもOPGの力頼みのかなり荒削りな物だ。それでも自分の身を守るぐらゐの武力としては十分だ。ちなみに、フチが闘ったイリユーモンスタージョンと俺も闘ってみたのだが、危うく殺されそうになった。……若干泣きそうになったのだが、それは秘密だ。

「はて、なんの音じゃ？」

そんな感じでみんなで談笑していると、突然タイバーンが不思議そうな顔をした。

「どうしたんですか？」

「あわただしい足音が聞こえてくるぞ。警備兵たちじゃな。なにかあったようじゃ」

足音だけでそこまで聞きわけると、相変わらず人間離れた聴覚だな。

とはいえ、いつも冷静な警備兵のみんなが慌てる？

「ネロ、モンスターの気配を感じる？」

「いや、特におかしな気は感じぬが……」

モンスターの襲撃じゃないのか？  
だったら、一体……？

しばらくすると、警備兵の一人がこっちに走って来た。  
その顔には焦りの表情がはりついている。

「タイバーンどの、それとタクト！ 緊急でございます。 危急の患者が！」

「危急の患者？ モンスターに襲われたんですか？」

「い、いや、それが……」

顔見知りの警備兵に尋ねるが、彼も混乱しているのかすぐには返事が返って来ない。

「タイバーン、背中に乗って」

目の見えないタイバーンをフチが背中におぶる。  
盲導犬もいないのに杖だけでスラスラ歩けるのはすごいが、さすがに走るのは無理らしい。

「城に、緊急の患者だった?」

驚いた村人が集まってくると、警備兵もなんとか動揺を抑えて俺とタイバーンに用を告げる。

「今朝、征伐軍の兵士ひとりが帰ってきました。ですが、大怪我をしています! ハーメル執事が大至急、タイバーンどのとタクトをお連れするようにと……」

なん、だと……。

予想外、いや、予想しなくなかった言葉にしばらく呆然とする。

征伐軍の兵士がたった一人で、それも重傷を負ったまま帰ってきた。それは、つまり……。

「嫌な予感がするな」

タイバーンの物憂げな呟きが胸に突き刺さったまま離れなかった。

？

？

？

城の前ではハーメル執事が奇立ちを隠そうともしないで、俺達を待っていた。

基本、温厚な彼がここまで冷静さを失っている。それだけでも事態が最悪な方向に転がっているのだと、嫌でも思い知らされる。

ハーメル執事は俺達を見つけるとすぐに玄関の扉を開け、心配になつていつしよについてきた村の人達を制止する。

「患者には安静が必要だ。心配だろうが、がまんしてくれ」

「執事さま、待ってください！ 誰かひとり帰ってきたっていうじゃないか。いったいどうということなんだ？」

「静かに！ 事情はゆっくり説明するから」

「帰ってきたのは誰なんだ？ それだけでも教えてください！ 執事さま！」

不安そうな村の人達の声を聞いてもハーメル執事は首を横に振るばかりだった。

そして、俺とタイバーンを招き寄せる。

俺の横にびったりと寄り添うネ口と、タイバーンを背負ってるフチを見て少し困ったような顔になったが、フチはタイバーンの目と足の役割をしているし、ネ口に至っては説得するだけ無駄だと思ったのか、二人ともいっしょに玄関の中に入れる。

「カール、あなたもおはいりなさい」

目を真っ直ぐ見てそう言うハーメル執事の言葉に、カールも頷いて中に入る。

そして俺達五人が中に入るのを確認すると、ハーメル執事は扉を閉めて外に残った村の人達に説明を始めたようだった。

俺達はそれを聞く暇もなく、案内の人の言うままに二階の寝室に向かう。

移動している間も、俺達の表情は暗い。

お父さんが出征しているフチはもちろん、領主さまの異母弟であるカール、警備兵に知り合いの多い俺とネ口、タイバーンだって直接の知り合いは少ないかもしれないけど、まるで無関係というわけで

もない。

みんな、征伐軍に参加した人達がどうなったか心配でならないんだ。寝室に着くと、中にはヒュリチエル伯爵やハルシユtail家の少年といっしょに首都からやってきたヘビートウルパー隊の若い男性が横たわっていた。話聞いた、一人で帰ってきた征伐軍の兵士、というのは彼で間違いないようだ。

だけど重体の患者だと聞いていたけど、顔色はそこまで悪くないし態度も普通だ。

とても怪我なんかしているようには見えるけど　　？

だけど、その考えもメイドの人達が兵士の上に掛かっていたシーツをまくりあげるまでだった。

「うぐっ！」

「これは……！」

「……どういふことだ？」

シーツの下から表れた兵士の体に、俺達は様々な反応を示す。

「どうしたんじゃ、フチ？　タクト、ネロ、悪いが説明してくれんか？」

タイバーンの怪訝そうな声にも、すぐには反応することができなかった。

シートで隠されていた兵士の体には惨たらしい傷があった。傷は一つだけであったが、そんなのなんの慰めにもなっていないだろう。

胸から腹にかけてつけられたその傷はあまりに深く、本来体内にあるあばら骨や内臓すらも外気に晒させてしまっている。おまけに、内臓のいくつかは明らかに傷ついている。

中にはバラバラに破れているものさえあるのが、ここから見てもわかる。

……確かに、これは重体だ。いや、どう見ても致命傷だ。

こんな状態で人が生きていられるはずがない。

しかし、この兵士はなぜか生きながらえている。

若干、顔から血の気が引いているが、それ以外に顔には傷に対するなんの感情も浮かんでいない。

当然あるはずの苦痛すら、その顔には表れていないのだ。

……………これは、一体？

茫然とする俺達に代わって、カールがタイバーンを兵士のそばまで案内する。

タイバーンは指先で傷に触り、眉をしかめる。

兵士の傷のおかしさに気付いたのだろう。

おまけに、兵士は傷を直接手で触られているのに僅かに顔をしかめるだけで特に反応もしない。

ただの擦り傷だって、触られたらとんでもない痛みが襲ってくるのに、こんな傷を触られてうめき声の一つも出さないなんて……………。

「あなたが、執事どのがおっしゃっていた魔術師ですか？」

「そうじゃ。これはいったいなんの傷じゃ？ いや、そんなことを言っておる場合じゃないな。タクト」

「……………はい」

「おぬしは重傷すら一瞬で治癒させ、さらにはその後の後遺症すらもほとんど失くすことができるほどの治癒魔術の達人だと村の者たちが言っておったが、この奇妙な傷も治すことができそうか？」

「……………できます」

タイバーンの目を真っ直ぐに見ながら、答える。

「必ず、治してみせます」

「そうか」

まるで見えているかのように俺の顔を真っ直ぐに見ながら、タイバーンは薄く笑う。



「フチ。熱い湯はすでに準備できておるじゃろうな？」

「となりにあるよ」

タイバーンは頷くと、そのままフチにお湯をひたしたタオルで傷を拭かせる。

フチが傷をきれいに拭き終えたあと、俺は精神を集中させてコードキャストを唱える。

「recover」！

俺の使える中で最高のコードキャストを唱えると、俺の手から光があふれだす。

思わず目を眩ませてしまうほどのまばゆい光が兵士の体を覆い、その傷を癒していく。

光が消えた後、あんなにも醜かった死に至る程の傷はすっかりと消え失せ、そこには兵士として鍛えられら者特有の筋肉に覆われた頑強な体だけがあった。

その光景にフチやネロは歓声を上げ、カールは安堵したかのように胸をなでおろした。

傷を負っていた当の兵士は、信じられないとも言いたそうなポカーンとした顔で固まっている。

「見事なもんじゃな。ここまでのものとは思わなかった」

茫然としている兵士の体を触りながら、タイバーンが感心したように言う。

「わしでもここまで完全に治すことはできんかっただろつな。せいぜい、命を繋げるだけで精いっぱいだったじゃろつ」

「……いえ、正直ギリギリでした」

そう、ギリギリだった。

今まで何度もコードキャストで傷を治してきたおかげか、最近はどれくらい傷を治せたか自分でわかるようになってきた。

だからこそ、今回かなり危なかったのが自分でもわかる。今までと違い怪我した直後ではなく数日たった傷だったからなのか、それとも単純に傷の深さが一番深かったからなのか、理由はわからないが下手したら治せなかったかもしれない。

697

「まあ、無事に治ったのだ。なんでもよいではないか」

気をつかってくれたのか、ネロが微笑みながらそう言う。

「そうじゃな。とりあえず、傷のことは脇におくとしよつ」

タイバーンがさっきまでと違い、厳しそうな顔で言葉を紡ぐ。雰囲気が変わったのを理解して、全員が真面目な表情になる。

「事のてんまつは想像できる」

淡々と、だがはっきりした口調でタイバーンはそう断言する。

フチは緊張した表情でごくりと唾を飲み込み、俺やネロも黙ってタイバーンの次の言葉を待つ。

「あの傷は武器によるものではない。アムルタットがなにかを伝えるために、あの兵士ひとりだけを半殺しにして、送り返したんじゃない」

「っ……っ！」

俺やネロは息をのみ、聡明なカールはある程度予測していたのか重苦しい溜息をついただけだった。

フチはショックが大きかったらしく、持っていたタライを床に落とした。

「じゃあ……負けたってことか？」

「残念じゃが」

「ひ、ひとりだけだなんて。じゃあ、ほかの兵士はどうなったんだ？」

「フチよ、なんとも言えん。とにかく、ヒュリチエル伯爵と領主さまは無事だろう。あの兵士を送りかえしてきたところを見ると、おそらく身代金の要求がでてくるはずじゃ。アムルタットの目的が身代金だというのなら、兵士たちはみな、捕虜として捕らえているかもしれん。捕虜が多ければ、その分たくさん身代金をてにいれることができるからな」

「な、なんでそんなことがわかるんだ」

「その方のおっしゃるとおりだ」

フチが食ってかかるが、すぐに先ほどの兵士がタイバーンの言葉を肯定する。

「あの、ただ飯食らいのホワイトドラゴンめ！」

しばらくオロオロしていたフチだが、悲壮な顔で天井を見上げて怒鳴り散らす。

俺達はそんなフチに声をかけることができなかった。

？

？

？

フチが少し落ち着いた後、ハーメル執事は領内の主要人物を集めて会議を行った。

村の村長や警備兵隊長代理のターナーのようなヘルタントでそこそこの地位を持つ者から、領主さまの異母弟だがなんの地位にもついていないカールなど、様々な人物が集まった。

臨時的に村の治安担当になったタイバーンも参加し、その助手である俺達もいっしょに会議に出席した。

領主さまが不在のため、ハーメル執事が代わりに今回の会議の議長を務めることになった。

会議の内容は、ソロイ・マイアーハンド 先ほど怪我を治したあの兵士の名前だ の話を聞くことだった。

ソロイはイスにきちんと座って、当時の状況を話し始めた。

ソロイの話によると、征伐軍はアムルタットの住みかのある灰色山脈の奥地へ果てしない渓谷へまでに着くまでは特に問題なく進軍できたらしい。

総司令官のヒュリチエル伯爵は、アムルタットブラックドラゴンとカッセルブラホワイトドラゴンが戦うことを大前提に、それでも人間の部隊ができることを考え、策を練った。

戦いの場は深い渓谷のため、軍を動かすのには向いてない。

そこで、ヒュリチエル伯爵は軍を三つに分け、カッセルプライムを援護する作戦を打ち出した。

まず、重装歩兵のヘビートウルパー部隊と槍兵のパイカー部隊をカッセルプライムといっしょに渓谷の下に待機させる。

そして渓谷の兩岸に警備兵を主体にしたライトフットマン部隊と弓兵のアーチェリー部隊を配置した。

カッセルプライムがアムルタットと戦い、勝てばどちらにせよこの戦いは終わる。

万が一負けたとしても、そのときは疲弊したアムルタットの逃亡を兩岸のアーチェリー部隊が阻止し、カッセルプライムと共に渓谷の下にいたヘビートウルパーとパイカーの二つの部隊が止めを刺す

そういう作戦だったらしい。

しかし、この作戦には大きな穴があった。

「まぬけな計画じゃな……。ただでさえ脆弱な部隊を三つに分けるとは。いつそ一か所まとまっていたほうが効果的だったはずじゃ。

それにこの計画は、アムルタットが渓谷の下におりてくることを前提にしているじゃないか」

そう。

ヒュリチエル伯爵の作戦は、カッセルプライムとアムルタットが戦い、そしてその戦いが終わったときに人間の部隊が無事であるという二つの前提を元に行っていた。

だからこそこの二つの前提が崩れたとき、ヒュリチエル伯爵の立てた作戦は簡単に瓦解する。

そして、これまで八回もの襲撃から生き残ったアムルタットがこの二つの大きな穴を見逃すはできなかった。

戦いの日、三つに分かれた軍はそれぞれの場所に展開し、溪谷の下に降り立ったカッセルプライムは咆哮でアムルタットを誘い、出てくるのを待った。

しかしその瞬間、征伐軍の展開したそれぞれの場所にトロールとゴブリンの大群が攻め込んできた。

溪谷の上と下という、すぐには合流できない場所に展開していた三つの部隊はそれぞれ孤立したまま敵と戦うことになってしまった。近接戦闘で効果的な装備をし、まだ戦いやすい溪谷の下にいたヘビートウルーパー部隊とパイカー部隊は、敵とも互角に戦うことができた。

しかし、溪谷の上にいた部隊はそうにはいかない。

溪谷の上で戦ったということは、つまりは崖を背にしたまま逃げ場もなく戦ったということだ。

おまけに上にいた部隊は軽装備のライトフットマン部隊に弓装備のアーチエリー部隊だ。

いくらヘルタントの精鋭ぞろいのライトフットマン部隊でも、自由に動くことのできない場所での混戦ではその実力を完全に発揮することができない。

アーチエリー部隊にいたっては敵味方が入り乱れる場所で矢を放つわけにはいかず、そして敵に近寄られたらまるで無力だ。

絶対的な力を誇るカッセルプライムもこんな混戦状態ではどうしようもなく、味方に当たらないように、敵の部隊の後方にブレスを吐くぐらいのことしかできなかった。

ドラゴンお得意のドラゴンフィアも、常日頃アムルタットに恐怖で

縛られているモンスター達にはなんの効力もなかった。

結局、渓谷の上にあった部隊はほとんど全滅し、生き残った僅かの兵だけが渓谷の下に逃げ込むことができたらしい……。

敵しかいなくなった渓谷の上にカッセルプライムはブレスを噴出しモンスター達をなぎ倒し、渓谷の下にいた部隊も敵を壊滅させることに成功した。

しかし、そのときになってブラックドラゴン、アムルタットが渓谷の上に姿を現した。

上空にいたアムルタットはカッセルプライムに向かって強力なエイシッドブレスを噴出した。

左右を崖に挟まれた渓谷の下では、いくらカッセルプライムといえどもすぐに飛び立つことはできない。

結果、かわすことのできなかつたその一撃でカッセルプライムは大きな傷を負ってしまった。

アムルタットはそのまま容赦のない追撃にかかり、カッセルプライムの首にかみつき止めを刺そうとした。

大怪我を負ったカッセルプライムもアムルタットの脚に噛みつき必死に抵抗する。



アムルタットが強力な酸のブレスを吐き、カッセルプライムも凍てつくアイスブレス周囲を凍らせる。

二匹のドラゴンの戦いは激しさを増し、それは見ている者にく果てしない渓谷が崩れるかもしれないと思わせるほどだった。

総司令官のヒュリチエル伯爵はここで退却命令を出し、征伐軍は散り散りになって逃げ出した。

ソロイも必死になって逃げていたが、その途中、後ろから突風を感じ、恐怖の感情に引きずられるまま振り返った。

その瞬間、無慈悲な一撃がソロイに襲いかかってきた。

一瞬で腹が裂け、内臓にまで達する傷を負ったソロイは悲鳴を上げることもできずに倒れた。

そのまま死を待っていたソロイに、目の前の巨大な影が話しかけてきた。

「人間よ。おまえの傷は、この先一週間は悪化しない」

傷だらけのアムルタットはどこか億劫そうにソロイに言葉を投げかけていた。

「一週間は、出血もしないし、傷もそのままの状態だ。だが、その期間をすぎれば、傷は悪くなり、腐りはじめるだろう」

震えるソロイの腹部と足からは弱い光が漏れている。

おそらく、アムルタットが何らかの魔法をかけたのだろう。

「これで、おまえのその貧弱な足は、最大限のスピードを出すことができるだろう。帰って、伝えよ。おまえたちの指揮官とまぬけ領主の命が惜しければ、十萬セル相当の宝石を持ってこい、とな。早ければ早いほど、よかるう。おまえたちがぐずぐずしていると、やつらは新年をむかえられなくなる」

アムルタットはゆっくりと翼を動かして、飛び立った。  
吹き荒れる強風にソロイは身を動かすこともできなかった。

「一週間だ。おまえの足が、おまえの命の担保だ。行け！」

それからずいぶんたったからソロイは起き上がり、そのまま四日間寝ることもしないでただヘルタントまで走り続けたらしい。

話を聞いたタイバーンが納得したように頷いた。

「ふつむ……。それで何日もたった傷が生々しかったのか」

「はい。本当におそろしい出来事でした。破れた腹から内臓が飛びださないように、手で押さえながら走る。こんなことは、ふつうでは考えられない経験ですからね。血もでないし、痛みもない。他人の傷みたいない傷が、一番おそろしいのだと実感しました」

ソロイの言葉に会議に出席していた人達の顔が青ざめる。

そんな中、フチが悲痛な顔のままソロイに話しかけた。

「あの、それじゃあ、ほかの兵士はどうなってしまったんだ……」

「わたしも聞いたよ。父上が参戦されていたとか？ 悪いが、ほかの兵士のことはまったくわからないんだ」

それは……確かにそうだろう。

あんな無茶苦茶な状況では、周囲を気にするような余裕は全くなかったに違いない。

がっくりと肩を落としたフチをカールが慰める。

「元気をだしたまえ、ネドバルくん。亡くなったのを見たわけでもないじゃないか。それにパイカー部隊は最後まで、たいした痛手をおわなかったというし」

「そうだな。うちの親父は帰ってくると約束したんだ。ふふん。いまごろ家に隠れてて、オレが帰ったら、びっくりさせようと準備しているかもしれない」

明るく言うフチだけど、無理にそうしているのがわかってしまい、俺は顔をそらす。

「国王陛下に事態をお伝えせねばならないでしょうね」

ハーメル執事が重苦しい溜息を吐きながら首を振る。

「それはそうじゃが……今回の作戦は国王陛下の所管だったのか？」

「いいえ、違います。陛下の支援をたまわっただけで、作戦責任は領主さまにあります。領主さまは全権委任の形で、ヒュリチエル伯爵に指揮権をおたくしになりました」

「それでは、責任はヘルタントヘルタント領地にあるんじゃない。二人を取りもどす責任も、その身代金を用意する責任も。国王は自分がつかわせたホワイトドラゴンが死んだことだけでも、ずいぶんと腹をたてるじゃろう。とても身代金を準備してくれと、たのむわけにはいくまいな」

民主主義の国で育った人が聞いたら『国の最高指導者である国王が自国の民を見捨てるのか！』とでも言いそうな言葉だが、実はこれはある程度仕方ない。

封建制の国では、国王が国の全てを支配するわけではない。

各地には国王に任命された貴族達がそれぞれに領土を持って現地を実効支配している。

当然、各領主は王に忠誠を誓い、税を納め、国の法に従うが、それでも自身の領地はある程度自由に振舞うことができる。

もちろんそれは、領主が自身の領土内ならば王のように振舞うこともできるということだが、同時に自身の支配している領内の責任も領主に降りかかってくる。

国全体のことなら国王が動くが、領内のことに留まるならよほど酷いことにならない限り、そう簡単に国王がなにかすることはないの

だ。

つまり、『普段は自分の土地だからって好き勝手にやってるんだらう？ だったら何かあったとしても自分の責任だらう？ 都合がいい時だけ王に頼んな！』ということだ。

……もちろん、これは極論だから実際はそこまでのことはないんだが、それでも領土のことなら領主に第一の責任が発生するのは間違いないのだ。

「領主さまの財産のすべてを処分したところで、十万セルを準備することなど……。それに財産といっても、そのほとんどが領地です。近隣の領主だって、この領地を買おうとするはずがありませんし……」

「首都に使いをだすことです。当主のヒュリチエル伯爵が捕らわれているのですから、伯爵家がかならず援助してくれるでしょう。それにこういう非常事態のときには、国王陛下が慈悲をお示しになり、長期無利子で金を融資してくださるものです。この領地を売る覚悟がおありなら、首都の貴族をあたってみれば、購入者が見つかると思います」

「うむ、そうするしかないであろうな。どちらにせよここでは十万セルを用意することができぬのであろう？ ならば首都の国王や貴族を頼るほかあるまい」

「マイアーハンドどのとクラウディウス嬢の言うとおりでしょうね。ハーメルどの、首都にヘルタント領を購入してくれるような貴族がないか調べてみたらどうでしょうか？」

ソロイの言葉にネロとカールが同意する。

「早急に調べてみます。今日は何日でしたか？」

「九月二十五日です」

「アムルタットは、新年をむかえられなくなると言ったのですから、それなら半年ちよつと時間がありますからね」

ハーメル執事の言葉に、タイバーンが重苦しい溜息をつく。

「そうじゃな。この国ではルトエリノ大王の勅命によって、四月二日から新しい年がはじまることになっているが、ドラゴンがこの国の慣例どおりに新年をむかえるだろうか？ 安全に考えれば、十二月末日まで、と見ておいたほうがよかるう」

「そ、それでは、残り三カ月……！」

ハーメル執事の顔が絶望に染まり、残りのメンバーの顔も苦々しげなものに変わった。  
全員の顔に同じことが書いてあった。  
すなわち

『ハーメル執事一人だけでは、たった三か月で十万セルもの宝石を集めることなんてできるはずがない』

と。

？

？

？

「やはり皆のことが心配か？」

「……急にどうしたんだ、ネロ？」

会議が終わって全員が解散した後、俺とネロは村の中心にある広場でなにをすることもなくただ座って空を見ていた。  
空は雲ひとつない快晴で、それが逆に俺の心を沈ませていた。

「会議のとき、一言も話さなかったであろう？　そなたはフチのようなおしゃべりではないが、それでも普段ならなにか発言をしたであろうっからな」

「……」

フチとタイバーンは村のあちこちに仕掛けたブービートラップを解除しに行った。  
万が一、これから帰ってくる征伐軍の兵がかかったら、シャレにならないからだ。

「……不安に思うのも当然か。余でさえ、正直不安で堪らん。優しいそなたが普段通りにできるわけがないか」

「……」

俺がなんの反応もしなくても、ネロは構わずに話を続ける。

「ヘルタント子爵はまず無事だとしても……。やはりサンソン達のことか心配だな。……ライトフットマン部隊は被害が最もひどかったらしいしな」

「……」

俺達がこうやって村にいるのにも、理由がある。

ブービートラップが解除されている今、モンスターに襲撃されてもそれを足止めすることができない。

警備兵は兵が帰ってきてないかあちこちを見回っていて、ただでさえ少ない人数をさらに減らしている。

タイバーンはいるが、彼は素早く移動することができない。

来た時にはすでに村人の何人か犠牲になっていましたでは、あまり



にも笑えない。

そこで、モンスターの気配を感じることが出来る俺とネロが、どこから侵入されてもすぐに駆けつけることができる村の中心で待機することになった。

俺とネロなら誰よりも速く現場にむかえるし、常に誰かいる村の中心なら間髪いれずに城の警備兵に連絡をいれることができる。

「それに……そなたのことだ。あの、ドラゴンレーザーの童のことも心配なのだろう？」

「……………」

……………なんて、色々な訳を言ってみたが、実のところ、ただ、俺があまり誰かと一緒にいたくなかったらだ。

「ドラゴンが死んだとき、そのドラゴンレーザーが生き残る可能性は限りなく低い。いつかカールが言っておったな。それが、気になって仕方ないのだろう？」

「……………」

さすがに村の空気も悪い。

不安なのは、みんないっしょなのだろう。

「……………フチの父親のことも心配だな」

「……………」

空が青い。

それは、もう、腹立たしい程に。

「いい加減にせぬか！」

「っ……………！」

ネロに怒鳴られて正気に戻る。

はっとしてネロを見ると、彼女は泣きそうな顔でこっちを見ていた。………いつ以来だろう、彼女のこんなにも不安に負けそうになっている顔を見るのは。

「言ったであろう！？ 余も不安だと！ 心配だと！ サンソン達とすごしたこの半年。余が彼らに何の感情もわかぬような心の冷たい女だとそなたは思っておったのか！？」

「ネロ……………」

「あやつらは友だ！ そなたと余の大切な友たちだ！ そんな者達が命の危機にあるというのに、余が普段通りでいられると本当にそう思っておるのか！？」

「……………」

「だが、不安に沈んでいる場合ではあるまい！ 村の者も、フチのやつも、おそらくはカールのやつも……。皆、不安なのだ！ ならば余だけでもいつもどおりに振舞わなくてはなるまい！ ……それなのに」

そこでネロは言葉を切って、潤んだ瞳で俺をじっと見つめる。その姿は、まるで救いを待つ少女のようで

「そなたまでが……。そなたまでが、そのような顔をしておつたら……。負けてしまうのではないか……。折れてしまうのではないか……。不安に飲まれて、泣いてしまうのではないか……」

「」

「無理矢理でもよい……。ひきつっておつてもよい……。笑顔を見せてくれ……。そんな顔をしないでくれ……。そなたの笑顔だけで……。余は、まだがんばれる……」

「ネ、口……」

「頼むから……。余に、恥をかかせないでくれ……」

限界がきたのか、それ以上は何も言わないで俺の服に顔をうずめる。泣いてしまったのかと思つたら、必死になつて涙を堪える意地っ張りな少女の姿がそこには、あつた。

「ああ、そうか……」

そう、不安なのは、心配なのは俺だけじゃないんだ。

そんなこと、フチの様子を見ただけでわかるはずのことじゃないか。

領主さま。

サンソン、ハリー、ジャレン、セロ、警備兵のみんな。

フチのお父さん。

そして、ハルシュタイル家の少年。

無事なのかどうか、とても不安で、心が重くなるけど。

それでも、簡単に潰れているわけにはいかないんだ。

他の皆だって、きっと俺と同じくらい、いや、俺以上に心配しているんだ。

だからこそ、まだ頑張らなきゃ。

まだ、みんなが死んだなんて決まっていななんだし。

それに、こんなことで彼女を泣かせるわけにいかない。

「ネロ、こつちを見て」

いまだに俺の服を掴んだままのネロに優しく声をかける。

「タク、ト……………」

「大丈夫。きつとみんな大丈夫だ。俺も、大丈夫だ。だから…………泣  
いちゃだめだ」

涙のたまったままのネ口の瞳をじっと見つめる。

「笑って、ネ口。俺も笑うから。だから、ネ口も笑って。そしたら、  
俺はもつと頑張れる」

…………今の、俺の顔に微笑みが浮かんでいることを切に願う。  
でも、言ったことは本当だ。  
きつと、彼女が笑ってくれたら、俺はどこまでも頑張れる。

「……………ふふ、それでこそ、余の奏者だ」

ネ口は短くそう言つと、涙をぬぐって、柔らかく微笑んだ。

## 9 不吉な予感（後書き）

原作では命は助かったものの後遺症が残りまくったソロイさんですが、この作品では拓斗のおかげですっかり元通りな元気な体になっています！

いや、本当に便利ですね、コードキャスト recover（）（）！

## 10 下された密命

？

？

？

生まれたことは確かにわれわれの結末なのである。死ぬということ  
は問題外である。生きることがわれわれの歡びであり、法則なので  
ある。

サローヤン

？

？

？

「おい、タクト！」

「フチ、やっぱり来てたのか……………って、どうしたんだ、その姿  
？ ポロポロじゃないか？」

「……………聞かないでくれ」

あの後、しばらくの間広場で待機していたが、日が沈み始めたこと  
で一旦自宅に戻った。

すでに肌寒く感じる季節になろうとしている今日この頃。

ずっと外にいたままだと、風邪をひいてしまう。というわけで、自宅で夕食の準備をしていると、突然城から警備兵がやってきた。

兵士は息を切らしながら、『城にほかの兵士が到着しました！』と伝えてくれたので、俺とネロは急いで城までやってきたのだ。

城門まで来ると、息を切らしながらタイバーンを背負ったフチと合流することができた。

……なぜか、足がびしょ濡れになっていたり、傷だらけになっていたが。

「とりあえず、さっさと入ろうではないか。顔見知りも探したいし、怪我している者を治療しなくてはいかんしな」

城門の前で待つていた警備兵が俺達をホールへ案内する。

ホールには急いで作られた避難所があり、ここでは帰還した征伐軍の兵が二十数名寝かされていた。

負傷していない者は一人としていなくて、ハーメル執事や城のメイド達が忙しく動き回っている。

先に来ていたらしいカールが俺達に気づいてこっちにやってきた。

「タイバーン。おこしくございましたか」

「どつどつじゃ」

「なあに、心配はございません。彼らは、ここまでもどれるくらいの傷ですから。コノエくんもよくきてくれた。重傷者はいないが、あとできみにも治療には参加してもらおうよ」



「もちろんです。……ッて、待てよ、フチ！」

俺とカールが会話しているのにも関わらず、フチは必死に帰ってきた兵士を確認していた。

慌てて俺とネロも追いかける。

途中何人か知り合いがいるのを確認できて二人で安堵のため息をつけていると、フチが大声で誰かと話しているのが聞こえた。

声の聞こえてきた方に視線を向けると、フチがひと際体の大きい男性と話しているのが見えた。

「フチ、サンソン！」

「サンソンよ、無事であったか！」

「タクトにネロ、ひさしぶりだな。元気にしてたか？」

フチと話していたサンソンは俺達を見ると、元気そうに返事をしてくれた。

よかった、無事だったんだ。

本当に良かった………！！

「それで、サンソン。本当に親父のことを全然見てないのか？」

フチが焦ったようにサンソンにつめよる。

やっぱり、ここにもお父さんはいなかったようだ。

「ああ、悪いな」

「……悪かったよ。興奮して大声をだしたりして。サンソンは大丈夫か？」

「ああ。ここまでくるのにちょっと疲れただけだ」

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫だって言っただろう。なんだ？ そんなに心配してくれたのか？」

「心配したに決まっておるだろう！ まったく、人の気も知らないでニコニコとしおって……」

「ハハハ。それは悪かったな」

唇を尖らせるネロを見て、サンソンは豪快に笑う。  
でも、何だか違和感があるような……。

……気のせいかな？

「ところでフチ、最近酒ばかり飲んでるみたいだな？ 酒のお  
いがぶんぶんするぞ」

ああ、なるほど。  
なんであんなにボロボロになっていたかと思ったら、また酒を飲んで  
いたのか。  
それで酔っぱらったまま慌てて城に来たから、あちこちにぶつかっ  
たり 色々してボロボロになったと。  
……………もうすっかり自分が未成年だっというの忘れちゃってるよ  
な。

「なあ、ひとつたのみがあるんだけどな、おまえが飲んでいた酒を  
もってきてくれないか？」

「ぶつ…………。今からヘナーおばさんのところに行けっというのかよ。  
城の厨房にも酒の一つや二つあるはずだろうから、それでもいいか  
？」

「ああ」

「厨房の場所なら俺が知ってる。案内するよ」

「タクトが行くなら余もついていこう。サンソンはここでゆっくり  
と休んでおれ」

「ああ。悪いな」

というわけで、厨房まで酒を取ってくることに。  
何で俺が厨房の場所を知っているかと言うと、以前城に警備の報告  
に行ったときに偶然迷い込んでしまったからだ。  
厨房に着くと、運のいいことに酒瓶が一本テーブルの上に置いてあ

った。

あまり高い酒でもないし、渡す相手は命がけで領主さまや村の人を守る警備兵隊長なのだ。

問題ないだろう。

ついでにフチは酔いを覚ますために冷たい水を飲んだ。

……まったく。

ホールに戻るときに、怪我人に酒っていいのかな、と思いましたが、深い傷はないみたいだし、たぶん大丈夫だろうと自分を納得させる。

「おい、サンソン。酒を、取って……きたぞ………?」

ホールの隅にいるサンソンに声をかけるが、その様子に声がだんだんとしぼんでいく。

サンソンは体育座りのような態勢で、膝に頭をうずめて座っていた。慌ただしいホールの中で、サンソンだけが一人ぼっちのような嫌な空気の中に沈んでいた。

「サンソン？ ほら、酒だ」

フチが酒を渡すと、サンソンはありがたいと言いたそうに笑って、酒瓶を受け取る。

そのまま酒瓶を口に運ぶが、一口、二口飲んだだけですぐに床に置いてしまった。

……さっきはサンソンが無事だったことに舞い上がったちゃって気付

かなかったが、サンソンの大きな体は細かく震えていた。酒を飲んでいた時も、酒瓶の口に歯が何度もぶつかっていた。

「喉が渴いていたんだ。おかげで生きかえったな」

「サンソン。本当に、どこも怪我していないのか？」

「う、うむ……。大丈夫なのか？ 正直に言っと、見ていて痛々しいぞ？」

「……心を、怪我したんだ」

サンソンは暗い表情でぼつりと言葉を漏らす。

「あんなにおそろしいことが起こるなんて。ハリーも、ジャレンも死んでしまった。自分が生きていることのほづが信じられないよ」

頭をガツンと殴られたような気がした。

俺はどこか自分のじゃないような声で、サンソンに聞き返す。

「ハリーと……ジャレンが………？」

「ああ………」

苦しげに答えるサンソンを見て、さらに胸が苦しくなる。

くそ……。

嘘だろ……。

ハリー……ジャレン……！

「そ、うか……」

ネロも茫然としたようにそう一言呟いただけだった。

「つねに心の準備はできてたはずなんだ……。それなのに……。アムルタットのブレスを受けて、とけていく仲間の姿が、いまでもくつきりと目に焼きついている」

うつろな微笑みを浮かべたまま、サンソンは話し続ける。

「帰還する道は本当につらかった。負傷して死んでいく仲間たちのうめき声で、気が狂いそうだった。治療を受けるどころか、飢えて死んでいくありさまだった。それに負傷した兵士たちは、モンスター」の標的にされたんだ。とどまるところを知らない攻撃は、悪夢のようだった。……何人かは、オレの手で逝かせてやったんだ」

俺達は何も言えなかったし……何も言わなかった。

「どうしようもなかったんだ……。生き残るためには、怪我人を見すてていくしかなかった。だが、置きざりにしていったら、怪我の痛みに苦しみながら死ぬか、あとを追ってくるモンスターたちになぶり殺される。やつらも納得してくれたはずだ。苦しまずに死ねたと思う。でも、自分の手で仲間の命を絶つなんて、考えてもみなかったよ……」

「サンソン……」

「そんなことをしてまで、生きて帰った意味があったんだろうか。まちがったことはしていないと思う。でも、胸がはりさけそうなんだ」

「そんなこと言うなよ！」

気がついたら、怒鳴っていた。

「タクト……？」

「生きて帰ってきた意味があったのか？ そんなのあったに決まってるだろう！ たくさんの人がサンソンが生きて帰ってきてよかったって思ってる！ 俺が！ ネロが！ フチが！ カールが！ ジョイスさんが！ 婚約したっていう女ひとだつて！ こんなにもたくさんの人を安心させたのに、まだ意味を求めるのか！？」

「……」

サンソンは口を開けたまま、何も言わない。  
俺はそんな様子にも気を止めないで、ただあふれ出る激情のままに  
叫ぶ。

「そりゃあ、自分だけが帰ることになっちゃって後ろめたいのはわかるさ！ 悲しいことだって、絶望してるのだってわかるさ！ でもな、ハリーもジャレンもお前が帰ってきたことを喜ぶことはあっても、怒ったり、恨んだりすることは絶対にしない！」

断言できる。

他の人なら……元の世界に住んでいた人やことは違つところで生きてる人なら、わからない。

むしろ、本当に恨むかもしれない。

でも、このヘルタントで暮らしている人には、そんな人は絶対にいない。

誰が死んでも、誰が生き残っても、みんなきつと許してくれる。

それだけのことがわかるくらいには……俺もここに馴染めたのだから。

「そんなの……」

「わかるさ！ じゃあ、逆にハリーが生きて、サンソンが死んでいたら！？ サンソンは生きてヘルタントに帰ったハリーを恨むか！？ ジャレンが生きてたら！？ 俺やネロだったら！？」



「……わかつてるさ。死んでいっただれもが、生きて帰ったオレたちを恨んでないことは。でも、恨まれてないとしても。なにもできずに、ただ生きて帰っただけのオレは……本当にこれでいいんだろっか……」

「俺も……」

激情を殺して、サンソンの目を見ながらゆっくりと話す。

「……俺も、たくさんの人を見殺しにして　犠牲にして、自分だけが助かったことがある」

「……故郷での話か？」

「ああ。……俺は自分が生きたいという願いだけで、自分と同じ境遇の人を犠牲にした。自分の命を最優先にして……あんな狂った環境を否定するだけで……直そうとも、壊そうともしなかった。いや、一度だけあったかな。でも、一度きりだった。それでな、全てが終わった後、俺は死ぬはずだったんだ」

「そうなのかつ？」

「でも死ぬ運命にあった俺を、ある人が助けようとした。なんで助けてくれたかは、結局教えてくれなかったけど……。だけど、俺はそのとき『生きてもいいのか？』『こんな俺に生きる価値なんてあるのか？』なんて考えちゃったんだ」

「それは……！」

「うん。今のサンソンとまったく同じだったよ。そんなとき、迷う俺を思いっきりブツ飛ばしてくれた人がいたんだ。その人は茫然とする俺にこう言ったよ」

「なんて、言ったんだ？」

「『私が生きてほしいと思っているだけでは、そなたが生きていく理由には、ならぬのか………？』って」

「っ！」

「なあ、サンソン。さっきも聞いたけど、もう一度聞くぞ？ 俺達の生きてほしいって願いだけじゃ、サンソンが生きて帰ってきた意味にはならないのか？」

「……………」  
ハハハ！ まったく、オレとしたがそんなことも教えてもらわないと、わからなくなるなんてな」

サンソンはしばらくポカーンとしたあと、やがていつもみたいに豪快に笑った。

その顔にはもう、さっきまでの暗い影は見当たらないようだった。あんなんで、よかったのかな………？

少しでもサンソンの心が軽くなればいいと思って好き勝手言ってしまったけど……。

「ありがとな、タクト。おかげでだいぶ楽になれた」

「そうか。サンソンがそう言ってくれるなら、俺も嬉しいよ」

「ふ。あのサンソンを丸めこむとは、タクトも言うようになったではないか」

「そうか？ サンソンぐらいなら近所のガキだって丸めこむことができる気がするけど」

「てめえ、フチ！」

「うおっ！ オーガが怒った！」

「だれがオーガだ！」

ギヤイギヤイと子供のように騒ぎだしたフチとサンソンを見て、俺は苦笑する。

しばらくそうやって笑っていたサンソンだったが、やがてその顔を真面目なものに変えた。

「せっかく命を拾うことができたんだ。だったらあまり難しいことを考えないで、それは単純にラッキーなことだったと思うことにするよ。そのかわり、オレはヘルタントの警備兵隊長として、死んでいったあいつらの分までがんばるとするよ」

「ああ、期待してるよ。隊長さん」

いたずらっぽく言った俺の言葉にサンソンは笑って、そのまま少し落ち着きのなさそうな顔になる。

「ところで、領主さまがどうなったか知らないか。あの戦闘のとき、オレは領主さまを救出することができなかったんだ。いや、おまえらに聞いても知ってるはずないか」

「それは心配する必要はないぜ。領主さまはごぶじだ」

「うむ、十中八九間違いはあるまい」

答えを期待していなかっただろうサンソンの目が丸くなる。

「アムルタットが身代金を要求してきた。ってことは、領主さまは生きてるってことだろ？」

「本当か！ どうやってそれを？」

「サンソンより先に到着した兵士がいる、って言ったよな。その兵士が全部話してくれたんだ」

「ああ。アムルタット本人から直接伝言を頼まれたみたいだからな。信憑性も大丈夫だ」

「そりゃ、よかった！　ところで……その身代金は、大変な金額なんだろうな？」

「想像できるか？ 十万セルだ」

喜んでいたサンソンの表情が、フチの言葉で固まる。でも、すぐにその顔はキリリとした表情に変わる。

「そうか。だったら、なんとしてでも十万セル集めないとな」

「って、あれ？ 驚かないのか？」

「驚いてるさ。警備兵隊長ごときのオレなんかじゃ、十万セルなんて大金、とてもじゃないが実感できん。でも、だからって嘆いてるだけじゃなにもできんからな。せつかく助かったんだ。だったら今度は領主さまやほかのみんなのために、なんとか身代金を手に入れるようがんばるだけさ」

清々しい笑顔でそうはつきりと断言するサンソン。

「……………まいったな。」

正直、すっごいカッコいい。

ネロとフチも似たようなことを考えていたのか、二人ともポカンとしている。

「サンソンって、本当に隊長なんだな……………」

「どういう意味だ、フチ！」

「ただ強いだけのイノシシ武者ではなかったのだな……………」

「ネロ。それは、オレのことを力だけのバカだと思ってたってことか？」

「気にするな、サンソン。ちょっと二人とも、サンソンがいつもと違って頭のよさそうなカッコいいことを言ったから混乱しているだけだから」

「……よし、三人ともオレにケンカを売っているってみて、いいんだな？」

今までの真面目シリアスな空気はどこにいったのか、とにかくそんなこんなで青筋を立てたサンソンに本気で謝る俺達三人の姿がそこにはありません。

？

？

？

「h e a l l ( 1 6 ) !」

呪文を唱えるのと同時に俺の指先から小さな淡い光が出て、寝てい

た兵の傷を覆う。

すると傷はすぐにふさがり、かさぶたができる。

お礼を言う兵士の人に軽く手を振って答えて、俺はその場を離れる。

「ふうー……」

知らず知らずのうちに、溜息がこぼれる。

サンソンと別れたあと、俺はカールとタイバーンといっしょに怪我人の治療にあたった。

重傷者はほとんどいなかったため、怪我の軽い人はカールが、比較的重い人はタイバーンが、そして警備兵や家族を養う立場の人など、すぐにでも怪我を完治させなければならぬ人を俺が治療していた。

俺の魔力には限りがあるが、人数が多いとはいえ怪我自体は命に関わらないものがほとんどだったため、魔力消費の少ないコードキヤストを使うことでなんとか全員の治療を終えることができた。もう夜も遅い。

緊急の患者が来たらすぐにも俺を呼ぶように指示も出ているみただし、今日はもう帰ってゆっくりと眠ろう。

「その前にネロを見つけないと……」

いっしょにいたフチとネロとは、治療のときに別れた。

二人とも特別治療ができるわけでもないし、手伝いの人もメイドさん達がいて事足りているからだ。

「どこにいるかな？」

しばらく捜していると、ホールの隅で所在なさげに立っているネロを見つけた。

でも、なんだか元気がない。

全体的にしゅんとしているし、いつもはピョンとしている頭の先の髪の毛も元気なさそうに垂れている。

……その理由が嫌になるほどわかる俺は、何も言わずにネロの隣に立つ。

「……………」

「……………」

しばらく、二人とも何も言わない。

ただ二人でいまだにたくさんの方が慌ただしく動き回っているホールを見ているだけだ。

「サンソンが無事に帰ってきたな」

「ああ、そうだな」

やがてネロがポツリと言葉をもらす。



「他にも多くの知り合いが帰ってきたな」

「ああ」

お互いに顔を合わせないで、前を見つめながら話す。

「だが、ハリーとジャレンが帰ってこなかったな」

「……ああ」

「……帰ってきた者も多くおったが……帰らぬ者も……多かつたな……」

「……ああ」

多くの言葉はいらない。

俺も、ネロも、気持ちは痛い程同じだった。

サンソンが帰ってきたのは嬉しいし、それは決して間違ってもなければ、意味のないことなんかでもない。

……でも、それと、これとは話が別なんだ……。

そのとき、小さな歌声が聞こえてきた。

たぶん、ホールのどこかにいるフチが歌っているんだろう。

その歌は、ひどく悲しげで、せつない歌だった。

川の水は低みへ

鳥は高みへ

男は畑を耕し

女は機を織る

戦士は前をにらみ

魔術師は上を見つめる

生まれた瞬間

死への旅が始まる

その日、家に帰った俺とネロは、お互いに抱きしめあって、ただただ泣き続けた。

?

?

?

「ええっ！ それは本当ですかっ？」

フチはそう叫ぶと、前転飛びでもしようと思ったのか、両手を地面につけて思いっきり跳ねあがった。

……そしてそのまま城の天井まで飛びあがってしまい、頭をぶつけてヒイヒイ言っている。

……嬉しすぎてせっかく覚えたOPGの力の調節をすっかり忘れてしまったようだ。

痛そうに頭を押さえているフチを見て、ネロは呆れたような顔をして、カールと話をしていた兵士の人は目を丸くしている。

「気持ちはわかるけど、少し落ち着け」

「い、いめん」

話が進まないの、いまだに目を丸くしている兵士の人にこっちら聞いてみる。

「それで、フチのお父さんが生きてるのは確かなんですか？」

目を丸くしていた兵士は、ああ、と答えると、ゆっくりと話し出した。

「ネドバルさんは、領主さまやヒュリチエル伯爵といっしょに、ゴブリンの群れに捕まったんだ。オレは死んだふりをしたから、ぶじだった。一匹のゴブリンが、本当に死んでいるのか確認するために、こっちにやってきたんだ。オレは死ぬ覚悟でそいつに切りかかって、そのまんま逃げる事ができた」

喜色満面になったフチは、ありとあらゆる祝福の言葉を兵士に送っていた。

兵士は半場呆れながらその言葉を聞いていたが、やがてニヤツと笑ってフチに尋ねた。

「ところで、どうやったらあんなに飛びあがれるんだ？」

「仇敵みたいな女に、尻尾をふって生きていく必要がないとわかったら、おたくだって、あれくらい飛べますよ！」

「いや、意味がわからないぞ」

俺のツッコミを聞きもしないで、そのままフチは奇声を上げながら全速力でホールを飛びだしてしまっただけ……。

サンソン達が帰ってきた次の日、俺達は新たに帰ってきた負傷兵を治療していた。

そしたら、フチのお父さんと同じパイカー部隊に所属していた兵がその所在を知っていて、まあ、さっきの騒ぎが起こったってわけだ。

「まったく、フチのやつ……。嬉しいのはすっごくわかるけど、ちよっと騒ぎすぎじゃないかな？」

「まあ、ネドバルくんが、父親のことを心配してたのは村の人たちも知っているからな。みんな多目にみてくれるだろう」

「そのとおりだぞ、タクトよ。それより今は、他の負傷兵の治療が優先されるばきではないか？」

「それもそうか」

何はともあれ、本当に良かったな、フチ……………。

そのあと、負傷兵の治療を続けていると、冷静になったらしく顔を少し赤くしたフチが戻ってきた。

そのときには重傷者の治療はもう終わっていて、あとはそこまで大変な怪我人はいなかったの、ホールはタイバインとカールに任せ、俺とネロとフチの三人は、軽傷者や俺のコードキャストで完全に治療した人達を家まで送り返すことになった。

フチはあまり怪我人の治療を手伝うことができなかったことを気にしているのか、妙にやる気があり、兵士がギユウギユウに乗った荷車を一人で引いていた。

げに恐ろしきは、OPG……。途中で会ったサンソンもびっくりしていた。

「なにい！ OPGだって？ すっごいバカ力だな？」

「っていつても、サンソンなみだろ？ オーガのパワーっていうくらいなんだから」

「なんだと！ 昨日も思ったが、口はあいかわらずだな」

俺達が荷車から帰還した兵士を一人、また一人と自宅に送り届けるたびに、笑顔や、喜びの涙が家族や村の人に広がった。もちろん、俺やネロ、フチ、サンソン、そして荷車に乗っている兵士たちもいっしょになって幸せな微笑みを浮かべる。

「ああ、生きて帰ったのか」

「ご心配おかけしました」

「クレイ、帰ってきたのね」

「おお、ダイアン！」

「パパー、お帰りなさい！」

「ああ、ただいま！ いい子にしてたかい？」

胸の中に温かい熱が広がっていく。  
本当に良かったと、心からそう思えた。

でも、同時にまた辛い思いしなくてはいけなかった。

帰ってきたばかりのサンソンが村をブラブラしていたのには、理由があった。

サンソンは警備兵隊長として、帰って来れなかった兵の家族に戦死の通知をしなくてはいけなかったのだ。

戦死者の家の前では、男性達は強張った顔でサンソンに礼を言い、女性達は慟哭してすがりよった。

サンソンは通知をした格好のまま身じろぎ一つせず、ただ黙って空を見ながら泣いていた。

そのたびに、俺やネロ、フチ、そして兵士の人達も一緒になって涙を流した。

喜びや悲しみの涙をたくさん流しながらも、村の外れでついに最後の一人を荷車から下ろした。

すると、フチは俺達に荷車に乗るように勧めてきた。

「おい、フチ！ よせつたら。オレは怪我人じゃないんだから」

「俺とネロなんていよいよ関係ないんだけど？」

「乗れって言うてんだからさ」

「うむ。二人とも、あまり人の好意を無下にするべきではないと余は思うぞ？」

あまりにフチが強く勧めてくるし、ネロも乗り気だったので、俺とサンソンも苦笑しながら荷車に乗り込む。

……ネロは単純に歩くのがめんどくさかったただけな気もするが。

「さあ、みんな！ 行くぞ！」

「な、ちよっ……！」

「うわあ！」

「おおっ？」

フチは荷車がバラバラになるんじゃないかってとんでもないスピードで走りだした。

……っつて、マジで速い、速い、速い！

「に、荷車がばらばらになるぞー！ おい、オレはこんなところで死にたくないんだ！」

「なんだと？ 退屈で死にそうなんだな？ ようし、荷車のスピードを上げてやる！」

「ぐわあああ！」

「ちよ、フチ……！ まじで、このスピードはやばい……！ 誰かにぶつかったら、交通事故なんかじゃすまないぞー！」



「おお、よいではないか！ このスピード、オリンピックの戦車競走を思い出させるではないか………！ ふふふ！ フチよ、もっとスピードを上げるがよい！」

「お、そうか？ だったら、要望通りもう一段回スピードを……」

「上げなくてもいいからな!？」

よほど怖かったのか、サンソンは城にたどり着くとそのまま転げ落ちるような勢いで荷車を降りて、そのまま全速力で逃げてしまった。……意外と、スピード恐怖症なのかもしれない。

とりあえず、大笑いしているネ口とフチにはお説教が必要そうだな。

？

？

？

フチとネ口をこつてりとしぼった後、俺達は再びホールに向かった。これ以上運ぶ兵がないのか、タイバーンに確認をとるためだ。ところが、ホールにはタイバーンどころか、カールの姿までない。いったい、どうしたんだ？

「あのう、執事さま。タイバーンはどこに行っただんですか？」

フチがホールにいたハーメル執事に聞くと、待っていたとばかりに微笑まれた。

「うむ、三人ともきたか。ついてくるがよい」

「はい？」

「なにかあつたんですか？」

「おまえらを待ちわびていたところだ。さあ、くるんだ」

ハーメル執事に連れられるまま向かったのは、初めてこの世界に来たときにも入ったことのある領主さまの執務室だった。中に入ると、そこにはタイバーンにカール、そしてさっき別れたサンソンの姿があつた。

カールは俺達を見ると、にっこりとほほ笑んだ。

「三人とも、こちらにきてすわりたまえ。執事さまも」

カールに勧められるまま、部屋にある大きなテーブルを囲むように座る。

「いったい、何が起こるんだ？」

困惑した表情を見ると、俺達以外ではサンソンもこれから何があるか知らないようだ。

ハーメル執事は苦悩に満ちた表情のまま、口火を切る。

「それでは、領主代理として申し上げます。カールさま。どうしても、領主代理をひきうけていただきませんか？」

カールは領主さまの異母弟だ。

確かに本来なら、ハーメル執事よりも領主さまの代理として相応しいといえるな。

しかし、カールは首を横にふる。

「私にはそのような資格はございません。これまで兄上をお助けすることもできずに、ただ森のなかで怠惰に暮らしてきただけです。それに何度が申し上げたとおり、兄上がいらっしやらないいま、その地位をうかがって城にはいりこむような真似はしたくありません」

ハーメル執事は残念そうにして、サンソンは驚愕の表情で固まっている。

ヘルタントでもカールの正体を知っているのは、ほんの少しの人だけだからな。

サンソンが知らなかったとしても、無理はない。

「それでは、警備兵隊長サンソン・パーシバル」

「はっ！」

「ヘルタント領地の現状と、第九次アムルタット征伐軍の敗北に関する報告をし、国王陛下の支援を要請するため、首都バイサスインペルに使者を派遣する。わかるだろうな？」

「はい！」

「カール・ヘルタントさまが、首都に行ってくださいることになった。これに護衛が必要なのだが、承知のとおり、いま城の兵は多くが負傷中だ。タクトの働きにより傷が完治したのも少なくないが、それでもなお多くの者が療養中だ。秋の深まりと警護の弱体化を考えれば、食料を狙うモンスターが押しよせてくるのは、火を見るよりも明らか。おおぜいの護衛兵をつけて、村の警備を手薄にするわけにはいかないのだ。カールさまは、単身でかまわないとおっしゃられたが、いくらなんでもそうはいかないだろう。この季節に、たったひとりで首都までいらっしゃるなんて。そこで、おまえと、あと三人の者に随行してもらおうことにする」

そう言うと、ハーメル執事はこつちを見た。

「特別警備兵タクト・コノエ、ネロ・クラウディウス」

「はい」

「うむ」

「きみたち二人にもカールさまの護衛として随行してもらいたい」

「わかりました」

「任せよ！」

俺とネロは二つ返事でその申し出を受ける。

あくまで俺達二人は正規の警備兵ではない。

だったら、今回のようなできるかぎり普通の警備兵を抜くことのできないときは、俺達のような非正規的な者が行くべきだろう。

それに、サンソンとは何度も一緒に戦った仲だ。

連携も戦闘中の意思疎通も他の警備兵と同じくらいにはできるようになっている。

……というか、サンソンとネロの二人がいるだけで、もうほとんどのモンスターは相手にならない気がする。

さて、これでハーメル執事の言っていた『三人』まで、あと一人だけが……。

「フチ・ネドバルくん」

「承知しました」

……返事、早。

ハーメル執事も慌ててるじゃないか。

「オレはタクトと同じで正規軍じゃないから、兵力の損失にはならないし、どうせオレの年齢では自警団にもはいれませんからね。ちよどいいですよ。オレも、親父のことが気になってるんです。なあに、こんな話があるってわかっていたら、オレのほうからお願いしてたと思いますよ、執事さま」

「おまえは、相当、生意気なやつだが、けっこう信用できる男みたいだな」

その言葉に全面的に同意です、ハーメル執事。

フチは剣の腕は覚えたてでまだまだけど、それを補って余りあるOPGの力がある。

イリユージョンとはいえガーゴイルやフリアにも勝てたんだし、戦力としては下手したら俺よりも上かもしれない。

それに、フチはかなり頭がキれる。

今さっきのハーメル執事とのやり取りそうだけど、とても俺と同年代とは思えない。

いっしょにいたら、かなり頼りになると俺は思う。

「できることなら、わしもいっしょに行ってやりたいんじゃないかな。

やはり、この村のことが気にかかるんじゃない」

そっくだろうな。

必要最低限の戦力とはいえ、サンソンもネロもこの村では最強の戦力といえる。

ここでタイバーンまでがいなくなったら、ちょっと村の防衛力が低くなりすぎる危険性がある。

正直、これほどいつしよにいたら安心できる人は他にいないんだけどな。

「フチよ、用心の上に用心じゃ。おぬしは訓練で、ガーゴイルと闘い、オーガとも闘った。だが、あれはすべて幻覚であり、実戦とはまったく違う。それを忘れたら、死ぬぞ。わかったな？」

「わかったよ」

「ジェミニのことは心配するな。このわしが、ほかの男に色目を使わんよう……」

「ストップ！」

二人のやり取りを微笑ましそうに見ていたカールが口を開く。

「みんな、なにか特別な準備が必要かい？ そうか、とくにはないのかね。それなら、すぐにでも出発することにしよう。それぞれの準備を終えて、明日の明け方までに私の家に来てくれ。ところで、私はまだ自分の正体を公にしたくないんだが、それについても協力してくれるだろうね？」

当然、俺達は全員頷いた。

まあ、サンソンはその場の流れ的なもので頷いただけで、まだ意味がよくわかっていないみたいだけど。

「首都で国王陛下に謁見したり、身代金を準備したりということは、私にまかせてくればけっこうだ。みんなには、旅の準備をひきうけてもらおうか。パーシバルくん、五人が一刻も早く首都までたどり着けるよう、方法を研究してくれるかね。村人たちを安心させるために首都へ行く、というような噂が流れることはかまわんが、私の名前だけは明かさないようにしてくれ」

「はっ！ ご心配なく！」

ハーメル執事は立ちあがると、領主さまの机から箱ときんちやく袋を取りした。

お金の入ったきんちやく袋の方をサンソンに、そして箱をカールに渡した。

「印章と任命状です。そのほかにもヘルタント領地の所有証書と林産物・農産物ほかの受取権証書などがはいつています。ヘルタント領地の全権をおまかせいたします」

「承知いたしました」

サンソンは立ちあがり、俺達にも立ちあがるように促す。

「それでは、私もこれで失礼して、準備を整えるようにいたします。あ、あのう……」



「いままでどおり、カールと呼んでくれ」

「わかりました。では、カール。乗馬については問題ありませんよね」

乗馬……？

つて、あれ？

ちよっと、ヤバくないか？

カールが笑って頷く中、俺とフチの顔はひきつっていた。

「待った！ タイバーン、あんた魔術師だろ。オレたちを首都までビューンと飛ばすことはできないのか。そうだよ、空間移動だよ。前にバーログを呼び出したときに、テレポ……とかなんとか言ってたじゃないか？」

「テレポトな、フチ」

「そう、それ！」

フチがどこか必死な様子でタイバーンに尋ねる。  
が、タイバーンは意地悪そうにニヤニヤ笑っている。

「こいつめ！ おまえがバーログなのか」

「は？」

「説明するとなるとむずかしいんじゃない。わしは盲者だから、正確にワーブさせることができない。だが、バーログは悪魔の中でも強力な悪魔じゃから、わしが疑似値座標しか設定できなくても、わしと力をあわせるような形で、こちらにやってこれるんじゃない。つまり、わしは通路を設定し、バーログが扉をひらく。それはバーログ自身にそなわったゲート能力とも関係があつてな……」

「もういい、もういい。いくら言われても理解できないから」

「まあ、要約すれば、レポートで首都に行くのは無理ってことなんですよね？」

「そのとおりじゃ」

タイバーンの言葉に俺とフチは二人して溜息をつく。

そのときサンソンがフチを無理やり引きずって執務室の外に連れ出した。

執務室の中ではまだカール達が話しあっているが、ここから先の話には俺達はあまり関係なさそうだ。

大人しく俺とネロも退室することにする。

「お、おい。おまえらはあんまりおどろいてなかったみたいだが、カールっていったい、何者なんだ？」

「おお、サンソンは知らなかったのだったな」

「カールはカールだろ。何者、つてなんだよ」

「そんなけちなこと言うなよ。タクト、ちょっと、教えてくれよ」

「カールは領主さまの弟さんだよ。もつとも、異母弟らしいから年齢はかなり離れているみたいだけどね」

「ああ、そういうことか！」

「詳しく言えば、カールは」

俺の答えをフチが補足すると、サンソンはしきり頷いていた。そんなサンソンを見ながら、フチがどこか不安そうに言う。

「サンソン、今度はオレが質問する番だぞ。首都まで馬で行くつもりか？」

「あたりまえだろ。おまえは、歩いて行くつもりだったのか。徒歩で往復すれば、五、六か月はかかるぞ」

う、やっぱりか。  
まずいな……。

「それじゃまずいけど、でもまずいんだよ」

「なにが言いたいんだ？」

「オレ、馬に乗ったことがないんだ」

「……ついでに告白すると、俺もないぞ」

俺達がそう言うと、サンソンはニコリと笑う。

「大丈夫さ。最初っから乗れるやつなんかいないだろう。ゆっくりとなじんでいけばいいんだ」

「ふつむ……」

「そういうものなのか？」

「うむ。安心するがよい、タクトよ。もしものときは、余の後ろに乗ればよからう。そうすれば、常にいっしょにいられるし……」

「そういえば、ネロは馬に乗れるんだっけ？」

「当たり前のことを聞くでない。余を誰だと思っておるのだ？」

そういえば、彼女は元々古代ローマ帝国の皇帝だっただけ。そりゃあ確かに、馬に乗るなんて朝飯前のことだろう。

「ひとつ助言してやろうか。馬に自分の主人だと認識させることが重要なんだ」

おや、なんだかサンソンの言葉を聞いたフチの目がキラリと光ったように見えたけど……。  
気のせいだよな？

？

？

？

俺達は城の裏方にある馬小屋にやってきた。

サンソンは自分の馬を持っているので問題ないが、俺とネ口とフチはまずは自分の馬を手に入れなければいけない。

そこで馬番のオーネルは首をひねりながら、何頭かの馬を連れてきてくれた。

どれも訓練が終わったばかりでまだ所有者がいない馬らしい。だけど。

「いや、いきなり見せられても、どの馬にしたらいいかわからないんですけど……」

「ちょっと。オレがあんたに、蜜ロウソクと獣脂ロウソクを見せて、どっちがいいか選んでみろって言ったら、どうするつもりだ？」

「……すごい例えだな、フチ」

オーネルは笑いながら、俺とフチ、そしてネロに合う馬を選んでくれた。

初心者の俺とフチには少し小柄な馬で、経験者のネロは大型の馬だった。

俺は用意してもらった馬をじっと見つめる。

きれいな茶色の毛をして、尻尾だけが金色になっている。

大人しい性格のようで、さっきからじっとこちらを見たまま身じろぎ一つしない。

……なんだか、『彼女』みたいだ。

そんなことを考えながら隣のフチを見ると、フチもじっと自分の馬を見ている。というより、睨んでいる？

なにやってるんだ？

さすが経験者だけあってネロの方はもうさっきの馬に乗って練習場を駆けていた。

その鮮やかな姿にしばらく見とれてしまう。

「はははっ！ 気に入ったぞ、そなた！ そなたには余から直々に『セネカ』という名前を贈ってやる。うむ、遠慮なく受け取るがよい！」

笑いながらネロが言うと、馬も満足そうにブルブルと啼いていた。すごいな……。

なんだか、相性バツチりって感じた。  
サンソンやオーネルも感心したようにそんなネロとセネカの姿を見ていた。

やがて、満足した様子のネロが戻ってくると、サンソンは『シューティングスター』という名前の自分の馬に乗った。

「フチ、タクト、おまえらは今日じゅうに、そいつらと仲よくなっておくんだな。旅の支度はオレがやっておくから」

そう言うと、そのまま馬に乗って行ってしまった。  
すると、ネロがどこか申し訳なさそうな顔でこつちを見てきた。

「タクトよ、すまぬが余も先に行ってよいか？」

「えっ。いや、別にそれは構わないけど……。なんだか珍しいな。ネロだったら、『余の乗馬法をそなたにたたき込んでやる！』って感じのことを言うと思っただけだ」

「う、む。確かにできればそうしたいところなのだが……。今日は準備したい物があったな……」

「準備……？ 明日の出発に関係あるのか？」

「そ、そうだぞっ！」

……なんか怪しいな。  
まあ、でも。

「うん、わかった。じゃあ、ネロは行ってきなよ。どうせ、俺もフチもまだまだ時間かかるだろうし」

「本当か！ うむ。すまないな、タクトよ！」

ネロはそう言うと、嬉しそうにセネカに乗って行ってしまった。  
はは、本当にかわいいな、ネロは。

「さて、がんばるか」

一足先に悪戦苦闘しているフチを見ながら、俺も気合をいれる。

？

？

？



「ん。よし、いい子だ。ありがとつな、俺の言うことを聞いてくれて」

騎乗の態勢のまま馬の首をなでると、馬は気持ち良さそうに目を閉じた。

ネロ達と別れて結構な時間が経ち、俺もようやく馬に乗るのに慣れてきた。

もちろん、ここに至るまでの苦労は計り知れない。

最初大人しい性格だと思っていた俺の馬は、意外ということを知らず、乗ろうとして振り落とされることも何度あったかわからない。

普段は物静かだが、内心結構アグレッシブな性格らしい。

静かにだが激しく燃える　まさにそんな馬だ。

オーネルに指示を受けながら、ようやく馬に自分が主人だと認めさせることができたときには、すでに時刻は夕方になるうとしていた。

「ネロやサンソンと別れたのが午前中の話だったから………ゆうに六時間は練習していたことになるのか」

ぶっ続けだと考えると結構な練習時間だが、無論、おかげでだいぶ馬に乗るのにも慣れた。

とはいえ、まだまだ初心者のは間違いはない。

まあ、後は実際に旅をしてその中で上達するしかないだろう。

「お前も疲れただろう？　よく付き合ってくれたな」

馬から降りて俺がそう言うと、馬は何も言わずにただ目を閉じただけだった。

なんだか、当り前のことをしただけです、って言ってるみたいだ。この馬ともだいぶ仲良くなれた。

最初は大変だったけど、一度俺の言うことを聞くと後はびっくりするくらいにこっちの言うことを聞いてくれる。

主人には徹底的に尽くすのが馬の性格なのだろうが、この馬はその中でもかなりそれが極端だ。

まあ、いい子なのは間違いない。

「お、だいぶ仲よくなっただみたいじゃないか」

俺が馬の首をなでていると、準備しに村に行っていたサンソンが帰ってきた。

「うん。おかげ様で」

俺が馬の首をなでるのをやめないで笑いかけると、サンソンも楽しそうに笑い返してくれた。

「馬の名前は決めたのか？」

「うん……。迷ったけど、『ラニ』にしようと思ってるんだ」

「ラニか……。いい名前じゃないか」

「……………うん、俺もそう思う」

ラニの首をなでながら、俺は小さく笑う。

サンソンはそんな俺の様子に少し首をかしげ、さらに向こうにいるフチを見てさらに首をかしげる。

「馬とけんかでもしたのか、あいつは？」

「まあ……………色々あってね……………」

ポロポロな様子のフチとフチの馬を見ると、軽く涙が出てくる。

うん、本当に色々あったんだよ、向こうは……。さっきまで行われていたフチと馬の六時間に及ぶ戦いを思い出していると、自然と頭が痛くなってきた。

フチは荒い息をしている馬を睨みながら、苦々しげに呟いた。

「こいつの名を、ジェミニと決めた」

睨みあっているフチとジェミニを見て、オーネルとサンソンは二人して大爆笑し、俺は重苦しい溜息をついた。

……大丈夫かな、これから。

ラニが心配そうにブルルと啼いたのが、正直かなり嬉しかった。

10 下された密命（後書き）

今年も残ることあと一日ですね。

そして第一章もあと一話で完成……………。

が、がんばります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6748s/>

---

Fate/another side saga ~ドラゴンラージャ~

2011年12月30日02時48分発行